

平成 24 年度
山口大学の FD 活動

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

平成 24 年 8 月 28 日に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」は、今後の大学教育の方向性を示すものである。この答申では、学士課程教育の質的転換への好循環のためには、質を伴った学修時間の実質的な増加・確保が不可欠であるとし、それは教育課程の体系化、組織的な教育の実施、授業計画（シラバス）の充実、全学的な教学マネジメントの確立といった諸方策と連なって進められる必要があるとしている。また、学生の能力をどう伸ばすかという学生本位の視点に立った学士課程教育へと質的な転換を図るためには、教員中心の授業科目の編成から学位プログラム中心の授業科目の編成への転換が必要であるとしている。ここで、学位プログラムとは、育成する能力を中心に据えた学士課程教育をいう。

本学では、成 24 年 3 月 27 日付で、学部・研究科再編等会議により、「新しい共通教育について」と題する報告がなされた。この報告で示された新しい共通教育は、教養コア科目 8 単位、英語 6 単位、一般教養科目 16 単位を全学共通の教養として定めることで、部分的にはあるが、学位プログラム中心の授業科目の編成となっている。平成 25 年度以降には、共同獣医学部を除くすべての学部の入学者に対し、学習の目的を同じくする計 30 単位の共通教育科目が必修として課されることになる。また、上記の報告では、全学的な教学マネジメントの確立を求めている。平成 24 年度には、この報告に基づき、教学審議会の下に作業部会が置かれ、新しい共通教育の具体的な実施体制が検討された。これにより、新しい共通教育が平成 25 年度からスタートすることになった。

平成 24 年度入学者まで適用される共通教育は、全教員出動体制による分科会制度により運営されてきた。23 の分科会があるが、平成 24 年度に何らかの FD 活動を行ったのは、6 つの分科会に限られ、すべての分科会が教育改善の場として機能しているとは言い難い状況にある。また、学生授業評価から得られた授業外学習時間の共通教育全体の平均と学部専門教育全体の平均は、いずれも年々わずかながら増えているが、それでも十分な授業外学習時間が確保されているとは言い難いのが実情である。

平成 25 年度からスタートする新しい共通教育では、課題探求型の能動的学修に取り組む授業科目「山口と世界」が必修化される。また、大学における学び方を学ぶ授業科目「知の広場」も必修化される。さらに、全教員出動体制による分科会制度から全部局出動体制への移行が行われる。これらにより、学生の授業外学習時間が大幅に増えるとともに、FD 活動がさらに活性化し、授業改善が大きく進むことを願ってやまない。

山口大学 大学教育機構
副機構長・大学教育センター長
糸長 雅弘

第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動	1
第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	7
第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動	32
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	34
第1節 実施方法・実施状況	34
第2節 授業評価の結果について（全学）	41
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	56

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	80
第1節 授業公開	80
第2節 学部・研究科主催FD研修会	84
第3節 教育改善に関する活動	87
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	91
第5節 FD実施経費報告	95
第6節 来年度の課題	95
第5章 教育学部のFD活動	96
第1節 授業公開	96
第2節 学部主催FD研修会	97
第3節 教育改善に関する活動	102
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	102
第5節 FD実施経費報告	105
第6節 来年度の課題	105
第6章 経済学部のFD活動	106
第1節 授業公開	106
第2節 学部・研究科主催FD研修会	113
第3節 教育改善に関する活動	113
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	113
第5節 FD実施経費報告	114
第6節 来年度の課題	114
第7章 理学部のFD活動	115
第1節 授業公開	115
第2節 学部・研究科主催FD研修会	124
第3節 教育改善に関する活動	128

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	133
第5節	F D実施経費報告	135
第6節	来年度の課題	135
第8章	医学部のF D活動	136
第1節	授業公開	136
第2節	学部・研究科主催F D研修会	137
第3節	教育改善に関する活動	144
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	145
第5節	F D実施経費報告	145
第6節	来年度の課題	145
第9章	工学部のF D活動	147
第1節	授業公開	147
第2節	学部・研究科主催F D研修会	154
第3節	教育改善に関する活動	159
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	160
第5節	F D実施経費報告	161
第6節	来年度の課題	161
第10章	農学部のF D活動	162
第1節	授業公開	162
第2節	学部・研究科主催F D研修会	168
第3節	教育改善に関する活動	171
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	176
第5節	F D実施経費報告	179
第6節	来年度の課題	179
第11章	共同獣医学部のF D活動	180
第1節	授業公開	180
第2節	学部・研究科主催F D研修会	182
第3節	教育改善に関する活動	186
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	187
第5節	F D実施経費報告	190
第6節	来年度の課題	190
第12章	人文科学研究科のF D活動	191
第1節	授業公開	191
第2節	学部・研究科主催F D研修会	191
第3節	教育改善に関する活動	191
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	191

第5節	F D実施経費報告	192
第6節	来年度の課題	192
第13章	教育学研究科のF D活動	193
第1節	授業公開	193
第2節	研究科主催F D研修会	193
第3節	教育改善に関する活動	193
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	193
第5節	F D実施経費報告	195
第6節	来年度の課題	195
第14章	経済学研究科のF D活動	197
第1節	授業公開	197
第2節	学部・研究科主催F D研修会	198
第3節	教育改善に関する活動	198
第4節	学生授業評価・教員自己評価	198
第5節	F D実施経費報告	199
第6節	来年度の課題	199
第15章	医学系研究科のF D活動	200
第16章	理工学研究科のF D活動	201
理学系		
第1節	授業公開	201
第2節	学部・研究科主催F D研修会	201
第3節	教育改善に関する活動	201
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	201
第5節	F D実施経費報告	203
第6節	来年度の課題	203
工学系		
第1節	授業公開	203
第2節	教育改善に関する活動	204
第17章	農学研究科・医学系研究科（農学）のF D活動	206
第1節	授業公開	206
第2節	学部・研究科主催F D研修会	206
第3節	教育改善に関する活動	207
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	207
第5節	F D実施経費報告	209
第6節	来年度の課題	209
第18章	東アジア研究科のF D活動	210

第1節	研究科主催FD研修会	210
第2節	教育改善に関する活動	211
第3節	FD実施経費報告	213
第4節	まとめと来年度の課題	213
第19章	大学院技術経営研究科のFD活動	215
第1節	授業公開	215
第2節	学部・研究科主催FD研修会	215
第3節	教育改善に関する活動	227
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	232
第5節	FD実施経費報告	238
第6節	来年度の課題	238
第20章	連合獣医学研究科のFD活動	239
第1節	授業公開	239
第2節	学部・研究科主催FD研修会	239
第3節	教育改善に関する活動	240
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	245
第5節	FD実施経費報告	249
第6節	来年度の課題	249
平成24年度	山口大学 教学委員会 名簿	250
平成24年度	山口大学 学部・研究科FD担当者 名簿	251
平成24年度	山口大学 大学教育センター 名簿	252

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む※）。

※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成24年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は101名であった。また研修会は9種類・計11回開催され、参加者は計487名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計320名であった。延べ908名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	ポートフォリオを活用した学びのデザイン —島根大学教育学部における取り組み—	平成24年8月10日(金)	13:30～15:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室 工学部E21番教室 医学部総合研究棟多目的室	富安 慎吾 (島根大学教育学部専任講師)	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	島根大学教育学部では、4年間のカリキュラムにおける学びの過程を可視化するポートフォリオシステム(プロファイルシート)を用いている。また、1年に1回行われる改訂は、教員にとって、カリキュラムを教育目標やその達成の面から見直す機会となり、講義や演習のあり方を再定位する立脚地となっている。本講演においては、その教育的効果や成果を述べるとともに、運用上の課題について研修する。	教職員101名
									参加者 計101名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会(第1回)	平成24年4月3日(火)	15:00～16:40	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室 工学部E21番教室 医学部総合研究棟多目的室	丸本卓哉(学長)、瀧藤厚(副学長)、三池秀敏(副学長)、糸長雅弘(大学教育センター長)、小川 勤(大学教育センター教授)、木下真(大学教育センター准教授)、酒井清彦(情報環境部長)	平成23年9月22日以降に新規採用された助教以上の教育職員	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員43名
2	共通教育TA・SA研修会	平成24年4月6日(金)	13:00～15:15	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室 工学部E21番教室 医学部第3講義室	糸長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)、森本宏志(保健管理センター講師)、徳永和之(共通教育係長)	共通教育において前期にTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員23名 学生160名
3	各学部・研究科FD担当者研修会	平成24年5月9日(水)	17:40～18:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	第一テレビ会議室・工学部E21番教室・医学部第3講義室	糸長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)、中田充(大学教育センター主事)	各学部・研究科のFD担当者	各学部・研究科のFD委員を対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の留意点などについて研修を行う。	教職員18名
4	障害学生に対する修学支援のための研修会	平成24年7月25日(水)	16:10～17:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室	平野均・奥屋茂(保健管理センター教授)、糸長雅弘(大学教育センター長)、小川 勤(大学教育センター教授)、木下真(大学教育センター准教授)、木谷秀勝(教育学部附属教育実践総合センター教授)、今井佳子(学生相談所カウンセラー)	障害学生が所属する学部教職員、大学教育センター、学生相談所カウンセラー、共通教育係、保護者	発達障害のある学生の修学状況の把握と修学支援の方法および授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教職員14名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	大学教員として知っておくべき知的財産の知識	平成24年8月22日(水)	10:00～11:40	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育メディア講義室 工学部E21番教室 医学部第3講義室	木村友久(技術経営研究科教授)	希望者	教員が研究・教育に従事する場合、教材作成、著書論文作成、研究開発の局面に応じて必要となる知財運用術に関する内容、あるいは知財を教材に授業設計を行う手法についてを伝える。	教職員44名
6	発達障害学生の理解と対応—入学から就労までを視野に入れて—	平成24年9月5日(水)	13:50～14:50	常盤地区	工学部D棟11番講義室	木谷秀勝(教育学部附属教育実践総合センター教授)	希望者	入学時点から支援を求める学生が増えている現状を踏まえ、発達障害の特徴を理解しながら、個々の学生の特性に応じた対応を全学的に取り組む必要性が高まっている。その場合、就労を視野に入れた支援の方向性が重要となり、実際の事例への対応を踏まえた支援に関して研修を行う。	教員52名
7	学生の主体的な学習活動を活発化させるPBL型授業の進め方	平成24年9月19日(水)	14:30～15:00	吉田地区	農学部本館2F会議室	川崎勝(大学教育センター教授)	希望者	PBL型授業の設計方法、シナリオの作成方法、グループ討論による問題抽出の方法、チューター教員の役割、成績評価の方法などについて学び、実際にシナリオを作るワークショップを実施する。	教員22名
8	発達障害学生の理解と対応—入学から就労までを視野に入れて—	平成24年10月3日(水)	14:30～15:30	吉田地区	人文・理学部大会議室	木谷秀勝(教育学部附属教育実践総合センター教授)	希望者	入学時点から支援を求める学生が増えている現状を踏まえ、発達障害の特徴を理解しながら、個々の学生の特性に応じた対応を全学的に取り組む必要性が高まっている。その場合、就労を視野に入れた支援の方向性が重要となり、実際の事例への対応を踏まえた支援に関して報告。	教員43名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
9	授業に役立つeラーニングの活用	平成24年10月10日(水)	13:30～14:30	吉田地区	農学部・共同獣医学部本館2F会議室	王 躍(メディア基盤センター准教授)	希望者	授業に役立つデジタルコンテンツの作り方をテーマとして、事前相談に対するサポートを行うと共に、講習会ではそれらの個別条件についての事例紹介を行う。	教職員16名
10	学生相談室の相談内容から見える最近の山口大学の学生の実態	平成24年11月7日(水)	14:30～16:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	今井佳子(学生相談所カウンセラー)	希望者	学生相談所に9年間に訪れた約1300名の学生との出会いを通して、山口大学の学生が何に悩み、不安に思っているのか、面接中に語られる相談内容をもとに語る。また、最近増えてきた保護者の相談についても現状や相談内容の傾向を伝える。	教員32名
11	大学教員として知っておくべき知的財産の知識	平成25年2月27日(水)	17:00～18:30	吉田地区	東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室	木村友久(技術経営研究科教授)	希望者	教員が研究・教育に従事する場合、教材作成、著書論文作成、研究開発の局面に応じて必要となる知財運用術に関する内容、あるいは知財を教材に授業設計を行う手法についてを伝える。	教職員20名
									参加者計487名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと農学部、農学研究科、医学系研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成24年7月18日(水)	14:30～15:00	吉田地区	農学部2F会議室	小川 勤(大学教育センター教授)、平尾元彦(学生支援センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員25名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	大学教育センターと工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成24年9月5日(水)	13:10～ 13:40	常盤地区	工学部D棟1F D11教室	糸長雅弘(大学教育センター長)、吉村誠(学生支援センター長)、小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員41名
3	大学教育センターと医学部医学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成24年9月12日(水)	13:15～ 13:30	小串地区	医学部本館6階第一会議室	川崎勝(大学教育センター教授)、辻多聞(学生支援センター講師)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員40名
4	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成24年9月14日(金)	14:30～ 15:00	吉田地区	人文・理学部 大会議室	糸長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)、平尾元彦(学生支援センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員39名
5	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科(教育学系)との教育改善FD研修会	平成24年9月19日(水)	16:00～ 16:30	吉田地区	教育学部21番教室	糸長雅弘(大学教育センター長)、吉村誠(学生支援センター長)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員58名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
6	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成24年9月19日(水)	16:00～ 16:30	吉田地区	経済学部A棟2F第1会議室	渡邊幹雄(大学教育センター主事)、木下真(大学教育センター准教授)、辻多聞(学生支援センター講師)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員45名
7	大学教育センターと医学部保健学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成24年10月10日(水)	13:15～ 13:45	小串地区	医学部保健学科第2研究棟HD1講義室	川崎勝(大学教育センター教授)、辻多聞(学生支援センター講師)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員40名
8	大学教育センターと理学部、理工学研究科(理学系)・医学系研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成24年10月31日(水)	13:00～ 14:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	糸長雅弘(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員19名
9	大学教育センターと共同獣医学部・連合獣医学研究科との教育改善FD研修会	平成24年12月12日(水)	13:30～ 14:15	吉田地区	農学部・共同獣医学部本館会議室	糸長雅弘(大学教育センター長)、吉村誠(学生支援センター長)、小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	大学教育の質保証の一環として、キャリア支援や修学支援を目指したポートフォリオの具体的な記載形式や内容について意見交換を実施する。また、ポートフォリオを利用してどのような修学支援やキャリア支援を具体的にやっていくのか運用計画を含む内容について意見交換を行う。	教員13名
									参加者 計320名

第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

1. 講演会

(1) ポートフォリオを活用した学びのデザイン ―島根大学教育学部における取り組み―

ける取り組み―

日時：平成24年8月10日（金）13:30～15:00

会場：メディア棟 情報メディア講義室

参加者：参加総数 101名（昨年71名）（内訳）山口大学（吉田地区66名 小串地区9名 常盤地区4名）、山口県立大学7名、徳山大学10名、山口学芸大学5名

講師：富安 慎吾 島根大学教育学部専任講師

内容

「ポートフォリオを活用した学びのデザイン」というテーマで島根大学教育学部におけるポートフォリオの活用法について具体的な説明があった。島根大学の教育学部では「プロファイルシート」を利用して、①レーダーチャート、②棒グラフ・数値、③文書を用いて、「客観的評価」、「自己評価」、「他者評価」などの評価を総合的に実施できるように、関係者が情報を共有できるシステムを開発している。このシステムの開発理由は、学生がプロファイルシート作成を通して自らの学びを振り返り、学びの過程を再認識することにより、「教師として必要な能力の向上」を目指すことにある。

今回の講演では例年通り本学の3キャンパスを結ぶとともに、新たに「コンソシアムやまぐち」に参加している3つの大学（山口県立大学、山口学芸大学、徳山大学）を遠隔授業システムを用いて講演会内容を同時に聴講するという試みを初めて実施した。このため、学長戦略部国際・社会連携課やメディア基盤センターにも協力をお願いして事前準備を実施した。

講演内容は現在本学が全学的に導入しようとしているポートフォリオの具体的な活用法を先進校から直接聞くことができるよい機会になった。研修会後のアンケート調査結果からも「非常に良かった」および「良かった」がアンケート全体の79.7%を占め、講演内容に対する満足度が高い結果となった。また、自由記述には「ポートフォリオに対するイメージがつかめた」、「講演の中で話されていた担任制度（チューター制度）に対して大変関心がある。」、



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	9	10.7%
良かった	58	69.0%
どちらとも言えない	12	14.3%
あまり良くなかった	3	3.6%
良くなかった	2	2.4%
無回答	0	0.0%
合計	84	100.0%

「今回の講演内容は本学の教員が聞きたかった内容だったからよかった」など島根大学におけるポートフォリオの導入に対して本学の教員もかなり刺激を受けた様子を伺うことができた。今回の全学講演会は本学の教育改善の具体的な方向性を考える上で意義のある講演会であった。

2. 研修会

(1) 平成 24 年度 新任教員研修会

日時：平成 24 年 4 月 3 日（火）15:00～16:40

会場：吉田地区：メディア講義室、常盤地区：工学部 E21 教室、小串地区：総合研究棟多目的室（8F）

参加者：43 名（内訳：吉田地区 24 名、常盤地区 2 名、小串地区 17 名）

内容

年 2 回（第 1 回目 4 月、2 回目 9 月）開催されることになって 2 年目を迎えた。4 月に第 1 回目を開催する趣旨としては新任教員に対して就任当初の時期から本学の教育と研究に関する方針や具体的な取組方法について理解を深めていただくためである。丸本学長には本学の現状と新任教員に対して期待することについて講話をしていただいた。また、三池理事兼副学長（学術研究担当）には本学の研究活動や競争的研究資金獲得の状況および資金不正流用防止について、瀧野理事兼副学長（教育学生担当）には大学教員として本学で教育活動を行う際の心構えなどについて講話をして



いただいた。その後、大学教育センターから「山口大学における教育改善の PDCA について」（糸長大学教育センター長）、「授業の実施方法について（教育方法、障害学生支援、TA の使い方等）」（小川教授）、「山口大学における授業評価と FD 活動」（木下准教授）という 3 つのテーマについて、それぞれの講師が説明を行った。また、本年度から「図書館の利用方法について」酒井清彦情報環境部長より図書館の学術文献や書籍の利用方法や管理方法について話があった。

研修会に参加した全体の感想としては概ね好評であった。参加した先生方からの意見としては、「学長、副学長、大学教育センターの各先生方から熱いメッセージとともに、山口大学の置かれた状況などを直接聞くことができよかった」、「教育・研究の基本について学ぶことができ貴重であった」、「ビジョンを共有し、改善していく場は必要である。このような機会をもっと増やしてほしい」、「新任なので授業の進め方に関してとても参考になった」という意見が多かった。しかし、一方で「今回の内容的であればもう少し研修時間が増やして欲しい」、「短い時間で実施できる研修会でないと思う」という意見もあり、次年度以降、研修内容や研修時間をどのようにするか課題も残った。

今回、4 月開催が 2 回目ということであったが、一様の成果をあげることができたと考えられる。しかし、参加者からの意見にもあるように、「研修時間」や「研修内容」について再検討が必要であると感じている。今回は第 1 回目のスタートアップ的な研修会としての意義は果たせたが、学部 FD や全学 FD と今後どのようにつなげていくのかといった「研修の体系化」が必要であることを痛感した。

(2) 平成 24 年度 共通教育 TA・SA 研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 24 年 4 月 6 日（金）13:00～15:15

場所：全体研修：共通教育メディア講義室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

個別研修：共通教育棟（分科会ごと）

参加者：共通教育において前期に TA に採用された大学院生、SA に採用された学部生、および TA・SA を採用する教員 参加者総数 183 名（学生 160 名、教職員 23 名）：内訳 吉田地区 132 名（教員 115 名 学生 17 名）、常盤地区 42 名（教員 39 名 学生 3 名）、小串地区 9 名（教員 6 名 学生 3 名）、アンケート回収 129 枚

内容：大規模授業の多い共通教育において、TA・SA による授業の補助は、きめ細かな指導の実現のために必要不可欠です。TA・SA のみなさんにとっても将来社会人になるにあたって望まれる基本的な資質（コミュニケーション力、行動力、計画力、責任感、状況把握力など）を身につける良い機会となります。また、経済的支援を得られることもメリットです。そこで、本研修会ではみなさんが TA・SA の役割を十分に果たすことができるよう、必要な知識について学びます。

報告

共通教育の授業の補助を行うティーチングアシスタント(TA)およびスチューデントアシスタント(SA)のための研修会が 4 月 6 日 13:00 より吉田・常盤・小串地区で同時開催された。本研修会は年 1 回行われており、今年で 6 年目となる。昨年度から学部 3・4 年生をスチューデントアシスタントに採用することになったため、参加者数は全体で 183 名であり、昨年より 12 名増加し、過去最多となった。詳細は以下のとおりである。

まず、第一部では糸長大学教育センター長より山口大学の共通教育の特徴と TA・SA への期待について説明があり、次に大学教育センターの小川教授より TA・SA の職務内容と注意点について説明があった。続いて大学教育センターの岡田専任講師より出席確認システムの使い方について解説があり、さらに全学労働安全衛生管理室主任・保健管理センターの森本宏志専任講師より大学の授業における安全衛生について解説があった。最後に教育支援課共通教育係より TA・SA の諸手続について説明が行われた。

第 2 部の個別研修では、共通教育棟の各教室に分かれてグループ別に TA の心得や機器の使用方法等について研修が実施された。ただし、グループ別研修に適さない科目については授業担当者が個別に事前研修を行うこととした。各グループの講師は共通教育授業科目別分科会にお願いしたが、多人数・講義系授業科目については多数の分科会に関係するため大学教育センターが担当した。各グループでは、TA の心構え、留意事項、共通教育係・印刷室等の案内、AV 機器操作実演、演習・実験補助の方法などについて研修が行われた。

参加した大学院生・教員からの事後評価では半数以上から肯定的な回答が寄せられた。自由記述では「TA になるにあたっての心構えが分かった」「TA としての自覚が深まり、この研修会はよい機会となった」などの意見が寄せられた。一方、「資料の数が足りなかったため、教務手帳など確認できなかった」「安全衛生のスライドの文字は見えず、聞き取れなかった」「一斉に行わず各キャンパスで行っても



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	11	8.5%
良かった	61	47.3%
どちらとも言えない	47	36.4%
あまり良くなかった	6	4.7%
良くなかった	3	2.3%
無回答	1	0.8%
合計	129	100.0%

らいたい。マイクの声が聞きづらい」「時間が長すぎる」「教員向けと学生向けを別に行って欲しい」「TA・SAになる学生が最初の方ずっと私語をしていた(注意するまでやめなかった)。学生の質に問題はないのか?研修内容はよいと思う」「事務手続きの資料が欲しい」などの意見も寄せられた。来年度は研修内容・方法の再検討を行い、改善を図ることが課題である。

(3) 平成 24 年度 F D 担当者研修会

主催：山口大学 大学教育機構

日時：平成 24 年 5 月 9 日 (水) 17:40～18:30

場所：第一テレビ会議室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

対象：各学部・研究科 F D 担当者 (参加者：担当教員数：12 名、参加総数：18 名 (オブザーバー、大教センター主事・教員含む))

報告

最初に糸長大学教育センター長より、本研修会の開催趣旨が説明された。本学の FD 活動は全学 FD と学部・研究科 FD の 2 本立てになっていること。さらに、全学的な教育課題解決に対応する全学講演会および教員個人の教育課題の解決を支援する全学アラカルト型研修会から各学部・研究科がそれぞれの部局が抱える教育課題を組織的に解決するための学部 F D、研究科 F D という F D 活動が現在重要視されつつあることが説明された。このため、大学教育センターから講師を派遣して、それぞれの教育課題解決の支援を実施する講師派遣型研修会が今後中心的な F D 研修会になることが述べられた。また、例年実施されている各学部を巡回して実施してきた「教育改善研修会」を本年度も実施すること。さらに、本年度の研修テーマはポートフォ

リオの書式や具体的な運用方法を巡って各学部との間で意見交換が中心的なテーマになることが明らかにされた。

次に、大学教育センターの小川勤教授より、本年度の教育機構主催の研修会の特徴と各学部・研究科 F D 担当者に対してセンターからの依頼事項が明らかにされた。依頼事項は、講師派遣型研修会の開催日時、全学講演会の参加依頼、教育改善研修会の開催日時について締め切り期日までに報告してほしいということであった。

次に、大学教育センターの中田充主事(教育学部准教授)から本年度の F D 予算について説明があった。本年度から共同獣医学部が設立され学部が 1 つ増加したが、概ね昨年度並みの予算(約 10 万円)を念頭に期日までに予算要求をしてほしいとの説明があった。

最後の意見交換が行われた。共同獣医学部から学部の特性上、今後遠隔授業が増えてくると考えられるが、eラーニングを使った授業方法や遠隔授業の効果的な実施方法に関する研修会を実施したいと考えているので、それに関係した F D 研修会や講師派遣で大学教育センターに協力してもらいたいという要望が出た。また、技術経営研究科からは来年度から英語を使った授業を宇部地区のキャンパスで実施する予定であるので、学内外における英語を使った授業の現状とこれに関する F D 研修会を実施する際



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	6.7%
良かった	9	60.0%
どちらとも言えない	4	26.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

に協力をお願いしたいとの協力依頼があった。上記の2つの依頼については現状を調査した上で大学教育センターから当該学部に対して回答するとともに、今後、連携・協力していくことになった。さらに、人文学部からは教育改善研修会の意見交換の内容について質問があった。すなわち、人文学部では今月中にポートフォリオの内容を機関決定する予定であるため、後から意見交換の結果で変更しなければならない事態は避けて欲しいとの意見であった。これに対して糸長大学教育センター長からは提出されたポートフォリオに関して意見は述べるが、すぐに変更して欲しいということではなく、次年度以降のポートフォリオの見直し作業の際に今回の意見交換の結果を参考にしてほしいという説明があった。また、今回は特にポートフォリオを各学部で実際にどのように運用し、改善していくのかについて意見交換を実施したいとの回答があった。

当該研修会後のアンケートからは、研修時期については73.3%がこの時期でよいという回答であった。また、今後受けてみたい研修としては「発達障害学生への対応に関する研修会」や「就職指導に関する研修会」などの研修会への参加希望が多かった。

(4) 大学教員として知っておくべき知的財産の知識

(大学情報機構と大学教育機構の共催)

日程：平成24年8月22日(水) 10:00～11:40

場所：メディア講義室（吉田キャンパス）、

E21 番教室（常盤キャンパス）、

第3講義室（小串キャンパス）

講師：木村 友久（大学院技術経営研究科 教授）

参加者：44名(アンケート回収 43名)

内容

本研修会は本学すべての教員を対象として、第一部では著作権法の基礎的な知識（著作権、支分権、ライセンス契約等）について、第二部では大学における研究や教育、業務と密接にかかわるタイムリーな内容（バックアップサービスにおける権利関係等）について解説がなされた。第一部の著作権法についての解説では、日常的に起こり得る具体的な事例（資料の複写や配信、遠隔講義、引用等）においてどのような問題点があるかを検討するとともに、知的財産法における同法の位置付け、法解釈の手順等について説明がなされた。説明においては実際の裁判事例が紹介され、司法の場における同法の解釈のポイントと問題点が解説された。また、これと関連して支分権（複製権、頒布権等）やライセンス契約で注意すべき点について、実例を交えて解説が行われた。第二部のバックアップサービスにおける権利関係等の説明においては、近年普及が著しいクラウドサービスと著作権法とのかかわりを中心にして、複製や公衆送信の行為主体の解釈、国際裁判管轄と準拠法等について、豊富な事例をもとに解説がなされた。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	12	27.9%
良かった	27	62.8%
どちらとも言えない	3	7.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.3%
合計	43	100.0%

れた¹。

研修会後に実施したアンケートでは、およそ約 9 割の参加者から「参加して良かった」との回答を得た。自由記述による回答には、「重要な事項であるのに、学ぶ機会が少ないため新鮮だった。研究では著作権のある資料等を用いることも多いので有意義だった」、「専門用語が難しいと思った」、「様々な著作権について勉強になった」、「タイトルの『大学教員として』を『大学教職員として』と変更し、職員の参加も促してほしい」、「今後またクラウドの著作権について研修会を企画してほしい」、「クラウドの著作権について興味がある。時間が短かったので続編を希望する」、「業務に関連した講義が聞けて参考になった」、「具体的な事例が示されたので興味を持って聞くことができた。後半の話は良くわからなかった」、「著作権について今まで漠然としか知らなかったが、概要に触れることができただけでも有意義な研修会であった。本研修会の続編を望む」「教育上使用する映像・画像・音声等の考え方についてもっと知りたい」、「クラウドや apache の話はごく一部の人にしか分からず、全体にむけての話としては、難しかったのではないかと思う」、「実例がわかりやすく、面白かった」、「著作権のことがよく分かった。今後気を付けて対応したい」等の回答が寄せられた。学内における本研修会のニーズは高いと思われるので、今後もこのような研修会の開催を検討してゆきたい。

¹ 本研修会の様子は、メディア基盤センターの「Web 配信型 e-Learning システム」から視聴することが可能である。メディア基盤センターの Web ページからの本システムへのアクセス手順は以下である。

- (1) メディア基盤センターの Web ページにアクセスする。
- (2) Web ページ右サイドメニューの「セキュリティ情報」をクリックする。
<http://www.cc.yamaguchi-u.ac.jp/security/>
- (3) 「高いセキュリティレベルを維持する仕組み」「情報セキュリティ講習会」の中の「Web 配信型 e-Learning システム(コンテンツアーカイブシステム)」の文字をクリックする。
- (4) 「山口大学 e-Learning 教材」の頁で、「学部」 = 「講習会」、「年度」 = 「2012」を選択して、「決定」をクリックする。
- (5) 「講習会」の一覧ページで、「講義名」 = 「FD 研修会兼 ISMS 研修会」の行の「講義回数」欄の数字をクリックする (1 をクリックすると前半の講演、2 をクリックすると後半の講演を視聴できる)。
- (6) その後、「ネットワーク パスワード」の入力画面で、学内ネットワークのアカウント (ユーザ ID とパスワード) を入力すると講演の動画が再生される。

また、本研修会の資料は以下の URL に掲載している。

<http://www.kim-lab.info/20120822.pdf>

(5) 発達障害学生の理解と対応 —入学から就労までを視野に入れて—

日程：平成24年9月5日(水) 13:50～14:50

場所：工学部D棟 11 番講義室 (常盤キャンパス)

講師：木谷秀勝 (教育学部附属教育実践総合センター 教授)

参加者：52名(アンケート回収 39名)

内容

本研修会は最近増加している発達障害学生について、今後どのように修学面や生活面で対応していくのか、また将来の就労に向けてどのような対応を日頃から実施すべきかをテーマにこの分野の専門家である本学の木谷教授に講演していただいた。はじめに、発達障害、特に「軽度発達障害」について、その特徴と支援方法のポイントについて話があった。次に、大学教育における発達障害学生の支援について、現状としては専門スタッフが少なく支援が不足がちなため発達障害学生が一人取り残されることが多いことや大学職員のソーシャルスキルが重要であることが述べられた。また、就職活動や就労には困難さが伴うこと、そのために、早めに外部の組織(公的組織やNPO)を活用して就労支援に努めることや学内での支援、具体的には就業体験をさせるためのインターンシップへの積極的な参加やインターンシップ前に学内でインターンシップ(学内インターンシップ制)を導入することの重要性を述べられた。

最後に木谷教授からは、特に1年生から丹念に継続的にケアを実施し、学生との間で信頼関係を構築することが最も重要であることが説明された。

研修会の最後に質疑応答があった。その中で現在大学としてどのような支援体制が取られているのかについて質問があった。陪席していた大学教育センターの関係者からは、現在共通教育では支援の申し出があった学生(現在3名、すべて工学部)については、授業担当者には「授業中に配慮すべき事項」について紙ベースで連絡していることや共通教育係の中に窓口を作っていること、さらに、保護者や本人とも随時面談や電話相談を実施している現状が説明された。また、本学では全学的な支援組織(例えば、障害学生支援センターなど)が存在していないため、大学教育センターや学生相談所、保健管理センター、学生支援センター等が相互に情報共有を行い、連絡調整を実施していることが報告された。しかし、共通教育段階ではこのような支援体制で対応しているが、学部・学科との間では連絡が不足しがちであり、2年生以降の専門教育段階に進学した際には多くの問題を抱えていることが質疑応答の中から明らかになった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	22	56.4%
良かった	17	43.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	39	100.0%

(6) 学生の主体的な学習活動を活発化させる PBL 型授業の進め方

日程：平成 24 年 9 月 19 日(水) 14:30～15:00

場所：農学部本館 2F 会議室

講師：川崎 勝（大学教育センター 教授）

参加者：22 名(アンケート回収 20 名)

内容

本研修会では PBL(Problem-based Learning) の理論的背景、PBL-tutorial を採用した医学科モデルの概要と本学医学部医学科での導入事例、PBL の問題点、今後の動向について解説が行われた。PBL の理論的背景においては、知識伝授型の伝統的教授方法(Pedagogy)から成人教育学(Andragogy)へのパラダイムシフトを源として、PBL が生み出されたことが説明された。次に PBL が医学教育に取り入れられ、医学科モデルとして普及するに至った経緯、本学における医学モデルの導入事例について説明がなされた。また、PBL の問題点として、大量の知識を身に着けさせる教育には向いていないこと、学生側は学習へのレディネスを備えており、教員側は十分なリソース（人的・時間的）を持つとともに組織化されていることを前提とすること、日本における「現場」を知らない医学生を「成人」とみなすことに懸念があることが示された。そして、これらの問題点を踏まえたうえで PBL-tutorial が今後どのように発展するかについて説明がなされた。

質疑応答においては、「医学部医学科において PBL-tutorial はどの程度効果があったのか」、「1 年生を対象とする授業『山口と世界』は PBL を用いて行うのか」、「新入生に対してどのような教育をすれば PBL を導入できるか」との質問がなされた。これに対して講師からは「医学部医学科で導入した PBL による効果を定量的に言及することはできないが、4 年時の国家試験前の全国的なテストにおいては、本学の学生は他校よりも成績が良い。これは PBL を導入した効果かもしれない」「1 年生にはこの授業に対してレディネスがあるわけではないので、現実的には難しいのではないか」「1 年生までは Pedagogy を主とする学習をしてきているので、PBL 型授業に備えて『自分で学ばなければ』という意識を育ててゆく必要がある」との回答がなされた。研修会後のアンケートでは、「PBL に関心を持つことができた」、「Active Learning について理解できたが、実際に行うに当たって教員が何をどのようにやると効果が上がるのか大教センターが提示して欲しい」、「先生の御見識に基づいて、アクティブラーニング導入の問題点をセンター内でひろめていただきたいと思います。特に一定のアウトカムが成立し得ない『山口と世界』では無理かと・・・」、「『山口と世界』は困難」、「農学部で PBL の実施は難しそう。農場実習に応用？」との感想が得られた。また、今後希望する研修会については「大学教育として知っておいた方がよい（必ず知るべき）内容に関する情報」、「授業改善の技術など」、「今回のような具体的な教育方法に関する研修」、「授業の進め方、テキストの使い方など講義方法について（理由：1 クラス中の理解の違いが最近大きくなった）」、「ポートフォリオ、カルト関係」との回答があった。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	10.0%
良かった	11	55.0%
どちらとも言えない	5	25.0%
あまり良くなかった	1	5.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	5.0%
合計	20	100.0%

(7) 発達障害学生の理解と対応 —入学から就労までを視野に入れて—

日程：平成24年10月3日(水) 14:30～15:30

場所：人文・理学部管理棟 4F 大会議室

講師：木谷秀勝（教育学部附属教育実践総合センター 教授）

参加者：43名(アンケート回収 37名)

内容

本研修会では本学でも多くみられるようになった発達障害の学生について、修学や学生生活、就労に向けてどのように対応すべきかについて様々な事例をもとに説明がなされた。はじめに、軽度発達障害について、その特徴と支援方法のポイントについて説明された。次に、大学教育における発達障害学生の支援においては、現状では専門スタッフが不足しており組織的な支援体制も十分とはいえず発達障害学生が支援を受けていないケースも多いため、専門家以外の大学職員の対応も必要とされていることが説明された。また、発達障害学生の就職活動や就労では様々な困難が伴うので、早めに外部の組織（公的組織やNPO）を活用して就労支援に努めるとともに学内での支援、具体的には就業体験をさせるためのインターンシップへの積極的な参加やインターンシップ前に学内でインターンシップ（学内インターンシップ制）を導入することの重要性が説明された。また、特に発達障害の学生の支援については、1年生から継続的なケアが必要であり、そのためには学生と信頼関係を築くことが最も重要であるため、協力をお願いしたいとの話があった。

質疑応答では、発達障害学生の指導経験をもつ教員から、個人的にその学生の修学や学生生活について様々な支援が必要であり、負担になるので組織的に支援する体制を整備してもらいたいとの要望があった。また、他の教員からは発達障害学生を取り巻く周りの学生の理解と支援も必要となるが、病気については個人情報の観点から本人の承諾なしに他の学生に伝えられない状況にあり苦慮しているがどうすれば良いか、何らかのメンタルな問題を有していると思われる学生に医療機関の受診や支援を受けるように勧めたいがどのように本人に伝えれば良いか、本人が診断結果を認めがらない場合はどうすれば良いか等さまざまな質問がなされた。これに対して講師からは「個人情報の取り扱いについて十分な配慮も必要であるが、発達障害学生に対する情報を共有し組織的な支援が必要であると考えている。問題を有している学生への対応については、保健管理センターに相談するとともに、学生の家族への相談も必要と思われる」との回答があった。

研修会後のアンケートでは、「現場の意見や実態が聞けて良かった」、「具体的な指導方法を聞きたい」、「定期的（1年ごとぐらい）に開催し、大学内の取り組みの現状・変化等を聞かせていただきたい」、「内容が難しい」、「支援の仕方等、もう少し適応事例毎に知りたかった」、「『発達障害』についてまったくの素人だった。知識が身についた」、「発達障害の学生とは何かについて良くわかった」等の感想が寄せられた。また、今後希望する研修会については、「今回のように、教育・指導の観点で有意義な内容」、「我々教員にとって共通する問題を扱う内容」、「発達障害学生への具体的な支援の方法」、「学習意欲を失くした学生に意欲を出させる方法」、「学生への対応に関する実践的な話題（今回のような）」、「学習障害についての他大学での様々な取り組み例の紹介」、「学生の個人指導方法」等の回答があった。



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	18	48.6%
良かった	17	45.9%
どちらとも言えない	2	5.4%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	37	100.0%

(8) 授業に役立つ e ラーニングの活用

日程：平成 24 年 10 月 10 日(水) 13:30～14:30

場所：農学部・共同獣医学部本館 2 階会議室

講師：王 躍、小柏 香穂理 (メディア基盤センター)

参加者：16 名(アンケート回収 14 名)

内容

本研修会では、2010 年 4 月からメディア基盤センターから正式サービスとして提供されている教育支援システム「Moodle」の使い方について紹介が行われた。コースの登録方法を説明した後に、教材の登録方法や小テストの作成方法について説明が行われた。小テストの作成は、文法に癖があり慣れないと作り難いということで、広島修道大学と株式会社 VERSION2 が共同で製作した問題作成ツール「e 問つく朗」を提供してもらっており、これを利用すると比較的簡単に問題が作成出来ると紹介があった(Moodle ログイン後、右下の欄に表示)。

本学独自にメディア基盤センターでカスタマイズして追加した機能として、修学支援システムとの連携機能も紹介された。修学支援システムへ登録されている授業については、講義担当者が moodle にログインしたタイミングで自動的にコース登録が行われるので設定画面からコース利用で「学生はこのコースを利用できる」に変更することで学生が受講登録可能になる。学生は moodle にログインしたタイミングで修学支援システムへ履修登録を行った授業がコース登録されていた場合、自動的に学生メンバーとして登録される他、従来通り登録キーによる登録も出来る。これによりコースの登録申請やメンバー登録の操作が簡略化出来るということであった。

質疑では、Q「鹿児島大学の学生も自動登録されるのか？」A「出来る。3612～の学生が鹿児島大学の学生」Q「直接質問したい時は誰に相談すれば良いか？」A「小串は私、常盤は小柏先生、吉田は赤井先生が対応可能」等のやり取りがあった。

自由記述の感想には、非常に良かったという意見では「moodle の使い方に興味がでてきた」、良くなかったという意見では「自分でできる」等の回答があった。今後の参加については、出来るだけ参加したいという意見として「PC を使って実際に」「双方向通信教育に有効な手段を得られるもの」「健康な心と体について」等の回答があった。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	21.4%
良かった	6	42.9%
どちらとも言えない	2	14.3%
あまり良くなかった	1	7.1%
良くなかった	2	14.3%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%



(9) 学生相談室の相談内容から見えてくる最近の山口大学の学生の実態

日程：平成24年11月7日(水) 14:30～16:00

場所：人文・理学部管理棟 4F 大会議室

講師：今井佳子（学生相談所 カウンセラー）

参加者：32名(アンケート回収 31名)

内容

本研修会では、学生相談所に寄せられた学生や保護者、指導教員からの相談内容の概要が説明され、教員としての対処の在り方について説明が行われた。学生からの相談には自分の性格や対人関係（友人、ゼミ、恋愛、先生）、体調不良（特に緊張による胃腸系の不調）、転学科・編入学や学習への不安、クラブ活動における人間関係のトラブル、大学院進学への悩みに関する相談が多い。一方、保護者や指導教員からは不登校や引きこもり、連絡がとれなくなる（電話をかけても出ない等）についての相談が多い。これらの問題を抱える学生には鬱的傾向がみられる場合が少なくなく、自殺等の最悪の事態にも繋がりがねないケースもあるので、学生の相談に十分に傾聴しながら、指導教員や保護者、学生相談所、保健管理センター、学務係等の事務、他の教員等と相互に連携してサポートする体制を築くことが重要である。これらの説明に加えて、相手の話を理解することの難しさを体験するために「一方的なコミュニケーションを体験するゲーム」が行われた。このゲームを通じて、学生からの相談には注意深く耳を傾けるとともに、信頼関係を築いてゆく重要性が説明された。

質疑応答では、学生が抱える問題によっては家族カウンセリングも必要な場合もあるのではないかと質問があった。これに対して講師からは「学生の家族関係に問題がありそうな場合には、本質的には家族カウンセリングも必要と考えている。学生の家族に問題があるかどうかは表面的には分かり難いが、それが疑われる学生は特に問題を抱えやすいので気をつけてほしい」との回答があった。

研修会後のアンケートでは、「最近の学生は多様なので、今日のような話は学生と接するときの参考になる」、「今回のような内容の研修会には是非参加したい」、「学生への対応の仕方がよくわかった」、「自分の仕事に対する意識が変わった」等の感想が寄せられた。今後希望する研修会については「学生の心の問題をテーマとするもの」、「不登校学生に関するもの」、「学習成果の組織的アセスメントの方法をテーマとするもの」、「日常の業務で困っている問題に参考になるもの」等の回答があった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	17	54.8%
良かった	13	41.9%
どちらとも言えない	1	3.2%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	31	100.0%

(10) 大学教員として知っておくべき知的財産の知識

日程：平成 25 年 2 月 27 日(水) 17:00～18:30

場所：東アジア研究科・経済学研究科棟 307 演習室

講師：木村 友久（技術経営研究科 教授）

参加者：20 名(アンケート回収 15 名)

内容

本研修会では知的財産権の概要の説明と近年の判例等を参考に大学教員として注意すべき点について解説がなされた。著作権をはじめとする知的財産権は、所掌が省庁に分かれているため解釈が微妙に異なるが、主として製品等の開発製造過程の創作物である知的財産(発明等、20 年程度)、営業上の信用が化体されている知的財産(商標等、半永久的)、思想または感情の創作物である知的財産(著作物等、死後 50 年程度)の 3 系統に分かれる。これらは無形の情報であり、例えば本であればその文章というように、データ自体に価値がある。動画等の他の著作物についても、その媒体は異なるがデータと捉えることによって知的財産の考え方が整理できる。実際の判例として博多人形と新居猛氏の NY CHAIR X の事例、江差追分事件、山の民家事件、TBS へんしん吹きごま事件等の説明があり、これらの実例をもとに大学で起こる可能性のある問題および注意点について解説がなされた。

質疑応答では、ある実際の作品の制作にかかわった複数の人のうちの誰に著作権があるかについて質問があった。これに対して、講師からはその作品に関する判決の概要と判断の根拠について説明があった。また、折り紙の折方も何らかの権利で保護されるかとの質問に対しては、折り方に独自性や芸術性があれば特許として保護される可能性はあるとの回答があった。

研修会後のアンケートでは、表 1 のように本研修会が「良かった」と回答した教員が大半を占める結果となった。具体的な感想としては、「教員にとって最も大切な法律問題について豊富な判例を示していただき大変参考になった」、「後半、論文に関する事例をもっと詳しく聞きたかった」、「出席者の興味のあるテーマに絞ってそこを深く話してほしい」、「論文執筆について原資料(写真)の著作権がどれほど主張されるか、今後アジアでも問題視されるかもしれない」等のコメントが寄せられた。また、今後に希望する研修内容については、「博士課程レベルでの留学生に対する指導方法について」、「本研修と関連する書物を撮影した写真についての詳しい話」、「著作権に関する詳しい内容」、「学生とのコミュニケーションの取り方」、「学生の勉強意欲の引き出し方」、「個別テーマを設けて内容を詳しくした研修」等の回答があった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	13.3%
良かった	11	73.3%
どちらとも言えない	1	6.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%



3. 教育改善研修会

(1) 農学部、農学研究科、医学系研究科(農学系)

日程：平成24年7月18日(水) 14:30～15:00

場所：農学部 2F 会議室

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

平尾 元彦 (学生支援センター教授)

参加者：25名(アンケート回収24名)

内容

本研修会では、農学部における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。

最初に大学教育センターの小川教授より農学部から提出された学生ポートフォリオの実実施計画について大学教育センターとしてのコメントが述べられた。まず一点目としては、農学部では、4年次にポートフォリオを使用して学生との個別面談を行うとしているが、それまで学生にポートフォリオを書かせるだけでは十分な記録がとれないのではないかと懸念している。元来、学生ポートフォリオの目的は学生の学びの過程や意欲を可視化することによって様々な問題の早期発見に繋げることにあるので、もっと早い時期(理想的には1年次)から面談を実施していただきたい。もう一点は、学生ポートフォリオは学生自身で保管させることになっているが、紛失してしまう学生がいるのではないかと懸念している。紛失した場合、その学生がこれまでどのような学びの道筋を辿ってきたのかわからなくなってしまう。そのため、他学部では学生ポートフォリオのコピーを事務等に保管してもらおう策を講じているところもある。農学部でもこの方法を採用してはどうかとの提案がなされた。



これに対して、農学部学務委員長からは「ポートフォリオに関しては、最初の前提では、キャリア形成の一環として本人が就職活動を始めるときに役立つようにという説明をきいている。学業以外の面で学生が何を考え成長してきたかを知るべきはあくまでも学生本人であると考えている。そもそも学業以外の事項、殊に学生個人の思想信条等の個人情報に教員が知り得ることは好ましくないで関知すべきではないと考えている。個人情報等に関する法律上も問題があるのではないかと懸念している。また、4年次だけの面接ではそれまでの学生の様子がわからず不十分ではとのことだが、農学部では1～3年次の実験を通じて教員と学生が触れ合う機会が頻繁にあり、その場における出席や発言、レポートの提出等を通じて学業面はチェックができています。例えば1年次でも前期、後期でほぼ全員参加の授業があり、学生の欠席情報を学科の教員全員で共有して、その状態が2～3週間続けば呼び出しをかけるなどの措置をとっている。ポートフォリオで半年に1回の面談をやるよりも、学生のケアをしている自負がある。かえってこのようなポートフォリオが導入されると学生への指導が硬直化してしまうとともに、教員の負担が無駄に増えて、これから大きく伸びる可能性を持つ学生のために教員が注ぐべき力が削がれてしまうのではないかと危惧している」との意見が述べられた。また、他の出席者からは「農学部ではサークルやバイトにのめり込んで学業が疎かになり大学を辞める事態になる学生が問題になっている。学生ポートフォリオの『学業以外(サークル活動・アルバイト等)』という欄は大学が学業以外のことをすることを奨励しているように見える。学生の中にはこういう欄を設けると学業以外を頑張った方が就職には有利だとはき違えて考える学生がいるだろうから、これは問題である。」

大学生なのだから学業に注力するように教える側としては主張すべきである」、「ポートフォリオのコピーは誰がどこに保存するのか」、「学業面とそれ以外を分けて記述させる必要はないのではないか」、「この学生ポートフォリオにおける質問は、実際のキャリア戦線には役立たないと思う。実際の企業の就職試験で出される質問と同等の厳しい問いかけにしないと効果がないのではないか」、「学生は自身の思想信条はもとより、他の指導上必要となる事項に関しても本当のことは書かないのではないか。そうだとすると、そもそもポートフォリオを書かせる意味自体が無いのではないか」等の意見が出された。

これらの意見に対して、平尾教授からは「現在、多くの企業は学業のみならずバイトやサークルを含め、大学生生活のあらゆる面を通じて学生にどのような資質があるかを問う傾向にある。最近、キャリアという言葉の意味合いは必ずしも就職ではなくて、例えば学生時代に何かに躓いたときにそれを超えてゆく過程も含まれている。学生ポートフォリオは学生が大学生活を通じて将来就職して社会へ羽ばたいていくための力を付けて行くための記録および指針であり、広い意味でのキャリア教育の一環であることをご理解いただきたい」との回答があった。また、小川教授からは、「学生の思想信条にかかわる個人情報に教員が触れてしまう件については、法的な側面からいけば事前に利用目的を定めて学生に明示すれば問題はないと考えている。ポートフォリオの導入がキャリア教育にとってベストだとは思っていないが、広い意味におけるキャリア教育において、学生がどのような生活をしていて、どのような方向に向かっているのかについて学生と話すきっかけになれば有意義であると考えている。農学部の事情に沿って今後も検討してもらいたい。また、ポートフォリオの保管については本日お話しした他学部の方法が良いと思われるが、この点に関しても先生方だけではなく事務の方も含めて再度ご検討いただきたい。今回の意見交換会は大学教育センターおよび学生支援センターとしても大変参考になった」との回答がなされた。

本研修会後のアンケートでは、研修会へ参加して良かったという意見は参加者の約半数にとどまる結果となった（表 1）。具体的な感想としては、「FD と呼んでいいのかと思った」、「ポートフォリオの運用について本部の意向が聞けた」、「生産的であるとは思えない」、「単なる説明、言い訳を聞かされるだけでは無意味」、「流行でやっても根がつかない。下手に教員へ押し付けない」、「ポートフォリオの意味が少しわかりました。ポートフォリオの導入は教員が学生の私生活に介入するというこれまでになかった危険な試みだと思いました。やはり絶対にやるべきではないと思います。中期目標・・・」、「ポートフォリオは不要と思います」、「結局、ポートフォリオについて、目的・内容ともにはっきりしないものであった」、「意義を感じられない」、「多様な学生に対応するための情報源としては有効だと思っている」、「ポートフォリオに関して具体的な説明がなかった」、「ポートフォリオについては効果がないと考える」、「理解が進んだ」、「アンケートに書いても、どのようにとりあげられるのか、信頼感を持ってません」とのコメントがあった（コメントは字句の若干の修正を除いて原文のまま引用）。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.2%
良かった	10	41.7%
どちらとも言えない	8	33.3%
あまり良くなかった	3	12.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	2	8.3%
合計	24	100.0%

(2) 工学部、理工学研究科(工学系)、医学系研究科(工学系)

日程：平成 24 年 09 月 05 日(水) 13:10～13:40

場所：工学部 D 棟 1 階 D11 教室

講師：糸長 雅弘 (大学教育センター長)

吉村 誠 (学生支援センター長)

小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：41 名(アンケート回収 34 名)

内容

本研修会では、工学部における学生ポートフォリオ(ステップアップノート)の実施について意見交換を行った。最初に大教センターの小川教授より工学部から提出された学生ポートフォリオの実実施計画について「ステップアップノートの内容は全学に示している簡略なひな形と比較して非常に丁寧で素晴らしい」とコメントが成され、今後の参考にしたいという主旨で、「導入された学科でどのような効果あったのか」、「具体的運用方法の計画(記入の機会をどの時点で設けるか?活用した面談どのように実施するのか)」について質問が行われた。

工学教育研究センターの齊藤センター長から、「平成 19 年度に 1 年生に意識をどう植えつけるかセンターの先生方で発案されて作ってみたのが最初。その後ちょっとずつ形を変えて、各学科で試すという形で 2～3 の学科が基礎セミナーで使っているが工学部全体ではない。一昨年、工学教育研究センターからのお願いという形で配布した。効果については、いろんなところで使って、他の就学指導全部で効果が出たかどうか判断できるものなので、お話しできない。今年導入したものは、各学科がやっている共通項をまとめたらあの形になった。批判も浴びながら、これから変えていく。電子化については moodle 化で一応検討を始めている状況。」と説明があった。実際に利用している学科からの情報提供として、社会建設工学科から、「学科レベルで作った学生の手引きを 1 年生に配布している。JABEE 認定受けていて、学生個人が PDCA を回せることが大切。学生の手引きには毎年度の始まり 4 月に 1 年を振り返って、単位の履修状況、到達状況を自己評価する。それを持ってチューターと面談している。最終的には 4 年間を振り返ってという欄を記入。教務的な話がメインなのでキャリアデザインには使い難い。電子化は学生委員とチューターが面談した記録を PDF 化して学科のサーバーで共有することで、担当教員が変わっても継続的に分かるようにしている。ステップアップノートは 3 年後期の共通教育科目総合教養 A にある大学院へのいざないで、自分の誇れることや、どうしたいかを記入し、卒業研究の担当教員や就職担当と相談する時のベースとしてもらうことを考えている。」と説明が、電気電子工学科からは、「ステップアップノート使って指導はしてないが、アドバイザー制を導入している。1 年生には手が回らないが、常盤キャンパスにいる 2、3 年生を半期に 1 度必ず個人面談している。准教授以上の教員を割り当て、呼び出して個別に面談し、修学状況の他に、学生生活全般のいろんな悩みや困り事の相談に乗る制度。その中でステップアップノートを使ったら良いという話は学科会議でも挙がっており、今後の活用を検討している。」と説明があった。小川教授からは「学科ごとの対応の仕方あることが分かった。これからも上手く行くやり方、行かないやり方を教えていただいて、ポートフォリオを他学部にも広めていきたい。」とコメントがあり、大学教育センターの糸長センター長からは「大学院へのいざないの中で使うのは非常に良いやり方だと印象を持った。新しい共通教育ではキャリア教育 2 という 1 単位ものが高年次向けにしてあるのでうまく活用できる可能性もある。大教センター長の立場で気になっているので何か聞かせ頂ければと思う。」とコメントされ、



設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	2.9%
良かった	9	26.5%
どちらとも言えない	12	35.3%
あまり良くなかった	6	17.6%
良くなかった	6	17.6%
無回答	0	0.0%
合計	34	100.0%

齋藤センター長から「ステップアップノートの中身を見ると、オリエンテーション、基礎セミナー、フレッシュマンセミナーで使うことを意識しており、後半は就職時に自分が何をしたいか、何をアピールできるかということ蓄積できるストーリーになっている。こういう形で使いなさいと言うよりは使い易い形で使って頂いて必要があれば改訂すれば良い。最初に考えていたのは、各学科で先進的な試み、面白い試みがされているので情報共有すること。結局は学生のためなので、学生が上手く行くならどうという使い方をされても良い。キャリア教育2で使うという形で同じようにやられていくと思う。」と返答があった。

質問では、1年次開講のキャリア教育1の内容の予定について質問があり、「知の広場を使うことを考えている。今は前期に学長、副学長、学部長、後期に外部の産業界等から講師を招いてやっているが、これだとオムニバスで話を聞くだけになる。学生支援センターの平尾先生を中心に、座学でトータル8回しかないですが最初に2回、終わりに1回のような形で、キャリアデザインの考え方等の基礎的な話を交えて、それにプラス今の知の広場のやり方を組み合わせようかと考えている。」と糸長センター長が返答された。中期計画ではポートフォリオを電子化して進めていくことになっているが、全学ではどういう計画で進められているのかという質問もあり、「今年に入って予算の目途が立っていない。新しい共通教育の実施に伴う修学支援システムの改修や、IYOCANで機能的に出来てないところがあり、そちらの優先度が高いので今年度はむしろそちらを優先し、今年度は紙ベースを中心に様子を見ていきたい。」と糸長センター長が返答された。これに関して、電子化が進んでいった際に工学部のステップアップノートのような各学部ごとに作り上げていく形になるのか、全体でテンプレートのようなものあってそれを使う形になるのかという質問があり、「基本フォームを示しているが、学部の独自性高いものを1つのシステム内で実現すると予算がかかる。共通性の高いものをまずは電子化するということからスタートせざるを得ない。Moodle等で独自に構築されるものあれば、それはそれで是非進めて頂きたい。」と糸長センター長が返答された。

(3) 医学部医学科、医学系研究科

日程：平成24年09月12日（水）13:15～13:30

場所：医学部本館6階第一会議室

講師：川崎勝（大学教育センター教授）、辻多聞（学生支援センター講師）

参加者：約40名（アンケート回収18名）

内容

本研修会では、医学部医学科における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの川崎教授より、学生ポートフォリオ実施に関する全学の流れに関する説明があった。その概要とは、「中央教育審議会が大学における学士力（社会人基礎力）の育成があげられ、山口大学の中期計画・中期目標として

学士力の育成を掲げていること」、「その具体的方策として学生の振り返りに伴う自己のPDCAサイクルを大学がフォローしていくこと」、そして「学生支援センターが主体、大学教育センターがフォローとして、学生ポートフォリオの全学的導入が検討され、2011年度教学委員会にてその導入が決定された」というものであった。説明の後、川崎教授より医学科に対して、次のような学生ポートフォリオへの積極的協力の願いが行われた。①とりあえず年に1回の学生によるポートフォリオ記入をお願いしたい、②2012年度は、学生の記入・提出・シートの保管のシステムづくりをお願いしたい、③次年度以降は、上記システムを基盤としてシートに基づく学生面談等の支援体制づくりをお願いしたい。質疑応答として、まず医学科より「①すでに導入している学部等はあるのか?」、「②実質的に回収で

きるであろうか？（回収率は100%近くになるだろうか？）という質問があった。これに対して川崎教授より「①医学部のログブックや工学部の一部学科によるスタディブックがこれに該当する」、「②すでに導入している他大学の事例のなかには回収率が低いことも報告されている。新入生オリエンテーションなどで記入の意義に関する十分な説明が必要となるだろう。さらにシートの回収方法の検討も行っていく必要があるだろう。しかし、なにより学生ポートフォリオを定着させることが大事だと考えている。導入・定着にともなう負担を先生方にはできるだけかけないようにしていくつもりである。定着させていくにあたり提出しない学生より、提出する学生に着目していただきたい」という回答がなされた。次に川崎教授より「①どのタイミングで学生ポートフォリオの記入・提出を予定しておられるのか？」、「②次年度以降、学生面談はおこなっていただけるだろうか？」という質問が医学科に対してなされた。これに対して「①1年次は9月末のフレッシュマンセミナーで、2年次以降は年度末を予定している」、「②学生面談等の支援体制づくりに関しては検討中であり、まずは『書かせる』ことだけを目指している」との回答があった。

非常に短時間な研修会ではあったが、医学科に対して学生ポートフォリオの導入に対して十分な理解が得られたと同時に、その導入には非常に前向きであることがわかった。

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	2	11.1
良かった	10	55.6
どちらとも言えない	5	27.8
あまり良くなかった	0	-
良くなかった	0	-
無回答	1	5.6
合計	18	100.0

(4) 人文学部、人文科学研究科、東アジア研究科（人文系）

日程：平成24年9月14日(金) 14:30～15:00

場所：人文理学部大会議室

講師：糸長雅弘（大学教育センター長）

小川 勤（大学教育センター教授）

平尾 元彦（学生支援センター教授）

参加者：39名(アンケート回収27名)

内容

本研修会では、人文学部における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの小川教授より人文学部から提出された学生ポートフォリオの実施計画について、大学教育センターおよび学生支援センターとしてのコメントや質問が述べられた。まず1点目としては、人文学部では来年度から「助言指導教員」が担当すると書かれているが、この教員の「役割」や「仕事内容」、「配置人数」、「助言指導教員一人当たりの担当学生数」について質問があった。これに対して、人文学部からは基礎セミナー1担当者の6名が担当し、1人当たり約30名の学生を担当する。役割や仕事内容は、出席確認やポートフォリオ記入上の説明および学生から提出されたポートフォリオの内容のチェック、関連学内外機関（就職相談室など）への仲介などの業務を考えていること

が明らかにされた。2点目の質問としては、運用計画の中で「面談を希望する学生のみ面談を実施する」と書かれているが、なぜ面談を希望する学生のみに限定するのかについて質問があった。これに対し人文学部としては、修学やキャリアに対して学生自らがマネジメントすることがポートフォリオ導入時の説明文や就職相談室などのパンフレットに書かれていたので人文学部としてその趣旨に従った面談方法を考えたことが明らかにされた。3点目の質問は、問題のある学生（登校拒否気味や学習意欲が低い学生など）こそ、面談すべきではないかと一般的には考えられるが、人文学部が考えているような対応であると、彼らは面談を望まない可能性があり、人文学として学生指導やキャリア指導上、問題が発生しないのかという質問があった。これに対して人文学部ではこのような学生に対しては学生委員やゼミの指導教員などが日頃から対応しているため、必ずしもポートフォリオにおける面談を利用してこのような学生に対する指導を実施していこうと考えていないことが明らかになった。3つの質問以外に、系長大学教育センター長からは、ポートフォリオシートの Web 化について説明があった。現状では来年度から導入される新しい共通教育に向けた教務システムの改修作業を優先せざるを得ないことや、仮にポートフォリオシートが Web 化されても、基本的には大学教育センターおよび学生支援センターが示した「雛形」をベースにしたシート開発になることが説明された。

平尾学生支援センター教授からは人文学部ではすでに外部のキャリア指導員を招聘して学生のキャリア指導に当たっていただいているので、今後はこれをさらに発展させるように、就職相談室等との連携を密にしていきたい旨、説明があった。最後に他の質問を受け付けたが、特になかった。

今回の研修会では大学教育センターから研修会において聴取したい事項を事前学部に連絡してあったので、短時間ではあったが、人文学部のポートフォリオに対する考え方や運用方法に対する具体的な内容を詳しく知ることができて大変有意義であった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	3.7%
良かった	7	25.9%
どちらとも言えない	12	44.4%
あまり良くなかった	6	22.2%
良くなかった	1	3.7%
無回答	0	0.0%
合計	27	100.0%

(5) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日時：平成24年9月19日(水) 16:00～16:30

場所：教育学部21番教室

講師：系長雅弘(大学教育センター長)、吉村誠(学生支援センター長)

参加者：58名(アンケート回収56名)

概要

教育学部の拡大教授会の後に全教員を対象に、ポートフォリオの目的・意義について説明をした後、教育学部における学生ポートフォリオの形式や実施体制についての質疑応答・意見交換を行った。

内容

本研修会では、教育学部における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に、学生支援センター長の吉村教授から学生ポートフォリオの内容・意義について、「教育学部では、既に教員を目指す学生向けに履修カルテを導入しているが、学生ポートフォリオは企業就職を目指す学生向けのキャリア教育の一環として導入する必要があると考えている」、「履修カルテは詳細な項目を含んでいるが、学生ポートフォリオはできるだけ簡素化する方向で考えている」と説明があった。

次に、大学教育センター長の糸長教授より、教育学部の学生ポートフォリオの実施について、新しい共通教育ではポートフォリオを活用したキャリア教育に関する授業が実施される予定であるとの説明があり、さらに、ポートフォリオの実施時期や学部として履修カルテと学生ポートフォリオの兼ね合い（特に、非養成の学生が免許取得を途中であきらめた場合の学生ポートフォリオへの接続・移行）をどのように考えているのかといった趣旨の質問があった。

これに対して、今年度は1年生を対象に10月以降に教職オリエンテーションに併せて実施する計画であること、2年次以降は5月末に実施する計画であること、学生ポートフォリオは教職カルテと平行して実施する計画であるが実施体制の詳細については未定であること、などの返答があった。これについて、糸長センター長より、共通教育のキャリア教育授業をぜひ利用していただきたい、また、電子化も早急に実施したいが目処が立っていないとのコメントがあった。

また、全体の質疑応答として、ポートフォリオの実施体制や保管体制、ポートフォリオのフォーマットに関して幾つかの質問があった。質問内容から、ポートフォリオの必要性については一応の共通認識が形成されているものの、教員免許取得者を対象とした履修カルテとの関係性（履修カルテと学生ポートフォリオを両方実施するのか否か）、ポートフォリオの運営並びに実施体制、ポートフォリオの形式などの詳細な部分については、今後、さらに検討が必要であると思われる。

なお、研修会実施後のアンケートの結果は表1のとおりである。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	3.6%
良かった	21	37.5%
どちらとも言えない	24	42.9%
あまり良くなかった	4	7.1%
良くなかった	5	8.9%
無回答	0	0.0%
合計	56	100.0%



図1 研修会の様子1



図2 研修会の様子2

(6) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日程：平成24年9月19日(水) 16:00～16:30

場所：経済学部A棟2F第1会議室

講師：渡邊 幹雄(大学教育センター主事)

木下 真(大学教育センター准教授)

辻 多門(学生支援センター講師)

参加者：45名(アンケート回収 11名)

内容

本研修会では、経済学部における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの渡邊主事より経済学部から提出された学生ポートフォリオの実実施計画について、大学教育センターおよび学生支援センターとしてのコメントと質問がなされた。まず1点目としては、ポートフォリオを1年生から可能な限り面接とセットでポートフォリオの実施ができないか、少なくとも4年次に個人面接と実施していただけないかとのコメントがあった。これに対して、経済学部では1年生からポートフォリオの実施は考えておらず、各教員がゼミで指導する学生数が非常に多いため、個人面接を各学年について毎年実施するのは時間的に難しいとの回答があった。大学教育センターからの2点目の質問として、学生が記入したポートフォリオを学生に保管させておいても紛失することも考えられるので、学生が記入したポートフォリオとその関連資料をコピーして事務等に保管してもらうことはできないかとの質問があった。これに対して、経済学部では記入されたポートフォリオは学生自身が管理すべきものであるという立場から、事務等での保管は考えていないとの回答がなされた。また、経済学部の教員からは、「ポートフォリオとはそもそも何なのかわからない。本日初めて聞いた」、「ポートフォリオについて他大学で実施されている例について聞かせてほしい。何にどの程度効果があるのか」、「大学教育センターおよび学生支援センターが用意したポートフォリオの記入事項はあまりにも抽象的で漠然としており、このような内容で実施しても効果は疑わしい。とても現在の就職活動のプラスになるとは思えない。ポートフォリオの実施をしているという既成事実だけを作りたいのか。無意味に思える」等の質問や意見があった。これに対し学生支援センターの辻講師からは、教育改善のPDCAサイクルにおけるポートフォリオの位置づけ、キャリア教育における『キャリア』という言葉の解釈においては学生生活も含まれること、学生生活の記録も重要になること等が説明された。木下准教授からは他大学でポートフォリオが用いられている例として島根大学教育学部の例について紹介がなされ、8月10日に実施された島根大学教育学部におけるポートフォリオの導入事例の概要が説明された。その上で、専門分野によってポートフォリオの馴染みややすさに違いがあるため他学部のポートフォリオ導入の事例が必ずしもそのまま参考になるとは言い難いこと、ポートフォリオの効果については定量的な効果測定は困難かつ限定的でどの程度何に効果があったかを明らかにしにくいことが説明された。また、ポートフォリオの記入項目については現時点では経済学部から特に意向を聞いていないが今後聞かせていただきたいとの話があった。



研修後のアンケートには、「ポートフォリオを作成する必要性を感じない」、「前置きが長い、ポイントを絞って伝えることだけを伝えてほしい。これは何の会なのか。研修とは言えない」、「データを集めたいだけなのか、それを指導に生かしたいのか。前者だけとしか見えない。データ集約だけならば、計

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	2	18.2%
どちらとも言えない	6	54.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	3	27.3%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

量社会学者が厳密に行うべき（今回はどちらも不十分）。科研（またはその他外部資金）のデータ集めとしか見えない。教育（学）研究者の代理でデータを集めさせられる（それも業務の一環として）筋合いはない。研究結果を出すべき（アンケートはそれなりの費用を出して）、「『Portfolio』は導入すべからずと思うからです。自主性・自発性を育てるものだと認識されていますが、他者に自らの目標をみてもらうことで自主性・自発性が低減する可能性もあります。その可能性を検討されていないようです」、「意義を感じられない研修が多い」、「教員によって立場が違うので無駄が多い」とのコメントが得られた。今後希望する研修会については、「非英語ネイティブを対象とした英語開講授業」、「ゼミ活動についてのヒント」、「教育効果にプラスになるもの」とのコメントがあった。

(7) 医学部保健学科・医学系研究科

日程：平成 24 年 10 月 10 日（水）13:15～13:45

場所：医学部保健学科第 2 研究棟 HD1 講義室

講師：川崎勝（大学教育センター教授）

辻多聞（学生支援センター講師）

参加者：約 40 名（アンケート回収 35 名）

内容

本研修会では、医学部保健学科における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの川崎教授より、学生ポートフォリオ実施に関する全学の流れに関する説明があった。その概要とは、「中央教育審議会で大学における学士力（社会人基礎力）の育成があげられ、山口大学の中期計画・中期目標として学士力の育成を掲げていること」、「その具体的方策として学生の振り返りに伴う自己の PDCA サイクルを大学がフォローして

いくこと」、そして「学生支援センターが主体、大学教育センターがフォローとして、学生ポートフォリオの全学的導入が検討され、2011 年度教学委員会にてその導入が決定された」というものであった。

次に、川崎教授より保健学科に対して、学生ポートフォリオへの積極的協力の願いが行われた。これに対し保健学科看護学専攻からは、「現在 2 年生以上を対象として実習要綱を示すとともに詳細な実習経験一覧表を記入させ、これをもとに指導を行っている状況であり、すでに実施していると言ってよいだろう」という回答があった。この回答を受けて、川崎教授から「実習の始まる前の学生に対してはどうしているのか？」との質問があり、保健学科看護学専攻から「実習要項への記入は 2 年次以降であるので、1 年生に対する実施方法に関して検討をする」との回答があった。

最後に、保健学科から川崎教授に対して学生ポートフォリオ実施にともなう質問がいくつかあった。その内容は、「①ポートフォリオの保管方法（提出方法）はどうしたらよいであろうか？」、「②教員一人一人が全員分のポートフォリオを見るのか？」、「③現在の実習経験一覧表は専門に準じた形で作成し実施している。本件のポートフォリオでは社会人基礎力の育成が求められているがどうしたら良いか？」、「④学生全員分のポートフォリオを大学に提出しなければならないのか？」というものであった。これらの質問に対しそれぞれ、「①学生と教職員で 1 部ずつ持っていることが望ましいと考えて



設問 1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	1	2.9
良かった	19	54.3
どちらとも言えない	14	40.0
あまり良くなかった	1	2.9
良くなかった	0	-
無回答	0	-
合計	35	100.0

いる」、「②基本的に自身の担当する学生分を見れば十分であろう」、「③大学としては目標意識をもって大学時代を過ごすことを望んでいる。この目標意識の設定は社会人基礎力の育成に通じるものであり、現行の実習要項ではほぼクリアできていると思われる。社会人基礎力を育成に関しては必要に応じ追加記入項目などを検討してもらえれば良いと思われる」、「④学生一人一人分を提出していただくことは現在考えていない。ただし実施状況に関する報告は求められることになるだろう。その報告書の書式や提出方法は、今後の教学審議会にて検討されるので、それに従っていただきたい」との回答がなされた。

この研修会によって、医学部保健学科看護学専攻においてすでに実施されている実習経験一覧表が学生ポートフォリオとして十分なことが明らかとなった。そして、そうした実績を基にした十分な内容の1年次向け学生ポートフォリオ実施への期待を感じることができた。

(8) 理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）

日程：平成24年10月31日(水) 13:00～14:00

場所：人文・理学部管理棟 4F 大会議室

講師：糸長 雅弘 (大学教育センター長)

小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：19名(アンケート回収19名)

内容

本研修会では、理学部におけるポートフォリオの実施について意見交換を行った。理学部では物理・情報科学科、生物・化学科が基本フォーマットを利用、数理科学科、地球圏システム科学科が独自様式を利用する計画となっている。最初に大教センターの小川教授



より理学部の学生ポートフォリオ実施計画について、数点の質問が行われた。まずは、各学科がこれに回答する形で、研修が進められた。

その後全体に対して、要望・意見が大学教育センターから問われた。それに対して「今後は紙ではなく web で行うべきという強い希望がある。」という意見があり、糸長センター長から「現在、新しい共通教育の導入に伴い修学支援システムの改修が必要になっている。それに合わせて、履修カルテの対応を第一に、現在のポートフォリオも包含する形で今年度中の実現を検討中。」と状況説明があった。さらに、数理科学科から「現在は就職の連絡票を配っていて効率が悪い。電子化の際には就職関連システムも統合して頂きたい。」と要望が上がった。

「教職履修カルテとポートフォリオの位置づけが似ている。同じような事を2回やらされると、それぞれがないがしろにされる可能性がある。」と指摘があり、糸長センター長から「教職カルテと共通する項目は自動的に入るような仕組みを考えたい。」と返答があった。これに対し「学部としては履修カルテをやっている人はポートフォリオはやらないという運用もありか？」という質問があり、糸長センター長から「ポートフォリオが履修カルテに含まれる形ならそれも有り。」と回答され、「山大の履修カルテは他大学と比べて簡便。教職課程委員会の方針次第だが、とりあえずスタートしたあの形が将来もあのままということはないと思う。」「修学支援システムの業者が履修カルテのシステムを持っており導入事例もあるらしい。本格的な物に対応できるはずなので、山大の簡便な形なら当然対応できるはず。」等の補足が行われた。これに対して「先程、今春に教職カルテを基に面談を行い効果が

あったと言ったが、内容が良かったわけではない。面談が良かった。教職カルテにない項目について質問を受けたりした。ポートフォリオを充実させるのは反対。簡便にした方が良い。面談が一番効果ある。」と意見が上がり、糸長センター長から「これを考えた平尾先生は、最初から複雑なポートフォリオは実施してもらいにくいだろうと、まさに先生の言われた効果を期待して始めた。先生の意見はまさに期待通りで心強いサンプル。」と返答があった。

基本フォーマットの学業以外・サークル活動・アルバイトの記述は、他学部では社会活動等という名称に変えたいという希望があった点について、数理科学科から「成績不振者の中にアルバイトで授業に行けなくなった学生がいるので、項目があればコメント出来ると思い残した。」とコメントがあった。

「基本フォーマット利用の場合、各学年のどの時期に行うのが効果的？」との質問もあり、糸長センター長より「今のところ回答出来るものを持っていない。スタートしたので他大学の状況も見て次年度以降言えるようにしたい。」とコメントが返された。

「ポートフォリオ導入は面談してもらいたいからだだったが、次年度以降臨機応変にフォーマットを変えても良いのか？」との質問には、糸長センター長から「前年度からの継続性の問題はあるが、より良いフォーマットに変えるのは問題ない」と返答された。

「年1回と言っているが、物理情報科学科は既に年2回面談を行っておりフォーマットには抵抗があった。担任制を実施しており、各教員で独自の質問シートを用意していると思う。共通項目はあっても良いと思うがあまり複雑にするのは良くない。学科の事情がある。」「電子化するとフォーマットが毎年変わるようなのは対応出来ないと思うし、お金もかかるので単にアップロード出来るだけで良いと思う。」等の意見も上がり、糸長センター長より「複雑なものより簡便なものと言うのは理解した。既にやっていて必要ないところはそれで良いというのが此方のスタンス。結局学部として使いたいのはごく一部となるので、形式より運用を大事にしたい。それとは別に電子化は必要と考えている。」「履修カルテは形式が必要だが、今のポートフォリオはPDF化したものを保存するだけという形も考えたい。学生に根付いたら、いろんなものを残したいとなる可能性はあるが、それはファイルに入っていて必要なときに引き出せるだけで十分はず。元々のポートフォリオはデザインをやる人が作品を挟んでいくものだと聞いているのでそういう機能は必要と思う。」等の回答が行われた。

「物理情報科学科では学生が困っている事をeLearning上で毎年アンケートしている。今日伺った話では面談の基礎資料として役立つ面は納得した。今年はテンプレートに沿って実施と回答したが、これまでのアンケート項目と重複する内容もある。全学的電子化に移行するまでは、学科で使っているアンケートを使う方針に変換可能か？」という質問もあり、糸長センター長から「それをポートフォリオと考えられるなら良い。根拠資料があれば中期計画の評価も3に出来る。学生のキャリア形成に役立つ物にして頂けると良い。」と回答が行われた。

「ポートフォリオの要件は見直せるかどうか？(残すのは)印刷すれば良いか？」という質問には、糸長センター長から「それを残して頂きたい。学生が持つだけではなくしてしまうので困る。」と回答された。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.3%
良かった	11	57.9%
どちらとも言えない	3	15.8%
あまり良くなかった	2	10.5%
良くなかった	2	10.5%
無回答	0	0.0%
合計	19	100.0%

(9) 共同獣医学部・連合獣医学研究科

日程：平成 24 年 12 月 12 日(水) 13:30～14:15

場所：農学部・共同獣医学部本館 会議室

講師：糸長雅弘(大学教育センター長)

吉村誠(学生支援センター長)

小川 勤(大学教育センター教授)

参加者：13名(アンケート回収 11名)

内容

本研修会では、共同獣医学部より提出された学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの小川教授より共同獣医学部から提出された学生ポートフォリオの実施計画について、大学教育センターおよび学生支援センターとしてのコメント(気づき)や質問が述べられた。まず一点目としては、共同獣医学部におけるポートフォリオの運用に関して、鹿児島大学との間で協議が行われたかどうかについて質問があった。これに対して、学部からは今のところこの件に関しては鹿児島大学と協議を行っ



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	4	36.4%
どちらとも言えない	4	36.4%
あまり良くなかった	1	9.1%
良くなかった	2	18.2%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

ていないが、今後は鹿児島大学での取り組み状況を把握し、双方でどのように実施するかについて検討していきたいことが明らかにされた。2つ目の質問としては、共同獣医学部を卒業した場合、その後の進路は獣医師になるだけでなく、国や県などの公務員などさまざまな進路先が考えられるが、これに関して共同獣医学部として組織的にどのように対応しているのかについて質問があった。これに対して学部からは、年次が上がり教育内容が増え、深化するにつれて1年次当初とは進路先希望が大きく変わってくるのが現状である。したがって、学部としてはこれまでに1年生の夏休み期間中や研究室配属になる前の3年次から4年次にかけて、現職の獣医師や県庁や行政に勤めている方々から直接、仕事内容などについて話を聞く機会を提供し、学生が自らの進路を考える際の参考にしてもらっている。また、今年年度の初めに学生にポートフォリオを作成させ、教員と面談する機会を設けることにより、これまでに学習活動を振り返るとともに、今後の自らの進路を考えるきっかけを作りたいと考え、今回の運用計画を考えたことが明らかにされた。3つ目の質問としては、医学部では医学実習に入る前に、病院での実習状況を詳細に記載し、指導教官からコメントを記入するというポートフォリオに似た制度がすでに導入されているのでこれを流用する案が示されているが、共同獣医学部では同様な制度はないのかという質問があった。これに対して学部からは今のところ、共同獣医学部では医学部のようなことは行われていない。しかし、平成 25 年度入学生から医学部と同様な動きがあるので、今後、ポートフォリオとの関係を考えていきたい旨との回答があった。

3つの質問以外に、糸長大学教育センター長からは、ポートフォリオシートのWeb化について説明があった。現状では来年度から導入される新しい共通教育に向けた教務システムの改修作業を優先せざるを得ないことや、仮にポートフォリオシートがWeb化されても、基本的には大学教育センターおよび学生支援センターが示した「雛形」をベースにしたシート開発になることが説明された。

吉村学生支援センター長からは共同獣医学部ではすでに現職の獣医師や獣医師免許を持っていることが前提となっている職業に就いている方々を招聘して学生のキャリア指導に当たっていただいているので、今後はこれをさらに発展させるように、就職相談室等との連携を密にしていきたい旨、説明があった。

今回の研修会では大学教育センターや学生支援センターから共同獣医学部から聴取したい事項について質問する形で意見交換が行われた。参加者からはポートフォリオの具体的な運用方法に関する研

修を実施するのではないかということを期待して参加された先生方もいたので多少ミスマッチがあった部分については、開催趣旨を事前に十分説明する必要があったと反省している。しかし、短時間ではあったが、共同獣医学部のポートフォリオに対する考え方や現状のキャリア指導の具体的な内容を詳しく知ることができて大変有意義であった。

第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別分科会

(1) 情報処理分科会（分科会長：大学教育センター 小川 勤）

平成24年度は、分科会としては「情報セキュリティ・モラル」の教材改訂、特に、知的財産教育を拡大・充実させるために、シラバスの見直しや統一教材の研究開発に知財センターの協力を得ながら実施した。

ワーキンググループで知財センターから導入の趣旨をヒアリングした。分科会の全体会で導入の承認を得た後に、シラバスの改訂案の策定に取り組んだ。メール審議でシラバス改訂案を分科会所属教員に同意を得た後に、2月に平成25年度シラバスを教務電算システムにアップロードした。統一教材に関しては、平成23年度にすでに知財教育関係のDVD教材は導入されていたので、これに知財関係の新たな内容を追加して教材を一部追加・改訂した。

授業外学習時間の確保に関しては、提供された授業外学習時間の実態を見ると、昨年度とあまり変化していない。情報教育関係は30分未満が多く、かなり少ないことは変化していない。情報スキルの向上や知識理解の定着を図るためには課題を毎回出すような授業形態にする必要があり、今後分科会で検討する必要がある。

適正な成績評価に関しては、成績分布共有システムを活用して授業の達成度を各自が検証することに関しては、平成24年度はあまり進展しなかった。平成25年度には分科会全体で取り組みたいと考えている

試験の監督体制については、情報処理分科会では授業の中で課題を提出されるケースが多く、定期試験を実施している担当者は少ないものと考えられる。

上記の2で示した課題を解決するために、平成25年度は以下のようなFDを計画する予定である。

- ・平成25年度から新たに導入される知的財産関係の教育内容について、知財センターの協力を得て、統計的手法を用いて、受講生に対する教育効果を測定する。
- ・改訂された情報セキュリティ・モラルの統一教材の授業での活用とその利用結果の検証
- ・成績分布公表システムを利用した教員間の成績評価についての現状分析と改善について分科会内で研修会の開催
- ・授業外学習時間を増やすために、課題の出し方について分科会FDで検討する。
- ・知財教育の指導方法に関する研修会の開催

(2) 英語分科会（分科会長：教育学部 猫田 和明）

- ・「TOEIC準備」と「Basic English」のシラバス記載事項について検討を行い、授業運営・評価の方法を確認し、その内容をシラバスに反映させた。
- ・平成24年度Q2の「Basic English」において受講者67名というクラスがあった。大人数のクラスは教育上好ましくないため、この科目に最大50名までの受講制限をかけることにした。
- ・「リーディング」と「英語特別演習」についても巨大クラスを避けるため、「リーディング」は80名、「英語特別演習」は50名を超える場合は原則として受講制限をかけることにした。
- ・「English Speaking」のオンライン課題において、システムエラーが頻繁に起こることで学習と評価がスムーズに行われなかった状況にあった。そこで、大学教育センターとメディア基盤センターの協力を得て、システムの移行作業を行った結果、問題の解決に至った。

(3) 政治学・法学分科会（分科会長：経済学部 梶原 健佑）

「日本国憲法」担当者による会合の折、講授に関する意見交換を行った。試験問題のあり方、単位認定の寛厳のイメージ、前期・後期配当の抱える問題等を話し合うことができ、短い時間ではあったが有意義な機会となった。

(4) 物理分科会（分科会長：工学部 嶋村 修二）

- ① 「物理寺子屋」（学生に対する物理学の学習相談室）の開設
 - ・数年来続けている学習相談室を前期・後期とも開設。
 - 大学院生(TA)が相談員となり、授業内容や演習問題について学生の質問に対応。
- ② 「物理学実験A」の授業公開（ピアレビュー）
 - ・主に理学部物理・情報科学科1年生対象の「物理学実験A」の授業公開の実施。
- ③ 「物理学実験B」の独自アンケートによる教育改善
 - ・工学部と医学部保健学科1年生対象の「物理学実験B」で、実験テーマ、テキスト、レポートなどに関するアンケートを実施。
 - 今後の物理学実験の改善に利用。
- ④ 「物理学実験A・B」のテキストの改訂と出版
 - ・物理学実験テキストの改訂作業（2年毎）を実施。
 - ・平成25・26年度版『基礎物理学実験』を東京教学社から出版。
- ⑤ 学生授業評価結果の整理と分析
 - ・物理学分科会の授業科目について、平成23年度の学生授業評価の整理。
- ⑥ 学生の授業外学習時間の確保
 - ・物理学実験では、9割以上の学生が2時間以上の授業外学習（実験レポート）。
 - ・講義科目の物理学I・IIの授業外学習時間を増やす対策は今後の検討課題。

(5) 地球科学分科会（分科会長：理工学研究科（理学） 阿部 利弥）

分科会メンバーの多くが理学部に属しているので、部会としての独自FDは行わず、理学部での地球科学関連講義のピアレビューへの参加を勧めた。本年は、地球圏システム科学科専門科目、地球惑星物質科学IIの講義を対象に、12月にピアレビューおよび、同日夕方授業研究会を実施した（8名参加）。

(6) 運動健康科学分科会（分科会長：医学系研究科 上田 真寿美）

H25から始まる新しいカリキュラムへの対応について、メール審議も含めて多くの話し合いが行われた。

運動健康科学の必修及び演習化への変更に伴い、担当者による研修会を実施した。

個々の教員においては、(社)全国大学体育連合中四国支部研修会（実技研修会）などに参加し、研修、意見交換を行なった。

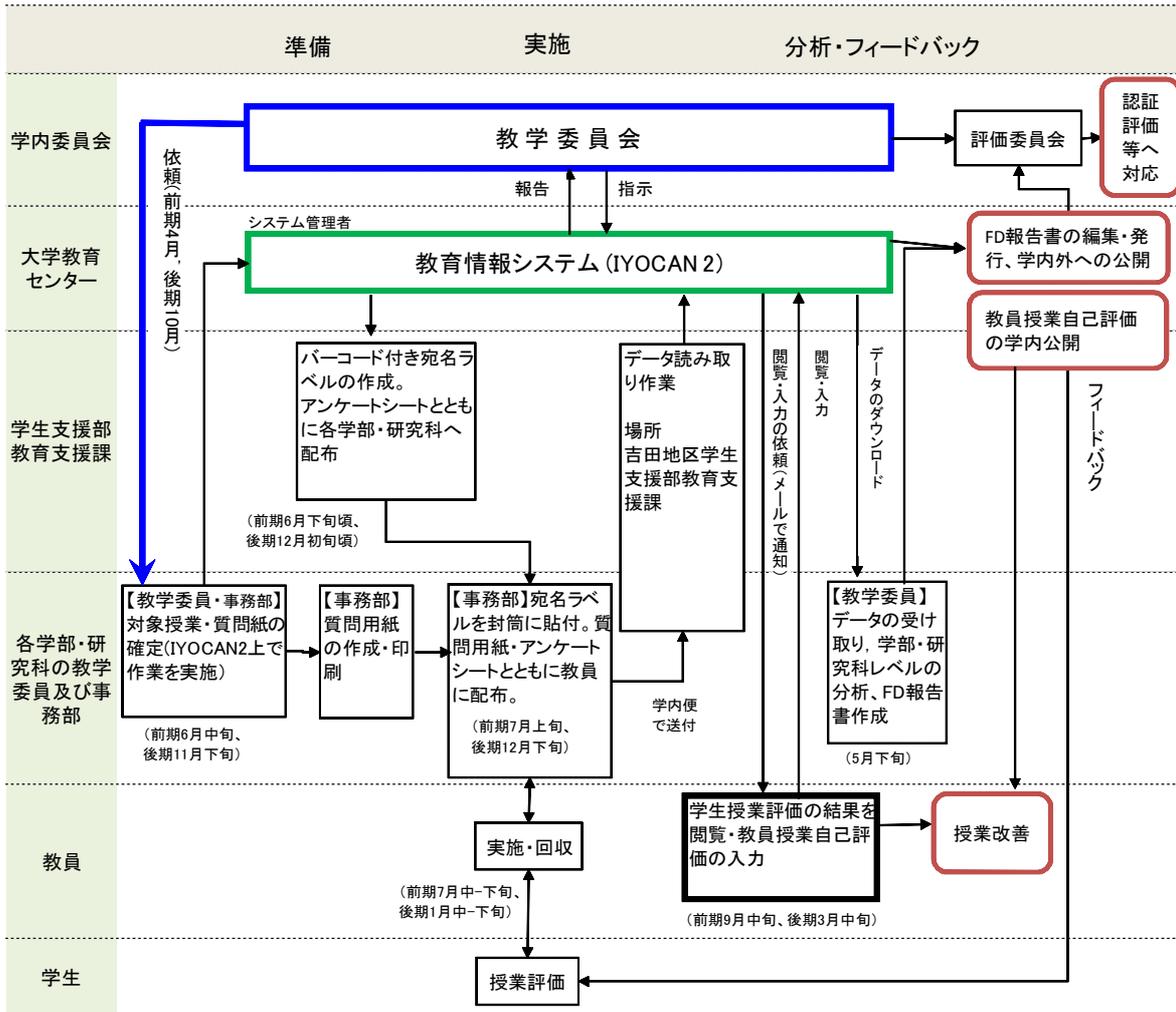
一昨年度より授業間の評価の違いが課題となっていたが、運動健康科学については演習化に伴い複数の教員が一人の学生の評価に関わることとなり、来年度はその1年目となることから、まずはその状況を把握してからの検討となった。

第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

(1) 実施方法

1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of YOur Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

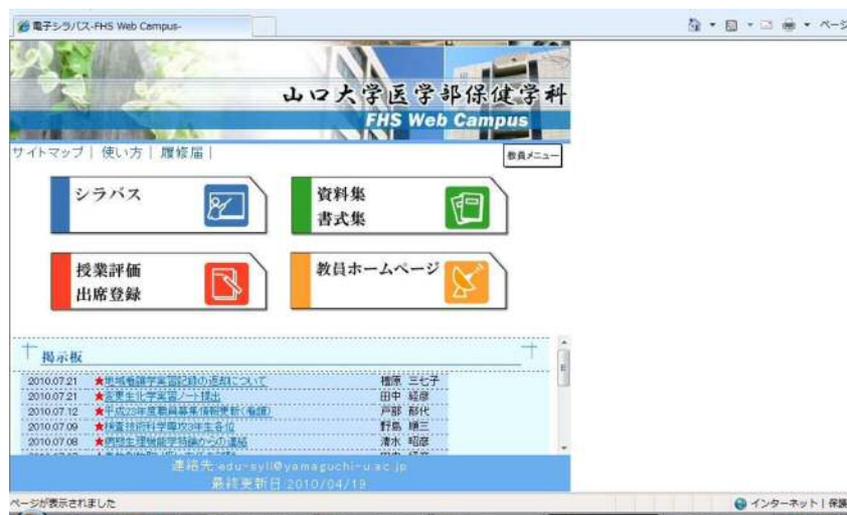
● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

● 医学部保健学科 授業支援システム



(2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

（３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

（４）実施対象授業

1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項（H17ー）

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が 5 名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会(平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている(平成17年度第10回FD委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

(5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

(6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot shows a web browser window displaying the IYOCAN2 system. The page title is "山口大学授業評価システム IYOCAN2". The main content area lists several courses with their respective feedback comments:

- 1002323001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4~5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければならなりません。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分~50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**
「新聞を読む習慣を」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急速代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。
また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。
次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**
ディスカッションが特定の学生に偏る。
予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

The browser's status bar at the bottom indicates "インターネット | 保護モード: 有効" and "100%".

第2節 授業評価の結果について(全学)

(1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2012年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2013年10月15日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2007年度以降の経年変化)として掲載した。

2012年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は100,316人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは技術経営研究科及び共同獣医学部(ともに100%)であり、続いて高かったのは医学部(98.8%)、理学部(96.6%)であった。全体的にみて昨年度より上昇した学部・研究科等が11、変化なし1、低下4であり、多くの学部・研究科で実施率が上昇した。

(2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率が最も高かったのは医学部及び共同獣医学部(ともに100%)であり、続いて農学研究科(90.9%)が高かった。昨年度より上昇した学部・研究科等は6、変化なし0、低下11であった。

昨年度は IYOCAN の旧システムから新システムへの移行期であり、入力時期がずれたことから実施率が低下したが、今年度は大幅に改善された。

2012年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2013年10月15日 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	学生授業評価 (2010年度)	学生授業評価 (2011年度)	学生授業評価 (2012年度)	対象授業
I Y O C A N 2	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	90.2%	89.5%	91.5%	91.8%	全て
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	86.5%	83.4%	81.0%	87.9%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	85.4%	84.4%	87.0%	87.3%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	87.9%	88.0%	82.2%	86.4%	卒業論文演習、演習Ⅰ・Ⅱを除く
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	94.7%	98.2%	97.6%	96.6%	特別研究、集中講義、一部の実習等を除く
	工学部	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	82.1%	87.6%	85.7%	89.7%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターシップを除く
	農学部(生物系)								95.9%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	農学部(獣医系)	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	83.9%	91.1%	94.7%	87.2%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	共同獣医学部								100.0%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	98.7%	97.5%	97.5%	98.8%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	66.7%	72.1%	85.0%	91.5%	授業評価の必要なものに限定

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	教員授業自己評価 入力率 (2009年度)	教員授業自己評価 入力率 (2010年度)	教員授業自己評価 入力率 (2011年度)	教員授業自己評価 入力率 (2012年度)	対象授業
I Y O C A N 2	39.1%	43.6%	34.4%	36.5%	40.1%	47.1%	全て
	49.7%	68.8%	48.5%	50.9%	56.1%	51.1%	学生授業評価と同じ
	34.1%	47.0%	52.1%	54.2%	48.7%	54.5%	学生授業評価と同じ
	38.9%	47.5%	31.3%	43.2%	32.4%	26.8%	学生授業評価と同じ
	57.3%	64.9%	67.5%	62.0%	72.4%	61.8%	学生授業評価と同じ
	35.1%	36.7%	21.3%	34.3%	38.5%	25.2%	学生授業評価と同じ
	50.6%	66.2%	54.8%	65.3%	79.1%	80.8%	学生授業評価と同じ
					78.9%	69.2%	学生授業評価と同じ
						100.0%	学生授業評価と同じ
独自	-	-	83.3%	100.0%	81.6%	100.0%	全て
独自	-	-	-	-	40.0%	76.0%	-

<大学院>学生授業評価

データベース	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	学生授業評価 (2009年度)	学生授業評価 (2010年度)	学生授業評価 (2011年度)	学生授業評価 (2012年度)	対象授業	
I Y O C A N 2	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	71.2%	84.7%	69.2%	81.6%	学外特別演習、特別講義、演習、集中等を除く
	技術経営研究科	-	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	全て
	医学系研究科	-	46.5%	54.5%	64.4%	51.5%	57.1%	51.4%	64.4%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	-	-	-	88.5%	73.1%	76.2%	71.5%	69.6%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	-	-	-	54.3%	48.7%	39.1%	47.4%	32.9%	演習、セミナーを除く
独自	人文科学研究科	-	-	-	24.1%	35.3%	36.8%	60.0%	53.3%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。後期は実施せず。
独自	農学研究科	-	-	-	28.6%	54.6%	41.2%	36.4%	37.5%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	教員授業自己評価 入力率 (2009年度)	教員授業自己評価 入力率 (2010年度)	教員授業自己評価 入力率 (2011年度)	教員授業自己評価 入力率 (2012年度)	対象授業
I Y O C A N 2	36.9%	33.1%	25.3%	29.3%	39.7%	35.1%	全て(ただし2011年度より学生授業評価と同じ)
	56.3%	29.4%	15.2%	67.6%	53.1%	40.0%	〃
	53.5%	28.8%	26.4%	31.5%	33.6%	30.3%	〃
	22.4%	38.0%	39.3%	31.8%	48.3%	52.7%	〃
	36.5%	58.1%	49.2%	47.8%	38.5%	35.4%	〃
	27.3%	38.0%	22.7%	48.5%	46.1%	41.1%	〃
	48.8%	70.8%	42.2%	46.5%	52.4%	95.5%	〃

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2008)	41,399			1,544			998		43,941
共通教育(2009)	28,988			2,147	9,512				40,647
共通教育(2010)	27,715			2,328	9,309			238	39,590
共通教育(2011)	27,295			2,544	8,899			52	38,790
共通教育(2012)	28,685			2,004	9,047				39,736
人文(2008)	4,927	626	1,368						6,921
人文(2009)	4,852	564	1,212						6,628
人文(2010)	4,301	657	1,132						6,090
人文(2011)	4,287	679	1,104						6,070
人文(2012)	5,084	727	1,293						7,104
教育学部(2008)	8,167		712	635			2,501		12,015
教育学部(2009)	7,404		859	599			2,726		11,588
教育学部(2010)	7,118		710	562			2,744	694	11,828
教育学部(2011)	8,064		791	675			2,788	86	12,404
教育学部(2012)	7,303		774	653			2,962	560	12,252
経済(2008)	10,454								10,454
経済(2009)	9,316								9,316
経済(2010)	10,100								10,100
経済(2011)	8,328								8,328
経済(2012)	8,530								8,530
理(2008)	4,599		469	433			442		5,943
理(2009)	4,457		389	383					5,229
理(2010)	4,753		311	440					5,504
理(2011)	4,700		289	467					5,456
理(2012)	4,656		321	488				234	5,699
工(昼)(2008)	14,301		1,243	1,981			1,462		18,987
工(昼)(2009)	14,667		1,643	1,981					18,291
工(昼)(2010)	15,083		1,596	2,063					18,742
工(昼)(2011)	14,558		1,673	2,167					18,398
工(昼)(2012)	14,477		1,793	2,073					18,343
農(2008)	3,691		268	1,082					5,041
農(2009)	3,198		204	757					4,159
農(2010)	3,711		98	852					4,661
農(2011)	4,006			1,016					5,022
農(2012)	3,769			767					4,536
共同獣医(2012)	62								62
大学院・理工(2008)	5,442		140						5,582
大学院・理工(2009)	2,273		119	11					2,403
大学院・理工(2010)	3,372		163	9					3,544
大学院・理工(2011)	2,859		184	3					3,046
大学院・理工(2012)	2,859								2,859
大学院・技術経営(2008)	315		67						382
大学院・技術経営(2009)								356	356
大学院・技術経営(2010)								325	325
大学院・技術経営(2011)								329	329
大学院・技術経営(2012)								333	333
大学院・医学系(2008)	234		108						343
大学院・医学系(2009)	350		24						374
大学院・医学系(2010)	277		89						366
大学院・医学系(2011)	199		123					18	340
大学院・医学系(2012)								332	332
大学院・教育学(2008)	208		83	38			112		441
大学院・教育学(2009)	247		104	26			128		505
大学院・教育学(2010)	137		110	4			183	8	442
大学院・教育学(2011)	132		78	1			146		357
大学院・教育学(2012)	167		83	3			155		408
大学院・経済学(2008)	187								187
大学院・経済学(2009)	146		4						150
大学院・経済学(2010)								138	138
大学院・経済学(2011)								123	123
大学院・経済学(2012)								122	122
合計(2008)	94,033	626	4,470	5,728			5,515		110,373
合計(2009)	75,898	564	4,558	5,904	9,512		2,854	356	99,646
合計(2010)	76,567	657	4,209	6,258	9,309		2,927	1,403	101,330
合計(2011)	74,428	679	4,242	6,873	8,899		2,934	608	98,663
合計(2012)	75,592	727	4,264	5,988	9,047		3,117	1,581	100,316

(3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

(1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

全体平均をみると、学部段階では2012年度の平均値データは2011年度の平均値をほぼすべての学部で上回っており、全体的な授業外学習時間は着実に伸びているとことが確認された。理学部及び工学部で比較的高い数値を示している。

なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

(2) 共通質問項目2「学習目標達成」

Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「5.そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が現状維持又は上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしないうちでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするれば喜ばしいことである。

(3) 共通質問項目3「理解」

Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に続き、4.0を超えた。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

(4) 共通質問項目4「満足」

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。学部段階では、すべての学部で高い数値を示している。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

(5) 共通質問項目5「出席」

Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

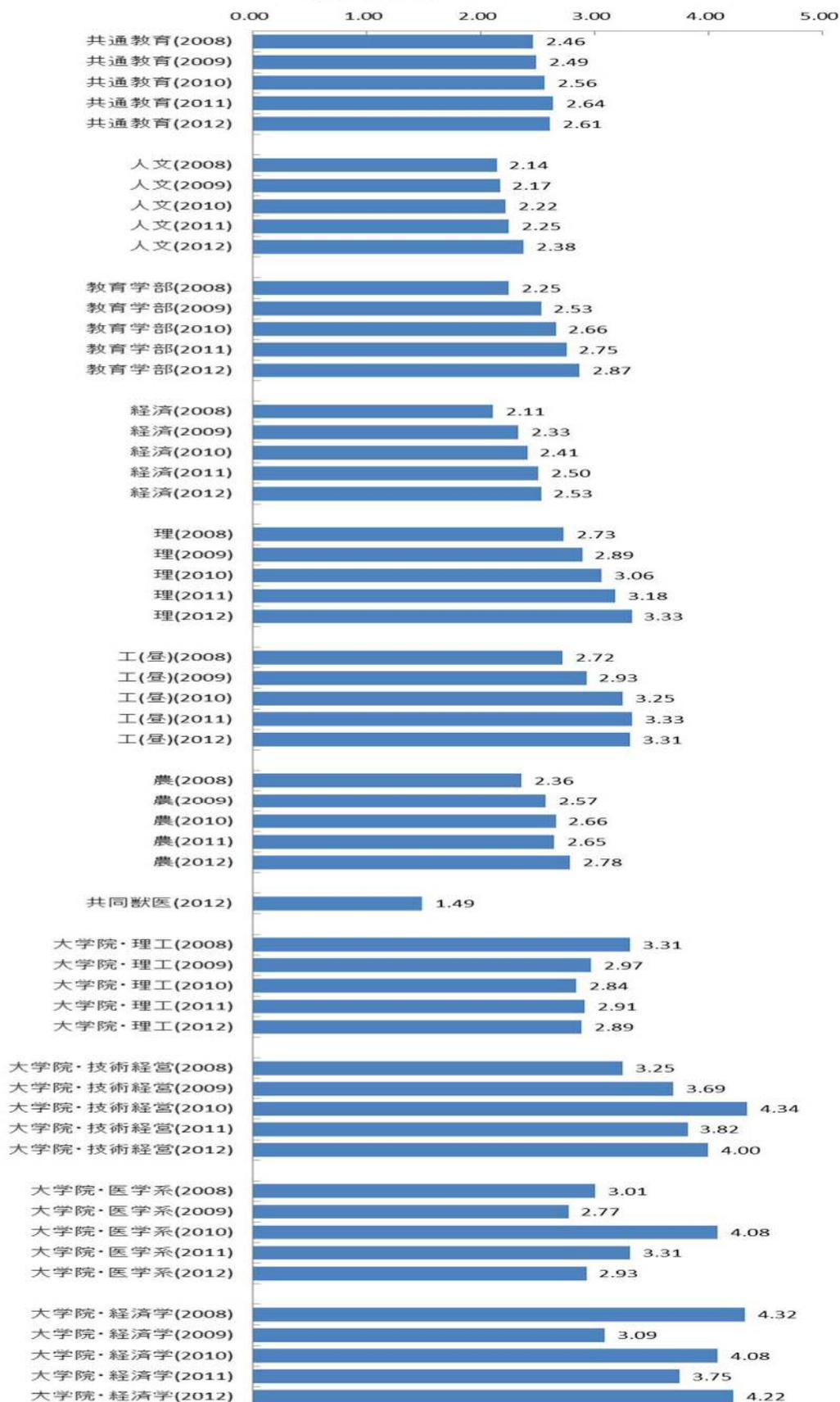
- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満） | |

共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5前後の高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2008)	2.42			4.26			1.70		2.46
共通教育(2009)	2.29			3.07	2.97				2.49
共通教育(2010)	2.34			3.44	3.01			2.10	2.56
共通教育(2011)	2.45			3.38	3.01			1.46	2.64
共通教育(2012)	2.44			2.97	3.06				2.61
人文(2008)	1.80	3.04	2.95						2.14
人文(2009)	1.80	3.26	3.13						2.17
人文(2010)	1.88	3.11	2.98						2.22
人文(2011)	1.92	2.86	3.16						2.25
人文(2012)	2.12	3.09	3.02						2.38
教育学部(2008)	2.05		3.11	3.15			2.13		2.25
教育学部(2009)	2.32		3.25	3.31			2.68		2.53
教育学部(2010)	2.44		3.49	3.46			2.93	2.22	2.66
教育学部(2011)	2.57		3.15	3.44			3.02	2.34	2.75
教育学部(2012)	2.70		3.35	3.63			3.06	2.53	2.87
経済(2008)	2.11								2.11
経済(2009)	2.33								2.33
経済(2010)	2.41								2.41
経済(2011)	2.50								2.50
経済(2012)	2.53								2.53
理(2008)	2.55		3.33	3.82					2.73
理(2009)	2.79		3.17	3.84					2.89
理(2010)	2.97		3.59	3.78					3.06
理(2011)	3.09		3.53	3.88					3.18
理(2012)	3.22		3.67	4.09				3.42	3.33
工(昼)(2008)	2.52		3.19	3.87			2.22		2.72
工(昼)(2009)	2.76		3.31	3.91					2.93
工(昼)(2010)	3.11		3.56	4.04					3.25
工(昼)(2011)	3.20		3.57	4.67					3.33
工(昼)(2012)	3.17		3.61	4.67					3.31
農(2008)	2.21		3.48	2.59					2.36
農(2009)	2.44		3.31	2.92					2.57
農(2010)	2.58		2.74	3.02					2.66
農(2011)	2.54			3.07					2.65
農(2012)	2.70			3.20					2.78
共同獣医(2012)	1.49								1.49
大学院・理工(2008)	3.29		3.94						3.31
大学院・理工(2009)	2.95		3.39	2.45					2.97
大学院・理工(2010)	2.80		3.57	2.78					2.84
大学院・理工(2011)	2.84		3.98	4.00					2.91
大学院・理工(2012)	2.89								2.89
大学院・技術経営(2008)	3.15		3.71						3.25
大学院・技術経営(2009)								3.69	3.69
大学院・技術経営(2010)								4.34	4.34
大学院・技術経営(2011)								3.82	3.82
大学院・技術経営(2012)								4.00	4.00
大学院・医学系(2008)	2.90		3.24						3.01
大学院・医学系(2009)	2.67		4.13						2.77
大学院・医学系(2010)	4.12		3.70						4.08
大学院・医学系(2011)	3.37		3.16					3.78	3.31
大学院・医学系(2012)								2.93	2.93
大学院・経済学(2008)	4.32								4.32
大学院・経済学(2009)	3.09								3.09
大学院・経済学(2010)								4.08	4.08
大学院・経済学(2011)								3.75	3.75
大学院・経済学(2012)								4.22	4.22

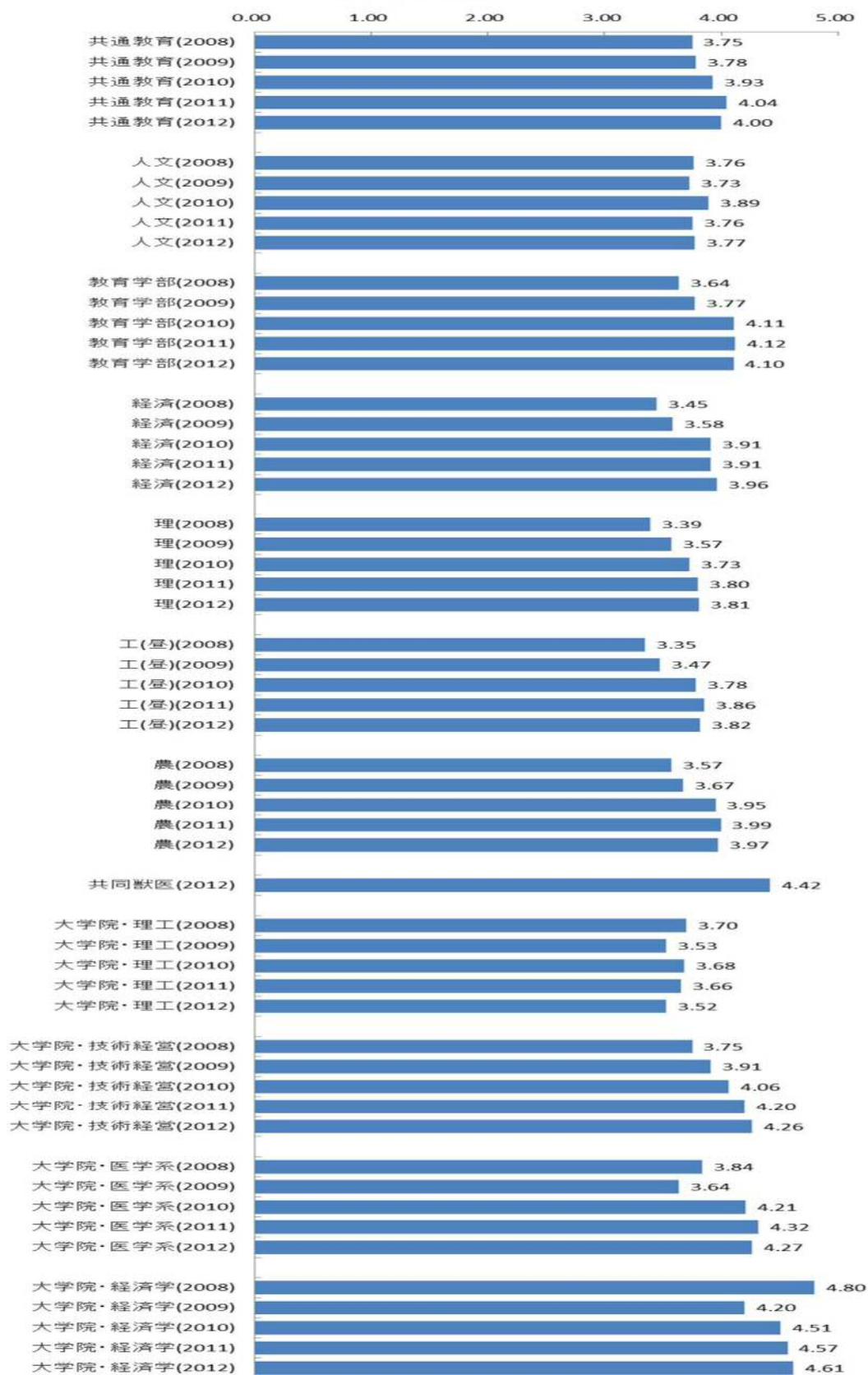
授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2008)	3.72			4.12			4.21		3.75
共通教育(2009)	3.73			4.13	3.87				3.78
共通教育(2010)	3.88			4.25	4.02			4.20	3.93
共通教育(2011)	3.98			4.52	4.10			3.37	4.04
共通教育(2012)	3.97			4.40	4.02				4.00
人文(2008)	3.73	3.81	3.75						3.76
人文(2009)	3.66	3.91	3.93						3.73
人文(2010)	3.82	4.00	4.08						3.89
人文(2011)	3.66	3.89	4.07						3.76
人文(2012)	3.70	3.96	3.97						3.77
教育学部(2008)	3.60		3.84	3.95			3.63		3.64
教育学部(2009)	3.70		3.97	4.05			3.82		3.77
教育学部(2010)	4.04		4.28	4.17			4.16	4.33	4.11
教育学部(2011)	4.07		4.29	4.31			4.17	4.29	4.12
教育学部(2012)	4.06		4.12	4.28			4.15	4.27	4.10
経済(2008)	3.45								3.45
経済(2009)	3.58								3.58
経済(2010)	3.91								3.91
経済(2011)	3.91								3.91
経済(2012)	3.96								3.96
理(2008)	3.32		3.77	3.78					3.39
理(2009)	3.53		3.71	3.95					3.57
理(2010)	3.70		3.99	3.97					3.73
理(2011)	3.78		3.91	3.98					3.80
理(2012)	3.76		3.96	4.05				3.93	3.81
工(昼)(2008)	3.28		3.52	3.62			3.35		3.35
工(昼)(2009)	3.44		3.60	3.62					3.47
工(昼)(2010)	3.76		3.84	3.94					3.78
工(昼)(2011)	3.83		3.91	3.99					3.86
工(昼)(2012)	3.78		3.92	4.00					3.82
農(2008)	3.47		3.95	3.83					3.57
農(2009)	3.63		3.90	3.80					3.67
農(2010)	3.91		3.92	4.15					3.95
農(2011)	3.95			4.17					3.99
農(2012)	3.99			3.90					3.97
共同獣医(2012)	4.42								4.42
大学院・理工(2008)	3.70		3.62						3.70
大学院・理工(2009)	3.52		3.78	3.36					3.53
大学院・理工(2010)	3.68		3.65	4.00					3.68
大学院・理工(2011)	3.66		3.63	4.33					3.66
大学院・理工(2012)	3.52								3.52
大学院・技術経営(2008)	3.72		3.85						3.75
大学院・技術経営(2009)								3.91	3.91
大学院・技術経営(2010)								4.06	4.06
大学院・技術経営(2011)								4.20	4.20
大学院・技術経営(2012)								4.26	4.26
大学院・医学系(2008)	3.81		3.90						3.84
大学院・医学系(2009)	3.62		3.96						3.64
大学院・医学系(2010)	4.26		4.13						4.21
大学院・医学系(2011)	4.31		4.36					4.17	4.32
大学院・医学系(2012)								4.27	4.27
大学院・経済学(2008)	4.80								4.80
大学院・経済学(2009)	4.20								4.20
大学院・経済学(2010)								4.51	4.51
大学院・経済学(2011)								4.57	4.57
大学院・経済学(2012)								4.61	4.61

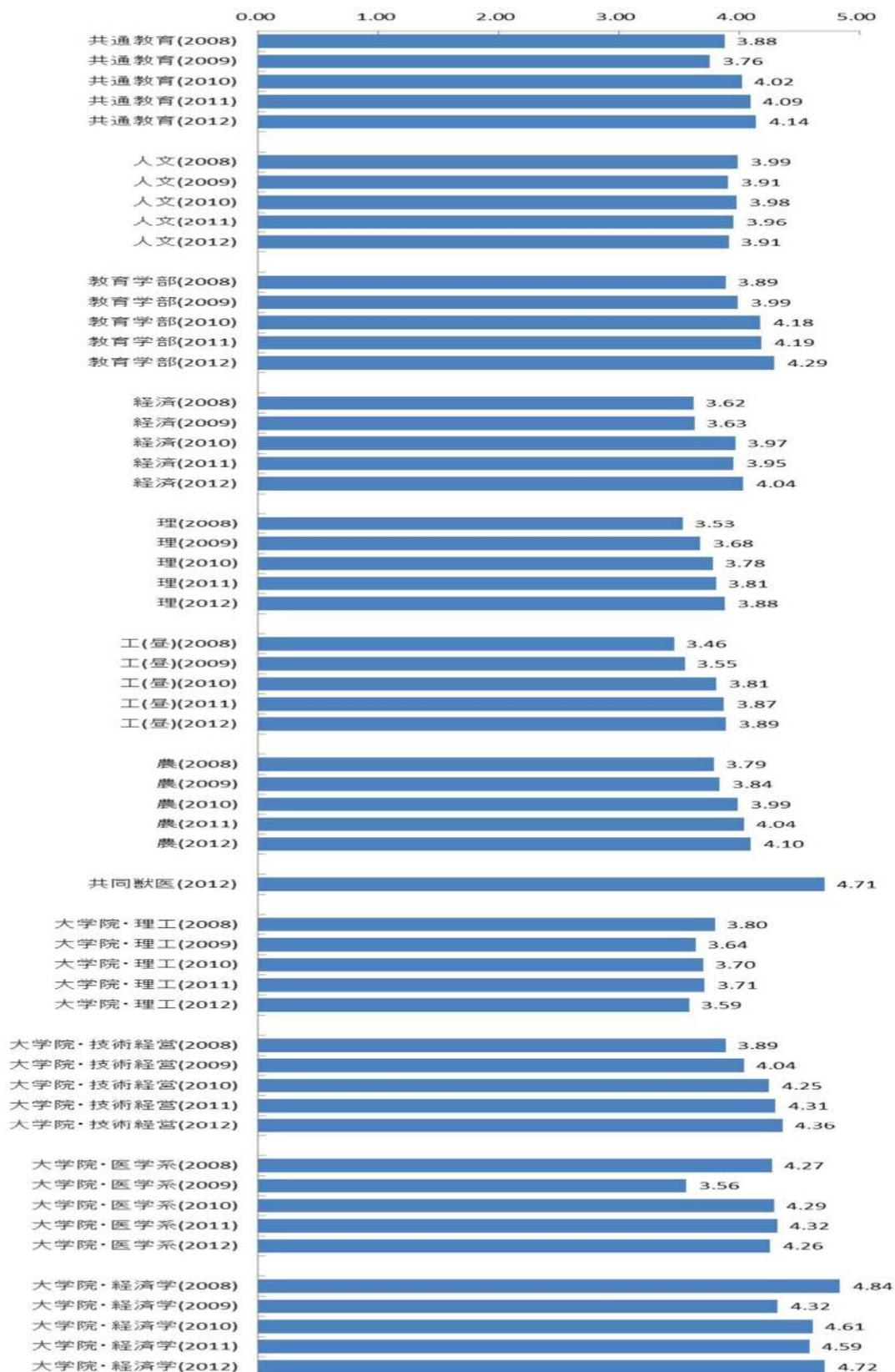
学習目標達成(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2008)	3.85			4.15			4.52		3.88
共通教育(2009)	3.89			2.14	4.12				3.76
共通教育(2010)	3.95			4.32	4.16			4.35	4.02
共通教育(2011)	4.03			4.36	4.23			3.25	4.09
共通教育(2012)	4.08			4.56	4.24				4.14
人文(2008)	3.84	4.09	4.03						3.99
人文(2009)	3.84	4.07	4.14						3.91
人文(2010)	3.90	4.11	4.21						3.98
人文(2011)	3.85	4.81	3.85						3.96
人文(2012)	3.84	4.08	4.11						3.91
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	3.94		4.21	4.26			4.01		3.99
教育学部(2010)	4.12		4.40	4.25			4.21	4.39	4.18
教育学部(2011)	4.14		4.36	4.40			4.22	4.39	4.19
教育学部(2012)	4.25		4.39	4.41			4.30	4.54	4.29
経済(2008)	3.62								3.62
経済(2009)	3.63								3.63
経済(2010)	3.97								3.97
経済(2011)	3.95								3.95
経済(2012)	4.04								4.04
理(2008)	3.47		3.89	3.91					3.53
理(2009)	3.63		3.89	4.05					3.68
理(2010)	3.74		4.09	4.08					3.78
理(2011)	3.76		4.08	4.08					3.81
理(2012)	3.84		4.02	4.16				4.05	3.88
工(昼)(2008)	3.40		3.57	3.69			3.59		3.46
工(昼)(2009)	3.51		3.72	3.71					3.55
工(昼)(2010)	3.78		3.88	3.95					3.81
工(昼)(2011)	3.85		3.93	4.01					3.87
工(昼)(2012)	3.86		3.99	4.06					3.89
農(2008)	3.66		4.55	4.08					3.79
農(2009)	3.76		4.47	4.01					3.84
農(2010)	3.94		4.11	4.19					3.99
農(2011)	3.99			4.24					4.04
農(2012)	4.08			4.19					4.10
共同獣医(2012)	4.71								4.71
大学院・理工(2008)	3.80		3.91						3.80
大学院・理工(2009)	3.63		3.87	3.27					3.64
大学院・理工(2010)	3.70		3.65	3.56					3.70
大学院・理工(2011)	3.72		3.64	4.67					3.71
大学院・理工(2012)	3.59								3.59
大学院・技術経営(2008)	3.84		4.14						3.89
大学院・技術経営(2009)								4.04	4.04
大学院・技術経営(2010)								4.25	4.25
大学院・技術経営(2011)								4.31	4.31
大学院・技術経営(2012)								4.36	4.36
大学院・医学系(2008)	4.23		4.36						4.27
大学院・医学系(2009)	3.75		2.17						3.56
大学院・医学系(2010)	4.37		4.15						4.29
大学院・医学系(2011)	4.30		4.35					4.22	4.32
大学院・医学系(2012)								4.26	4.26
大学院・経済学(2008)	4.84								4.84
大学院・経済学(2009)	4.32								4.32
大学院・経済学(2010)								4.61	4.61
大学院・経済学(2011)								4.59	4.59
大学院・経済学(2012)								4.72	4.72

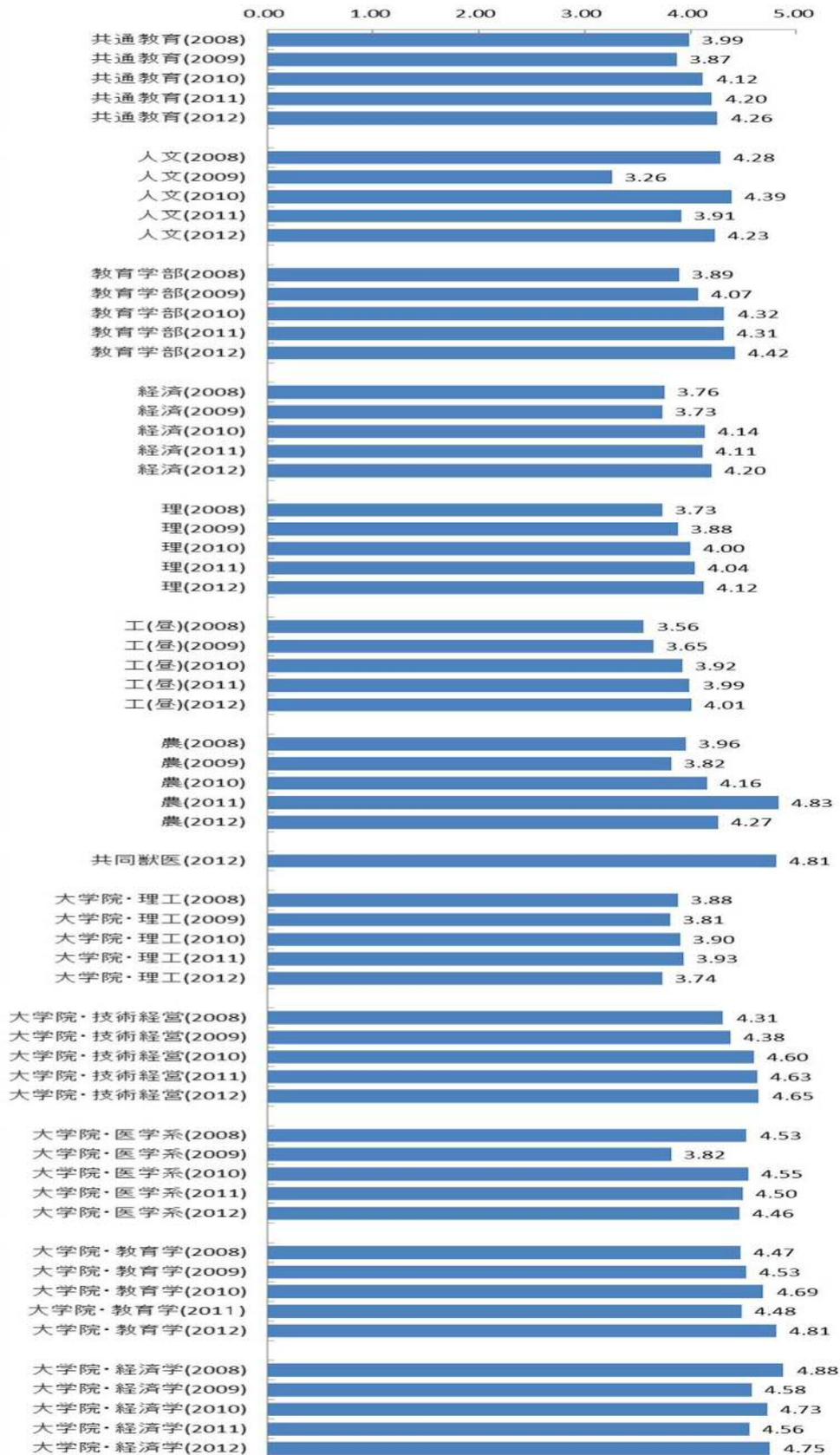
理解(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2008)	3.97			4.26			4.60		3.99
共通教育(2009)	3.97			1.87	4.18				3.87
共通教育(2010)	4.05			4.32	4.28			4.49	4.12
共通教育(2011)	4.14			4.42	4.34			3.40	4.20
共通教育(2012)	4.20			4.64	4.36				4.26
人文(2008)	4.22	4.50	4.39						4.28
人文(2009)	4.05	2.23	2.16						3.26
人文(2010)	4.31	4.54	4.60						4.39
人文(2011)	4.03	4.32	3.20						3.91
人文(2012)	4.21	3.90	4.49						4.23
教育学部(2008)	3.86		4.14	4.12			3.89		3.89
教育学部(2009)	4.02		4.38	4.34			4.06		4.07
教育学部(2010)	4.26		4.62	4.35			4.35	4.52	4.32
教育学部(2011)	4.27		4.47	4.43			4.35	4.60	4.31
教育学部(2012)	4.37		4.55	4.54			4.44	4.70	4.42
経済(2008)	3.76								3.76
経済(2009)	3.73								3.73
経済(2010)	4.14								4.14
経済(2011)	4.11								4.11
経済(2012)	4.20								4.20
理(2008)	3.68		3.99	4.05					3.73
理(2009)	3.84		3.94	4.23					3.88
理(2010)	3.97		4.14	4.30					4.00
理(2011)	4.02		4.17	4.16					4.04
理(2012)	4.09		4.18	4.36				4.21	4.12
工(昼)(2008)	3.51		3.68	3.79			3.71		3.56
工(昼)(2009)	3.61		3.84	3.79					3.65
工(昼)(2010)	3.89		3.99	4.05					3.92
工(昼)(2011)	3.97		4.06	4.13					3.99
工(昼)(2012)	3.98		4.11	4.14					4.01
農(2008)	3.84		4.49	4.25					3.96
農(2009)	3.73		4.39	4.07					3.82
農(2010)	4.11		4.32	4.40					4.16
農(2011)	4.80			4.97					4.83
農(2012)	4.25			4.33					4.27
共同獣医(2012)	4.81								4.81
大学院・理工(2008)	3.88		3.76						3.88
大学院・理工(2009)	3.80		4.20	3.45					3.81
大学院・理工(2010)	3.91		3.79	3.56					3.90
大学院・理工(2011)	3.94		3.85	5.00					3.93
大学院・理工(2012)	3.74								3.74
大学院・技術経営(2008)	4.27		4.53						4.31
大学院・技術経営(2009)								4.38	4.38
大学院・技術経営(2010)								4.60	4.60
大学院・技術経営(2011)								4.63	4.63
大学院・技術経営(2012)								4.65	4.65
大学院・医学系(2008)	4.52		4.56						4.53
大学院・医学系(2009)	4.05		2.08						3.82
大学院・医学系(2010)	4.60		4.46						4.55
大学院・医学系(2011)	4.52		4.43					4.72	4.50
大学院・医学系(2012)								4.46	4.46
大学院・教育学(2008)	4.37		4.64	4.63					4.47
大学院・教育学(2009)	4.46		4.79	4.31			4.50		4.53
大学院・教育学(2010)	4.76		4.76	4.75			4.58	4.88	4.69
大学院・教育学(2011)	4.55		4.37	5.00			4.48		4.48
大学院・教育学(2012)	4.76		4.93	5.00			4.79		4.81
大学院・経済学(2008)	4.88								4.88
大学院・経済学(2009)	4.58								4.58
大学院・経済学(2010)								4.73	4.73
大学院・経済学(2011)								4.56	4.56
大学院・経済学(2012)								4.75	4.75

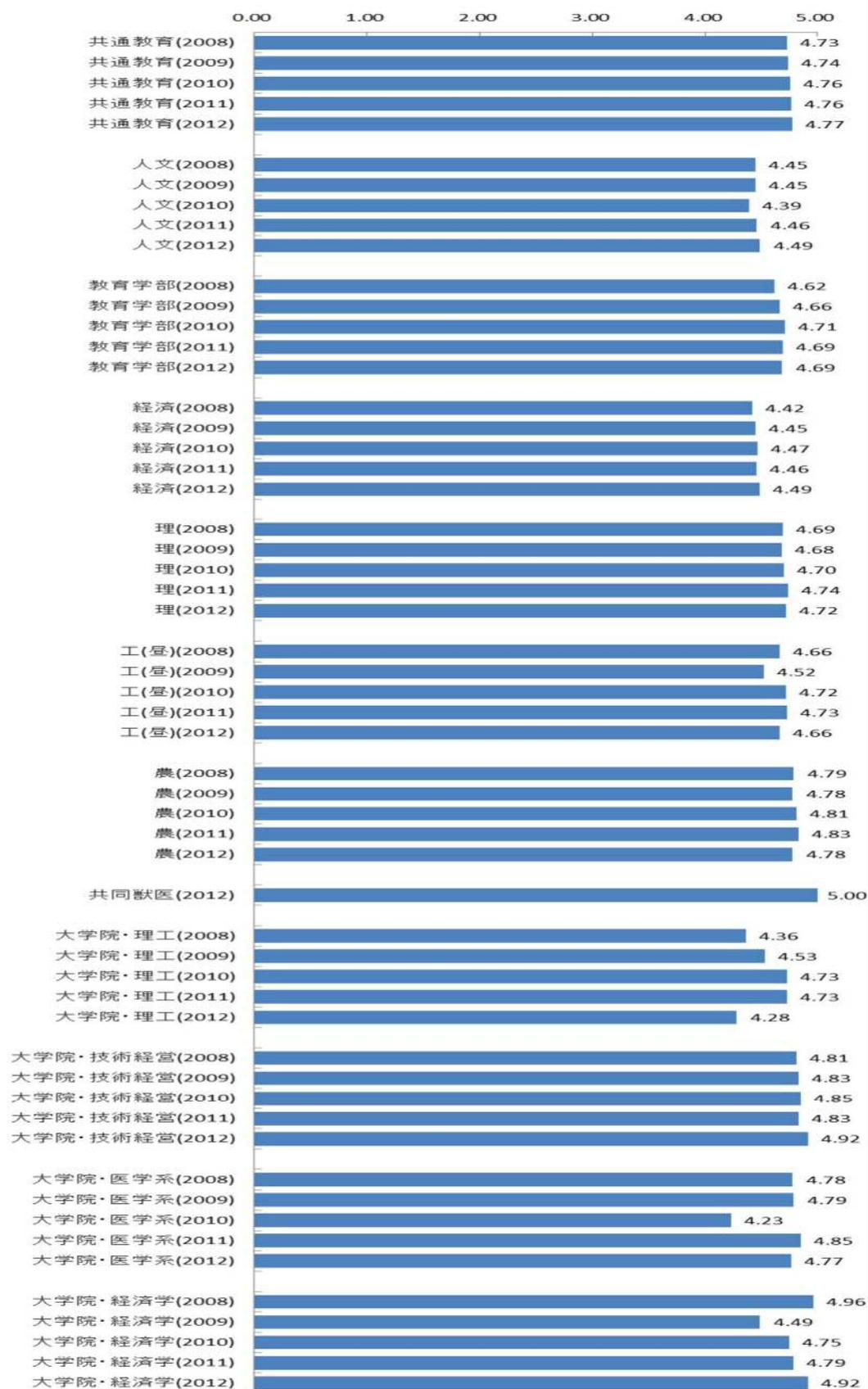
満足(全体平均) 一経年変化一



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2008)	4.58			4.66	4.73				4.73
共通教育(2009)	4.73			4.81	4.74				4.74
共通教育(2010)	4.75			4.82	4.77			4.68	4.76
共通教育(2011)	4.76			4.83	4.77			4.94	4.76
共通教育(2012)	4.77			4.81	4.78				4.77
人文(2008)	4.45	4.52	4.41						4.45
人文(2009)	4.47	4.42	4.38						4.45
人文(2010)	4.41	4.38	4.32						4.39
人文(2011)	4.50	4.43	4.34						4.46
人文(2012)	4.50	4.53	4.43						4.49
教育学部(2008)	4.62		4.52	4.73			4.52		4.62
教育学部(2009)	4.64		4.61	4.76			4.71		4.66
教育学部(2010)	4.69		4.67	4.73			4.74	4.75	4.71
教育学部(2011)	4.68		4.69	4.77			4.72	4.67	4.69
教育学部(2012)	4.67		4.61	4.82			4.70	4.78	4.69
経済(2008)	4.42								4.42
経済(2009)	4.45								4.45
経済(2010)	4.47								4.47
経済(2011)	4.46								4.46
経済(2012)	4.49								4.49
理(2008)	4.65		4.82	4.88					4.69
理(2009)	4.65		4.78	4.91					4.68
理(2010)	4.68		4.81	4.87					4.70
理(2011)	4.71		4.86	4.92					4.74
理(2012)	4.69		4.87	4.91				4.71	4.72
工(昼)(2008)	4.64		4.68	4.77			4.75		4.66
工(昼)(2009)	4.49		4.66	4.61					4.52
工(昼)(2010)	4.70		4.77	4.84					4.72
工(昼)(2011)	4.71		4.76	4.84					4.73
工(昼)(2012)	4.65		4.67	4.79					4.66
農(2008)	4.73		4.95	4.93					4.79
農(2009)	4.74		4.90	4.95					4.78
農(2010)	4.77		4.84	4.97					4.81
農(2011)	4.80			4.97					4.83
農(2012)	4.74			4.97					4.78
共同獣医(2012)	5.00								5.00
大学院・理工(2008)	4.36		4.39						4.36
大学院・理工(2009)	4.52		4.70	4.55					4.53
大学院・理工(2010)	4.73		4.72	5.00					4.73
大学院・理工(2011)	4.72		4.84	4.67					4.73
大学院・理工(2012)	4.28								4.28
大学院・技術経営(2008)	4.82		4.81						4.81
大学院・技術経営(2009)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2010)								4.85	4.85
大学院・技術経営(2011)								4.83	4.83
大学院・技術経営(2012)								4.92	4.92
大学院・医学系(2008)	4.77		4.80						4.78
大学院・医学系(2009)	4.79		4.83						4.79
大学院・医学系(2010)	4.17		4.78						4.23
大学院・医学系(2011)	4.84		4.85					4.95	4.85
大学院・医学系(2012)								4.77	4.77
大学院・経済学(2008)	4.96								4.96
大学院・経済学(2009)	4.49								4.49
大学院・経済学(2010)								4.75	4.75
大学院・経済学(2011)								4.79	4.79
大学院・経済学(2012)								4.92	4.92

出席(全体平均) 一経年変化一



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2012年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は91.8%、教員授業自己評価実施率は47.0%であった。昨年度より前者は0.3%、後者は6.9%、共に上昇した。なお、回答数は合計39,736人であり、内訳は講義28,685人、実験・実習2,004人、語学9,047人であった。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、TOEIC準備用、実験実習用の4種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

（1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「初期教育」「一般教養教育」「専門基礎教育」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高い「理系基礎」が2.97、次に高かった「初期教育」が2.86であり、その他の授業についても昨年度より増加しており、良い傾向にある。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての分野で3.5を上回っており4.0を超えている科目も多い。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。すべての分野で4.0を上回っており、全体的に昨年度よりもやや上昇している。

Q5のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてはQ6の板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについてはQ4と同様の計算方法で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択肢があるが、平均値の計算には含めていない。多くの分野で平均が4.0を超えており、良

好である。

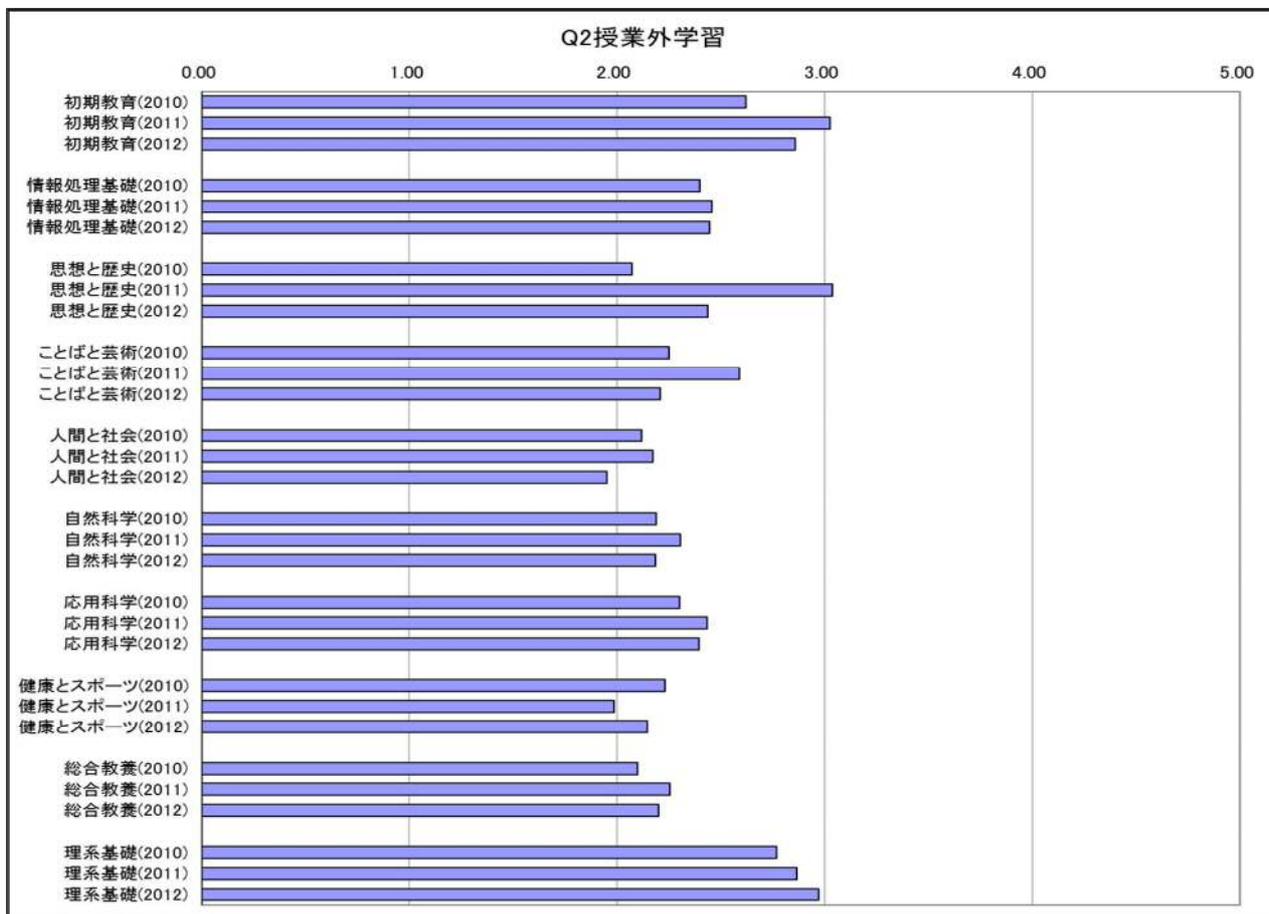
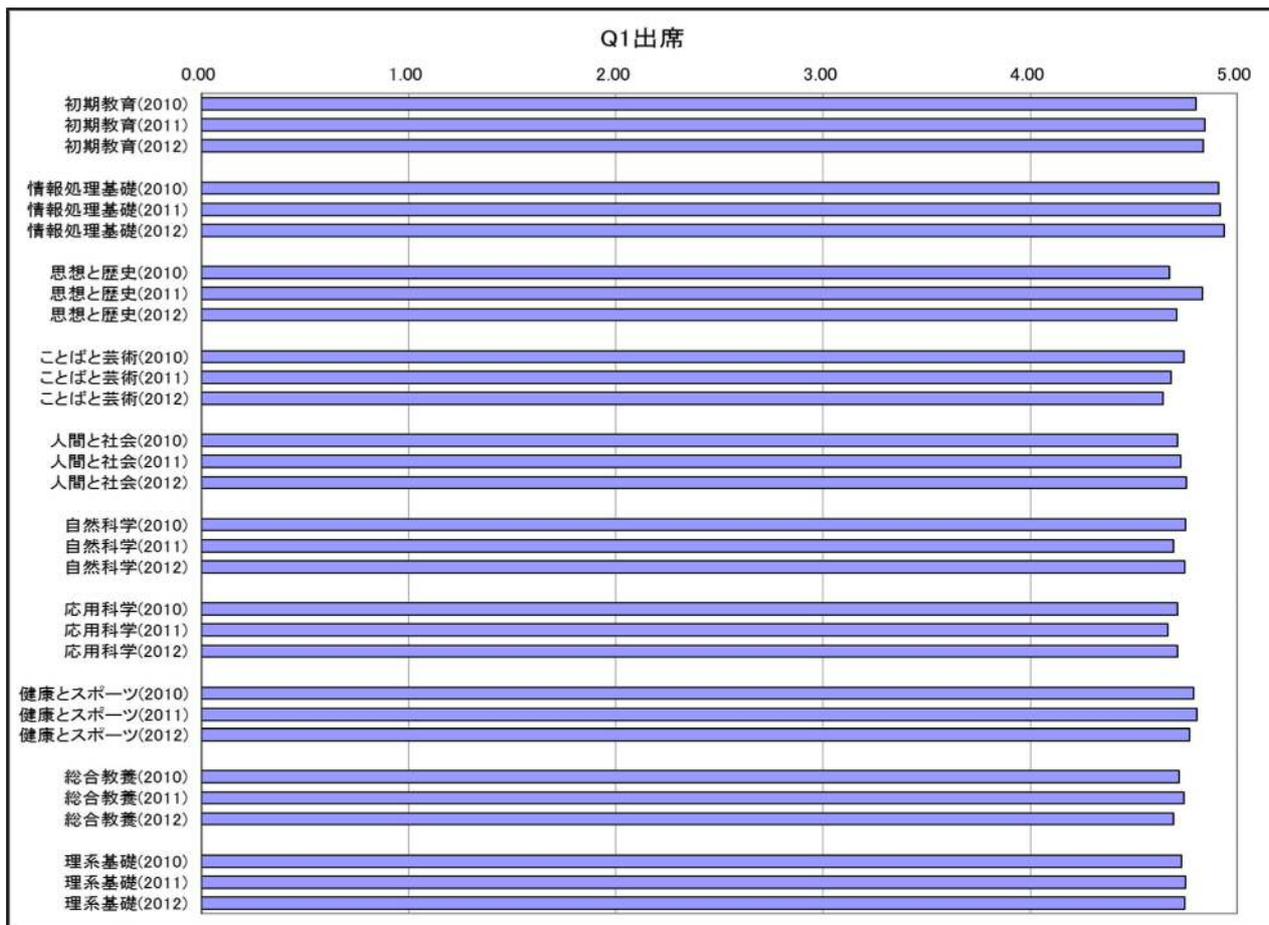
Q7の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか?という問いについては、すべての分野で平均が4.0を超えており、良好である。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

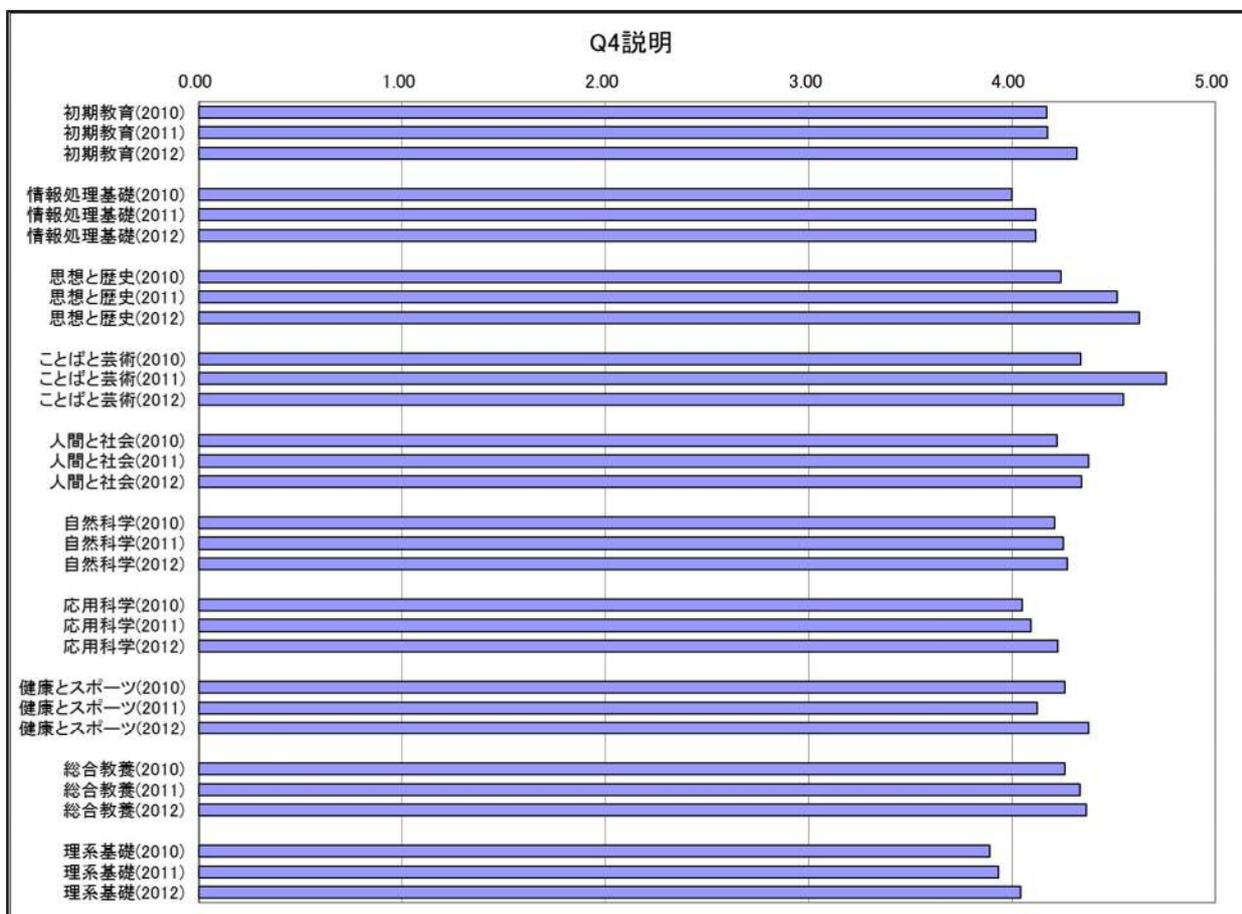
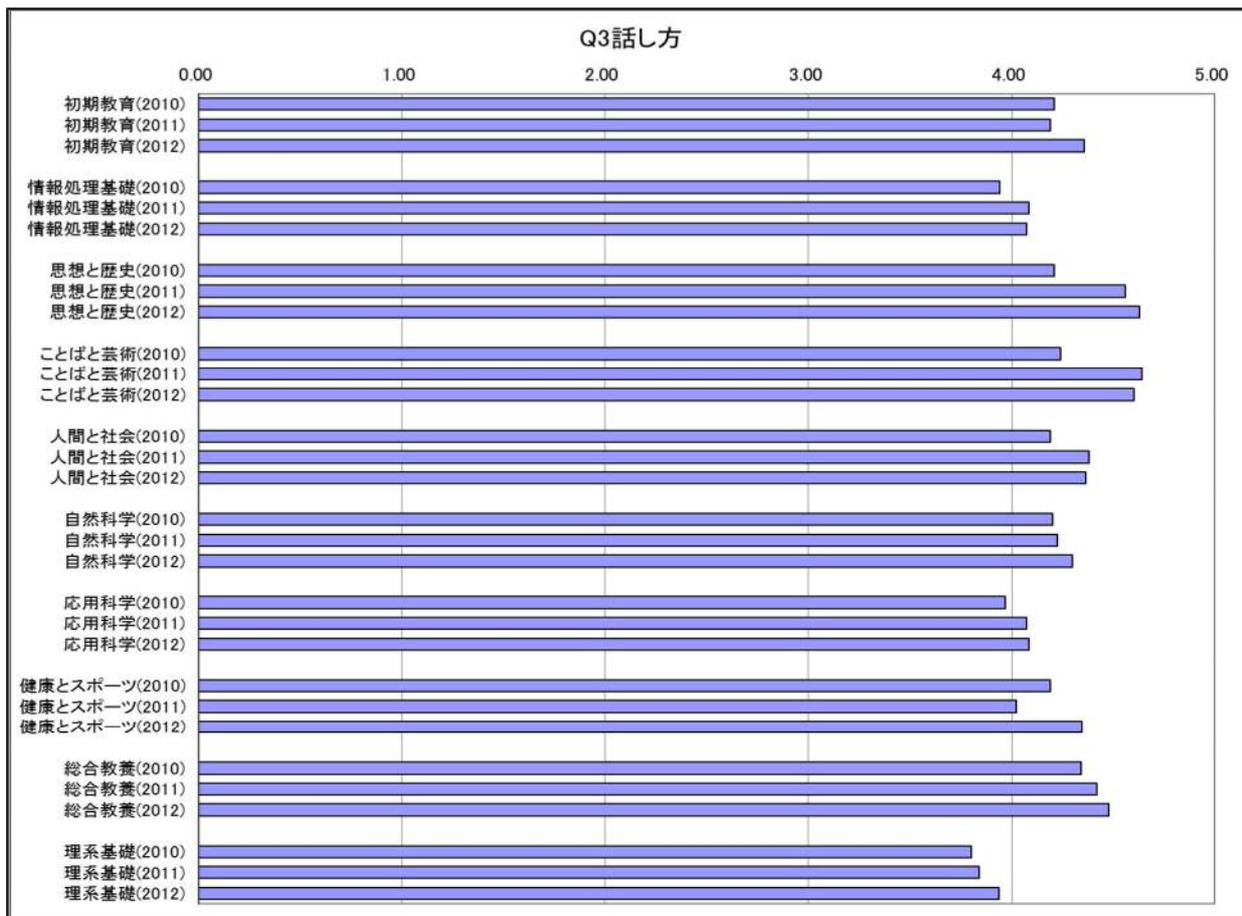
Q8のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を5,4,3,2,1とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で3.5を上回っており良好である。また、昨年度に続き、すべての分野で上昇している。

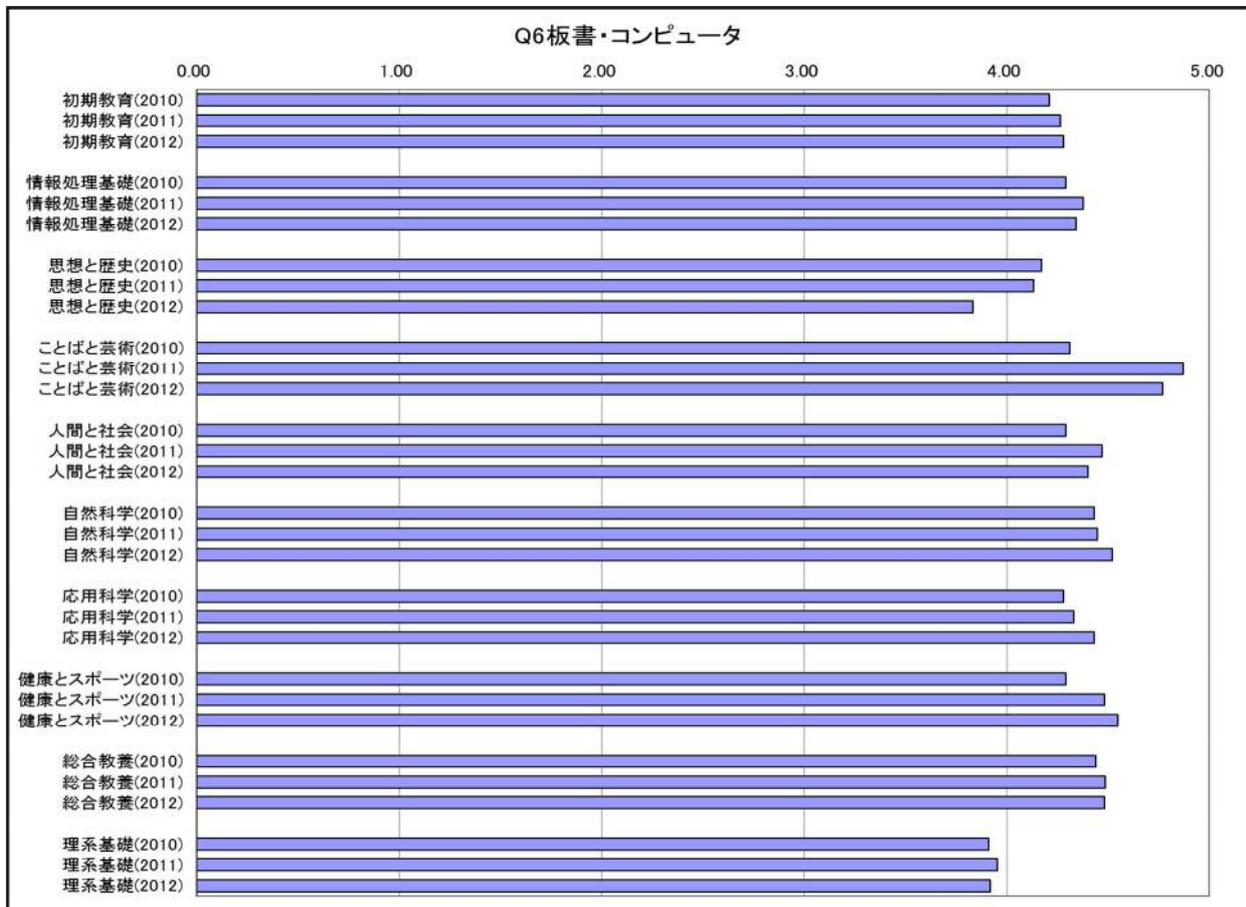
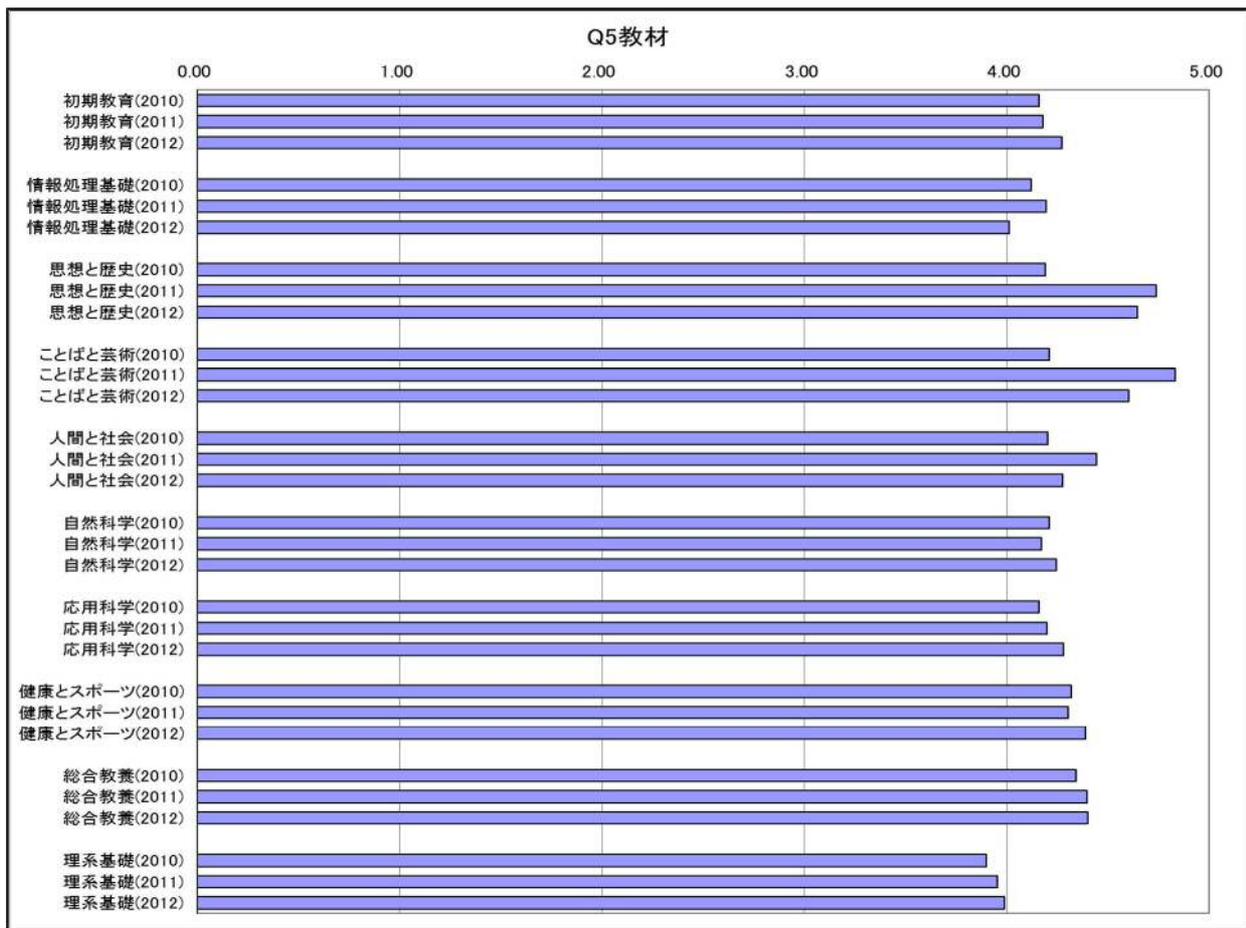
Q9のこの授業の内容を理解できたかという質問についてはすべての科目で3.5を上回っており良好であった。

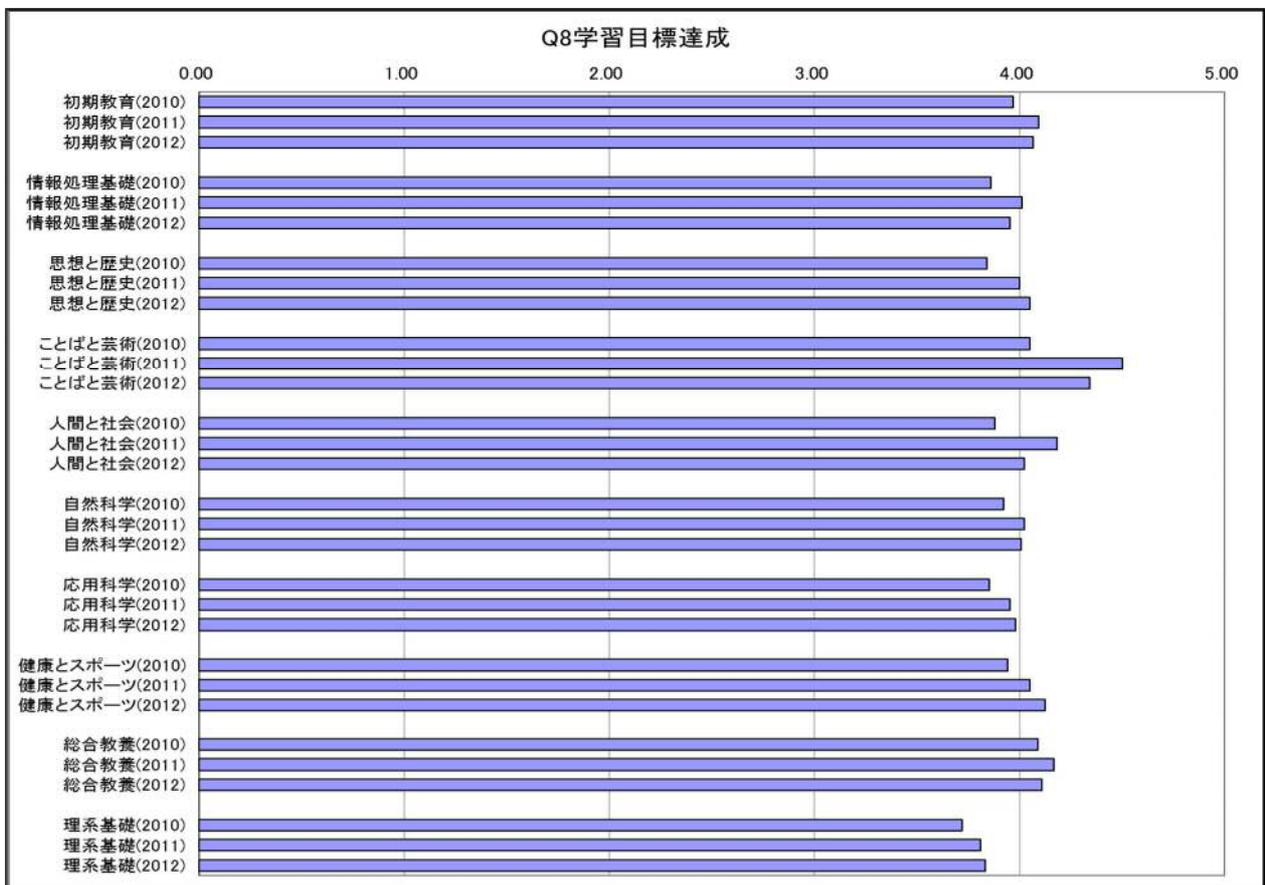
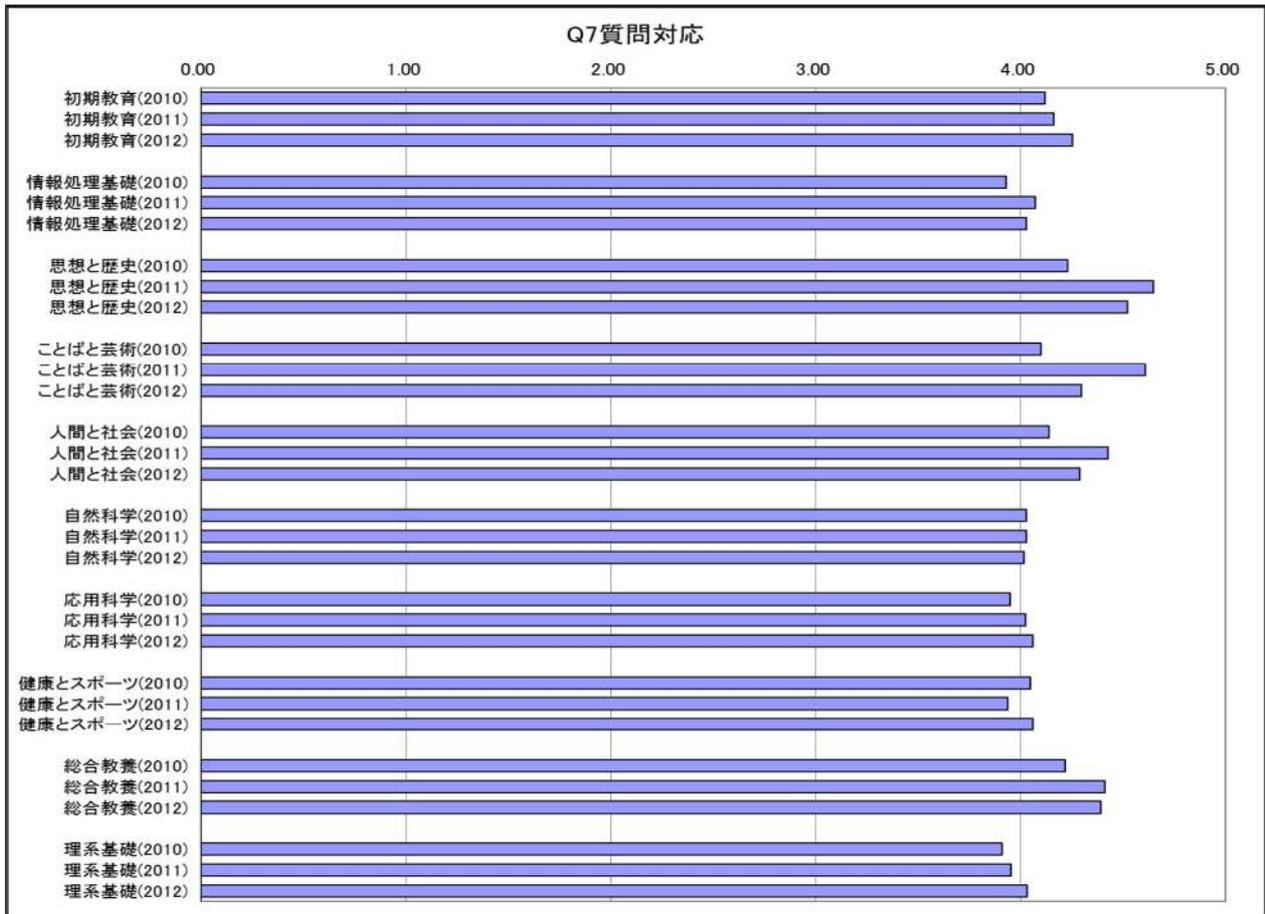
最後にQ10のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのはことばと芸術(4.63)であり、次に高かったのは思想と歴史(4.55)であった。

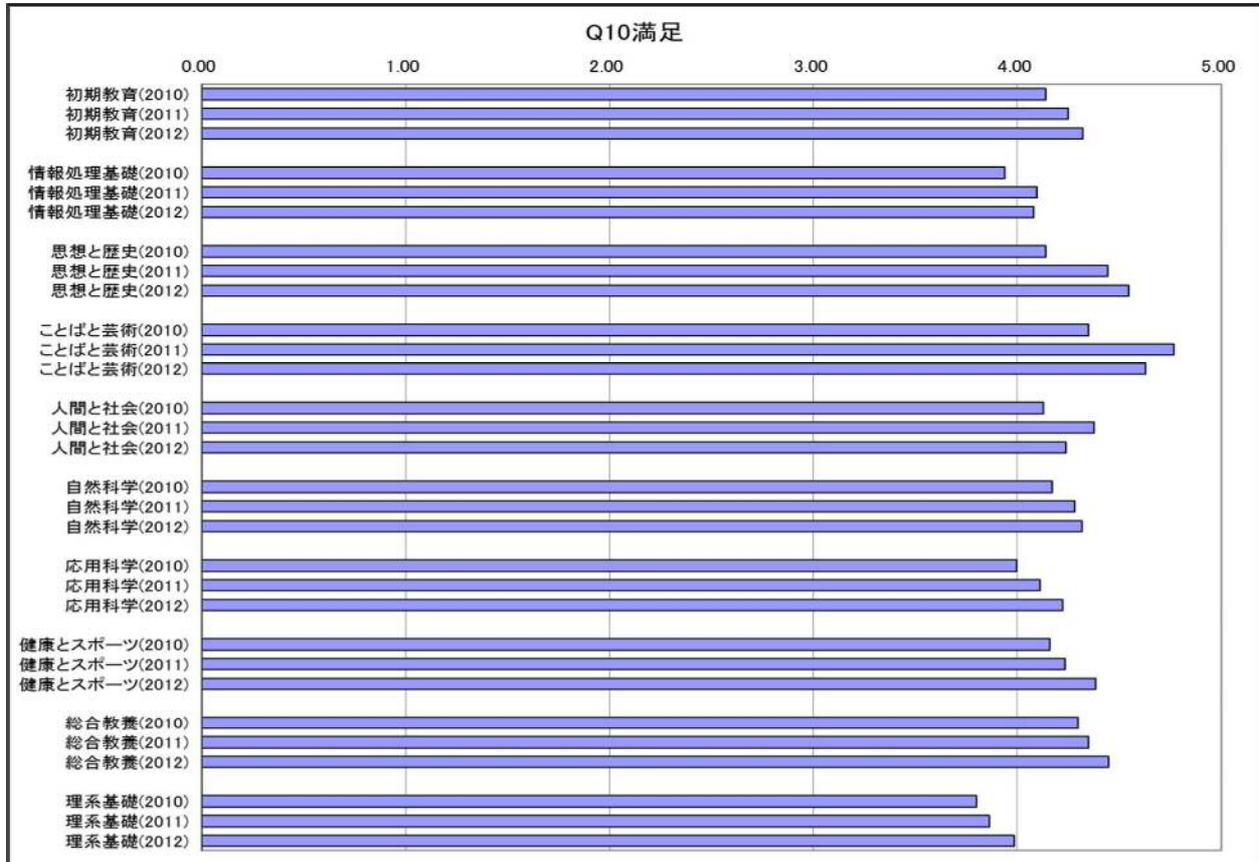
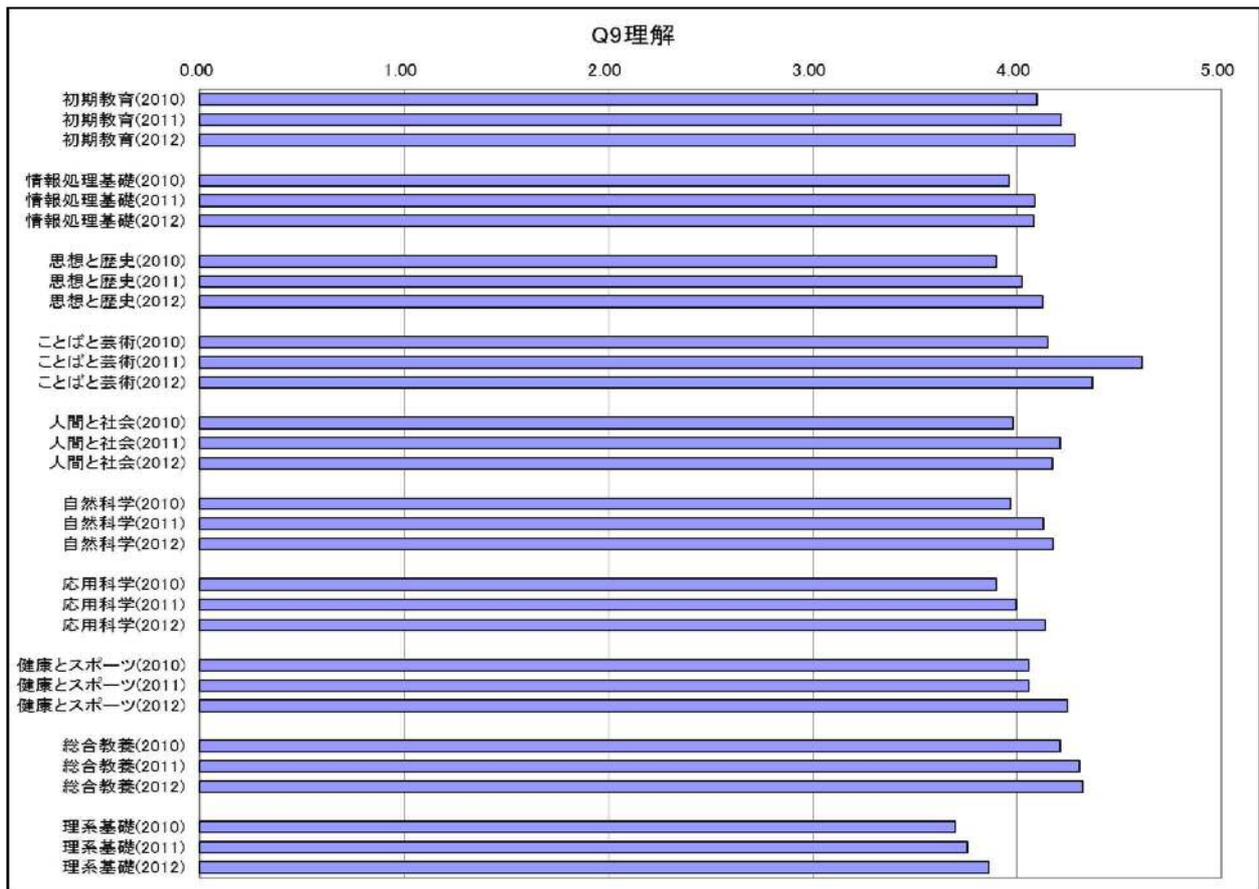
系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
初期教育	初期教育(2010)	講義	4.80	2.62	4.21	4.17	4.16	4.21	4.12	3.97	4.10	4.14
初期教育	初期教育(2011)	講義	4.84	3.02	4.19	4.18	4.18	4.26	4.16	4.09	4.21	4.25
初期教育	初期教育(2012)	講義	4.84	2.86	4.36	4.32	4.27	4.28	4.26	4.07	4.28	4.32
初期教育	情報処理基礎(2010)	講義	4.91	2.40	3.94	4.00	4.12	4.29	3.93	3.86	3.96	3.94
初期教育	情報処理基礎(2011)	講義	4.92	2.46	4.09	4.12	4.19	4.38	4.07	4.01	4.09	4.10
初期教育	情報処理基礎(2012)	講義	4.94	2.45	4.07	4.11	4.01	4.34	4.03	3.95	4.08	4.08
一般教養教育	思想と歴史(2010)	講義	4.67	2.07	4.21	4.24	4.19	4.17	4.23	3.84	3.90	4.14
一般教養教育	思想と歴史(2011)	講義	4.83	3.04	4.56	4.52	4.74	4.13	4.65	4.00	4.02	4.44
一般教養教育	思想と歴史(2012)	講義	4.71	2.44	4.63	4.63	4.64	3.83	4.53	4.05	4.12	4.55
一般教養教育	ことばと芸術(2010)	講義	4.74	2.25	4.24	4.34	4.21	4.31	4.10	4.05	4.15	4.35
一般教養教育	ことばと芸術(2011)	講義	4.68	2.59	4.64	4.76	4.83	4.87	4.61	4.50	4.61	4.77
一般教養教育	ことばと芸術(2012)	講義	4.64	2.21	4.60	4.55	4.60	4.77	4.30	4.34	4.37	4.63
一般教養教育	人間と社会(2010)	講義	4.71	2.12	4.19	4.22	4.20	4.29	4.14	3.88	3.98	4.13
一般教養教育	人間と社会(2011)	講義	4.73	2.17	4.38	4.38	4.44	4.47	4.43	4.18	4.21	4.38
一般教養教育	人間と社会(2012)	講義	4.75	1.95	4.36	4.34	4.28	4.40	4.29	4.02	4.17	4.24
一般教養教育	自然科学(2010)	講義	4.75	2.19	4.20	4.21	4.21	4.43	4.03	3.92	3.97	4.17
一般教養教育	自然科学(2011)	講義	4.69	2.31	4.23	4.25	4.17	4.45	4.03	4.02	4.13	4.28
一般教養教育	自然科学(2012)	講義	4.75	2.18	4.30	4.27	4.24	4.52	4.02	4.01	4.18	4.32
一般教養教育	応用科学(2010)	講義	4.71	2.30	3.97	4.05	4.16	4.28	3.95	3.85	3.90	4.00
一般教養教育	応用科学(2011)	講義	4.67	2.43	4.07	4.09	4.20	4.33	4.02	3.95	4.00	4.11
一般教養教育	応用科学(2012)	講義	4.71	2.40	4.09	4.23	4.28	4.43	4.06	3.98	4.14	4.22
一般教養教育	健康とスポーツ(2010)	講義	4.79	2.23	4.19	4.26	4.32	4.29	4.05	3.94	4.06	4.16
一般教養教育	健康とスポーツ(2011)	講義	4.80	1.99	4.02	4.13	4.30	4.48	3.94	4.05	4.06	4.23
一般教養教育	健康とスポーツ(2012)	講義	4.77	2.15	4.35	4.38	4.39	4.55	4.06	4.12	4.25	4.39
一般教養教育	総合教養(2010)	講義	4.72	2.10	4.34	4.26	4.34	4.44	4.22	4.09	4.21	4.30
一般教養教育	総合教養(2011)	講義	4.74	2.25	4.42	4.33	4.40	4.49	4.41	4.17	4.31	4.35
一般教養教育	総合教養(2012)	講義	4.69	2.20	4.48	4.37	4.40	4.48	4.39	4.11	4.32	4.45
専門基礎教育	理系基礎(2010)	講義	4.73	2.77	3.80	3.89	3.90	3.91	3.91	3.72	3.70	3.80
専門基礎教育	理系基礎(2011)	講義	4.75	2.87	3.84	3.93	3.95	3.95	3.96	3.81	3.76	3.86
専門基礎教育	理系基礎(2012)	講義	4.75	2.97	3.94	4.04	3.99	3.92	4.04	3.83	3.86	3.98









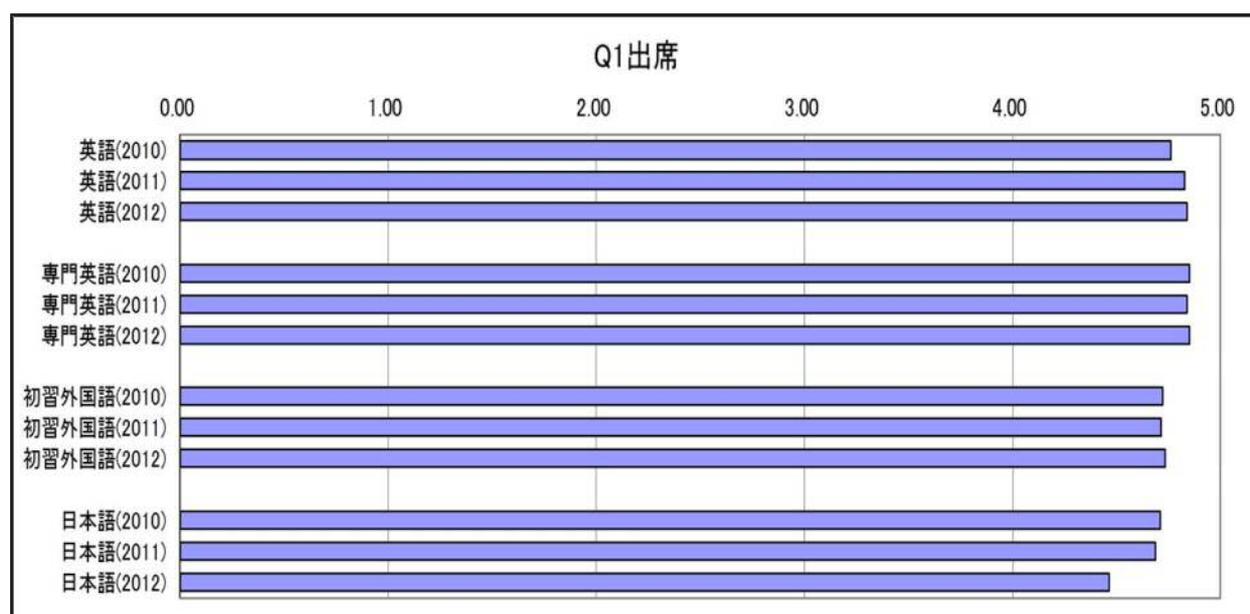


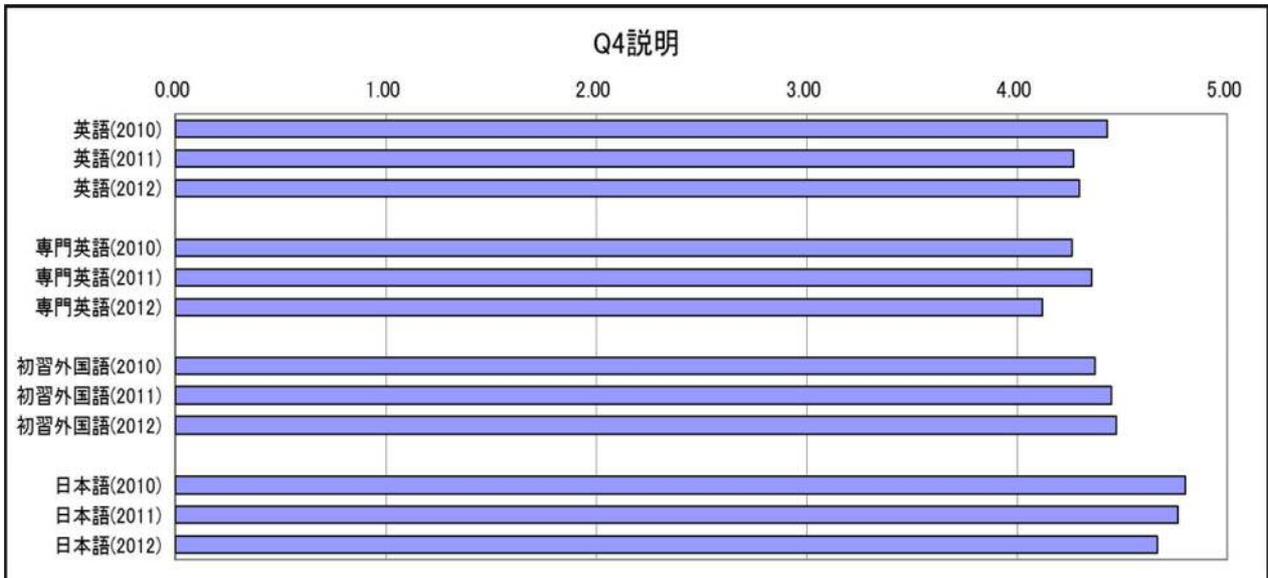
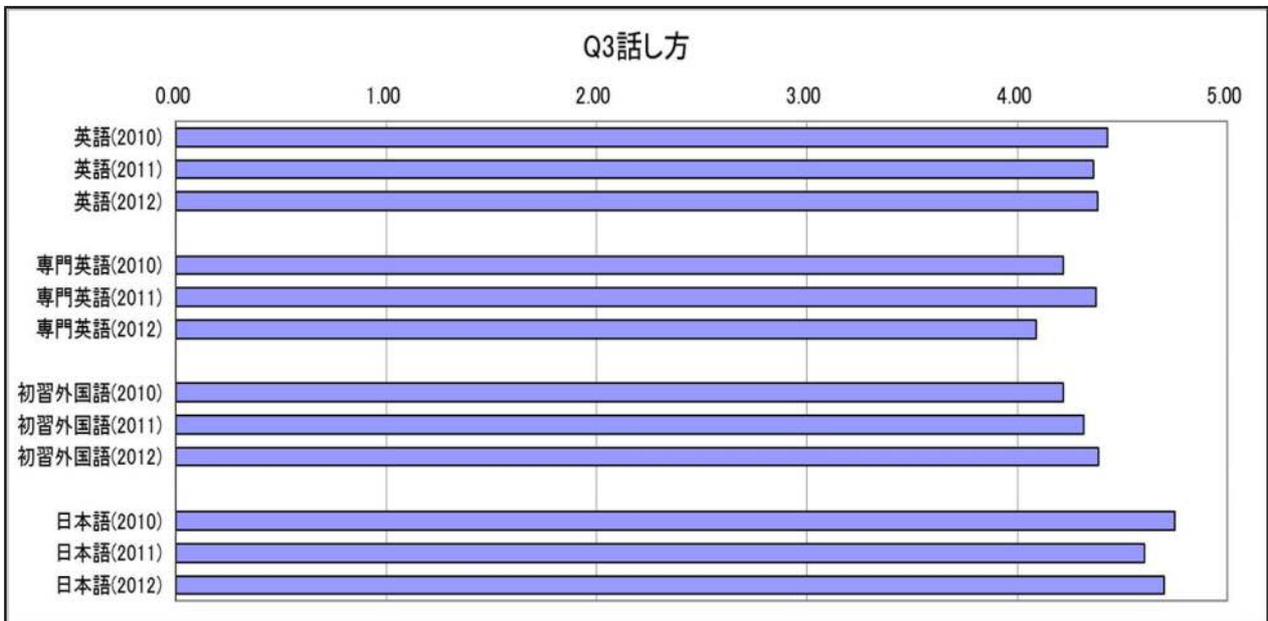
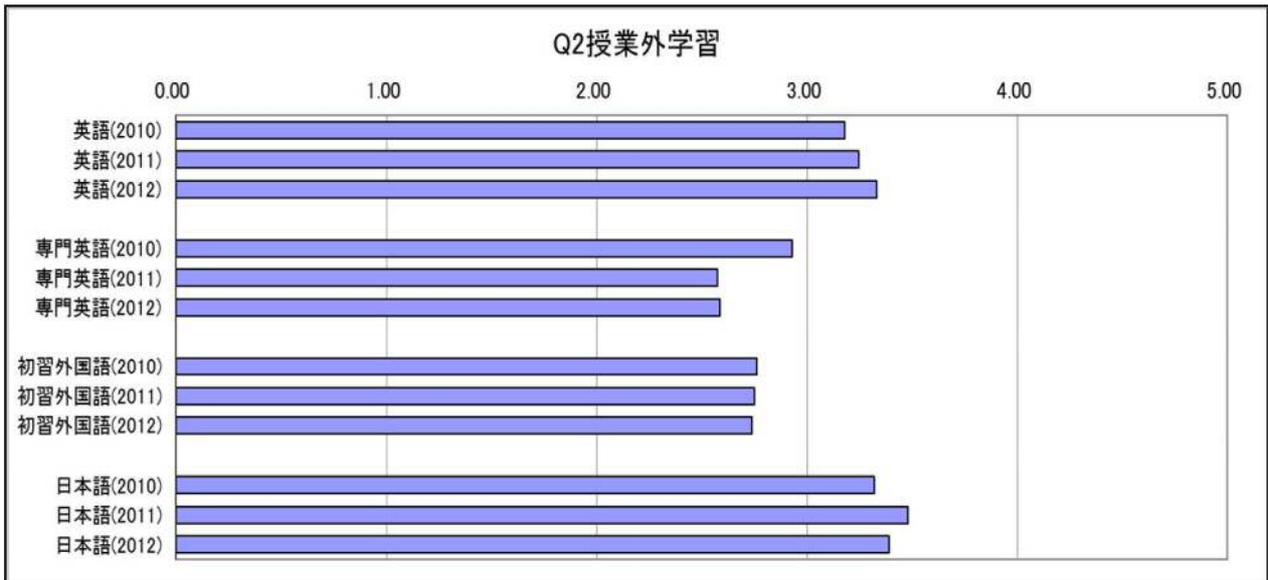
(2) 外国語教育科目の結果について

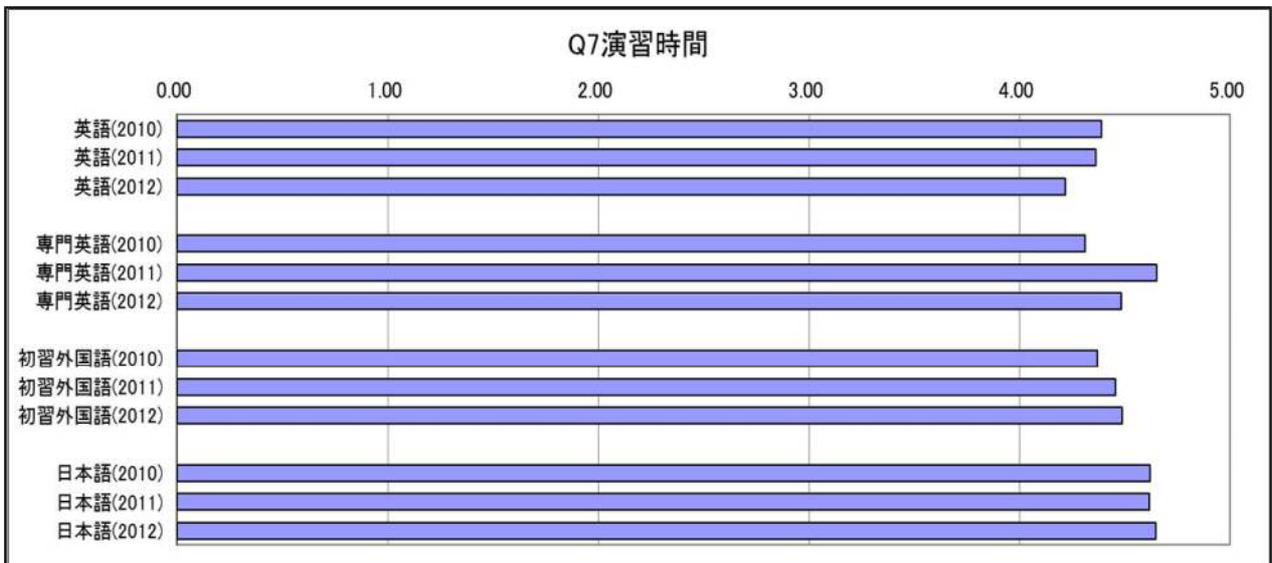
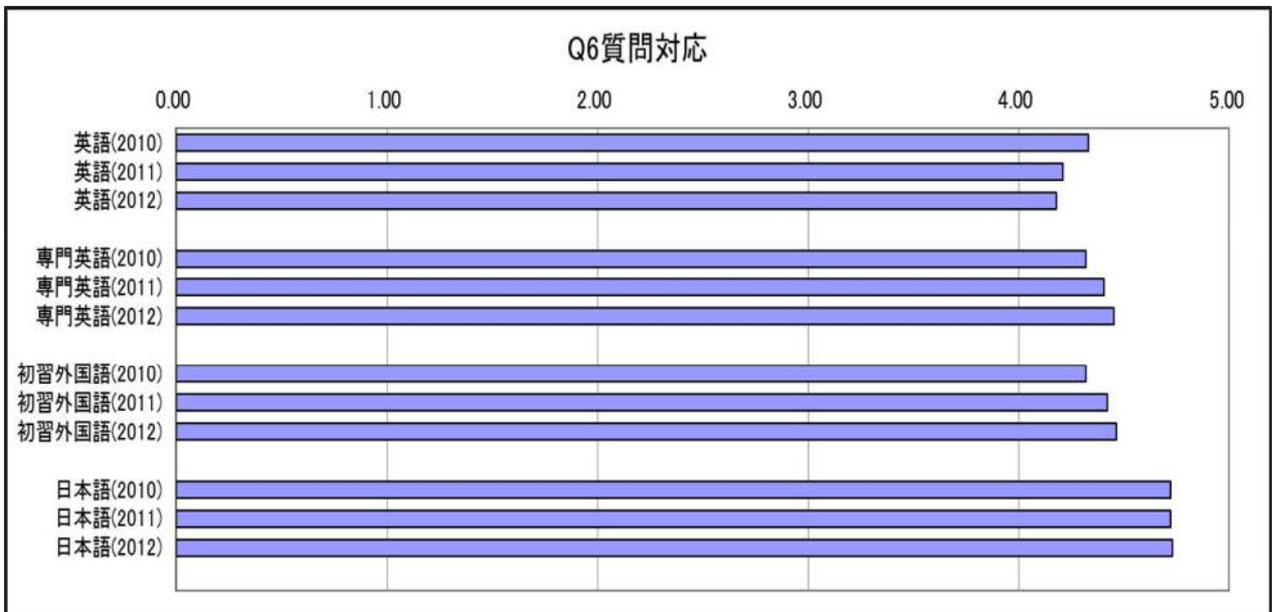
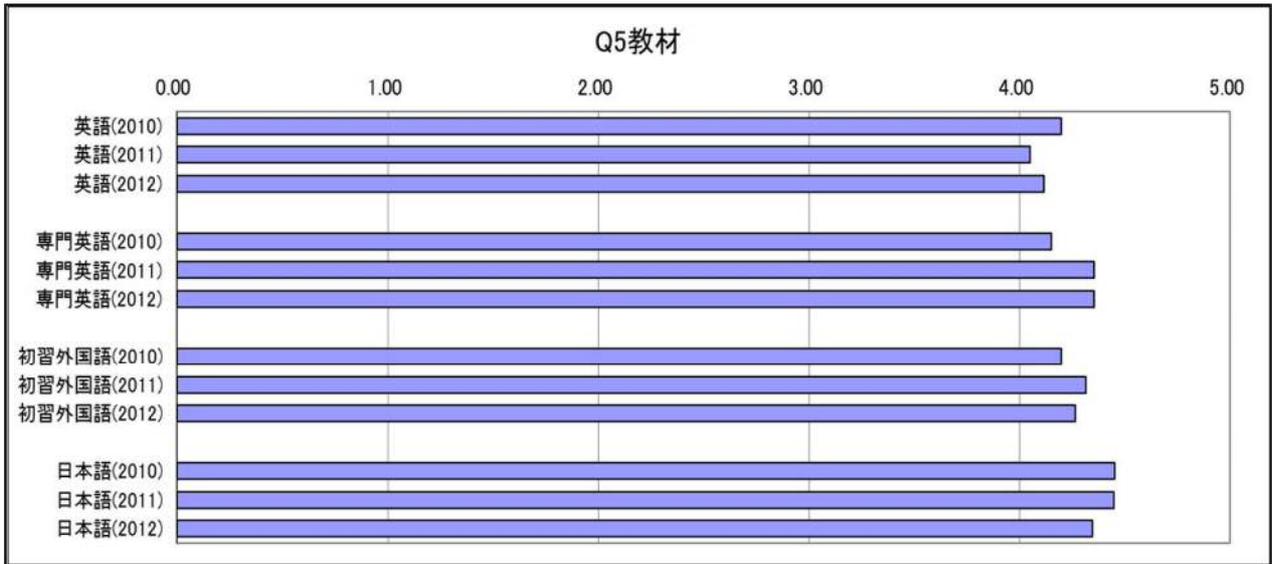
以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「専門英語」(*ここでは医療系英語科目を便宜的にこう呼称する)「初習外国語」「日本語」の4つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。

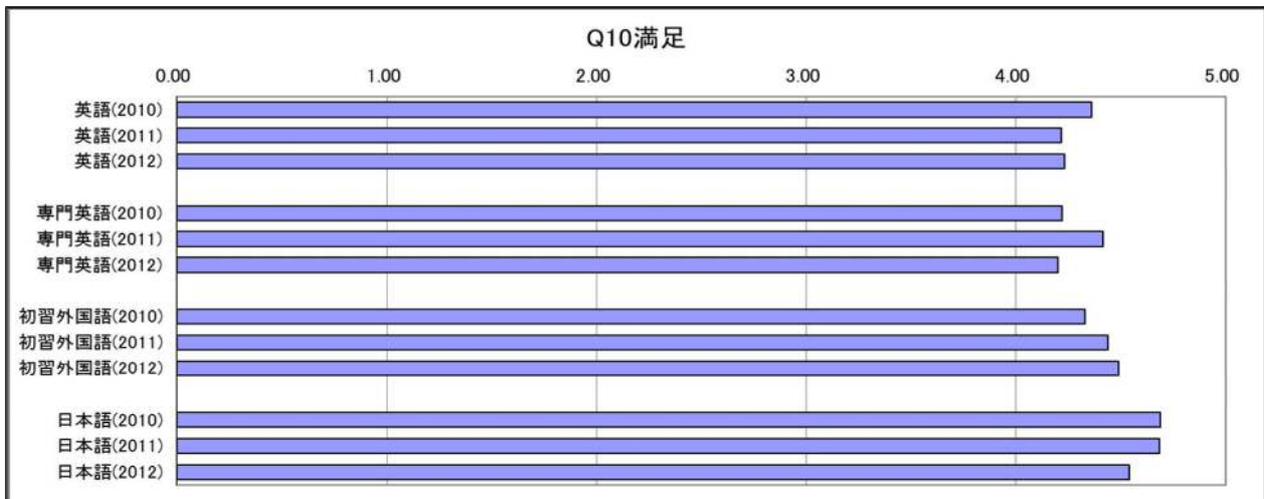
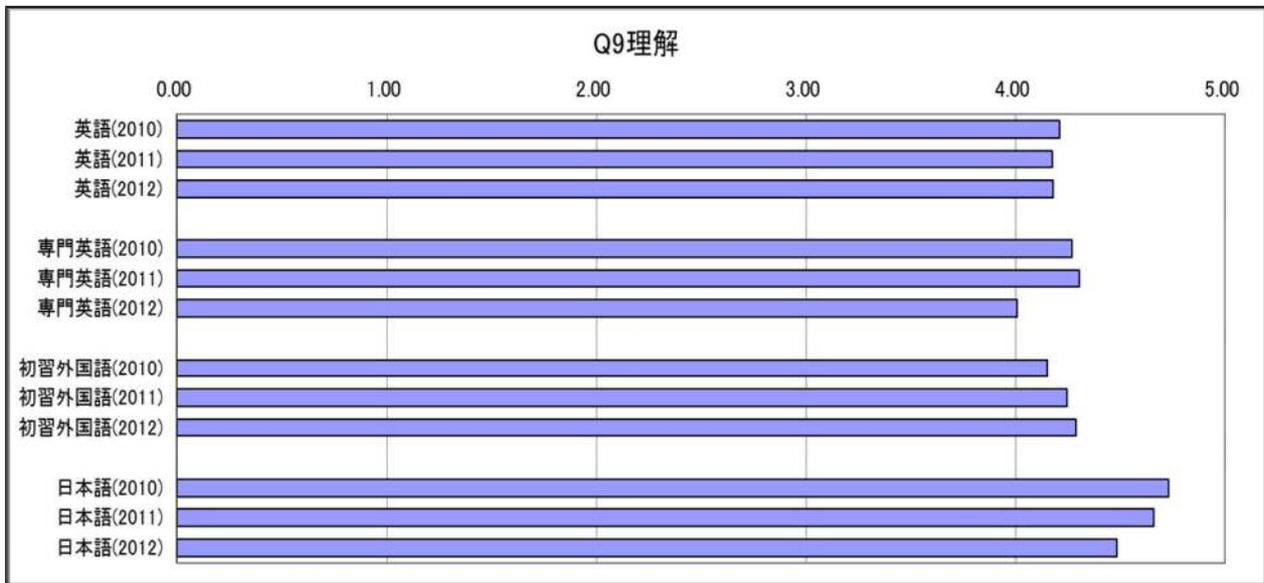
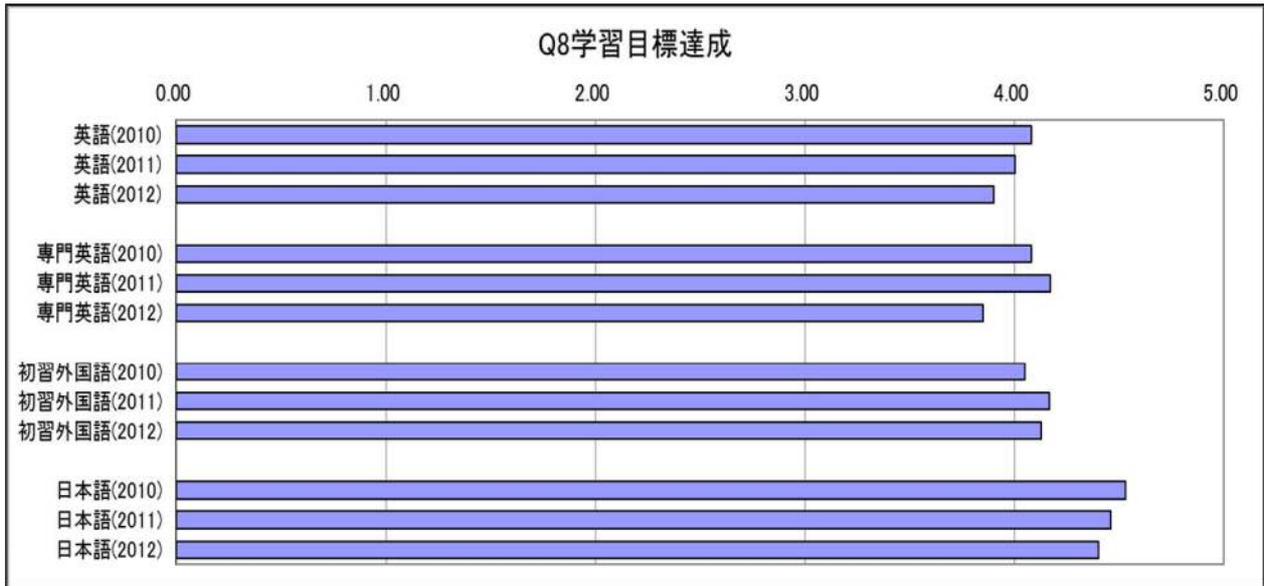
Q1の出席はすべて4.5前後を維持しており良好である。Q2の授業外学習は日本語分野が最も高く、次いで英語分野が高い。Q3の話し方とQ4の説明は昨年度と比較して大きな変動はないが、日本語分野は平均値が特に高い。Q5の教材はすべての科目で4.0以上であるが、英語がやや低下した。Q6の質問対応はどの分野も非常に高い。Q7は教員が授業内容の説明以外に学生に演習や練習の時間を十分に与えましたか?という質問である。これもすべて4.0以上を維持しており良好である。Q8の学習目標達成は昨年度に続き、ほとんどの分野で4.0以上であった。Q9の理解、Q10の満足もすべて4.0以上を維持しており良好である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2010)	語学	4.76	3.18	4.43	4.43	4.20	4.33	4.39	4.08	4.21	4.36
外国語教育	英語(2011)	語学	4.83	3.25	4.36	4.27	4.05	4.21	4.36	4.00	4.18	4.22
外国語教育	英語(2012)	語学	4.84	3.33	4.38	4.30	4.12	4.18	4.22	3.90	4.18	4.23
外国語教育	専門英語(2010)	語学	4.85	2.93	4.22	4.26	4.15	4.32	4.31	4.08	4.27	4.22
外国語教育	専門英語(2011)	語学	4.84	2.57	4.37	4.35	4.35	4.41	4.65	4.17	4.30	4.41
外国語教育	専門英語(2012)	語学	4.85	2.59	4.09	4.12	4.36	4.45	4.48	3.85	4.01	4.20
外国語教育	初習外国語(2010)	語学	4.72	2.76	4.22	4.37	4.20	4.32	4.37	4.05	4.15	4.33
外国語教育	初習外国語(2011)	語学	4.71	2.75	4.32	4.45	4.32	4.42	4.45	4.17	4.25	4.44
外国語教育	初習外国語(2012)	語学	4.73	2.74	4.39	4.47	4.26	4.46	4.49	4.13	4.29	4.49
外国語教育	日本語(2010)	語学	4.71	3.32	4.75	4.80	4.45	4.72	4.62	4.53	4.73	4.69
外国語教育	日本語(2011)	語学	4.68	3.48	4.60	4.76	4.45	4.72	4.61	4.46	4.66	4.68
外国語教育	日本語(2012)	語学	4.46	3.39	4.70	4.67	4.34	4.73	4.65	4.40	4.48	4.54





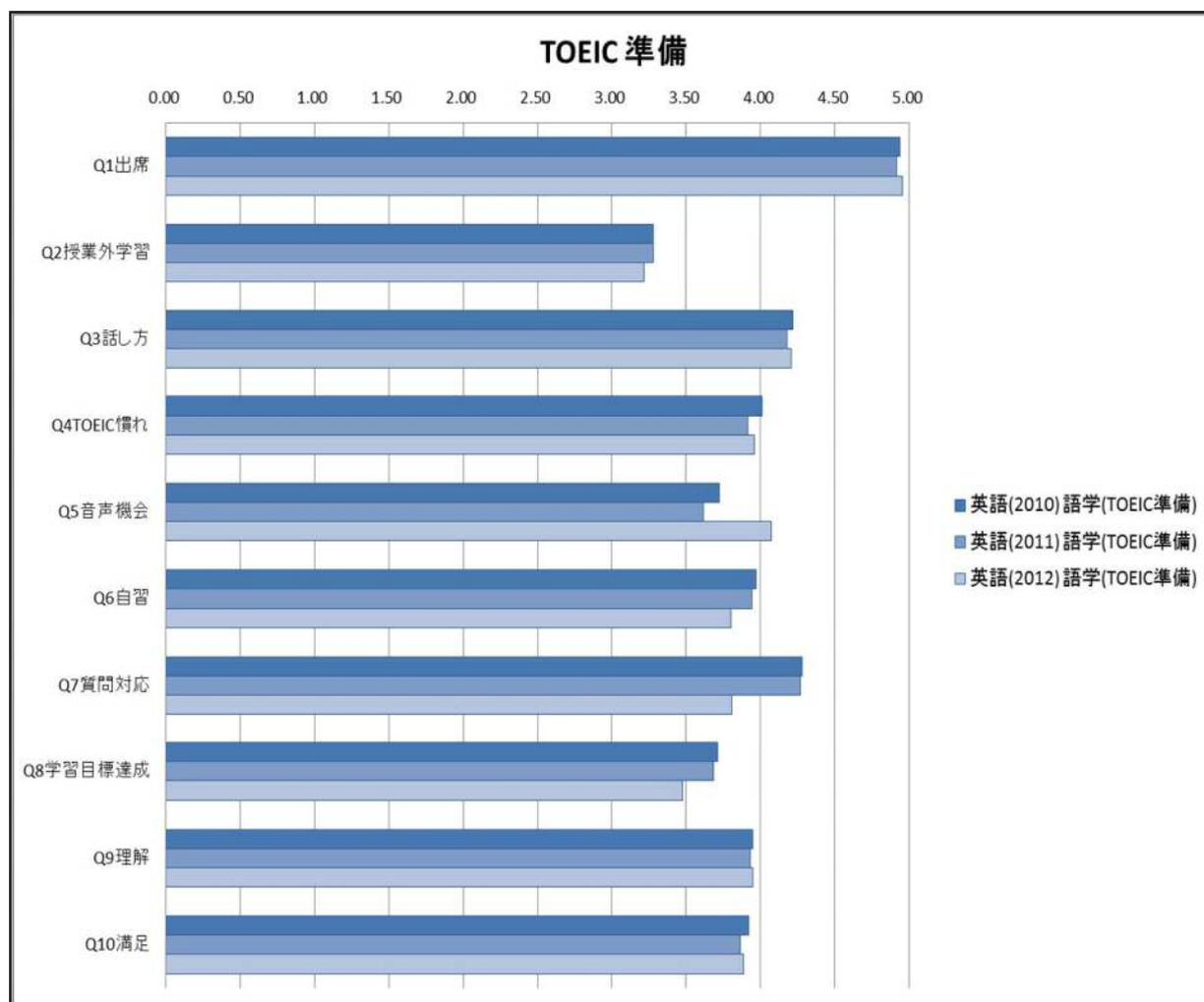




(3) 外国語科目 (TOEIC 準備) の結果について

以下は外国語科目 (TOEIC 準備) の平均値を示したものである。TOEIC 準備は1年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。昨年度と比較すると、全体的に概ね現状維持の状況にある。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語(2010)	語学(TOEIC準備)	4.94	3.28	4.22	4.01	3.72	3.97	4.28	3.71	3.95	3.92
外国語教育	英語(2011)	語学(TOEIC準備)	4.92	3.28	4.18	3.92	3.61	3.94	4.27	3.68	3.93	3.86
外国語教育	英語(2012)	語学(TOEIC準備)	4.95	3.22	4.21	3.96	4.07	3.80	3.81	3.47	3.95	3.89

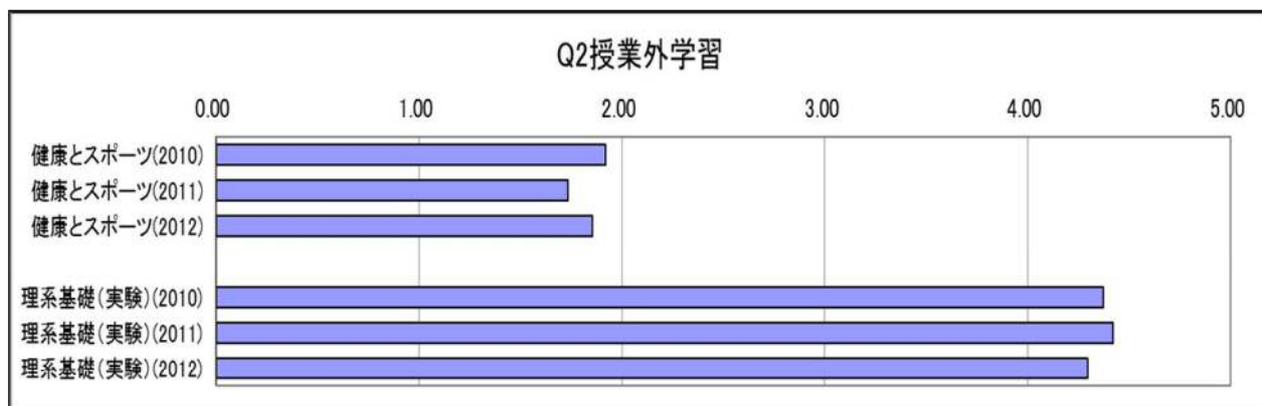


(4) 演習・実験・実習系科目の結果について

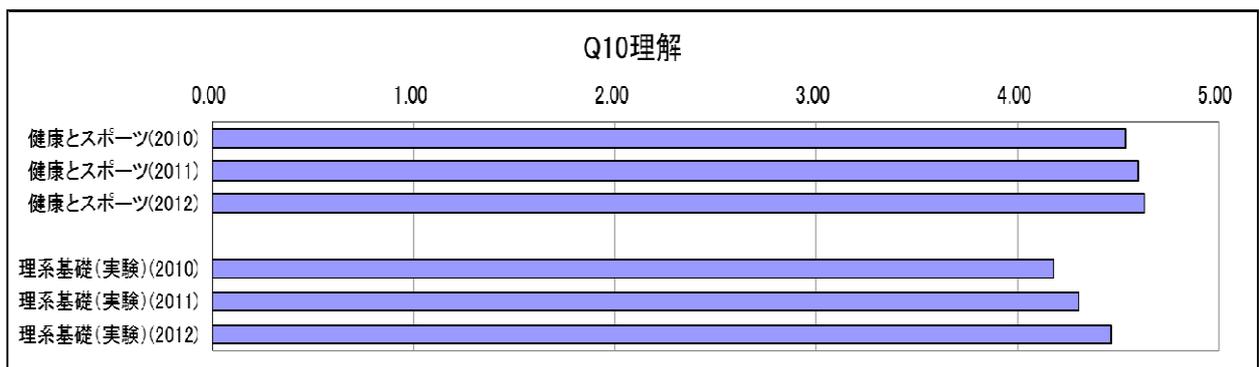
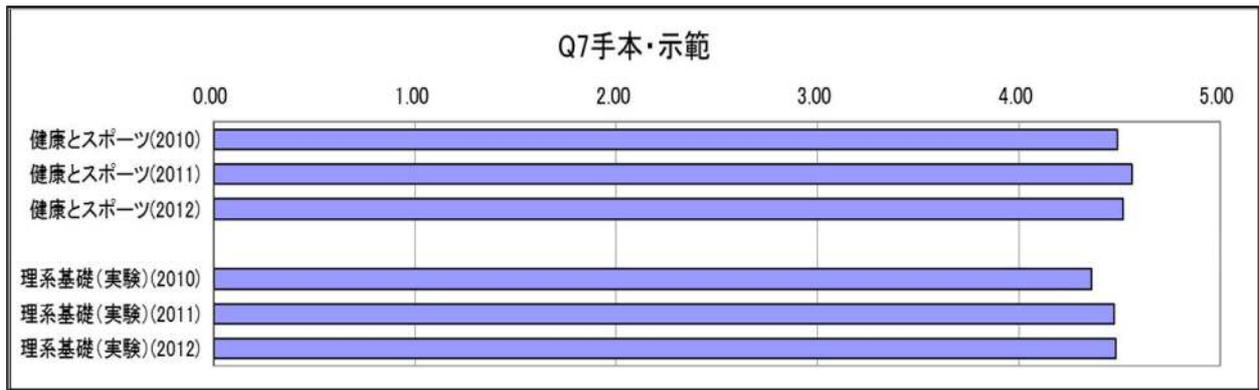
以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは「健康とスポーツ」分野のスポーツ運動実習の授業、および「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については健康とスポーツ分野は1.85と低く、反対に理系基礎(実験)は4.29と非常に高く、分野間で大きな差がみられる。健康とスポーツ分野は授業の性格上授業外学習を課すことが難しい面もあると考えられるが、何らかの取り組みは必要であると思われる。一方、理系基礎(実験)は多くの学生が授業1回につき2時間以上の授業外学習を行っていることが分かり、単位の実質化という点からみて望ましい状況にあるといえる。

Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
一般教養教育	健康とスポーツ(2010)	演習・実験実習	4.66	1.92	4.44	4.46	4.35	4.32	4.49	4.56	4.37	4.54	4.37
一般教養教育	健康とスポーツ(2011)	演習・実験実習	4.66	1.73	4.53	4.56	4.41	4.40	4.56	4.59	4.44	4.60	4.63
一般教養教育	健康とスポーツ(2012)	演習・実験実習	4.69	1.85	4.46	4.53	4.13	4.41	4.52	4.62	4.42	4.63	4.68
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2010)	演習・実験実習	4.92	4.37	4.23	4.25	4.40	4.37	4.36	4.38	4.18	4.18	4.30
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2011)	演習・実験実習	4.93	4.42	4.30	4.34	4.50	4.42	4.47	4.47	4.31	4.31	4.40
専門基礎教育	理系基礎(実験)(2012)	演習・実験実習	4.95	4.29	4.43	4.42	4.55	4.52	4.48	4.52	4.37	4.46	4.60







附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

系列	分野	授業科目	開設科目名(H24)			
初期教育	初期教育	フレッシュマンセミナー	フレッシュマンセミナー			
		基礎セミナー1	基礎セミナー1 基礎セミナー(経) 医学入門I			
		基礎セミナー2	基礎セミナー2			
	情報処理基礎	情報リテラシー演習	情報リテラシー演習			
		情報セキュリティ・モラル	情報セキュリティ・モラル			
外国語教育	英語	TOEIC準備	TOEIC準備			
		Basic English	Basic English			
		English Speaking	English Speaking			
		TOEIC認定	TOEIC認定			
		TOEIC認定400	TOEIC認定400			
		英語リーディング	英語リーディング			
		英語ライティング	英語ライティング			
		英語特別演習	英語特別演習 英語特別演習1a 英語特別演習1b			
		Comprehensive English	Comprehensive English			
		TOEIC認定500(TOEFL450)	TOEIC認定500(TOEFL450)			
		TOEIC認定600(TOEFL500)	TOEIC認定600(TOEFL500)			
		海外英語研修	海外英語研修			
		専門英語	医学英語2	医学英語2		
			医療英語	医療英語		
	基礎医療英会話		基礎医療英会話			
	医療英会話		医療英会話			
	初習外国語	初習外国語初歩		ドイツ語初歩 フランス語初歩 中国語初歩 ハングル初歩		
			初習外国語入門1		ドイツ語入門1 フランス語入門1 中国語入門1 ハングル入門1	
				初習外国語入門2		ドイツ語入門2 フランス語入門2 中国語入門2 ハングル入門2
					初習外国語初級1A	
		初習外国語初級1B				ドイツ語初級1B フランス語初級1B 中国語初級1B ハングル初級1B
			初習外国語初級2A			ドイツ語初級2A フランス語初級2A 中国語初級2A ハングル初級2A
				初習外国語初級2B		ドイツ語初級2B フランス語初級2B 中国語初級2B ハングル初級2B
		初習外国語会話1				ドイツ語会話1 フランス語会話1 中国語会話1 ハングル会話1
			初習外国語会話2			ドイツ語会話2 フランス語会話2 中国語会話2 ハングル会話2
				海外初習外国語研修	海外中国語研修	
		日本語		日本語 ※外国人留学生対象科目		ロシア語 スペイン語 日本語ⅠA 日本語ⅠB 日本語ⅡA 日本語ⅡB 日本語ⅢA 日本語ⅢB 日本語ⅣA 日本語ⅣB 日本語ⅤA 日本語ⅤB

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	思想と歴史	思想と倫理	哲学 倫理学 生命倫理学 宗教学 論理学
		歴史	日本史 東洋史 西洋史
		主題(思想と歴史)	漱石の思想Ⅰ 漱石の思想Ⅱ 日本の思想
	ことばと芸術	文学と言語	日本文学 漢文 言語学
		芸術	芸術史(美術史) 芸術史(日本近代美術史) 芸術概論(音楽と歴史) 芸術概論(音楽) 芸術実践(美術) 芸術実践(音楽) 芸術実践(工芸) 芸術概論(イメージ論)
		主題(ことばと芸術)	美術鑑賞と作品記述
		人間と社会	法学 政治学 経済学 社会学 地理学 民俗学 文化人類学 産業倫理 社会科学概論 社会福祉学
	人間と社会	人間と教育	教育学
		心理学	心理学(看護のための心理学) 心理学(適応と不適応) 心理学(自分自身を再発見する) 心理学(心のとらえ方) 心理学(行動分析の基礎と応用) 心理学(心と社会の心理学) 心理学(思考・コミュニケーション) 心理学(子どもの発達と心の世界) 心理学(概説) 心理学(心理学概論) 発達心理学 医療心理学
		日本国憲法	日本国憲法
		主題(人間と社会)	マーケティング入門 観光と交通 欧州統合と欧州経済 個人の財務設計 経済学の面白さ 遊園地とレジャー 意思決定と業績評価 初学者のための経済学入門 アジアの交通と文化 比較教育概論 現代社会と刑事法 法と市場経済 比較文化心理学 国際関係・コミュニケーション論 Japanese Economy and Culture Close-up Japan-Various Aspects of Culture and Society
		自然科学の考え方	数学の考え方 地球科学の考え方
	自然科学	自然科学	数学概論 現代物理学総説 現代化学総説 現代生物学総説 現代地球科学総説
		主題(自然科学)	宇宙と人間 医学のための物理学入門 科学の中の動物 環境とバイオテクノロジー 人間とバイオテクノロジー 歴史の中の動物 火山と地震 地球と人間 生命を科学する 生命現象のいろいろ

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	応用科学	統計学	社会科学のためのやさしい統計学 理工学のための統計学 医学のための統計学	
		環境科学	環境学	
		応用科学	科学史 技術概論 生命科学概論 生活科学 デザイン工学入門 行動科学 医学史	
		社会と医療	社会と医療(いのちと発達) 社会と医療(心とその座) 社会と医療(日本の医療) 社会と医療(性を考える)	
		主題(応用科学)	命と境 命と人間 環境と植物 環境と人間 環境と農業 環境と気象学 現代の科学技術 暮らしの中の動物 交通と社会 知的財産の開発と権利 情報技術と社会 人間と植物	
	健康とスポーツ	運動健康科学	運動健康科学	
		スポーツ運動実習	スポーツ運動実習(エアロビクスa)	スポーツ運動実習(エアロビクスa)
			スポーツ運動実習(エアロビクスb)	スポーツ運動実習(エアロビクスb)
			スポーツ運動実習(エアロビクスc)	スポーツ運動実習(エアロビクスc)
			スポーツ運動実習(エアロビクスd)	スポーツ運動実習(エアロビクスd)
スポーツ運動実習(エアロビクスe)			スポーツ運動実習(エアロビクスe)	
スポーツ運動実習(エアロビクスf)			スポーツ運動実習(エアロビクスf)	
スポーツ運動実習(ショートテニスa)			スポーツ運動実習(ショートテニスa)	
スポーツ運動実習(ショートテニスb)			スポーツ運動実習(ショートテニスb)	
スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフa)			スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフa)	
スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフb)	スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフb)			
スポーツ運動実習(バスケットボールa)	スポーツ運動実習(バスケットボールa)			
スポーツ運動実習(バドミントンa)	スポーツ運動実習(バドミントンa)			
スポーツ運動実習(バドミントンb)	スポーツ運動実習(バドミントンb)			
スポーツ運動実習(バドミントンc)	スポーツ運動実習(バドミントンc)			
スポーツ運動実習(バレーボールa)	スポーツ運動実習(バレーボールa)			
スポーツ運動実習(バレーボールb)	スポーツ運動実習(バレーボールb)			
スポーツ運動実習(バレーボールc)	スポーツ運動実習(バレーボールc)			
スポーツ運動実習(バレーボールd)	スポーツ運動実習(バレーボールd)			
スポーツ運動実習(バレーボールe)	スポーツ運動実習(バレーボールe)			
スポーツ運動実習(バレーボールf)	スポーツ運動実習(バレーボールf)			
スポーツ運動実習(バレーボールg)	スポーツ運動実習(バレーボールg)			
スポーツ運動実習(ハンドボールa)	スポーツ運動実習(ハンドボールa)			
スポーツ運動実習(ハンドボールb)	スポーツ運動実習(ハンドボールb)			
スポーツ運動実習(フィットネストレーニングa)	スポーツ運動実習(フィットネストレーニングa)			
スポーツ運動実習(空手a)	スポーツ運動実習(空手a)			
スポーツ運動実習(硬式テニスa)	スポーツ運動実習(硬式テニスa)			
スポーツ運動実習(硬式テニスb)	スポーツ運動実習(硬式テニスb)			
スポーツ運動実習(硬式テニスc)	スポーツ運動実習(硬式テニスc)			
スポーツ運動実習(硬式テニスd)	スポーツ運動実習(硬式テニスd)			
スポーツ運動実習(硬式テニスe)	スポーツ運動実習(硬式テニスe)			
スポーツ運動実習(レクリエーションナル・スポーツa)	スポーツ運動実習(レクリエーションナル・スポーツa)			
スポーツ運動実習(サッカーa)	スポーツ運動実習(サッカーa)			
主題(健康とスポーツ)	スポーツの医学 ライフスタイルと健康 加齢と健康 食・環境と健康			
総合教養	総合教養A	キャリアデザイン	キャリアデザイン	
		<うた>と<もの>がたり - 日本文学への招待 -	<うた>と<もの>がたり - 日本文学への招待 -	
		ベンチャービジネス論	ベンチャービジネス論	
		ポランティアと自主活動	ポランティアと自主活動	
		メディア情報処理	メディア情報処理	
	総合教養B	環境と地域共生	環境と地域共生	
		資本主義と大衆観光	資本主義と大衆観光	
		国際交流論	国際交流論	
		自然科学と現代社会A	自然科学と現代社会A	
		時間学A	時間学A	
専門基礎教育	理系基礎	数学I	数学I	
		数学II	数学II	
		物理学I	物理学I	
		物理学II	物理学II	
		化学I	化学I	
	理系基礎(実験)	化学II	化学II	
		生物学I	生物学I	
		生物学II	生物学II	
		地球科学I	地球科学I	
		地球科学II	地球科学II	
総合教養	総合教養A	時間学A	時間学A	
		知の広場 - 人と学問 -	知の広場 - 人と学問 -	
		留学生のための日本企業文化理解	留学生のための日本企業文化理解	
		山口県の地域政策	山口県の地域政策	
		教職協働実践I	教職協働実践I	
	総合教養B	哲学・思想入門	哲学・思想入門	
		キャリアと就職	キャリアと就職	
		キャリア形成とコミュニケーション	キャリア形成とコミュニケーション	
		地域と出逢う - 地域とともに自主活動 -	地域と出逢う - 地域とともに自主活動 -	
		パソコンSOS1	パソコンSOS1	
パソコンSOS2	パソコンSOS2			
やまぐち学	やまぐち学			
知的資産経営論	知的資産経営論			
自然科学と現代社会B	自然科学と現代社会B			
時間学B	時間学B			
生命と倫理	生命と倫理			
知的財産論	知的財産論			
大学院へのいざない	大学院へのいざない			
教職協働実践II	教職協働実践II			
教職協働実践III	教職協働実践III			
医療環境論I	医療環境論I			
医療環境論II	医療環境論II			

<参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙（４種類）

共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価 (TOEIC 準備)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>この授業を通して、TOEICテストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
6	<p>配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
8	<p>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
9	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>

10	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12~ 30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 授業公開（ピアレビュー）

（1）ピアレビューウイーク

1) 概要

平成24年度の授業公開は、平成27年度開始予定の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資すべく、人文学部新コースカリキュラム等策定委員会と連携して企画した。人文学部では、これまで、特定の授業を公開・参観し、事後、意見交換会を持つ形式でピアレビューを実施してきたが、今年度は、分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として、通常の授業を互いに広く参観しあうこととした。

具体的には、12月4日（月）から7日（金）にかかる1週間をピアレビューウイークとし、下記の要領で授業公開を実施した。

- 1：ピアレビューウイーク期間中、人文学部所属教員は、原則として1つ以上の授業を公開する
- 2：ピアレビューウイーク期間中、自身の所属するコース（平成27年度以降の新コース）の授業を1つ以上参観する
- 3：授業を参観した教員は、事後、ピアレビュー参加シートに必要事項を記入し、人文学部学務係に提出する
- 4：人文学部FD部員は提出されたピアレビュー参加シートにより、授業参観者の所属コースや氏名等をチェックしたのち、コース毎にとりまとめて新コースの代表委員（新コースカリキュラム等策定委員会委員）にシートを渡す
- 5：新コースの代表委員は、ピアレビュー参加シートの記述内容により、必要に応じてコース（新コース）会議等で意見交換の機会を設けたあと、シートを授業担当者に渡す

公開の対象とした授業は【図表1】のとおりである。ピアレビューウイーク期間中、人文学部教員39名（東アジア研究科教員2名を含む）による39科目を公開した。また、ピアレビュー参加シートとして、【図表2】に示す書式を人文学部全教員に事前に配布した。

【図表 1】平成 24 年度人文学部ピアレビューウィーク開講授業一覧

時限	12/3 (月)	12/4 (火)	12/5 (水)	12/6 (木)	12/7 (金)
12			[言]英語学卒業研究	[言]日本語学講読	
34	[哲]宗教学演習	[社]質的調査データ解析法	[言]英語学卒業研究	[文]中国文学講読 [言]言語類型論特殊講義 [言]日本語学特殊講義 [歴]日本史史料講読	[文]日本文学史 IV [言]ヨーロッパ言語概説 [歴]考古学概論 II
56	[社]コミュニケーション論 [歴]東洋史概論Ⅲ [言]日本語学講読	[文]日本文学概論 [言]中国語学概説Ⅳ [言]フランス語学特殊講義 [社]生活文化論 [社]社会学演習	[言]日本語史	[哲]日本思想史演習 [哲]美学・美術史演習 [歴]考古学実習	[文]中国文学特殊講義 [歴]日本史概論Ⅳ
78	[文]ドイツ文学演習 [哲]美学・美術史演習	[文]英米文学講読 [文]日本文学演習		[言]中国語学特殊講義 [社]現代民俗論 [歴]考古学実習 [歴]西洋史概論Ⅳ	[文]英米文学特殊講義
910	[言]中国語学講読 [言]歴史言語学特殊講義	[哲]西洋倫理学演習 [社]多変量解析法 [歴]古文書・古記録Ⅰ			

注：授業科目名冒頭の略号は、当該授業科目が、平成 27 年度以降の新体制において属する見込みの新コースを示す。すなわち、[哲]＝哲学コース [歴]＝歴史学コース [社]＝社会学コース [文]＝文学コース [言]＝言語学コースの 5 コースである。

【図表 2】ピアレビュー参加シート

ピアレビュー参加シート	
	提出先：人文学部学務係
提出者氏名 []
見学した授業科目名 []
授業見学の日時 [平成 24 年 12 月	日 () 時限]
授業担当者 [先生]
見学授業に対する感想・意見 *新コース構築のヒントとなるようなご意見も歓迎致します	

2) ピアレビュー結果

ピアレビュー参加結果は【図表3】のとおりである。授業参観に参加した教員数は延べ49名であった。平成24年12月当時の人文学部教員数が47名（東アジア研究科教員2名を含む）であることに照らせば授業参観率は100%を超えることになる。ただし、1人で複数の授業を参観した教員が7名あり、全体の約15%を占めるいっぽうで、全体の約35%を占める17名の教員がいずれの公開授業も参観しないという結果に終わった。これをコース別に見ると、【図表4】に示すとおり、文学・言語学コース所属予定の教員の参加率は高く、哲学・社会学・歴史学コース所属予定教員の参加率はおしなべて低かった。平成27年度以降に大規模な組織改編を迫られるコースに所属予定の教員が今回の授業公開に積極的に参加した結果と考えられ、FD部会のねらいがよく教員に理解された点は評価される。しかしながら、授業公開や教育改善に対して教員間に大きな意識差の存することは否めない。その克服は今後の課題と言える。

【図表3】平成24年度人文学部ピアレビューウイーク参加結果

参観者	参観者所属コース	参観した授業科目名	参観日	時限	授業者所属コース
1	哲学	西洋倫理学演習	12/4	910	哲学
2	哲学	日本史概論Ⅳ	12/7	56	歴史学
3	哲学	日本思想史演習	12/6	56	哲学
4	哲学	現代民俗論	12/6	78	社会学
5	哲学	美学・美術史演習	12/6	56	哲学
6	哲学	美学・美術史演習	12/6	78	哲学
7	哲学	日本思想史演習	12/6	56	哲学
8	社会学	質的調査データ解析法	12/4	34	社会学
9	社会学	考古学概論Ⅱ	12/7	34	歴史学
10	社会学	社会学演習	12/4	56	社会学
11	社会学	生活文化論	12/4	56	社会学
12	社会学	社会学調査実習	11/29	56	社会学
13	歴史学	日本史概論Ⅳ	12/7	56	歴史学
14	歴史学	西洋史概論Ⅳ	12/6	78	歴史学
15	文学	ドイツ文学演習	12/3	78	文学
16	文学	英米文学特殊講義	12/7	78	文学
		日本文学演習	12/4	78	文学
		日本文学史Ⅳ	12/7	34	文学
17	文学	英米文学講読	12/4	78	文学
		英米文学特殊講義	12/7	78	文学
		ドイツ文学演習	12/3	78	文学
		日本文学演習	12/4	78	文学
		日本文学概論	12/4	56	文学

18	文学	英米文学講読	12/4	78	文学
		古文書・古記録 I	12/4	910	歴史学
		西洋倫理学演習	12/4	910	哲学
		日本文学演習	12/4	78	文学
19	文学	中国文学講読	12/6	34	文学
20	文学	英語学卒業研究	12/5	1234	言語学
		英米文学特殊講義	12/7	78	文学
		西洋倫理学演習	12/4	910	哲学
		日本文学概論	12/4	56	文学
21	文学	日本文学史IV	12/7	56	文学
22	言語学	歴史言語学特殊講義	12/3	910	言語学
23	言語学	英語学卒業研究	12/5	1234	言語学
24	言語学	言語類型論特殊講義	12/6	34	言語学
		日本語学講読	12/6	12	言語学
		フランス語学特殊講義	12/4	56	言語学
		歴史言語学特殊講義	12/3	910	言語学
25	言語学	中国語学特殊講義	12/6	78	言語学
26	言語学	言語類型論特殊講義	12/6	34	言語学
		フランス語学特殊講義	12/4	56	言語学
27	言語学	英語学卒業研究	12/5	1234	言語学
28	言語学	英語学卒業研究	12/5	1234	言語学
		中国語学概説IV	12/4	56	言語学
		日本語史	12/5	56	言語学
29	言語学	日本語学特殊講義	12/6	34	言語学
30	言語学	ヨーロッパ言語概説	12/7	34	言語学

【図表 4】平成 24 年度人文学部ピアレビューウイーク参加結果 コース別内訳

参観者所属コース	授業参観者延べ人数	授業参観者実人数
哲学	7 名	7 名
社会学	5 名	5 名
歴史学	2 名	2 名
文学	19 名	7 名
言語学	16 名	9 名

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 大学教育機構との共催による研修会

(1) 教育改善FD研修会（学生ポートフォリオ意見交換会）

1) 概要

日時：平成24年9月14日（金） 14:30～15:00

場所：人文理学部大会議室

講師：糸永雅弘（大学教育センター長）・小川勤（大学教育センター）・平尾元彦（学生支援センター）

司会：尾崎千佳（人文学部FD部会座長）

参加者：人文学部・東アジア研究科所属教員39名

2) 内容

本研修会は、学生ポートフォリオに関する意見交換を主旨として開催し、大学教育センター・学生支援センターから示される人文学部学生ポートフォリオ実施計画への意見・質問に対して、主として人文学部学生委員が回答するかたちで進行した。質問ならびに回答は以下のとおりであった。

質問1：人文学部学生ポートフォリオ実施計画には、平成25年度以降、1年生助言指導教員が学生ポートフォリオを担当すると書かれているが、この教員の役割や仕事内容、配置人数ならびに1年生助言指導教員ひとり当たりの担当学生数は具体的にどのようなものか。

回答1：1年生助言指導教員とは、基礎セミナー1の授業を担当する6名の教員であり、ひとり当たり約30名の学生を担当する。1年生助言指導教員の役割および仕事内容は、ポートフォリオの記入上の説明、学生から提出されたポートフォリオの内容の確認、就職相談室等の学内外機関の紹介や仲介等である。

質問2：人文学部学生ポートフォリオ実施計画には、面談を希望する学生のみを対象に面談を実施するとあるが、面談を希望学生のみに限定した理由は何か。

回答2：大学教育センター・学生支援センターより示された学生ポートフォリオ導入時の説明に、学生ポートフォリオは、修学やキャリアについて学生がみずからマネジメントすることを目的とするとあった。人文学部としては、その趣旨に沿った面談方法を講じた。

質問3：一般論的には、登校拒否や学習意欲低下といった問題を抱える学生こそ、面談を必要とする学生と考えられる。彼等はみずから面談を望まない可能性が高い。人文学部として、学生指導やキャリア指導上、問題が発生しないのか。



回答3：人文学部では、従来、学生委員や指導教員が問題を抱えた学生に対応してきたため、ポートフォリオにおける面談を利用した指導は特に考えていない。

以上の応答のあと、糸長大学教育センター長より、ポートフォリオシートのWeb化について説明があった。現状では来年度から導入される「新しい共通教育」に向けた教務システムの改修作業を優先せざるを得ないこと、ポートフォリオシートがWeb化される場合は、大学教育センター・学生支援センターが示すひな型に基づいたシート開発になることが説明された。

また、平尾学生支援センター教授より、人文学部ではすでに外部のキャリア指導員を招聘して学生の指導に当たっているが、今後は就職相談室等との連携を密にしつつ、キャリア指導をさらに発展させていきたい旨の発言があった。

アンケートには27名の回答があった。【図表5】のとおり、研修会に参加した感想は、良くも悪くもないという回答が最も多かった。自由記述欄には、あらかじめ質疑応答の内容が決まっており参加者にとって新味がなく、研修会として実施する意味を問う意見が多く寄せられた。

今後、大学教育機構との共催による研修会をより効果的で意義のあるものとするためには、テーマや進行のあり方について検討する必要があると思われる。

【図表5】平成24年度教育改善研修会に参加した感想（アンケート回答）

設問：研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	員数（人）	割合（％）
非常に良かった	1	3.7
良かった	7	25.9
どちらとも言えない	12	44.4
あまり良くなかった	6	22.2
良くなかった	1	3.7
無回答	0	0.0
合計	27	100.0

2. 人文学部FD部会主催による研修会

（1）三重大学におけるPBL教育の取り組み

1) 概要

日時：平成24年12月12日（水） 14:30～16:00

場所：人文学部大会議室

講師：中山留美子（三重大学高等教育創造開発センター）

司会：尾崎千佳（人文学部FD部会座長）

参加者：人文学部・東アジア研究科所属教員30名

2) 研修会の趣旨

国内外の大学で問題発見解決型授業=PBL授業の導入が進められるなか、山口大学にお

いても、平成 25 年度開始の「新しい共通教育」に PBL を導入する授業科目が含まれることとなった。医学部医学科では早く 2002 年度より PBL 型授業を導入しているというが、人文系科目に PBL を導入する場合、どのような工夫が求められるのか、初歩から学ぶこととし、FD 活動経費の一部を使用して【図表 6】に一覧するテキストを購入した。

【図表 6】 PBL 型授業テキスト一覧

タイトル	編著者	出版社	出版年
PBL (Problem-based Learning) : 判断能力を高める主体的学習	ドナルド・R・ウッズ 新山幸恵訳	医学書院	2001 年
実践 PBL チュートリアルガイド	吉田一郎他	南山堂	2004 年
法則探検に出かけよう	法則研究プラザ	三重大学出版会	2007 年
国語教育と PBL : コミュニケーション能力育成のために	望月謙二	星雲社	2008 年
大学教員のための授業方法とデザイン	佐藤浩章	玉川大学出版部	2010 年
PBL スタイル 情報リテラシーテキスト	前野博他	同友館	2011 年
三重大学版 Problem-based Learning の手引き—多様な PBL 授業の展開	三重大学高等教育創造開発センター	三重大学高等教育創造開発センター	2011 年

これらのテキストを参観することによって、PBL 型授業がきわめて多岐にわたること、大学によって授業の実態は区々であることが推し量られた。そこで、人文学部 FD 部会では、PBL 教育に先進的に取り組み、豊富な実績を有する国立大学法人三重大学高等教育創造開発センターより講師を招き、その事例に学ぶこととした。

3) 内容

三重大学高等教育創造開発センター中山留美子氏による講話「三重大学における PBL 教育の取り組み—「アクティブラーナー」を聞いた。

三重大学では、平成 16 年度に「e-learning を駆使した PBL チュートリアル教育の全学的展開」を概算要求（特別教育研究経費）して以来、全学の教育方法改善の核として PBL 教育を位置づけ、高等教育創造開発センター（HEDC）を設置し、組織的に PBL 教育を推進しているという。

PBL 教育が能動的学習者（アクティブラーナー）を育成するための有効な方法のひとつであることについて、記憶のモデル理論等を使いつつ説明された。また、PBL 授業を設計するに当たっては学生の現状をよく把握し、具体的で精緻な教育到達目標の設定が重要であると述べられ、PBL 授業の進め方（①問題・課題発見→②自己学習→③グループ学習→④評価）について、事例に則した説明があった。また、ひとつの授業に PBL を導入するだけでは能動的学習者を育成することは不可能であり、組織と



しての授業設計が重要であること、個々の授業にあつてはPBLを多様かつ柔軟に導入すべきことが強調されたうえで、PBL教育を「学生の能動的学習を促進するため、学習が行われるプロセスに乗せて効果的に学習内容を配置していく教育方法」とまとめられた。

4) アンケート結果とそれに対する回答

参加者に実施したアンケートでは、「PBLは人文系科目には導入しにくいと思っていたが、それと自覚しないまま従来の授業のなかで実施していた部分があったと気づかされた」という趣旨の意見が多く寄せられるいっぽう、より豊富な授業事例紹介を望む声もあった。研修会終了後、アンケート結果をとりまとめて講師に送信したところ、「授業通信・山大FD（2012.12.12）特別号」というかたちでアンケート結果に対する回答を戴き、さらに5件の事例を掲載した「三重大学PBL授業事例集」も作成して戴いた。それぞれメールで人文学部全教員にメールで配信し、各人の参考に供した。

「授業通信・山大FD（2012.12.12）特別号」の一部を紹介しておきたい。すでにPBLの要素が授業の中に含まれている、との意見に対しては、三重大学では現在500以上もの授業科目でPBL型授業が実施されているが、導入当初は、既存の授業のなかからPBL的要素を発見するというFD活動から取り組みを始めた。その積み重ねで今日に至っており、すでに行っている実践を見つめ直し、発展させていく視点こそ重要との回答が示された。昔ながらの「自主的に予習をして授業に臨む」という方法との違いを問う質問に対しては、教員が予習内容や範囲をあらかじめ定める従来の「予習」とは異なり、PBLではすでに提示されている問題を理解・解決するために必要な学習内容をみずから考え学習を進めること、学生の能動性を高めるための工夫としてグループ学習とふりかえりの段階が設定されていることが説明された。さらに、卒業論文や卒業論文がある以上、学生を能動的学習者として結実させるという発想そのものは新しいものではないが、従来、学生は必ずしも能動的学習者となることを意識して個々の学びに取り組んでいたわけではない。全教員が4年間の学士課程教育全体を見つめたうえで個々の授業科目の意義を明確化し、学生に伝えていくことが重要であるとの見解も示された。

研修会そのものも充実したものであったが、講師の厚意と熱意によって、研修会後に充実したフィードバック・フォローアップができ、PBLに対する教員の理解はいつそう深まったと思われる。

第3節 教育改善に関する活動

1. 基礎セミナー1の改善に関する活動

(1) 合同授業の実施

1) 経緯と趣旨

1年次前期の全人文学部生を対象として開講する基礎セミナー1は、4年間の学士課程教育の端緒として学生にとってはきわめて重要な授業でありながら、専門とは異なる内容の授

業を展開しなければならないことから、教員にとっては少なからぬ負担となってきた。また、当該授業は、当初、日本語論述力の養成を主たる目標として開設されたものであったが、平成 19 年度以降、情報処理担当教員も授業担当に加わった結果、情報処理技術の基礎修得を授業内容に含めることも行われるようになった。さらに、近年は志望コースアンケートやポートフォリオの記入も基礎セミナー 1 で実施することが求められるようになるなど、授業の目標・内容が拡散の傾向を強めるなか、担当者間でおおよそのすり合わせをはかる程度の統一は試みられてきたものの、授業内容・評価基準とも授業担当者の裁量に委ねられているのが実情であり、授業アンケートにおいて授業内容・評価基準の不統一に対する学生の不満の声は大きかった。

以上の経緯をふまえ、人文学部 F D 部会では、平成 23 年度に「基礎セミナー 1 の授業改善に向けて」と題する F D 研修会を実施した。さらに、シラバス入力に先立つ平成 23 年 12 月 21 日、平成 24 年度の基礎セミナー 1 担当者と F D 部員で会合を持ち、授業の概要・目標・計画のすりあわせを行った。

2) 授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせ

会合では、上記の経緯と課題について F D 部員より基礎セミナー 1 担当者に説明したうえで、F D 部員より【図表 7】のような授業概要案・一般目標案・到達目標案を提示した。

【図表 7】人文学部基礎セミナー 1 授業概要案・一般目標案・到達目標案

授業概要案	人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生活に馴染み、大学を勉学の場として活用していけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。
一般目標案	1：学生が、自らの大学生活の目的について、明確な意識をもつことができる。 2：学生が、大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。 3：学生が、図書館やインターネットの利用方法に習熟し、自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。 4：学生が、日本語論述にかかわる基礎的知識・技術を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。
到達目標案	知識・理解の観点：学生が、自らの人生の展望をもち、その中での大学生活の位置づけを理解している。 思考・判断の観点：学生が、自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。 関心・意欲の観点：学生が、人文学全般に広く関心をもつとともに、とくに自身の資質に適い、自らが深く関心をもてる分野に気づいている。 態度の観点：学生が、大学生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。 技能・表現の観点：学生が、大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

担当者は、上記の目標に沿った内容で各自授業を設計することとしたが、授業内容の不統

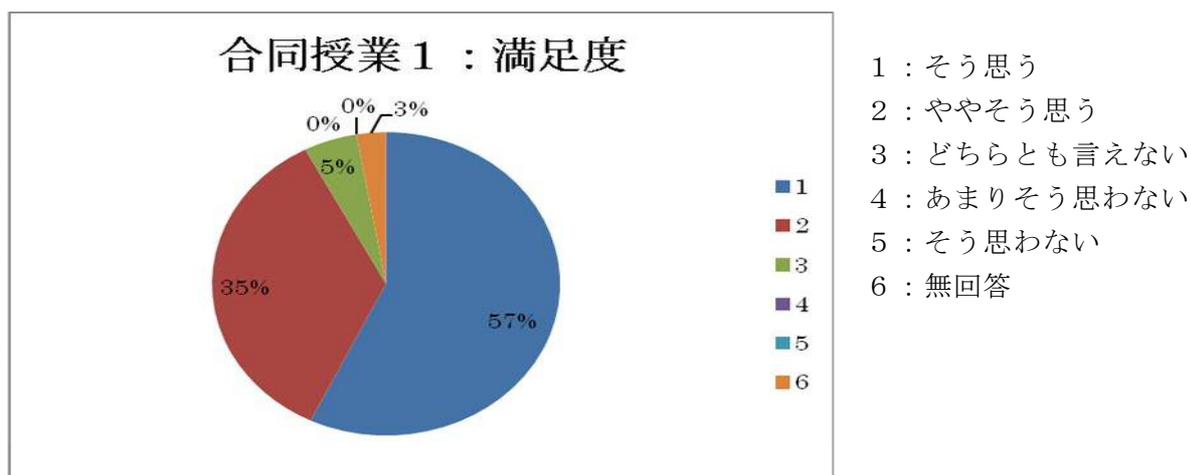
一に対する学生の不満を緩和するため、6クラス合同で実施する授業を2回設定することとした。具体的には、授業6週目に合同授業（1）として人文学部生のための留学案内を、13週目に合同授業（2）としてキャリア教育を実施することとした。

3）合同授業（1）留学案内

合同授業（1）は、平成24年5月25日、人文学部大講義室で実施した。授業の内容は、人文学部国際交流部会座長による留学制度の説明と、人文学部4年生による留学体験談であった。出欠確認をかねて受講者にとったアンケートによれば、特に留学体験談はすこぶる好評で、「このような内容を聞く機会はなかなかないので知ることができてよかった」「お金がかかる分、得られるものも多く、プラスになることも沢山あるのだということが分かった」「実際の留学に何が必要でどういった目的で行くのかなど、今まであいまいだった留学について少し身近なものになったと思う」等の感想が寄せられ、受講生が留学への意欲・関心を高めるきっかけになったことがうかがわれた。合同授業（1）の満足度を【図表8】に示す。

【図表8】平成24年度人文学部基礎セミナー合同授業（1） 満足度

設問：本日の授業は、あなたにとって満足のものでしたか。

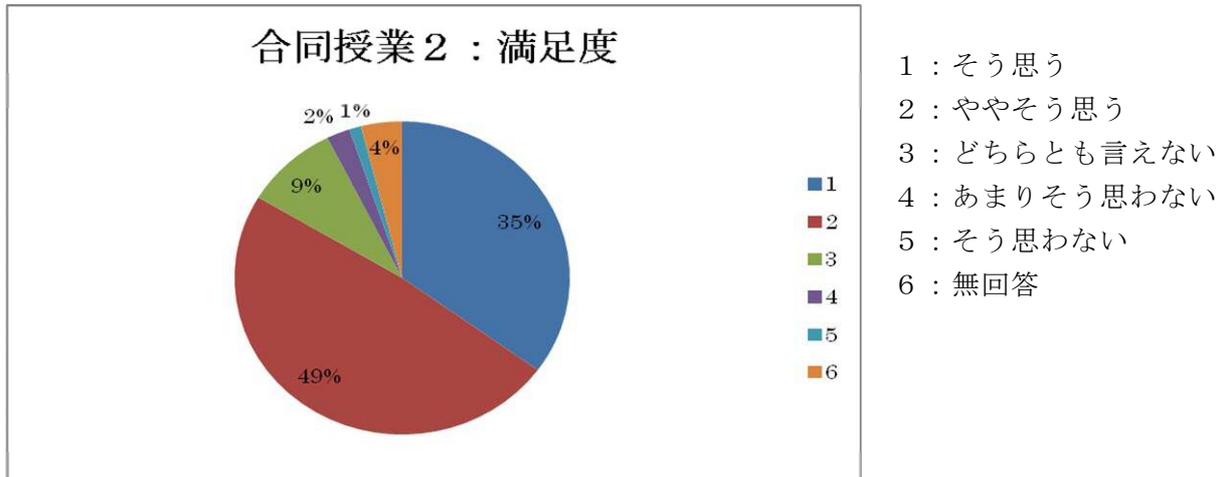


4）合同授業（2）キャリア教育

合同授業（2）は、平成24年7月6日、人文学部大講義室で実施した。授業の内容は、学生支援センター平尾元彦教授による人文学部1年生のためのキャリアに関する講話と、基礎セミナー1を担当する6名の人文学部教員による座談会であった。座談会はFD部会座長の司会で、「私の大学時代」をテーマに、学生時代の出来事や思い出を6名の教員がコメントする形式で行った。学生時代の体験や出会いの重要性に気づかせ、広い意味でのキャリア教育に資することをねらった企画であったが、出欠確認をかねて受講生にとったアンケートによれば、「日頃の授業では聞けないような先生方の大学時代の話を知るととても新鮮な感じでした。大学生活での経験や出会いが貴重なものになると思うので、いろいろなことに一生懸命に取り組んでいきたいです」「就職したいなら1年生のうちから動け！みたいな話をされるんだろうなと思っていたので、いい意味で期待を裏切られました」等の好意的感想が寄せられた。合同授業（2）の満足度を【図表9】に示す。

【図表 9】平成 24 年度人文学部基礎セミナー合同授業（2） 満足度

設問：本日の授業は、あなたにとって満足のものでしたか。



（2）合同授業に対する反応

学生アンケートの結果によれば、合同授業の実施はおおむね好評であり、「人文学部全体で授業を受けるという機会があまりなかったので、とても新鮮な気持ちだった」等の意見が多かった。「担当教員によって授業の厳しさが違いすぎて不平等だと思った」「担当教員によってやる内容がかなり異なりますが、自分たちが教員をえらぶことはできないのでしょうか」等の批判的意見が依然として寄せられるいっぽうで、「基礎セミナーは担当の先生のクラスによって大きく授業が異なっているので、今回のように合同でやる授業はとても良いと思う」といった意見や、「自分の学科と違う先生に教えていただく機会となり、世界に対して、より広いアンテナを広げる助けになるよい授業だと思います」等の意見も見られ、合同授業の実施によって、授業内容不統一に対する不満を緩和しようとする当初のねらいはおおむね達成されたと思われる。「大勢で授業をすると、普段の少人数の授業よりも雰囲気引きしまっているように感じたが、個々への対応は少人数の方がやりやすいのでどちらか片方にかたよらずに実施するなら合同授業も織り交ぜていくべきだと思う」という意見もあった。

いっぽう、授業担当教員 6 名にも、前期授業終了後に合同授業の内容・方法等についてアンケートを実施したところ、合同授業（1）の留学案内については、留学を身近に感じる機会として有意義であったとの意見が多かった。合同授業（2）のキャリア教育については、キャリアを「就職」だけでとらえることに対する是非や、座談会の効果等に対する疑義が多く寄せられた。合同授業の実施は授業担当者にもおおむね好評ではあったが、授業内容不統一への不満は、教科書の統一レベルまで踏みこまなければ解消されないとの意見もあった。

（3）基礎セミナー部会の発足

以上の結果について、FD 部会座長より、平成 24 年 10 月の人文学部教務学生部会ならびに拡大教授会において報告を行った。平成 25 年度からの「新しい共通教育」においても基礎セミナーは共通教育の枠組みで半期 2 単位分開講される。授業内容不統一に対する学生のおおむね不満や授業担当者の負担を緩和する方法として、平成 24 年度の取り組みを踏襲し、基礎セ

ミナーに2回程度の合同授業を設けることを提案し、了承された。あわせて、当該年度の授業担当者・FD部会・教務委員・学生委員から成る基礎セミナー部会を新たに立ちあげ、国際交流部会・就職支援部会の協力を仰ぎつつ、基礎セミナーの運営に当たることを提案し、了承された。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 平成24年度の状況

1) 学生授業評価

平成24年度の学生授業評価は、集中講義・卒業研究・平成18年度以前入学者対象の旧カリキュラム授業以外の、人文学部の全ての授業357科目で実施する予定であったが、実際に学生授業評価を実施したのは313科目で、実施率は87.7%であった。

アンケートを実施した全授業における評価の平均値は【図表10】のとおりである。

【図表10】平成24年度学生授業評価 全体平均

授業外学習時間	2.38
学習目標の達成	3.84
理解度	3.92
満足度	4.30
出席率	4.49

学習目標の達成・理解度・満足度・出席率ともおしなべて高いポイントを示していることは評価できる。いっぽう、授業外学習時間の向上は今後の課題である。

2) 教員授業自己評価

平成24年度の教員授業自己評価は、学生授業評価と同じく、集中講義・卒業研究・平成18年度以前入学者対象の旧カリキュラム授業以外の、人文学部の全ての授業357科目で実施する予定であったが、実際に入力されたのは173科目で、履修登録のなかった授業を除外しても、入力率は48.6%であった。入力率が50%を下回っており、その向上に向けた何らかの対策が必要であろう。但し、入力率の低さの原因には、非常勤講師にIYOCAN2への入力を依頼して来なかったという事情も関係していると思われる。通常の学期に開講する非常勤講師の授業は教員自己評価の対象に含めているにもかかわらず、従来、非常勤講師には、IYOCAN2にアクセスするためのID・パスワードを通達して来なかった。その理由は、学期の最後の授業の終了から教員授業自己評価が入力できるようになるまで数ヶ月程度の間があり、学期や年度をまたいでの入力依頼は非常勤講師にはし難かったからである。

アンケートを実施した全授業における評価の平均値は【図表11】のとおりである。

【図表 11】平成 24 年度教員授業自己評価 全体平均

学習目標の達成	4.26
理解度	4.22
満足度	4.06

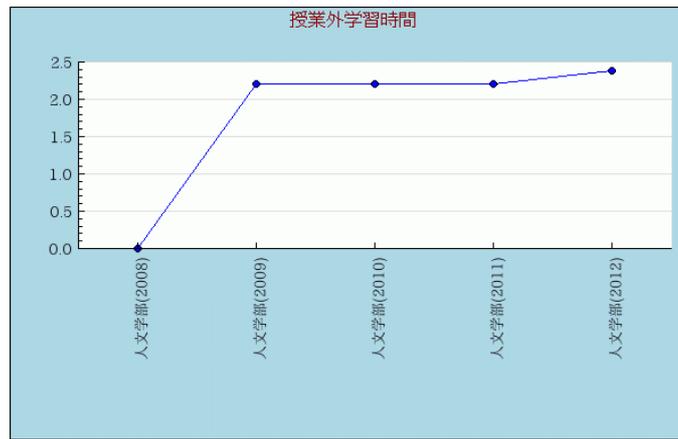
【図表 10】と【図表 11】を比較すると、学習目標の達成・理解度について、学生の感想より教員の自己評価が若干高い数値を示しており、学生と教員の認識にやや隔たりがあるようにも思われる。

(2) 経年変化

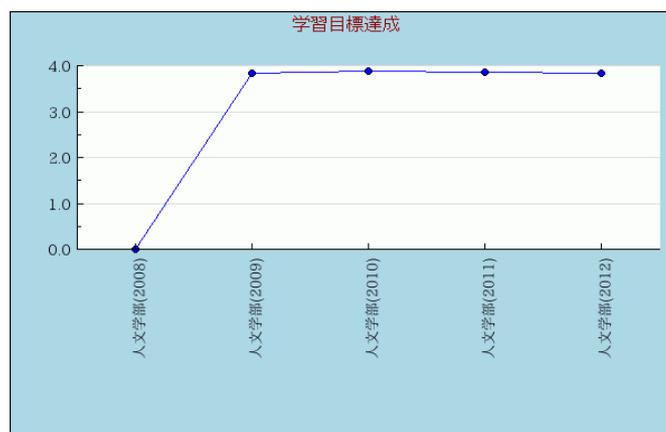
1) 学生授業評価

授業外学習時間・学習目標の達成・理解度・満足度・出席率について、平成 21 年度（2009）から 24 年度（2012）にかかる経年変化を【図表 12】から【図表 16】に示す。

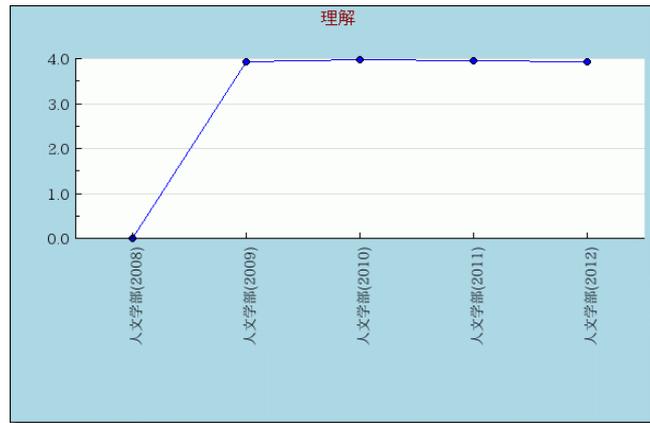
【図表 12】授業外学習時間 経年変化



【図表 13】学習目標の達成 経年変化



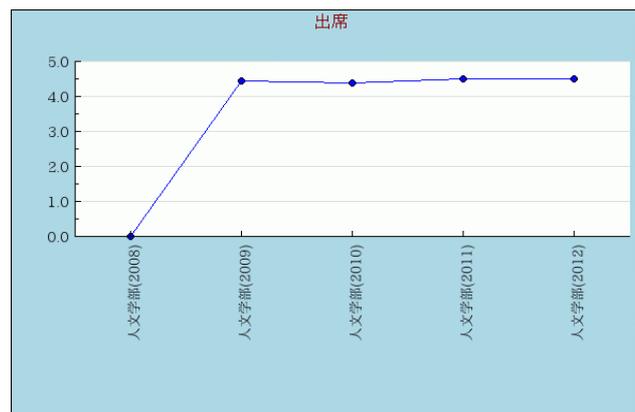
【図表 14】理解度 経年変化



【図表 15】満足度 経年変化



【図表 16】出席率 経年変化



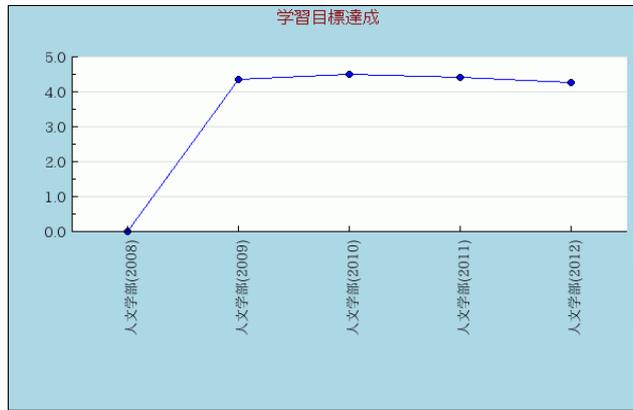
授業外学習時間・学習目標の達成・理解度・満足度・出席率ともほぼ横ばいで推移しており、有意な変化は認められない。

2) 教員授業自己評価

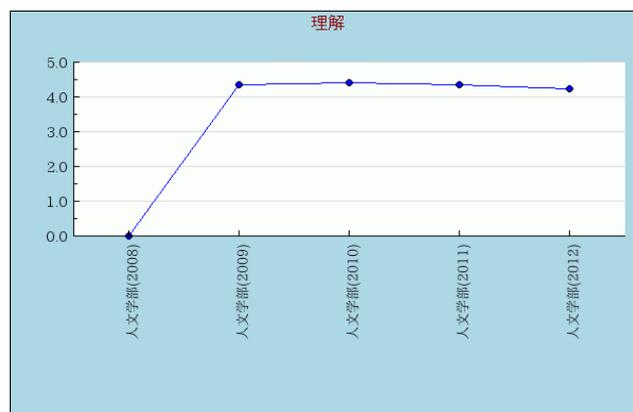
学習目標の達成・理解度・満足度について、平成 21 年度 (2009) から 24 年度 (2012)

にかかる経年変化を【図表 17】から【図表 19】に示す。

【図表 17】 学習目標の達成 経年変化



【図表 18】 理解度 経年変化



【図表 19】 満足度 経年変化



学習目標の達成・理解度・満足度ともわずかにポイントを下げの傾向にはあるが、ほぼ横ばいで推移しており、有意な変化は認められない。

(3) 今後の課題

授業外学習時間の向上が今後の課題としてあげられるが、人文学系学問分野においては、学生の学習の深まりは必ずしも時間という尺度のみで測れるとは言えない。例えば、卒業論文のテーマについて考えをめぐらせたり、先輩や友人と意見交換したりするような「学習時間」として意識されにくい部分にも、重要な学びは潜んでいるだろう。人文学部が学生の「満足」する授業を提供し続けている点は評価できるが、単なる「満足」に終わらせず、学生の能動的学習を喚起する授業をこそ目指すべきであるとも考えられる。能動的学習者を育てるという視点を、新コースのカリキュラム編成に反映することが重要である。

教員授業自己評価の入力率向上については、何らかの組織的取り組みが必要である。非常勤講師にも教員授業自己評価の入力を求めるか否か。入力を求める場合は事務手続き上の問題点等についてFD部会で問題を精査し、学部全体でこれを共有することが、学部所属教員の入力率向上にも繋がると考えられる。また、入力を形式的に義務化するだけでなく、それが個々の授業の活性化や進化にとってどのように意味のあることなのか、教員自己評価の持つ意味について改めて考えることも必要であろう。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
人文学部	PBL教育研修会	テキスト購入 7冊	15	PBL型授業の事例や実態について情報を得た。
	PBL教育研修会	講師旅費・謝金 1名	60	三重大学における事例をもとにPBL教育の理論や方法を学んだ。
	ピアレビューウィーク	資料印刷費	10	ピアレビュー参加シート等を作成しピアレビューに組織的に取り組んだ。
	基礎セミナー1の授業改善	資料印刷費	15	基礎セミナー1でアンケートを実施し授業改善の参考とした。
計			100	

第6節 来年度の課題

(1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

第4節(3)を参照のこと。

(2) カリキュラム構築に資する研修会の開催・ピアレビューの実施

人文学部では平成27年度から新コース体制を発足させることを予定しており、現在、それに向けた準備や議論が進められているところである。従来以上に充実した教育を実現するため、個々の授業技術の開発ではなく、組織としてのカリキュラム構築に資する研修会の開催ならびにピアレビューの実施は喫緊の課題と言える。

第5章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

平成24年度の授業公開では、講義形式の授業に加えて、英語による授業やゼミ形式のもの、実験・模擬授業を取り入れたものなど、多様な形態のものを実施することができた。公開授業は以下の通りであった。

1) 数学教育教室 授業公開

担当教員：泉池耕平 講師
授業科目名：確率・統計学
日時：7月2日（月）3・4時限
場所：教育学部22番教室

2) 国際文化教室 授業公開

担当教員：ミホバ D.Y. 教授
授業科目名：地理学 I
日時：6月25日（月）7・8時限
場所：教育学部42番教室
内容：Culture and Political Patterns

3) 理科教育教室 授業公開

担当教員：栗田 克弘 准教授
授業科目名：理科実験指導法 I
日時：12月19日（水）3・4時限目
場所：教育学部A棟1F理系共同実験・実習室(A101)
内容：中学校理科の授業における実験や観察の意義について「理科実験から学んだこと」
(学生発表、協議)、模擬授業(中学校の物理分野)を実施。

4) 人間教育学教室 授業公開

担当教員：佐々木 司 教授
授業科目名：人間教育学研究法 II
日時：11月22日（木）1・2時限目（8時30分開始）
場所：教育学部C407
授業内容：学生が行った教育制度関連の研究とそのまとめについて指導。

授業公開の後、参観者に対して「授業観察カード」と名付けたアンケートを実施したところ、次のような指摘があった。すなわち、授業公開は15回の中の1回であるが、学習内容を積み重ねていく授業では、既修得内容を参観者が把握することが困難であり、参観した授業に対してどのようにコメントしてよいか判断が難しいという指摘であった。シラバスの内容を授業公開の案内時に紹介することや、当日にもシラバスの内容を配布するなど、参観者が既修得内容を把握できるよう工夫する必要がある。

なお、参考のため表1にこれまで教育学部で実施した授業公開を示す。

表1 平成24年度までに実施した授業公開一覧

年度	期	教室	担当教員名	授業科目名
平成16年度	後期	技術教育	岡村 吉永	製図
平成17年度	前期	幼児教育	荘司 泰弘	保育内容環境

	後期	家政教育	友定 啓子	児童学
平成 23 年度	前期	国語教育	村上 林造	国文学講読 III
		スポーツ健康科学	丹 信介	健康運動処方論
	後期	社会科教育	南浦 涼介	教科教育法社会
		表現情報処理	葛 崎偉	グラフ・ネットワーク論
平成 24 年度	前期	数学教育	泉池 耕平	確率・統計学
		国際文化	ミホバ D. Y.	地理学 I
	後期	理科教育	栗田 克弘	理科実験指導法 I
		人間教育学	佐々木 司	人間教育学研究法 II

第 2 節 学部主催 F D 研修会

1. 教育改善 FD 研修会

日 時: 平成 24 年 9 月 19 日(水) 16:00~16:30

場 所: 教育学部 21 番教室

講 師 糸長雅弘(大学教育センター長)、吉村誠(学生支援センター長)

参加者: 58 名 (アンケート回収 56 名)

(1) 概要

教育学部の拡大教授会の後に全教員を対象に、ポートフォリオの目的・意義について説明をした後、教育学部における学生ポートフォリオの形式や実施体制についての質疑応答・意見交換を行った。

(2) 内容

本研修会では、教育学部における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に、学生支援センター長の吉村教授から学生ポートフォリオの内容・意義について、「教育学部では、既に教員を目指す学生向けに履修カルテを導入しているが、学生ポートフォリオは企業就職を目指す学生向けのキャリア教育の一環として導入する必要があると考えている」、「履修カルテは詳細な項目を含んでいるが、学生ポートフォリオはできるだけ簡素化する方向で考えている」と説明があった。

次に、大学教育センター長の糸長教授より、教育学部の学生ポートフォリオの実施について、新しい共通教育ではポートフォリオを活用したキャリア教育に関する授業が実施される予定であるとの説明があり、さらに、ポートフォリオの実施時期や学部として履修カルテと学生ポートフォリオの兼ね合い(特に、非養成の学生が免許取得を途中であきらめた場合の学生ポートフォリオへの接続・移行)をどのように考えているのかといった趣旨の質問があった。

これに対して、今年度は 1 年生を対象に 10 月以降に教職オリエンテーションに併せて実施する計画であること、2 年次以降は 5 月末に実施する計画であること、学生ポートフォリオは教職カルテと平行して実施する計画であるが実施体制の詳細については未定であること、などの返答があった。これについて、糸長センター長より、共通教育のキャリア教育授業をぜひ利用していただきたい、また、電子化も早急に実施したいが目処が立っていないとのコメントがあった。

また、全体の質疑応答として、ポートフォリオの実施体制や保管体制、ポートフォリオのフォーマットに関して幾つかの質問があった。質問内容から、ポートフォリオの必要性については一応の共通認識が形成されているものの、教員免許取得者を対象とした履修カルテとの関係性(履修カルテと学生ポートフォリオを両方実施するのか否か)、ポートフォリオの運営並びに実施体制、ポートフォリオの形式などの詳細な部分については、今後、さらに検討が必要であると思われる。

研修会実施後のアンケート結果は表 1 のとおりである。



図1 研修会の様子（その1）



図2 研修会の様子（その2）

表2 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	3.6%
良かった	21	37.5%
どちらとも言えない	24	42.9%
あまり良くなかった	4	7.1%
良くなかった	5	8.9%
無回答	0	0.0%
合計	56	100.0%

2. 学生支援に関する教育学部主催 FD 研修会

日時：平成 25 年 3 月 25 日（月）12 時 30 分～14 時 30 分

場所：教育学部 21 番教室

参加者数：30 名

研修会のスケジュール：

趣旨説明・山口大学教育学部の現状：12 時 30 分～12 時 50 分（20 分間）

講演：12 時 50 分～14 時 00 分（70 分間）

全体議論：14 時 00 分～14 時 30 分（30 分間）

本研修会のプログラムは 3 部からなり、それぞれの概要は次の通りであった。

(1) 趣旨説明・教育学部の現状紹介

山口大学全体の状況とも一致するが、教育学部においても不調となる学生がここ 10 年間で目立つようになってきた。これらの学生を早期に見つけ、適切に支援していく必要がある。平成 16 年度から学務厚生部による不調学生に対するアンケート調査が実施され、そのデータが蓄積・分析されてきた。FD 活動としては、どのように不調となっていくか、そうなった学生をどのように見つけ、支援

していけばよいかという観点から、FD 研修会を企画してきた。3 年前より学内外の学生支援・学生相談の専門家の先生方を講師として迎え、学生支援の変遷、最近の学生の状況、カウンセラーからみた学生の心理的課題、〈こころ〉を育てる学生支援とは、といったテーマ・キーワードで FD 研修会を実施してきた。

以上の経緯から、本年度は、実際に教職員がどのように学生に対応すればよいか、特に実践的な部分も含めて考える FD 研修会を企画した。

(2) 講演

講師：九州大学健康科学センター・福盛英明先生

題目：「こころが不調になった学生の理解と接し方—メンタルヘルスの基礎知識—」

メンタルヘルスの問題がクローズアップされており、大学だけでなく、一般の社会・企業においても、その対策が求められている。大学については、全国の学生相談の現状について日本学生支援機構による調査（2006年6月30日）がある。それによると、ほとんどの大学で学生からの相談件数が横ばい又は増加傾向にあり、保護者や教職員からの相談も増加していると報告されている。相談内容としては、非常に多岐に渡り、対人関係の問題が最も多い傾向がある。

九州大学健康科学センターでは、「学生生活チェックカタログ」と名付けた大学生の生活の質を把握する質問票を独自に開発し、2001年より経年的に大規模調査を行った。その結果は、一部の質問項目についてはネガティブな傾向が見られるものの、全体的に悪いわけでもなく横ばいか、あるいは、見方によっては良くなっているとも読み取れるものもあり、大学生全体の **Quality of Student Life** が急激に悪化しているエビデンスは認められなかった。統計としては現れないが、調査した感触としては二極化・多極化の傾向、すなわち、充実した大学生活を送る学生と悩みを抱える学生の差が大きくなっていると感じている。従って、充実した学生生活を送る学生・普通の学生をさらに伸ばす学生支援が求められると同時に、悩みを抱える学生を如何にして支援していくかということも重要になっている。現代の大学には多様な学生が入学していること、学生をケアし社会に送り出すことが大学の責任と位置づけられている状況もある。しかし、学生は受け身になってきており、受け身の学生支援だけでなく、積極的でなおかつ非侵襲的な支援が求められる（押しの強い支援は逆効果であるので注意が必要）。別の研究者の調査でも、学生は授業・ゼミを重点に考えており、宿題が出されるほど授業満足度が高い、教員が学生と授業外でコミュニケーションをとってくれることを期待しているという結果も報告されており、受け身の学生の様子が浮かび上がってくる。また他の調査では、時代によって若者意識に変化があり、今の若者は、場の空気を読むことに長けており、FEV 基準（早く効率的で目に見える結果を求める）に従って考え・行動し、長期的視野が希薄である、と言われている。その一方で、現代の若者は、自己へのこだわりがあるが、そのこだわりを貫く自信がない、人間関係に対する警戒心・不安感、自己決定・自己責任的世界を回避する傾向があるとも言われている。そのような若者が、自立することを求められると、不安感が募り、自己決定を回避するためにひきこもりとなってしまうことも少なくない。自分の中の葛藤を受け止めて処理していくことが必要ではあるが、葛藤せずにすぐに回避してしまうことは問題である。

「心の健康づくり」には、4つのケア：セルフケア・ラインによるケア・大学内資源によるケア・大学外資源によるケアと、健康な状態（ウェルネス）の学生がさら充実した学生生活を送るためのアクティブ・ライフ・プランがある。ケアとしては、まず各自でセルフケアをし、深刻な状態にならないようにすることが重要である。より困った状態になった場合には、セルフケアではなく、大学内・大学外の専門家に相談するなど、早めにケアすることが重要である。

人間はストレスを受けると緊張・歪の状態となる。適度なストレスはパフォーマンスを上げるが、過剰なストレス、逆にストレスが少ない状態は良くない。しかし、どの程度のストレスが適当かは個人差があり、教員は学生を日ごろからよく観察しておく必要がある。大学生生活における学生の不調のサインとしていくつかあるので、それを見逃さないこと、日ごろから学生との信頼関係を気づいてお

くことが重要である。特に優秀な教員は、無自覚のうちに自分のペースを学生に押し付けてしまうことがあり、後々問題となることがある。人間には、外からの見せかけの状態と内面の本当の状態にギャップがあり、タフな人ほど、そのギャップに耐えられる（我慢強い）。ストレスに対して平気そうに見えても、内面では強く我慢を強いられていることもあり、その期間が長くなると、耐え切れず突然不調となることがある。人は互いに内面を気遣う必要があるが、各自は自分の状態に正直に対処するセルフケアが必要である。自分にしかわからないことも多いので、セルフケアとして適宜休息を取るなど心がける。

大学生・大学院生がうつ病になる典型的な例がある。そのプロセスは、前駆期・極期・回復期と分けられ、特に前駆期と回復期は良くなったり悪くなったりを繰り返す。うつ状態が進む段階としては、いらいらから始まり、不安感を感じる、ゆううつ・・・などといったステップをたどる。学生から悩みを打ち明けられたときは、よく話を聴き、専門家（保健管理センターの医師や学生相談所のカウンセラー）と連携する。また、重大な決断や衝動は先送りにする。治療としては、休息をとり環境を整えることに加えて、薬物療法や精神療法などがある。セルフケアだけで、メンタルの健康を取り戻す場合もあるが、非常に長い時間：数年が必要となる。（いくつかの架空の事例を基に、対処の仕方を説明。）

学生を援助するための4つの要素として、「気づく」、「声かけ」、「聴く」、「つなぐ」がある。最後の「つなぐ」は、学内外の援助リソースを持っている人と連携することを指す。具体的に、教職員が個人としてどのように援助すればよいかについては、1) 訴えには話をよく聞く、2) 緊急度の判定を行い（難しいが）相談機関とつなぐ（しばらくつながっておく）、3) 保護者に連絡する、4) 緊急時には一人で抱え込まず連絡体制を日ごろから整備しておく、5) メモ（指導記録）をつくっておく、などが挙げられる。また、やっちはいけないこと、かけない方がよい言葉などを箇条書きで具体的に示しておく。他の相談機関・医療機関を紹介する場合、しばらく、状況を確認しながら学生・保護者・機関とつながっておく、フォローアップが大切である。援助の隙間で、重大な問題が起こることも多い。なお、保護者からの訴えが早期発見につながることもあり、共感的に受け止めることが大切である。その場合も、メモ・記録を取るなどして、情報を収集・検証することが必要である。

最後に、学生相談所は学生一人では行きにくい場合、信頼のおける人（教員・職員・家族）と一緒にってもらうことも大切である。そのためには、教員は普段から学生と信頼関係を築いておくことが大切である。

(3) 全体議論

講演の後、参加者からの質問に講師が答える形で議論を行った。議論の概要は次の通りであった。

1) ウェルネスを高める取り組みについては、どのようなものがあるか？

筑波大学の例（T・ACT：学生支援 GP）で、システムとして、学生のやりたいことをバックアップしウェルネスを高める試みがある。また、個別対応としては、自信がない学生が増えており、日頃から小さく褒めることによって自信を付けさせるようにするとよい。但し、褒め方が重要であり、学生自身ががんばっていると思っていることを、褒めることが重要である。特に悩みを抱えていない一般の学生を勇気づけ、さらに充実した学生生活となるようにすることは比較的容易であり、メンタルヘルスにおける予防という点からも重要である。

2) 薬物療法について、精神科医との連携はうまくいっているのか？

九州大学健康科学センターは医師・臨床心理士が同じ組織内におり、薬物療法については連携がとれており、十分うまくいっていると思う。ただ、薬物療法だけでうまくいく場合もあれば、逆にカウンセリングでうまくいく場合もあり、結果としてわからないことも多い。医師・カウンセラー・一般の教職員が、連携していくことが重要ではないか。（補足として、山口大学学生相談所カウンセラーより、山口大学の場合は、学生相談所と保健管理センターとが連携をとって対応していることの紹介があった。）

3) 学生相談所や医療機関を受診することを拒否する学生をどのように説得すればよいか？

まず、何のために学生相談所や医療機関に行くのか、それらの機関が何をするとどこか十分説明することが大切である。行く・行かないの水掛け論のようになってはいけない。十分話し合いをした上で、今は受診しないという結論になったとしても、それは教員と学生との間の信頼関係が強まったということでは意味あることなので、粘り強く受診に向けて働きかけることが大事である（もちろん自傷他害の恐れのある場合は緊急に対応する必要があるが）。

4) 不調学生とさぼっている学生を見分けるためにはどうしたらよいか？

見分けるのは難しい。実際にさぼっていたとしても、それが学生の学びたいことや目標と大学で学べることとのミスマッチによる意欲の問題という側面もあるかもしれないので、さぼっているからといって放っておいてよいわけではない。また学生相談では、例えば依存症のような、学生がコントロールできない心理的な課題があるような人には支援を提供する必要があるだろう。しかし、例えば個人的に芸術に一生懸命取り組んでいて、今は大学の勉強ではなくそれに熱中することを本人も家族も認めているというような学生の場合には、それはそれでよいのではないかと考えられる場合もある。いずれにしても線引きは難しいので、最初から「さぼっている」から強く指導しなければならないなどと決めつけず、よく話を聞いてみるのが大切である。

最後に、講演・全体議論に対して、学部長からの謝辞があった。

現代の大学では、学生をケアして、社会に送り出すことが求められている。昔のように学生の自主性に任せる、そして、学生もそれを望むという状況とは変わってきている。このような背景から、教育学部としてもこれまで3年間、学生支援をテーマにしてFD研修会を企画してきた。今回の講演では、具体的な学生支援の仕方について教えて頂き、非常に参考になり感謝したい。さらに、教育学部としては、もう一段進んで、児童・生徒の心のケアができる学校教員をどうやって養成していくかという課題に取り組んでいく必要がある。このことについて、今後、臨床心理学を専門とする教員とも一緒に考えていきたい。

(4) アンケート結果の概要

研修会の最後にアンケートを実施した。アンケートの質問項目と回答の概要は次のとおりであった。

質問1：講演内容についての感想（全体のコメント）をお願いいたします。

回答：

- (1) データと具体的な対応例が整理して紹介しており、非常にわかりやすかった。
- (2) 今回の内容は「大学生一般」に関するものであったが、教員養成のような目的学部で学ぶ学生に固有のメンタルヘルスの問題や、学校教員となった後のメンタルヘルスの話題を扱ってあげば、さらに教育学部のFD研修会としてふさわしいものになると思う。
- (3) 教職員と専門家（医師・カウンセラー）との連携：「つなぐ」の重要性、及び連携の際に気を付けることなどがよくわかった。
- (4) 普段から学生との信頼関係を気づいておくことが大切であること、そして、学生をよく観察して内面を気遣い、サインを見逃さないことが、よくわかった。

質問2. 今回のFD研修会の時間及び構成はいかがでしたか？また、お気づきの点などありましたらお願いいたします。

時間：ちょうどよい (17)・もう少し長い方がよい (1)・もう少し短い方がよい (2)

構成：適切であった (12)・改善すべき点がある (0)

(カッコ内の数は、回答件数を示す。)

気付き：

資料を多く準備していただいていたが、時間の関係で一部省略された部分もあった。さらに講演時間を長くとっていただいて、十分な説明を受けたかった。質問の時間は十分あって、よりわかりやすいものになった。

質問3. 今回の研修会の内容について、もっと聞きたかったことや、あまり興味が持てなかったことがありましたら、お願いいたします。

具体的な事例に対する解説・対応策などをもっと聞きたかった。特に、受診を拒否する学生への説得の事例や、大学・コースとのミスマッチで悩む学生への対応について、学びたいと感じた。

質問4. 次年度のFD研修会で取り上げて欲しいテーマなどありましたら、お願いします。

山口大学における不調学生の実態について、データ及び具体的な事例を紹介してほしい。また、今回省略された発達障害についても取り上げてほしい。その他に、学生支援とは別のテーマとなるが、教員養成大学のカリキュラム改革についても取り上げて欲しい。

質問5. その他、FD研修についてのご要望やお気づきの点などありましたら、お願いいたします。

学生支援について、3年間で計画的に研修会が企画されており、知識を積み重ねることができた。

第3節 教育改善に関する活動

特記事項なし。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

ここでは、平成25年4月17日にIYOCAN2システム上で確認した学生授業評価・教員授業自己評価の結果を示し考察する。

まず実施率については、表3及び表4のように、学生授業評価の実施率が87.3%、教員授業自己評価の実施率44.7%であった。学生授業評価を実施した科目の約半数が教員授業自己評価を実施している。最近4年間の傾向として(表5)、学生授業評価は8割を超えており、概ね実施されていると言えるが(特に平成23・24年度は87%)、教員授業自己評価の実施率は低下傾向にある。

学生授業評価の結果について、回収数と各質問項目(必須5項目)の授業区分ごと(講義、演習、実験・実習、その他、未指定)の評価値の経年変化を表6に示す。(評価値については、表6の後述の(参考)を参照のこと。一般に大きい値の方が望ましいと理解する。)その結果、Q5の学生の出席状況を問う質問に対しては、ほとんど変化が見られず4.6~4.7(授業に8~9割以上出席)で安定しているのに対して、Q1~Q4の質問項目については、平成24年度が望ましい結果となっている。すなわち、「Q1 授業外学習時間」は増加しており(特に講義科目において単調増加)、「Q2 学習目標達成」については、すべての授業区分で平成24年度が良い結果となり、「Q3 学生理解」及び「Q4 学生満足度」では平成24年度が4つの授業区分で良い結果となっている。また、授業区分の「講義」については、Q1~Q4の質問項目で全て平成24年度が好ましい結果となっている。

表6の結果を考察する。「Q1 授業外学習時間」については、平成24年度の講義科目で2.61となっており、30分~1時間程度と推測される。十分な授業外学習時間とは言えないが、年を経るごとに値が単調増加しており、その原因として、教員の授業外学習を促すような指導、あるいは、学生の意識の向上が考えられる。「演習」や「実験・実習」の科目については、従来より1時間~2時間程度あり、もう少しの授業外学習時間が望まれる。Q2~Q4の評価値は平成21年度に比較して「講義」、「その他」、「未指定」の授業区分で大きく増加(0.2~0.3程度増加)している。これは、約15,000件のア

アンケート回収数のうち、およそ 3,000 件～4,500 件のアンケートにおいて、評価値が 4 から 5 に上昇したことを示している。教育学部の学生数が約 1,000 人であるので、各学生が受講する科目のうち平均 3～4.5 科目で評価値が向上したことになる。4 年間で学生授業評価の結果は大きく向上していることから、特に講義科目の質的向上があったと推察する。

表 3 平成 24 年度（前期・後期を含む）の学生授業評価の実施状況

教育学部	全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)		
	登録数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
	765	608	765	608	79.5%	699	608	87.0%
履修登録者ありの科目(D)			B&C			B&D		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
718	607	84.5%	699	608	87.0%	718	607	84.5%
C&D			B&C&D			実施率最大		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率			
695	607	87.3%	695	607	87.3%	87.3%		

表 4 平成 24 年度（前期・後期を含む）の教員授業自己評価の実施状況

教育学部	全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)		
	登録数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
	765	312	765	312	40.8%	699	312	44.6%
履修登録者ありの科目(D)			B&C			B&D		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
718	311	43.3%	699	312	44.6%	718	311	43.3%
C&D			B&C&D			実施率最大		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率			
695	311	44.7%	695	311	44.7%	44.7%		

表 5 最近 4 年間における学生授業評価及び教員授業自己評価の実施率変化

	平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
学生授業評価実施率	84.1%	84.4%	87.0%	87.3%
教員授業自己評価実施率	51.3%	54.2%	48.7%	44.7%

表 6 アンケート結果の経年変化。太字・下線は過去 4 年間での最大値を示し、「最大」の列は、調査年度ごとの最大値の個数を記す。

学生授業評価回答数（アンケートシート回収枚数）							
調査年度	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計	最大
平成 21 年度	11,039	1,021	704	3,546	59	16,369	0
平成 22 年度	8,351	918	693	3,474	721	14,157	0
平成 23 年度	15,421	1,232	1,264	4,478	210	22,605	1
平成 24 年度	15,157	1,418	1,326	4,793	724	23,418	5
Q1 授業外学習時間							
調査年度	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計	最大
平成 21 年度	2.31	3.27	3.27	2.65	1.97	2.48	0
平成 22 年度	2.48	3.53	3.52	2.90	2.23	2.69	1
平成 23 年度	2.49	3.19	3.33	2.93	2.21	2.66	0
平成 24 年度	2.61	3.40	3.71	3.04	2.61	2.81	5

Q2 学習目標達成							
調査年度	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計	最大
平成 21 年度	3.86	4.08	4.23	3.93	3.87	3.91	0
平成 22 年度	4.06	4.27	4.13	4.14	4.33	4.11	0
平成 23 年度	4.04	4.25	4.27	4.13	4.21	4.08	0
平成 24 年度	<u>4.15</u>	<u>4.29</u>	<u>4.30</u>	<u>4.23</u>	<u>4.43</u>	<u>4.19</u>	<u>6</u>
Q3 学生理解							
調査年度	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計	最大
平成 21 年度	3.97	4.23	4.33	4.04	4.05	4.02	0
平成 22 年度	4.13	<u>4.39</u>	4.22	4.20	4.39	4.18	1
平成 23 年度	4.12	<u>4.39</u>	<u>4.39</u>	4.19	4.30	4.16	2
平成 24 年度	<u>4.22</u>	4.37	4.37	<u>4.28</u>	<u>4.52</u>	<u>4.26</u>	<u>4</u>
Q4 学生満足度							
調査年度	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計	最大
平成 21 年度	4.10	4.46	4.48	4.16	4.11	4.15	0
平成 22 年度	4.27	4.60	4.33	4.34	4.52	4.33	0
平成 23 年度	4.24	<u>4.61</u>	4.48	4.30	4.42	4.29	1
平成 24 年度	<u>4.34</u>	4.52	<u>4.50</u>	<u>4.41</u>	<u>4.67</u>	<u>4.39</u>	<u>5</u>
Q5 学生出席							
調査年度	講義	演習	実験・実習	その他	未指定	合計	最大
平成 21 年度	4.66	4.61	<u>4.79</u>	4.73	4.59	4.68	1
平成 22 年度	<u>4.70</u>	4.67	4.74	<u>4.74</u>	4.75	<u>4.71</u>	<u>3</u>
平成 23 年度	4.68	<u>4.69</u>	4.73	4.72	4.59	4.69	1
平成 24 年度	4.67	4.60	4.78	4.69	<u>4.78</u>	4.68	1
Q1～Q5 における平成 24 年度最大値個数	4	1	3	4	5	4	5

参考：教育学部学生授業評価における質問文（一部を抜粋）と回答選択肢。質問文の番号：Q1～Q5 は表 6 中の質問項目の番号に対応している。回答選択肢における各回答文後の括弧内に記された整数(5)～(1)が評価値を表し、アンケート回答の評価値を平均したものが、表 6 中の評価値となる。全ての質問項目は平成 22 年度 FD 報告書第 5 章第 4 節(P.113)に掲載している。

Q1. あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。 回答選択肢： 1. 3 時間程度または以上(5) 2. 2 時間程度(4) 3. 1 時間程度(3) 4. 30 分～50 分程度(2) 5. 30 分未満(1)
Q2. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 回答選択肢： 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1) 6. 答えられない
Q3. あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 回答選択肢： 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3) 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)

- Q4. この授業は、あなたにとって満足のものでしたか？
 回答選択肢： 1. そう思う(5) 2. ややそう思う(4) 3. どちらとも言えない(3)
 4. あまりそう思わない(2) 5. そう思わない(1)
- Q5. あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？
 回答選択肢： 1. 90%以上(5) 2. 80～90%(4) 3. 60～80%(3)
 4. 40～60%(2) 5. 40%未満(1)

第5節 FD 実施経費報告

平成 24 年度の FD 実施経費は表 7 の通りであった。

表 7 平成 24 年度 教育学部 FD 実施経費報告

FD 研修 FD 活動の内容	経費の用途（購入物・ 旅費謝金等）	執行額 （円）	FD 活動の効果
FD 研修会開催	講師謝金・旅費 1 名	47,803	学生支援の具体的な方法について理解を深めることができた。
	ポスター作製印刷費	5,250	FD 研修会広報用のポスターを作成・掲示し、多くの教職員の参加を促した。
	IC レコーダーの購入 物品費	9,975	FD 研修会の内容を録音し、報告書作成に役立てることができた。
	計		63,028 円

第6節 来年度の課題

授業公開について、最近 2 年間では前期・後期 2 件ずつ（養成系・非養成系）、年間 4 件ずつ実施しており、全 22 教室のうち 11 教室が実施した。すべての教室が終わるまで、さらに継続していきたい。

学部主催の FD 研修会としては、これまで 3 年間の計画で学生支援をテーマとして外部講師を招いて講演を中心に行ってきた。山口大学での学生支援・学生相談の現状、現代の大学生・若者の理解、実際の学生対応の方法、と順に詳細テーマを設定して実施してきた。ここで一旦区切りをつけて、今後どのようなテーマを扱っていくか、継続するか否かを含めて再度検討する必要がある。

教育改善（カリキュラム改善）については、今年度は特記するような活動は行わなかった。学部教員より教員養成系大学等のカリキュラム改革の話題について FD 研修会で扱ってほしいという要望があり、他大学等の情報収集を含めた活動や、それを参考とした本学部のカリキュラム再考のための研修会が望まれている。

学生授業評価については概ね定着しており、従来通り実施する。教員授業自己評価の入力率は低く、さらに低下していく傾向にあり、入力を促すための組織的な取組みを検討する必要がある。授業外学習時間の確保（単位制度の実質化）については、学生授業評価の結果からみると、徐々にではあるが、その時間が増えてきている。より一層の時間確保のため、組織的な取組みを検討する必要がある。

第6章 経済学部のFD活動

第1節 授業公開

本年度の経済学部におけるピアレビュー活動は以下のとおりである。

経営学科

経営学科 FD 委員 岡田 隆子

1 実施内容

日時：2013年1月11日（金） 5・6時限（12時50分～14時20分）

場所：経済学部 第2大講義室

授業科目：特殊講義 H「現代社会と損害保険」（日本損害保険協会）

テーマ：「年金制度の現状とこれからの課題」

講義担当者：石田成則教授

参加者：塚田広人教授、渡邊英之教授、山本勝也講師、岡田隆子准教授、以上4名

2 講義内容の要約

公的年金は、生活上のリスクのうちで、「退職による無収入」「障害による無収入・低収入」「世帯主の死亡による一時的な無収入」などのリスクに対処して所得を保障する仕組みである。つまり、公的年金は、老後の問題ではなく、若年時の障害事故や世帯主の死亡事故などに対処する、保険の仕組みであり、同時に20歳以上の全国民が強制的に加入してリスクに備える社会的な扶助の仕組みでもある。このようにして、まず、公的年金が社会保険であり、保険の仕組みを活用した制度であることの理解が重要になる。

しかしながら、わが国の少子高齢化状況の中で、年金財政は危機的状況にある。それは、その財政方式が、若年就労世代が高齢退職世代を扶養する、賦課方式を採用していることにある。公的年金のうち被用者年金では、その保険料は、両者の比率である扶養負担比率に応じて急上昇してきた。こうした保険料の急上昇が、総保険料と総年金給付の倍率で、現在の退職世代を有利に、就労世代を不利にする、世代間格差を生んできた。しかしながら、こうした倍率上の格差は存在するものの、それはわが国の世界に類例がない少子化と高齢化の同時進行の結果であり、社会連帯の制度としては容認されるべきところもある。

一方、2004年に大きな制度上の転換が行われ、一定の給付率を保証する方式から、保険料率を固定化することで、若年就労世代の負担を増やさない方式に転換した。これは、こうした世代の就労意欲への負の効果を考えれば当然のことである。しかしながらこうした改革の結果として、これから退職して年金生活に入る世代にとって、将来的な少子化の進行が年金給付額の低下に直結し、生活水準の下落に結びつくことになった。

そこで、これからの対応策として、ひとつには自助努力によって老後生活水準を維持しなければならない。同時に、一層の少子化を抑止する政策を実行する必要もある。具体的には、若年世代の結婚力を高めるために、安定した雇用を確保することや、結婚後の女性に育児と仕事を両立できる環境を与えていくことである。このようにして、今後は年金政策と雇用政策の連携がますます重要になってくる。

（文責：石田成則教授）

3 工夫したと考えている講義手法

年金制度は元来、年金数理によって組み立てられており、理解が難しい。同時に長期的制度であるために、その持続可能性のために幾多の改革が積み重ねられ現在に至っているために、かなり複雑な仕組みとなっている。年金制度を正しく理解するためには、枝葉末節にこだわることなく、その社会的意義・本質や根底にある理念などをバランスよく伝える必要がある。こうしたポイントを図や表を駆使して、分かり易く伝えるように心掛けている。

また、公的年金は国民生活に直結する制度で、学生が卒業後も生涯付き合うことになる。そこで、公的年金のメリットや効用を解説するとともに、それに伴う権利と義務、そして保険料免除制度等を知り、公的年金と上手く付き合い、上手く活用することを教示したいと考えている。年金制度の解説を通じて、現代社会の諸問題に広く目を開かせることを講義目的としている。

さらに、公的年金のあり方を決めるのは、国民一人一人であるため、学生にも公的年金の選択ポイントを理解してもらい、自らの価値観に従って望ましい制度構築のために、投票行動を通じて積極的に意思表示してもらいたい。こうした選択のための基礎的な知識を付与したいと希求している。そこで、世代間の格差などについて、講義内で質問をしながら、講義を進めている。

(文責：石田成則教授)

4 他の教員からの意見

以下は、ピアレビュー参加者から寄せられた意見を FD 委員が纏めたものである。

(1) 良かった点、参考になった点

- ・ PPT, レーザーポインターの利用など, 分かり易い資料・手法を用いていた。
- ・ 最初のスライドで, 今回の講義のポイントが何であるかをまず提示することによって, 学生に話を聞く上で注意すべき点を明確に伝えられていた。
- ・ 学生に配布した資料と, プロジェクター上に映す PPT の内容を多少変えてあり, 配布資料を持ち帰るだけで十分, と学生を安心させてしまわないようにしてあった。
- ・ カラーの絵や, 図, グラフなどを PPT に多用することで, 視覚的な効果を引き出しており, 統計データについても, 最近の数値を具体的に示していた。
- ・ 年金制度のポイントが分かり易く説明されており, 何が問題となっているかについても明確であった。
- ・ 年金制度について, 聴講している学生自身の立場から, 彼らの将来の問題として捉えられるように話しており, 学生の興味関心を惹きつけようとする工夫が見られた。
- ・ 重要なキーワードについては, その都度, 「これだけは覚えておくように」, 「線を引くように」という指示があった。
- ・ 講義時の声も, 滑舌が良く, 聞き取り易かった。
- ・ 教壇から離れて, 机間において講義することで, 学生の反応を確かめやすい状況であった。
- ・ スライドの量や時間配分も適切であり, 定刻に終了した。

(2) 疑問や課題が残った点

- ・ (技術的にどうしようもないが), レーザーポインターでは, 中央のメイン画面しか指示することができず教室後方の画面を見ている分には, どこが示されているのか分からないのが不便である。
- ・ プロジェクター上に映す PPT の中には, 学生に配布した資料にないスライドがあったので, それも配布したほうが良いのではないか。
- ・ PPT に載せられたグラフの中には, 縮小されたため判読できなくなっているものがあつた。
- ・ 講義の導入部分において, 新聞やニュースを用いるなど, 実際に生じている問題を提示することで, 学生の関心をより引き出すことができるのではないか。
- ・ 講義中, 学生はただ受動的に話を聞いているだけなので, 問題点や疑問を学生に投げかけ, しばらく考えさせる時間をとってみるという方法も, 学生に刺激を与えるのに有効かもしれない。

・大講義室であるため仕方がないが、講義を行っている教官の目の届く範囲の席に座っている学生は比較的眞面目に受講しているのに対し、教官から遠く離れた後方の席に座っている学生は、授業に集中できていない様子であった。

以上

国際経済学科

国際経済学科 FD 委員 豊嘉哲

1. 担当者：山本勝也（講師）
2. 授業科目：貿易論
3. テーマ：リカード・モデル
4. 日時：2012年11月14日水曜日10時20分～11時50分
5. 場所：D301教室
6. 参加人数：5名（岡田隆子准教授、梶原健佑准教授、櫻庭総講師、服部麻理子講師、豊嘉哲准教授）
7. 内容

(1) 授業内容

この授業ではリカード・モデルの導入部分（比較生産費説）が説明された。このモデルの仮定、労働投入係数、そして絶対優位が説明された後、機会費用概念を利用して比較優位の説明が丁寧に行われた。さらに、自給自足経済と比較して、比較優位に基づく貿易はどのような利益をどのようにもたらすのかが示された。

(2) 授業における工夫

- ・パワーポイントスライドと板書の適切な使い分け。
- ・学生に簡単な問題を解かせる時間の設定。

(3) 他の教員からの意見

- ・聞き取りやすい。
- ・学習項目のまとめごと、まとめを板書することが学生の理解を助けている。
- ・前回までの授業、今後の授業との関連を明示しながら授業を進めているため、本科目全体の中での今回の授業の位置づけを理解できる。
- ・初学者にもわかりやすく専門用語が解説された（経済学を専門としない教員の意見）。
- ・単にテキストの解説で終わるだけでなく、研究者としての見解も述べる点が素晴らしい。
- ・講義内容の中で特に重要な点について、学生が重要であることをはっきりと認識するように指摘してもよいかもしれない。

経済法学科

経済法学科 FD 委員 服部麻理子

- ◆ 実施日時：平成24年7月4日（水）12：50～14：20
- ◆ 授業科目：経済学
- ◆ 担当教員：中村美紀子先生（経済法学科教授）
- ◆ 講義テーマ：アニメチック法学入門—サザエさん「カツオの出世払い」を法学的に深読みする
- ◆ 学習目標（担当教員の指導案）：
基盤科目「法学Ⅱ（民法総則）」の導入を行い、受講者が後期に学習する民法総則への関心および意欲をもたせる
- ◆ 実施教室：第2大講

- ◆ 参加教員数：6名（実施教員除く）

ピア・レビュー参加教員のコメント（要旨）

1. 参考になった点

- 視聴覚教材による「つかみ」がとても良かった。その後も受講生が静かに集中して参加していた
- 講義内容6パートのうち、いずれかが長すぎる短すぎるということもなく、適切な時間配分であった。全体的にストーリー性のある講義展開で、テーマを明確に伝えていた
- 最初から全て書き込んであるレジュメではなく、キーワードを授業中に受講生自身に書き込ませたり、感想カードに答えやその理由を答えさせたりすることによって、受講生が聞き流す一方的な講義にならないよう工夫がされていた
- 内容的には必ずしも身近な題材ではないにもかかわらず、適切な例示によって受講生の関心を持続させていた。また、親権者を「チームメイト」と言い換えるなど、初学者にとって分かり易い説明がなされていた
- 1つの論点につき1つのキーワードという対応関係が明確になっており、思考の際のポイントが押さえられていた。約束手形と為替手形、有価証券といった専門用語についても簡明な定義づけがなされ、記憶しやすかった
- 講義中に説明しきれない発展的内容が、どの専門科目の範疇なのかをレジュメに提示してあり、受講生の今後の科目選択に資するよう配慮がしてあった
- 声はハッキリしていて聴き取りやすく、板書の文字は大きく読み易かった

2. 改善点

- 講義の進行について：最後に5分程度で、クイズの解答と講義の要点を再度まとめてみてはどうか
- 配布資料について：頁あたりの字数が多く行間が詰まっており、少し読みにくい箇所があった。両面印刷にしたり、もう少し行間を開けたりすると、なお良いのではないか
- 六法を持参していない受講生が多く、講義担当者が指示する条文を参照できないでいた。法学科のリレー講義時には六法を持参するよう、マネージャー等から受講生に対して事前に周知徹底を行ったほうが良いかもしれない
- マイクが遠く、後部座席まではあまり聞こえない時があった。マイクの音量をもう少し上げて良いかもしれない

観光政策学科

観光政策学科 FD 委員 武本 Timothy

1. 担当：観光政策学科 武本 Timothy
2. 科目：観光コミュニケーションコースの異文化コミュニケーションの授業
3. 評価対象講義の内容：授業のパワーポイント教材に多くの視覚教材や文献を使用し、それぞれの出典を明記することと、文献管理ソフトを紹介すること
4. 日時：2013年4月9日（月）5・6時限
5. 場所：経済学部D棟・語学演習室
6. 参加者：塚田広人先生、岡田隆子先生
授業用パワーポイントに多くの映像教材や先行研究からの実験などを提示することにつとめ、今回

の FD で、90 分の授業に映像・論文を 100 点以上使用して、学生が眠くなることなく、次々と面白い教材を見せることができた。しかし、学問のマナーの基本・著作権法上では、それぞれの資料の出典を明記し参考文献を教示することが当たり前であるのに、それを怠ることもあったので、それぞれの教材の文献の明記に力を入れた。

授業の重要ポイントである文献管理ソフト Zotero の主要な特徴は以下のとおりである。これはたかさんの教材を使う場合と、出典を明記するために、また研究目的でも資料を整理し保管するために非常に有用である。(以前から Endnote という有料ソフトがあったが、MS ワードのバージョンに依存するもので高価であったが、近年完成度が高くなって Endnote に近い機能を持つフリーソフトが「Zotero(ゾテロ)」である)。

文献管理ソフト Zotero の特長

- I. Amazon.co.jp などの本屋や Flickr という画像共有サイトや Cinii, Google Scholar, JStore, Proquest などの文献データベースから文献の情報(場合には文献そのものを PDF ファイルとして)をワンクリックで取り込み、
- II. 安易に入手できた文献情報を複数のフォルダーに分け、コメントをつけたり整理し、
- III. 文献情報を Chicago や APA などの書式^{スタイル}にしたがって出典の明記や参考文献一覧表を瞬時に作成しパワーポイントに貼り付けることができます。

文献管理ソフト Zotero の入手法

- 1) ファイフォックスをダウンロード・インストールする



各国語版・各 OS 対応版 | プライバシーポリシー

Zotero は独立したプログラムとしても、そしてファイフォックス ("火狐") というブラウザの追加ソフトとしても存在する。ここでは後者について述べる。まずはブラウザとして Chrome や Internet

Explorer を使っている場合は、それらに負けないほどの速さや機能性をもつファイフォックス (無料) をインストールする必要がある。

<http://www.mozilla.jp/firefox> (グーグルで「ファイフォックス」も検索可) にて「Firefox 無料ダウンロード」のボタンをクリックし *Firefox Setup 2x.xx.xx* をパソコンにダウンロードし、ダブルクリックすることで実行しインストールする。

- 2) Zotero をダウンロード・インストールする

<http://www.zotero.org/download/> にてダウンロードボタンをクリックし、Zotero を実行しインストールする。Zotero はファイフォックスの GUI 言語で表示されることになるので、日本語で操作することができる。



ここをクリック

B) Zotero を使う

1) Zotero を起動する・Zotero の画面

ファイフォックスを起動すると右下に「zotero」というボタン (①) が表示されるので、それをクリックすると、3つに分けられている Zotero の画面がファイフォックスの下部に表示される。



画面右②には、複数の文献を含めるフォルダー（「コレクション」）がある。ここで右クリックすると新コレクションを加えたり、名前を変更したりすることができる。

画面中央③には、それぞれの文献の題名・著者名や日付が羅列されている。これらの文献項目もすぐ左隣に「▷」のマークがある場合フォルダーとして機能することができ、「▷」をクリックすると、文献の PDF ファイルやコメント（「メモ」など中身が見える）。

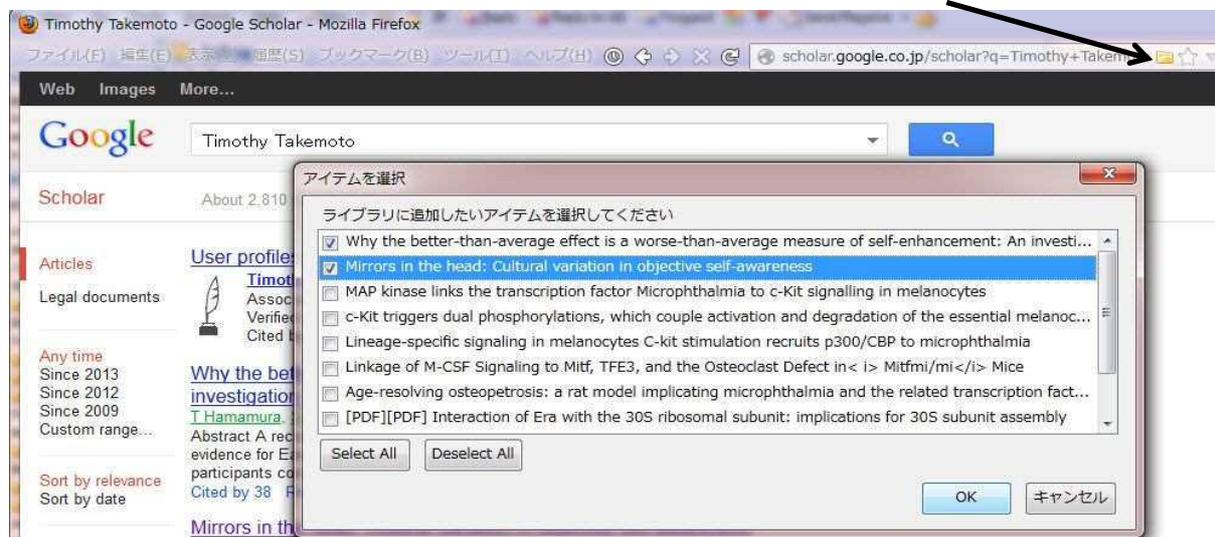
画面左④には、それぞれの文献の詳細情報が提示され、それを手動で編集することもでき、コメントなる「メモ」やキーワードなる「タグ」を記入したり、関連項目を設定することもできる。

2) 文献を入手すること

Zotero のもっとも優れた機能は、文献情報や場合には文献そのものをワンクリックで入手することができる。本や論文の著者名をうったり、ネットから入手した視覚教材の URL を記入したりすることは必要ない。文献情報を入手する方法はさまざまあるが、もっとも便利な方法は、ブラウザで表示されているページが（上述の特長 I. などの）Zotero に認識されるウェブサイトであれば、ブラウザの URL の窓の右側には、文献入手ボタンが表示される。Flickr.com 画像なら



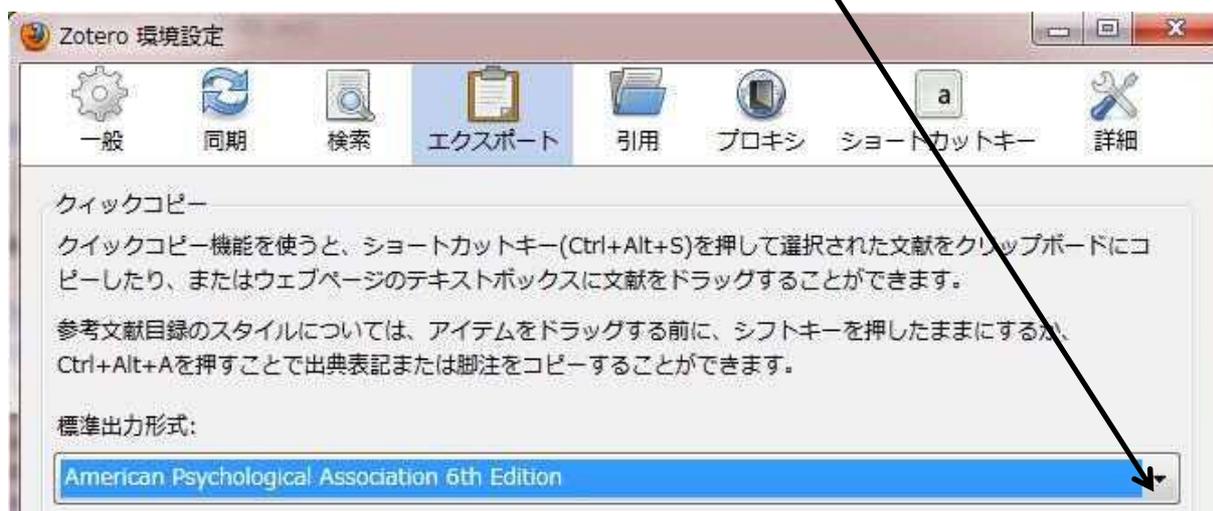
そして、CiNii・グーグルスカラー・JSTOREなどの研究論文データベースでは、複数の文献情報が一括ダウンロードすることができ、PDFファイルも入手可能であれば、SHIFTボタンを押しながらクリックすると、文献のPDFファイルも同時にZoteroのデータベースにダウンロードされる。下記はグーグルスカラーの場合、まずはURL右隣の黄色のマークをクリックし、現れてくる「アイテム



選択」画面で入手したい文献を選択し、「OK」を（PDFが欲しければSHIFTキーを押しながら）クリックするだけです。

3) 文献明記・参考文献一覧表の^{スタイル}書式を選択する

Zotero画面の歯車のマーク（上記B1の図の⑤）をクリックし、環境設定を表示し、「エクスポート」（出力）タブをクリックすれば、様々なものの中から好みの^{スタイル}書式を選択することができる。



4) 出典の明記をパワーポイント・ワードファイルなどに貼り付ける

Zoteroの中央画面で1つあるいは複数の項目を選択し、CTR+ALT+Aを同時に押すと、APA書式では例えば(Benedict, 2006; Kim, 2002)などの出典明記がクリップボードにコピーされるので、CTRL+Vでスライドや文章に貼り付けることができる。

5) 文献一覧表をパワーポイント・ワードファイルなどに貼り付ける

Zotero の中央画面で 1 つあるいは複数の項目を選択し、CTR+ALT+S を同時に押すと、APA 書式では例えば

Benedict, R. (2006). *The Chrysanthemum and the Sword* (1st ed). Mariner Books.

Kim, H. S. (2002). We talk, therefore we think? A cultural analysis of the effect of talking on thinking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(4), 828.

などの出典明記がクリップボードにコピーされるので、CTRL+V でスライドや文章に貼り付けることができる。

Zotero には他にも様々な便利な機能があるが、上述のようにして、教材や研究の文献の管理、出典の明記や参考文献一覧表の作成をより早く行うことができると思われる。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

平成24 年 9 月 19 日(水)、16 時より約 1 時間にわたって大学教育機構との共催により、学生ポートフォリオを使った指導をテーマに教育改善FD 研修会を実施され、機構側からの説明の後、質疑応答が行われた。この日は経済学部の定例教授会の日で、研修会開催の開始時刻が教授会の直後ということもあり、教授会へ出席していたほとんどの教員が研修会へ参加した。

第 3 節 教育改善に関する活動

2013 年度においてはゼミ教育の改善に向けた取組が行われる予定であり、今年度においてはその実施に向けた計画づくりが主にそれを担当する二教員において進められた。

第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価について経済学部の実施率は2009年度、86.6%、2010年度、85.8%、2011年度、79.7%、2012年度、84.5%であった。

教員授業自己評価は、2009年度、33.9%、2010年度、43.2%、2011年度、32.3%、2012年度、24.1%であった。

学生授業評価はまだ一部の科目で実施されていないものがあるが、8割台の入力率を保っている。しかし教員授業評価は近年、高い年度でも4割程度であり、2012年度は2割程度と非常に低調である。この点をどのように改善できるかを、その必要性の理解を強めることも含めて検討する必要がある。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の 用途	執行額(千円)	FD活動の効果（簡潔に）
経済学部	ピアレビュー(経営、国経、経法、観光政策)	資料費	88	講義改善のための資料が得られた。

第6節 来年度の課題

経済学部における来年度の課題としてはとくに教員授業自己評価の入力率向上に向けた組織的な取り組みを強化することがあげられる。

以上。

第7章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 数理科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「数理科学入門セミナー」

1) 概要

①日時：平成24年11月19日（月）5・6時限

②対象学生：数理科学科1年生（約55名）

③授業概要：この授業では、90分間のテストと10人程度の少人数のグループによるプレゼンテーションを交互に繰り返す。プレゼンテーションでは学生はセミナー形式で前回の授業で受けたテストの内容についてプレゼンテーションを行い、それに対し担当教員から更なる質問を受け、それに答えることによって理解を深めていくという形式で授業が進められる。

④授業担当教員：増本 誠、内藤 博夫、川上 裕、大関 一秀、宮澤 康行

レビュアー：幡谷 泰史、廣澤 史彦、菊政 勲、久田見 守、村井 聡

2) レビュー結果

何れのグループでも「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

(優れた点)

- ・学生のプリント問題の解答状況や本人の能力を確認した上で発表者の指名を行うなど理解力に応じた指導がなされていた。
- ・安直に出席さえすればよいという風潮にならぬよう、また、発表内容に学生の注意が集中するように、発表後に各自の答案を返却するなどの工夫がなされていた。
- ・学生と時折談笑を交えるなど、疑問点を質問し易い和やかな雰囲気づくりがなされていた。
- ・工夫を凝らした学生の解答をほめ、やる気を引き出していた。また、学生の解答の不十分な箇所を例にとり、直観的理解を厳密な論理にどのように載せるかという、学生にとって躓き易い所を丁寧に解説していた。
- ・総じて、各問を微積分・線形代数のカリキュラム全体のどこに位置するかを判断した上で、そのような問題では何に注意を払い・どのように考え振舞うべきかを、丁寧にアドバイスを与えていた姿勢が印象的であった。
- ・全体として微分積分学、線形代数学の基本的な概念を理解習得し、問題解決力を養うという本科目の趣旨に沿い、少人数教育でしかなしえないきめ細かい配慮がなされた授業であった。
- ・和やかな雰囲気の中にも学生は集中すべきところは集中して聞いているようであった。
- ・理解が十分でない学生には、まず、より簡単な例で考えさせる、途中までは一緒に解いてみるなど学生の気付きをうながす工夫をしていた。
- ・定理を使って解いた学生に対し、その定理が成り立つ理由をたずねたり、定理を使わない解答を考えさせつつ解説を行うなど、学生の理解を深める指導が行われていた。
- ・発表者以外の学生にも声かけを行うなど学生に質問の機会を与えるとともに、質問に対して適切に応えていた。

- ・学生のこれまでの発表状況を踏まえ、授業最初に、プレゼンテーションにおける板書の仕方や、他学生に分かりやす説明の仕方に対する指導が教員より行われた。これは、この授業の重要な達成目標である。その後、実際に、教員は発表している学生の解答や考え方を十分尊重しつつ、その解答や発表に対する不備な点を指摘修正する等、プレゼンテーションを行う上での必要不可欠な指導が行われていた。授業は、静かな雰囲気の中で行われていたが、教員と学生の連携が非常に良好である様子が感じられた。学生も不明な点について良く質問し、この授業の目的が十分果たされているように感じた。
- ・比較的理解度が低いクラスだったためか、基本的な部分から丁寧な解説が行われていた。
- ・一つの問題を二人の学生に発表させ、その解答を見比べさせることで、どのような解答が正しく、どのような解答が正しくないかを理解させる工夫がなされていた。
- ・発表した学生以外にも別解が無いかどうか尋ねるなど、発表していない学生も上手く授業に参加できるような指導が行われていた。
- ・学生ができていなかった問題を重点的に解説するなど、メリハリのある授業内容であった。
- ・学生との談話を通じて、質問などが行いやすい雰囲気が作られていた。
- ・非常に丁寧に指導が行われていた。一部の問題に対して解説する時間が十分確保できなかった場面もあったが、全体としては当該授業の趣旨に合った適切な指導が行われていた。

(改善点)

- ・学生の予習状況が今一つのもので、比較的易しい問題でも板書で正答できていない場合があった。学生のやる気の問題もあるが、あってもついてゆけない学生がアドバイスを受けられる場所として、学習相談室などが積極的に活用されると良いと思われた。
- ・出題された問題は学生が当然習得しているべき内容を理解しているか確認する問題と、授業などでは扱いきれない事項を補足するものとなっており、適切な内容であった。但し、一部の問題は問題の意図が学生に伝わり難いように書かれていたように思われる。

2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「ロジカルシンキングⅠ」(前期)

1) 概要

①日時：平成24年6月11日(月)、18日(月)

②対象学生：1年生

③授業概要：様々な現象を観察した上で仮説を形成し、その妥当性を実験や理論的手法により検証していく手法は実社会の様々な場面でも必要とされている。仮説形成や妥当性の検証を正しく行い、その結果を筋道立てて他者に示せるようになるには、推論および説明のための様々な手法を身につける必要がある。

授業の到達目標：

- ・物理学等のトピックに関する説明文において、結論や主張とそれを導く前提や理由を見分けることができる

- ・様々な観察事実に対する考察を帰納法や演繹法を用いて行える

- ・様々な観察事実に対する考察をわかりやすい言葉で説明できる

④授業担当教員：藤澤健太、繁岡 透、吉川 学、芦田 正巳、川村 正樹、新沼 浩太郎

レビュアー：野崎 浩二、西井 淳、末竹 規哲、浦上 直人、吉川 学、芦田 正巳、川村 正樹

⑤レビューの方法：授業に出席の後、授業改善点等のレビューをメールにて提出してもらった。

2) レビュー結果

11日(講義)

授業担当者：藤澤健太、授業内容：「演繹と推測、仮説形成」

①授業内容

・「演繹と推論」の内容の話は、学生にとっては今までに初めて聞いたのではないかと思います。一方、自然科学を行う上では必須の内容であると考えられる。それを今まで、系統的に教えていなかったが、この授業を受けた学生が今後、どのように成長するか、その学習効果を期待する。

・「演繹と推論」というタイトルの講義だったが、非常に分かりやすく説明していたと思う。進行速度もちょうど良く、適度に演習を入れ、学生に答えさせているので、学生は、適度な緊張感を持って講義を受けていたように思う。

・授業内容としては、一般的な文章で演繹と推論の違いを説明しているため、学生は理解しやすかったのではないかと思います。また、推論に対する反論もしやすかったのではないかと。しかし、科学的な文章になると、反論できない学生も多くいるように思われるため、このギャップをいかに埋めて行くかが、一つの課題だと思ふ。

②授業の進め方

・ワークシートの答えや授業のスライドの中の答えが、レジメに書いてある問題があった。これは消した方がよいだろう。

・1週目に講義で話をし、その中でも例を示すとともに、簡単な課題をやらせるやり方は効果的であると思う。また、講義で出した課題について、次の週に、複数の教員が10人程度のグループを受け持って指導するという方法もとてもよいと思う。

③その他、改善点

・学生の出席率はよいようだ。

・後ろの方の学生が寝ていることがあった。

・例文が、口語体であり、レポートや論文を書くことを目標とすると、文体のレベルで見直した方がよいかも知れない。例えば、「だが」と言う接続詞は、「であるが」の略語だろう。これを使うことに慣れてしまうことは避けたほうがよい。

18日(演習)

授業担当者：藤澤健太、繁岡 透、吉川 学、芦田 正巳、川村 正樹、新沼 浩太郎、授業内容：「演繹と推測、仮説形成」、演習の実施方法：講義のときに宿題として、文章を作成する課題が出される。この提出されたレポートを元に、演習で使用する資料を作成する。交代で学生に司会をしてもらい、学生同士でレポート内容について議論させる。学生は椅子に座ったまま自由に発言する。特に必要がない限り黒板は使っていない(使った時もある)。教員はなるべく口を挟まないようにする。ただし、学生達が気づかなかった点については指摘し、問題点を解説する。学生が気軽に発言できるような雰囲気を作るよう心がける。

①授業内容

・教材はとてもよいと思う。この内容の授業は、3年生くらいにもう一度あってもよい。たとえば、1年生と3年生を同じグループにして実施するのも面白いだろう。

②授業の進め方

・受講生60人強を6つのクラスに分け、それぞれ約10名ずつで、先週の授業内の演習を行っている。6つのクラスをそれぞれ回ったが、担当教員が違えば、やり方もそれぞれ異なっていた。

大体、まとめると、

1. 学生が主体で、教員は単に聞いているだけのクラス。
2. 学生がいろいろと意見を出す、主な進行は教員が行うクラス。
3. 教員が主に話をし、学生が聞く側に回っているクラス。

のようであった。どのやり方が良いのかは、それぞれ一長一短で、現状では何とも言えないので、何かしら効果を確かめる術があると良いと思う。または、もう少し頻繁にクラス替えをし、いろいろな

パターンのクラスを学生が回れると良いのかもしれない。

・少人数クラスによる発言を強制される演習の授業を実験や数学科目以外で行うことは、非常に画期的だと思った。

・積極的な発言が見られるまでには至っていない様子だ。受け身の授業に慣れ親しんできた学生にとってはこの授業は苦痛かもしれない。しかし、このような授業で、論理的思考とともに能動的な学習態度を養うことに意味があると思った。

・学生が積極的に参加しており、意外であった。

・ある教員は、司会進行を学生にやらせていた。そのグループでは、司会の学生が熱心に取りまとめをしていたのが印象的だった。さらに、他の学生も積極的に議論に参加していた。教員はたまに指導するのみで、とてもよい進め方だと思った。一方で、発言する学生1名と教員との1対1のやり取りが中心で、その間、他の学生が今ひとつ参加していないグループがあった。

・毎回ワークシートが配布される方式により、演習の運びがスムーズに進行していた。

・当初予想していた以上に、学生達は積極的に発言し、発言内容もかなりの確である。私が気づいた点の多くは、学生の誰かが指摘するので、私の解説は最小限でよい。今のところ、発言者が極端に偏ることはないが、これはグループを構成する学生次第だろう。

・演習の実施方法は様々なものがあると思う。今のところ私が実施した形態に大きな問題点は見あたらないが、これは私が他の授業形態を試していないので、比較対象がないせいでもある。

③その他、改善点

・学生の発言内容や態度をみて、「日ごろから物を深く考える癖がない」と感じさせられた。

・理想的にはもう少し少人数だったらよい。

・上座を作らない。これは、ほとんどの先生が工夫されているが、お互いの顔を見れるように机の配置を変えたり、立ってみたりというのは、対等感を出して話しやすくするのに良いだろう。

・教員も学生と同じ目線になっていた。要は学生と同じように座っているということであるが、教員だけ立っていると、どうしても学生は「監視されている」という感覚になるようだ。藤澤先生がされているみたいに、全員が立つというのも、良いように思う。

・教員はできるだけ発言しない。教員はたぶん習慣的に、学生の言葉にコメントしたくなるように思うが、そうすると、「学生は評価される」と意識してしまうようである。教員の話す量が多いほど、当然かもしれないが学生の話す量は減るだろう。

・教員は説明しない。学生が納得する点を重視するには、教員による答合せ的な解説はできる限り無い方がよい。納得できずにいる学生がいることがわかると、問題を優しく感じている学生も説明のための工夫をいろいろしている。そうはいっても、議論がうまく進まない時にどう舵取りするかは難しそうであった。

(2) 実施科目「物理学実験 III」

1) 概要

①日時：平成25年1月21日(月)、28日(月)

②対象学生：物理学コース3年生

③授業概要：あらかじめ設定された実験テーマから、半期で2テーマの実験を行う。2テーマの実験終了後に、実験結果のプレゼンテーションを行う。テーマごとに実験レポートを作成し、数回の添削を経て、実験レポートとして完成させる。

④授業の到達目標：物性物理学分野の基本的な物理現象やそれを観測する実験手法、原理・概念を説明できるようになる。決められた実験目的に対して、具体的な実験方法や手順を計画し、それに従って実験を行い、得られた結果をグラフや表にまとめ、考察し、結論を導き、報告する、という一連の作業を行うことができるようになる。

⑤授業担当教員：野崎 浩二、藤原 哲也

レビュアー：新沼 浩太郎、川村正樹、坂井 伸之、野崎 浩二、藤原 哲也

⑥レビューの方法：授業に出席し、授業の最後で感想を述べた。また、メールにてレビュー報告をした。

2) レビュー結果

①授業内容

・実験結果と正解（他からの知識）と差があった場合、誤差がどうして生じたものであるのかを検討する必要がある。

・一部の実験結果を元に導き出した結論には、論理的なギャップが見られることがあった。正解を知っている学生実験だから可能なのであって、未知の物質等を扱う場合には、もっと慎重な対応が必要であることを理解して欲しい。

・1つの結論を出すには、それが言えるための条件や定義があるので、それをしっかり理解し、説明できることが望まれる。

・実験で得たデータについて、もう少し丁寧な扱いをして欲しい。

②授業の進め方

・まず、ほとんどの学生が発表の方法を良く考えていると感じられた。一昔前なら、自分がやったことをいきなり説明したり、図や式だけの発表をする学生もいたが、今回はそのような学生はなく、内容を吟味し、練習を行った様子がかがわれた。この成果の一部は、発表（プレゼンテーション）を重視した教育指導によるものだろう。

・学生の主体的な参加という面では、まだまだ不十分である。少々変な事を言っても良いから、学生が自由に発言できるようになると、発表の技法はさらに向上するだろうし、その背後にあるコミュニケーション力も高まるだろう。現状では、学生が自分の知識不足を恥ずかしく感じる、あるいは知識不足ゆえに質疑応答にならない、というところであろうか。

・学生のプレゼンテーションを見る限り、プレゼンテーション技術の指導はしっかりとされているようであった。しかしながら、学生によっては、実験のデータ処理の基礎ができていない者がいたり、実験原理の物理や物理の現象として実験結果を捕らえて理解することが今ひとつできていない者がいたりしたのが残念であった。物理学や実験の基本の指導のよりいっそうの充実を期待する。

・発表の仕方についてはだいぶ慣れてきているように感じ、発表回数を重ねてきているだけでなく、練習もしっかり行っているのではと伺わせるものがあった。

・今回の授業は物理学実験の発表会であり、2週にわたり学生全員が順番に発表するものであった。発表内容は別にして、3年生なのにみなプレゼンテーションがきちんとできていたことには感心した。学部での早い段階からプレゼンテーションの練習をすること、特に今回のように公開して緊張感を与えた上で発表させることは意味があり、その成果が現れているのだと思う。

③その他、改善点

・学生の発表の仕方は3年後期でもあり、だいぶ良くなっている。ただし、聴衆の方を向いて話すとか、専門知識の説明については、もっと練習する必要がある。

・実験データの解析等で用いる理論式・理論値をただそのまま使用するだけでなく、式および各パラメーターが示す物理的な意味についてもデータ解析の段階で理解するように努めることが望まれる。

3. 生物・化学科のピア・レビュー

3. 1 生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「微生物学」

1) 概要

①日時：平成24年12月19日（水）1・2時限

②場所：理学部1号館22番講義室

③対象学生：生物・化学科、生物学コース3年生（約40名）

④授業の概要：微生物学は、生化学、細胞生物学、分子生物学など幅広い分野と連携しながら発展してきた。本講義では、微生物学の基礎となる技法、細菌・ウイルス・真菌（酵母）の構造・生活環・代謝・遺伝などを中心に解説する。

12月19日の授業は「酵母の生活環」について行った。微生物の中でも酵母は古くから遺伝学が盛んであり、現代では真核生物の代表的モデル生物として研究が進んでいる。授業では、酵母の生息環境、分類、酵母を研究に用いる利点、酵母の細胞構造、酵母の性、接合過程の変化、減数分裂と胞子形成、ホモタリク株とヘテロタリク株の違いについて、資料プリント4枚を配布して解説を行い、板書で補足した。授業後半の15分くらいを使って、授業全体のまとめをパワーポイントで行った。質問は授業最後に配布する記入用紙に書いてもらった。

⑤授業の到達目標：微生物学で用いられる技術およびその原理を基礎知識として修得し、理解する。細菌、古細菌、ウイルス、真菌類の構造、代謝、ゲノムの共通性と違いを理解する。今回の授業では、酵母の生活環を理解する。

⑥授業担当教員：宮川 勇

レビュアー：祐村恵彦、三角修己（生物・化学科 生物科学分野）

⑦レビューの方法：90分の授業全体を聞いていただき、授業終了後、授業方法、内容について改善点を指摘していただいた。

2) レビュー結果

レビュアーによる授業に対する意見・コメントとして、以下のものがあげられる。

- ・酵母の分類、生活環、分裂についての講義であった。講義途中で、学生へ質問することで、注意を喚起できて、学生の集中力が維持されたと思う。また最後にスライドで本日の全体の復習をやった点がよかったと思う。

- ・プリントが配布されていたので必要度は低かったかもしれないが、板書は重要なところをもう少し整理したものがよかったかもしれない。

- ・難しいいくつかの専門用語を説明(シナプトネマ構造など)なしで使っていたのでプリントのどこかに説明があったほうが良かった。

- ・講義の最後に質問票を配って、質問を書かせる方法は良かったと思う。

- ・板書の字が大きくて見やすく、講義内容に関する説明も丁寧で適切であった。パワーポイントを併用した画像や映像による視覚情報による補足もなされていて良かった。

- ・指定教科書以外の配布資料も複数あり、学生の講義内容の理解に対して配慮がなされていた。

- ・今の学生は授業中に質疑の時間を設けても、自ら挙手をして質問をするという事が稀なので、出席カードに当日の授業内容に関する質問や感想を記入させて、次回の講義時に教官が回答するという本授業のやり方は、1つの方策として有効であると思われた。

- ・授業の最後が若干駆け足になったので、当該箇所は次回の講義の最初に簡単な復習があるとよい。

- ・受講人数に対して教室が若干大きく、(どの授業でも)学生が後ろの席にかたまる傾向があるのでもう一回り小さい教室の方が授業運営には適切であるように思われた。

これらのレビュアーによるコメントを参考にして、授業改善に取り組みたい。

3. 2 化学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「計算化学及び演習」

1) 概要

①日時：平成24年7月13日(金)及び18日(水、金曜授業振替日)9・10時限

②対象学生：生物・化学科 化学コース2年生(36名)

③授業の概要・到達目標：新規な問題に対して多様な視点から本質を見極め、幅広い情報から総合的に解を見出す能力を養うには、講義等により知識を一方向的に享受するだけでは不十分であり、基本的な知識や理論の準備なしに未知の課題に取り組み、必要な情報を自ら収集し統合して活用する能力が重要である。計算機の中で分子を組み立て反応させる「計算機実験」を用いた個別の研究を体験することで、個々に目標を設定し解決する能力を養うきっかけとし、主体的に新しい領域に挑む態度を身につけることが本授業の目的である。

④授業担当教員：石黒勝也

レビュアー：川俣 純・村藤俊宏・藤井寛之・谷 誠治

⑤レビューの方法：有機化学に関する個別テーマについて、半経験的分子軌道計算プログラムWinMOPACを用いて研究した結果を、1人5分程度ずつ、3回に分けて発表を行った。

2) レビュー結果

以下のようなコメントが寄せられた。カリキュラムの変更によりこの授業は今回が最後となるが、今回のレビューの結果は、「創成化学実験及び演習」に活かしていくつもりである。

- ・よく考えられた授業だと思う。
- ・有機化学の講義で学習した内容を、計算化学を用いて軌道の観点から理解を深めることができ、効果的な授業内容と思う。
- ・最近の学生は、それぞれの講義内容を互いにリンクさせることができている気がする。今回の授業はそれを補うのに十分な配慮がなされていた。学ぶべき点、参考にするべき点が多いため授業であった。
- ・発表内容だけではなくプレゼンテーションの方法についても指導があるとよかったと思う。

(2) 実施科目：量子化学及び演習 I

1) 概要

①日時：平成25年1月24日(木)1・2時限

②対象学生：生物・化学科 化学コース2年生(27名)

③授業概要：古典力学による波動方程式の基本から始め、シュレーディンガーの波動方程式について解説する。簡単な力学系についてシュレーディンガーの波動方程式を適用してそれらの系のエネルギーや波動関数を求める方法について説明する。量子論の仮定と演算子について説明し、演算子の交換関係、角運動量に対する演算子法を紹介する。また、水素原子やヘリウム原子の系に対してシュレーディンガーの波動方程式の解を求める。

④到達目標：シュレーディンガーの波動方程式を理解し、簡単な力学系についての系のエネルギーや波動関数を求めることができるようにする。水素原子やヘリウム原子の系に対してシュレーディンガーの波動方程式の解を求める。

⑤担当教員：谷 誠治

レビュアー：石黒勝也・藤井寛之

⑥レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答

⑦当日の授業内容：ヘリウム原子を例に取り上げ、多電子原子のエネルギーを求めるための2つの近似法（摂動法と変分法）について解説した。

2) レビュー結果

①授業内容について

・原子軌道の締めくくりとして、一電子のシュレーディンガー方程式を元にして多電子原子のエネルギーを求めるための2つの近似法（摂動法と変分法）について解説され、量子化学としては新しい考え方が導入され一気に難解さが増加するところかと思う。HPとプリントで提供され、授業ではプロジェクターで示される講義資料は詳細且つよくまとめられており、図や数式も非常にきれいで見やすく、式の番号が300にも達しているようにたいへんな労作と思った。

・講義でも「自分でフォローする」ことが指導されていたが、量子化学では、意味を確かめながら自分の手で数式を書き、自力で解いたことがある、という経験が重要で、これがあれば、試験が終わり詳しいことは忘れてしまっても、テキストを見ながらやればできるという自信が付き、量子化学への抵抗感がなくなると思う。

・「摂動法とは一言で言えばこういうこと」「変分法はこういうもの」と一分程度で自分の言葉で説明できる程度に消化できていれば、詳しくは忘れても1番大事なことが残り、後の研究などで分子軌道法でのMP法やCI法などが出てきても、どういうことをやっているかくらいがわかるのではないかと思う。

・変分法と摂動法によるエネルギーの求め方に関する内容であった。両者の違いを実験値と比較し、その精度を示す事で講義内容の重要性を確認できる内容であった。

②授業の進め方

・授業の最初に出席をとることが、冬場の1コマ目でありながら遅刻者を少なくする（数名いましたが）のに有効に働いていると思った。

・授業の途中で演習を交え、自分で考える時間をとるのは非常に有効と思うが、後ろの方から見ているとやっていない学生もいて、他の授業科目の期末テスト勉強をしている者もいた。

・講義はパワーポイントを使って進められていた。文字も見やすく、教室の最後列でも十分見ることができた。声量も問題なかった。数式の誘導を説明するには少し講義ペースが速いようにも感じるが、ウェブ上に講義内容をアップされているようなので、復習により理解が深められると思う。

③改善を要する点

・暖房はかかっていたが、座って話を聞いているだけだと寒く、学生もコートを着たままで多かったので、もう少し温度を上げてほしいのではないかと。

・15番教室で後ろの席に座ると、スクリーンの下の方が見えないので、右側のプロジェクターもオンにしてはどうか。

・受講生に緊張感を持たせるために、時には学生を当ててみるのも良いと思う。

(3) 実施科目「有機化学実験」

1) 概要

①日時：平成25年1月25日（金）5・6・7・8時限

②対象学生：生物・化学科 化学コース3年生（37名）

③授業概要：有機化学に関する基礎的な5つの実験テーマを実験し、講義で学んだ有機化学の理解度を深める。最後の実験では、5つ目のテーマを実験し、教員による有機反応の実演と質疑応答も行い、これらをピア・レビューの対象とした。

④授業の到達目標：実験を通して、基礎的な実験技術を習得するとともに有機反応を理解する。また、データの解析と考察を行って、きちんとした報告書を書けるようになる。

⑤授業担当教員：村藤俊宏

レビュアー：山崎鈴子

⑥レビューの方法：授業を参観し、意見・改善点の指摘などについて、用紙またはメールにて回答した。

2) レビュー結果

レビュアーより以下の意見が出された。

・学生が主体的に実験に取り組んでいる様子が見られた。特に、担当教員による演示実験では、ホワイトボードを使って基礎事項を説明するとともに、反応を実演しながら、実験の細部にわたって注意すべき点が説明され、学生にとっても理解しやすいだろうと感じた。積極的に質問する学生もいたが、後ろの方の学生は私語をし、演示実験に集中していなかった。ティーチングアシスタントの大学院生は後ろの方で指導した方が良いかもしれません。

・実験台の上に、筆箱、レポート、教科書などが乱雑に置かれているので、実験台に置く物についての指導、実験ノートの取り方などの指導も必要と感じた。

・演示実験の説明を受けている際に、ノートを取る学生が全くいなかった。しっかり記憶にとどめているのだろうか？自分自身の学生時代を思い出すと、実験ノートには観察結果や担当教員からの注意など、あらゆることを書き込み、それがレポートを書く際に大変役立った。他の実験担当者とも相談して、実験ノートの指導について、考えるべきかもしれないと感じた。

4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「地球惑星物質学Ⅱ」

1) 概要

①日時：平成24年12月10日(月)、7・8時限

②対象学生：地球圏システム科学科2年生(36名)

③授業の概要・到達目標

<概要> 地球や惑星を構成している物質单元である鉱物にみられる物性や形態と組織、さらに温度・圧力条件に相応した鉱物の成長や相転移、分解現象などの特徴やしぐみについて講義する。また、生活の中で利用されている鉱物の性質や合成についても紹介する。

<到達目標> 鉱物の基本的な物性や安定性、挙動を理解し、地球や惑星上での物質の状態や変化を類別することができる。また、生活のなかの鉱物の活用を例示することができる。本講義は、地域環境科学コースにおける学習・教育目標(D)(基本的な知識、技術、理論性およびそれらを地域社会の問題解決に応用できる能力を養う)に対応する。

④授業担当教員：阿部

レビュアー：大和田・今岡・永尾・宮田・脇田・澤井・永嶋

⑤レビューの方法：レビュアーによるコメントおよび講義後に行う学生授業アンケート(無記名)

2) レビュー結果

授業研究会

日時：同日 17時45分～18時30分

出席者：大和田(座長：教育改善WG)・今岡・永尾・宮田・脇田・澤井・永嶋

①指摘・改善事項

<改善を要しない点>

アンケート：話のききとりやすさ、声の大きさ、プロジェクター等の読みやすさ、質問の時間、私語等への注意は、良好な結果であった。ビデオ動画に好意的な感想があった。今後も素材を探したい。

レビュアー・研究会：パワーポイント、話し方(声の大きさ、速度)等は、適切である。ビデオ動画、

板書等の併用も、良かった。

<検討もしくは配慮すべき点>

アンケート：学習の達成度は、約4割が50-70%、さらに約4割が70-90%であるが、それ以下も2割に及んでいた。説明の仕方のわかりやすさに関しては2/3が満足しているが、1/3が満足していない。両者の相関が認められることから、説明への配慮を増やすことで、理解度改善の可能性に気づかされた。ただし、授業内容の構成から、本日の講義内容は、3-4回分の積み重ね、総合的な要素も兼ねており、学生の理解度に幅がでるのは致し方ない側面もある。

学生の意見として、レビュアーと異なり、講義速度が速い旨の感想も寄せられた。少しだけ間を増やすよう心がけたい。

レビュアー・研究会：平衡と非平衡の区別、説明をもっとすべきとの意見があった。この回だけを見れば、もっともな指摘であるが、前々週までは平衡に根ざした説明を行い、前週から平衡からずれた現象の説明に移行している。また、授業の所々で、平衡、非平衡を意識するように講義している。ただし、講義時間の関係で説明が終わらず、次回までの課題としたため、余計説明不足の印象があったと思われる。次回講義で継続して説明したい。もっとも、指摘を受けた箇所はここ数回の講義のまとめた側面がある事項である。平衡下の現象であるか、平衡から外れた現象であるか考えさせ、正しく理解しているかを確認するために、敢えて前提条件を言わず、解を2つ提示してその条件やプロセスを考えるよう学生に問いかけた。平衡、非平衡を学生が意識してくれることを望んでいる。

難易度に関しては、2年生には少し難解ではないかとの指摘と、適切であるとの両意見があった。重要な現象であり、極力基礎的事項に内容を絞り、継続したい。講義内容の重複等は一部認められるが、重要部分の確認程度であり、問題ないレベルであることが研究会でも確認された。

<改善すべき点>

レビュアー・研究会：ビデオの際、照明の調整が望ましいとの指摘があった。以後注意したい。今回の講義の目標、全体とのかかわりに関する言及が不足している旨の指摘があった。個別の目標やポイントに関する説明を忘れないよう今後留意したい。

②今後の課題

アンケート：講義に関する興味が必ずしも高くない。トピック等の挿入を増やすなど、方法や話題を検討したい。

レビュアー・研究会：予想される最終成績に関して、一般的な議論がなされた。他と同様にふたつのグループ（学習目標を達成しているものと、そうでないもの）が予想される。講義や試験の内容やレベルは、年々少しずつ修正し、比較的容易に身につく内容を想定しているが、復習等の習慣がないため、習熟度の幅を広げているように思われる。いかに復習するよう指導するかが今後の検討課題である。口頭による説明だけだと、メモをとらない学生が多い。板書（説明文）を多用すると、書き写しに夢中になり、説明を理解しない。そのバランスに関して、研究会で議論された。また、ノートへの記述程度が学生による個人差が著しいように思われる。要検討課題であり、今後のピアレビュー等を通して、改善できればと思う。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 大学教育センター・理学部共催FD研修会

(1) 理学部教育改善FD研修会

主催： 大学教育センター・理学部共催
 日時： 平成24年10月31日（水） 13:00～14:00
 場所： 人文・理学部大会議室
 講師： 糸長 雅弘 (大学教育センター長)、小川 勤 (大学教育センター教授)

参加者：理学部教員 19名

内容：本研修会では、理学部におけるポートフォリオの実施について意見交換を行った。理学部では物理・情報科学科、生物・化学科が基本フォーマットを利用、数理科学科、地球圏システム科学科が独自様式を利用する計画となっている。最初に大教センターの小川教授より理学部の学生ポートフォリオ実施計画について、数点の質問が行われた。



まずは、各学科がこれに回答する形で、研修が進められた。

その後全体に対して、要望・意見が大学教育センターから問われた。それに対して「今後は紙ではなく web で行うべきという強い希望がある。」という意見があり、糸長センター長から「現在、新しい共通教育の導入に伴い修学支援システムの改修が必要になっている。それに合わせて、履修カルテの対応を第一に、現在のポートフォリオも包含する形で今年度中の実現を検討中。」と状況説明があった。さらに、数理科学科から「現在は就職の連絡票を配っていて効率が悪い。電子化の際には就職関連システムも統合して頂きたい。」と要望が上がった。

「教職履修カルテとポートフォリオの位置づけが似ている。同じような事を2回やらされると、それぞれがないがしろにされる可能性がある。」と指摘があり、糸長センター長から「教職カルテと共通する項目は自動的に入るような仕組みを考えたい。」と返答があった。これに対し「学部としては履修カルテをやっている人はポートフォリオはやらぬという運用もありか？」という質問があり、糸長センター長から「ポートフォリオが履修カルテに含まれる形ならそれも有り。」と回答され、「山大の履修カルテは他大学と比べて簡便。教職課程委員会の方針次第だが、とりあえずスタートしたあの形が将来もあのままということはないと思う。」「修学支援システムの業者が履修カルテのシステムを持っており導入事例もあるらしい。本格的な物に対応できるはずなので、山大の簡便な形なら当然対応できるはず。」等の補足が行われた。これに対して「先程、今春に教職カルテを基に面談を行い効果があったと言ったが、内容が良かったわけではない。面談が良かった。教職カルテにない項目について質問を受けたりした。ポートフォリオを充実させるのは反対。簡便にした方が良い。面談が一番効果ある。」と意見が上がり、糸長センター長から「これを考えた平尾先生は、最初から複雑なポートフォリオは実施してもらいにくいだろうと、まさに先生の言われた効果を期待して始めた。先生の意見はまさに期待通りで心強いサンプル。」と返答があった。

基本フォーマットの学業以外・サークル活動・アルバイトの記述は、他学部では社会活動等という名称に変えたいという希望があった点について、数理科学科から「成績不振者の中にアルバイトで授業に行けなくなった学生がいるので、項目があればコメント出来ると思い残した。」とコメントがあった。

「基本フォーマット利用の場合、各学年のどの時期に行うのが効果的？」との質問もあり、糸長センター長より「今のところ回答出来るものを持っていない。スタートしたので他大学の状況も見て次

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.3%
良かった	11	57.9%
どちらとも言えない	3	15.8%
あまり良くなかった	2	10.5%
良くなかった	2	10.5%
無回答	0	0.0%
合計	19	100.0%

年度以降言えるようにしたい。」とコメントが返された。

「ポートフォリオ導入は面談してもらいたいからだであったが、次年度以降臨機応変にフォーマットを変えても良いのか？」との質問には、糸長センター長から「前年度からの継続性の問題はありますが、より良いフォーマットに変えるのは問題ない」と返答された。

「年1回と言っているが、物理情報科学科は既に年2回面談を行っておりフォーマットには抵抗があった。担任制を実施しており、各教員で独自の質問シートを用意していると思う。共通項目はあっても良いと思うがあまり複雑にするのは良くない。学科の事情がある。」「電子化するとフォーマットが毎年変わるようなのは対応出来ないと思うし、お金もかかるので単にアップロード出来るだけで良いと思う。」等の意見も上がり、糸長センター長より「複雑なものより簡便なものと言うのは理解した。既にやっていて必要ないところはそれで良いというのが此方のスタンス。結局学部として使いたいのはごく一部となるので、形式より運用を大事にしたい。それとは別に電子化は必要と考えている。」「履修カルテは形式が必要だが、今のポートフォリオはPDF化したものを保存するだけという形も考えたい。学生に根付いたら、いろんなものを残したいとなる可能性はあるが、それはファイルに入っていて必要なときに引き出せるだけで十分はず。元々のポートフォリオはデザインをやる人が作品を挟んでいくものだと聞いているのでそういう機能は必要と思う。」等の回答が行われた。

「物理情報科学科では学生が困っている事をeLearning上で毎年アンケートしている。今日伺った話では面談の基礎資料として役立つ面は納得した。今年はテンプレートに沿って実施と回答したが、これまでのアンケート項目と重複する内容もある。全学的電子化に移行するまでは、学科で使っているアンケートを使う方針に変換可能か？」という質問もあり、糸長センター長から「それをポートフォリオと考えられるなら良い。根拠資料があれば中期計画の評価も3に出来る。学生のキャリア形成に役立つ物にして頂けると良い。」と回答が行われた。

「ポートフォリオの要件は見直せるかどうか?(残すのは)印刷すれば良いか？」と言う質問には、糸長センター長から「それを残して頂きたい。学生が持つだけではなくしてしまうので困る。」と回答された。

(2) 講師派遣型アラカルト研修会「発達障害学生の理解と対応 —入学

から就労までを視野に入れて—」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成24年10月3日(水) 14:30~15:30

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 木谷秀勝(教育学部附属教育実践総合センター教授)

参加者： 理学部教員43名

内容： 本研修会では本学でも多くみられるようになった発達障害の学生について、修学や学生生活、就労に向けてどのように対応すべきかについて様々な事例をもとに説明がなされた。

はじめに、軽度発達障害について、その特徴と支援方法のポイントについて説明された。次に、大学教育における発達障害学生の支援においては、現状では専門スタッフが不足しており組織的な支援体制も十分とはいえず発達障害学生が支援を受けていないケースも多いため、専門家以外の大学職員の対応も必要とされていることが説明された。また、発達障害学生の就職活動や就労では様々な困難が伴うので、早めに外部の組織(公的組織やNPO)を活用して就労支援に努めるとともに学内での支援、具体的には就業体験をさせるためのインターンシップへの積極的な参加やインターンシップ前に学内でインターンシップ(学内インターンシップ制)を導入することの重要性が説明された。また、特に発達障害の学生の支



援については、1年生から継続的なケアが必要であり、そのためには学生と信頼関係を築くことが最も重要であるため、協力をお願いしたいとの話があった。

質疑応答では、発達障害学生の指導経験をもつ教員から、個人的にその学生の修学や学生生活について様々な支援が必要であり、負担になるので組織的に支援する体制を整備してもらいたいとの要望があった。また、他の教員からは発達障害学生を取り巻く周りの学生の理解と支援も必要となるが、病気については個人情報観点から本人の承諾なしに他の学生に伝えられない状況にあり苦慮しているがどうすれば良いか、何らかのメンタルな問題を有していると思われる学生に医療機関の受診や支援を受けるように勧めたいがどのように本人に伝えれば良いか、本人が診断結果を認めたがらない場合はどうすれば良いか等さまざまな質問がなされた。これに対して講師からは「個人情報の取り扱いについて十分な配慮も必要であるが、発達障害学生に対する情報を共有し組織的な支援が必要であると考えている。問題を有している学生への対応については、保健管理センターに相談するとともに、学生の家族への相談も必要と思われる」との回答があった。

研修会後のアンケートでは、「現場の意見や実態が聞けて良かった」、「具体的な指導方法を聞きたい」、「定期的（1年ごとぐらい）に開催し、大学内の取り組みの現状・変化等を聞かせていただきたい」、「内容が難しい」、「支援の仕方等、もう少し適応事例毎に知りたかった」、「『発達障害』についてまったくの素人だった。知識が身についた」、「発達障害の学生とは何かについて良くわかった」等の感想が寄せられた。また、今後希望する研修会については、「今回のように、教育・指導の観点で有意義な内容」、「我々教員にとって共通する問題を扱う内容」、「発達障害学生への具体的な支援の方法」、「学習意欲を失くした学生に意欲を出させる方法」、「学生への対応に関する実践的な話題（今回のような）」、「学習障害についての他大学での様々な取り組み例の紹介」、「学生の個人指導方法」等の回答があった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	18	48.6%
良かった	17	45.9%
どちらとも言えない	2	5.4%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	37	100.0%

（3）講師派遣型アラカルト研修会「学生相談室の相談内容から見えてく

る最近の山口大学の学生の実態」

主催： 大学教育センター・理学部共催

日時： 平成24年11月7日（水） 14:30～16:00

場所： 人文・理学部大会議室

講師： 今井 佳子 先生（山口大学学生相談所 カウンセラー）

参加者： 理学部教員 32名

内容： 本研修会では、学生相談所に寄せられた学生や保護者、指導教員からの相談内容の概要が説明され、教員としての対処の在り方について説明が行われた。学生からの相談には自分の性格や対人関係（友人、ゼミ、恋愛、先生）、体調不良（特に緊張による胃腸系の不調）、転学科・編入学や学習への不安、クラブ活動における人間関係のトラブル、大学院進学への悩みに関する相談が多い。



一方、保護者や指導教員からは不登校や引きこもり、連絡がとれなくなること（電話をかけても出ない等）についての相談が多い。これらの問題を抱える学生には鬱的傾向がみられる場合が少なくなく、自殺等の最悪の事態にも繋がりがねないケースもあるので、学生の相談に十分に傾聴しながら、指導教員や保護者、学生相談所、保健管理センター、学務係等の事務、他の教員等と相互に連携してサポートする体制を築くことが重要である。これらの説明に加えて、相手の話を理解することの難しさを体験するために「一方的なコミュニケーションを体験するゲーム」が行われた。このゲームを通じて、学生からの相談には注意深く耳を傾けるとともに、信頼関係を築いていく重要性が説明された。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	17	54.8%
良かった	13	41.9%
どちらとも言えない	1	3.2%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	31	100.0%

質疑応答では、学生が抱える問題によっては家族カウンセリングも必要な場合もあるのではないかと質問があった。これに対して講師からは「学生の家族関係に問題がありそうな場合には、本質的には家族カウンセリングも必要と考えている。学生の家族に問題があるかどうかは表面的には分かり難いが、それが疑われる学生は特に問題を抱えやすいので気をつけてほしい」との回答があった。

研修会後のアンケートでは、「最近の学生は多様なので、今日のような話は学生と接するときの参考になる」、「今回のような内容の研修会には是非参加したい」、「学生への対応の仕方がよくわかった」、「自分の仕事に対する意識が変わった」等の感想が寄せられた。今後希望する研修会については「学生の心の問題をテーマとするもの」、「不登校学生に関するもの」、「学習成果の組織的アセスメントの方法をテーマとするもの」、「日常の業務で困っている問題に参考になるもの」等の回答があった。

第3節 教育改善に関する活動

1. 「サイエンス実習」における学士力育成の取り組み

理学部では平成20年度から、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成のため、サイエンス実習Ⅰ、Ⅱ（各1単位）を、さらに理工学研究科（理系専攻）では、サイエンス特別実習Ⅰ、Ⅱ（各1単位）を実施している。

履修学生は、科学理解増進活動事業（例えば、山口大学理学部サイエンスワールド）に向け、自らが企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、一般市民に対してプレゼンテーションを行う。それらを通して上記能力を身に付けさせることがサイエンス実習の目的である。毎年、20名から30名の学部生、大学院生が履修しており、教員からは明らかな教育効果が見られると評価されている。ここでは、その取り組みの一例を報告する。

理学部 物理・情報科学科 情報科学コースのサイエンス実習

物理・情報科学科1年生4名、2年生1名、3年生7名、4年生6名、物理・情報科学専攻1年生、1名、2年生2名が受講し、4つの出展を企画した。7月3日から9月25日まで7回の全体ミーティングを実施し、各出展の進捗報告、課題のリストアップ、課題解決策、プレゼンテーション方法等について教員を含め全員で議論しながら実習を進めた。

サイエンス実習担当教員：野崎浩二教授、末竹規哲准教授

実習例「モザイク画 何が見えるかな？」(10月28日 サイエンスワールド2012)

この出展では、来場者に楽しみながら プリンタ印刷の仕組みを学んでもらうことを目的とした。具体的な出展内容は、

(1) スタッフが来場者の方の写真を撮り、その顔写真を塗り絵用の画像に加工する。

(2) スタッフの説明の後、来場者自身がプリンタの気持ちになって、その塗り絵用の画像をペンで着色する。

というものであった。

出展にあたっては、テーマの選定、具体的な内容の決定、準備、注意事項等に関して、補助教員の指導の下、事前打ち合わせを数回程行った。その他の具体的な準備については、すべて学生自らが創意工夫を凝らして行った。当日は、大きな問題もなく、来場者にも比較的満足してもらうことができた。学士力を総合的に育成するという観点から、この取り組みは、サイエンス実習学生にとって非常に有意義なものとなったと考えられる。

2. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。平成23年度には、学長裁量経費を申請し、低年次教育改革を実施した。平成24年度も引き続き、改革のための取り組みを行った。以下に、理学部全体および各学科におけるそれぞれの取り組みの一部を報告する。

(1) e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

1) 理学部における e-ラーニング導入・利用支援体制

理学部では理学教育企画センターが中心となり、平成21年度から教員が e-ラーニングを専門教育の授業に積極的に導入・活用する支援の取り組みを行ってきた。今年度も理学部長裁量経費を申請し、教員の e-ラーニング導入・活用を促進するための支援員(技術補佐員)を1名配置して、Moodle 利用時の技術的な支援体制を整備するとともに、大学院生を中心とした教材入力補助体制も構築した。

2) 数理科学科における e-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の科目で e-ラーニングを活用した。

①授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科1年生(約55名)

活用方法：自習時間の増加を狙って e-ラーニングの活用を今年度より開始した。数学に関する基本的な事項に関する問題を小テスト形式で毎週一定の量を解答させた。この授業では、成績の10パーセントを e-ラーニングのテストによる成績で評価しており、ほぼ全て学生が e-ラーニングを活用した。アンケートでは、50パーセント以上の学生が e-ラーニングを使うことにより数学の勉強時間が増えたと回答しており、当初の目的であった学習時間の確保という面では大きな効果があったと考えられる。

②授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科2年生(約55名)

活用方法：自習用の課題として e-ラーニング教材を利用した。今年度にこの授業で e-ラーニング教材を利用した学生は全体の25パーセント程度であった。本授業科目における e-ラーニングの活用はまだ試験的な試みであり、今後利用を拡大していくことを検討している。

3) 物理・情報科学科における e-ラーニングの活用事例

本年度、物理・情報科学科では「情報数学 III」、および「物理と情報のための応用数学 II」で、演習用の e-ラーニング教材を作成した。さらに、昨年度の e-ラーニング教材を改訂し、内容を充実させた。

1. ロジカルシンキング e-ラーニング教材 【新規作成】
2. 数学の基礎訓練: 関数の基礎編 e-ラーニング教材 【改訂、内容の充実】
3. 数学の基礎訓練: 微積分の基礎編 e-ラーニング教材 【改訂、内容の充実】
4. 学習理論 e-ラーニング教材 【改訂、内容の充実】

さらに、以下のビデオ教材を新規に作成した。現時点では e-ラーニングシステムにログインしたときのみ閲覧可能である。

5. ロジカルシンキング入門(3 本)
6. 学習理論(2 本)

今年度初めて e-ラーニング教材を使用した「情報数学 III」、および「物理と情報のための応用数学 II」で、実施したアンケートでは、以下のような回答が得られた。

- ・ e-ラーニングの宿題はどのくらい解きましたか? → 「ほとんど解いた」または、「だいたい解いた」と答えた学生は 90%以上。
- ・ 1 回分の宿題にかかる時間。 → ほとんどの学生は 1 時間程度。
- ・ 授業を理解する上で、e-ラーニングの宿題は役に立ちましたか? → 「非常に役立った」、「ある程度役立った」と答えた学生は 95%以上。
- ・ e-ラーニングへの要望 → 途中の計算過程の解説も e-ラーニング上で見れるようにしてほしいと答えた学生が多かった。

また、「基礎数学 I、II」(西井教授担当)の講義では e-ラーニングのドリルを宿題としているが、「e-ラーニングの宿題は理解度の確認や勉強のきっかけにするために有効と思いますか。」との問いに対して受講生の約 9 割が 5 段階で 4 以上(そう思う、もしくは、ややそう思う)と答えている。「計算モデル論演習 II」では、e-ラーニングシステムを利用した、学生によるレポートの相互評価を実施し、「レポートの自己採点は、自分のレポートの反省に役立ったと思いますか?」という問いに対して受講生の約 9 割が 3 段階で 3 以上(そう思う)と答えている。

以上のように e-ラーニングによる宿題は学生には前向きに捉えられているようである。

また、e-ラーニングシステムを用いたアンケートを 2 回実施した。物理・情報科学科に入学してくる学生の状況を把握するために新入生アンケートを 4 月に行い、1 月には全学年に対して、授業の満足度、学習が困難と考えている科目、普段の学習方法、就職希望、大学生活での抱負、要望等の調査を目的に、「総合アンケート」を実施した。これらの結果を学生指導や授業改善に利用している。

4) 生物・化学科における e-ラーニングの積極活用事例

生物・化学科では、昨年から開始した 1 年生の必修科目での e-ラーニングに加え、化学コース 3 年生の選択科目と理学部共通科目でも e-ラーニングを活用した。

①授業科目名：有機化学 I

対象学生：生物・化学科 1 年生 (必修科目) 受講者数: 85

授業担当教員：石黒勝也

e-ラーニング：6 回 (各 10~15 題)

第 1・2 章演習	受験件数: 137
命名法演習 (1)	受験件数: 157
第 3 章演習	受験件数: 117
命名法演習 (2)	受験件数: 106
第 4 章演習	受験件数: 106
第 5 章演習	受験件数: 104

②授業科目名：有機構造化学及び演習

対象学生：生物・化学科3年生（選択科目）受講者数: 42

授業担当教員：石黒勝也・村藤俊宏・藤井寛之

e-ラーニング：2回（各25題）

有機構造化学演習（1）受験件数: 77

有機構造化学演習（2）受験件数: 60

③授業科目名：化学概論

対象学生：生物・化学科1年生（必修科目）、物理・情報科学科及び地球圏システム科学科2年生（理学部共通科目）、受講者数: 121

授業担当教員：山崎鈴子・石黒勝也

e-ラーニング：4回（各10題）

演習1 受験件数: 186

演習2 受験件数: 177

演習3 受験件数: 149

演習4 受験件数: 127

化学の授業におけるe-ラーニングでは、Moodleシステムの化学構造式描画用アプレットに由来するトラブルが多発していたが、e-ラーニング支援員の協力により概ね解決することができた。

（2）教材開発や補習授業の実施

物理・情報科学科では、以下のように教材開発を行った。

1) 共通教育物理学実験教科書「基礎物理学実験（東京教学社）」の改訂

著者：繁岡、朝日、笠野、新沼、藤原、野崎

2) 共通教育「物理学I」（担当教員：坂井伸之教授）において、剛体力学と電磁誘導に関する演習用の実験教材を開発した。

また、西井淳教授は、以下の教材をすべてweb上で公開しており、学外からの利用の問合せも受けている。

<数学の基礎訓練シリーズ>

1. 数学の基礎訓練: 関数の基礎編
2. 数学の基礎訓練: 微積分の基礎編
3. 数学の基礎訓練: 線形代数編
4. 数学の基礎訓練: 応用編

<力学の基礎訓練シリーズ>

1. 力学の基礎訓練: テキスト
2. 力学の基礎訓練: 演習編

<計算機関連の資料と演習>

1. C言語プログラミングの基礎訓練
2. UNIX/LINUXの基本操作
3. UNIX操作の演習課題

<その他>

1. 論文の書き方の掟
2. 研究発表の掟

生物・化学科では、平成 22 年度の理学部教育改革 WG の支援により 1 年生の必修科目における補習授業を開始し、平成 24 年度も引き続き以下の 5 回の補習授業を行った。

授業科目名：有機化学 I

対象学生：生物・化学科 1 年生（必修科目）受講者数: 85

授業担当教員：石黒勝也

1 2 月 5 日	中間テストプレ演習	受講者数: 54
1 2 月 1 2 日	中間テストポスト演習	受講者数: 42
1 月 1 1 日	冬休み課題演習	受講者数: 57
1 月 3 0 日	期末テストプレ演習	受講者数: 40
2 月 8 日	期末テストポスト演習	受講者数: 24

（3）学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科の低年次必修専門科目への学力別クラス編成導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成 23 年度に 4 つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成 24 年度には、1 年生、2 年生の 5 つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。

○「物理と情報のための基礎数学 I、II、III」

・これらの授業科目は、物理学と情報科学の両方の基礎となる内容を学習させるため、将来、物理学コースおよび情報科学コースのどちらに進む学生に対しても同じ内容の学習をさせる必要がある。したがって、講義は 1 クラスで行った。

・学習意欲はあるが、理解度不足の学生に対しては、時間をかけて学習させる対策と個々の学生への指導時間の確保が必要である。演習は発展クラスと入門クラスに分け、入門クラスの演習時間は 2 コマに、発展クラスは演習 1 コマ+自宅学習とした。



○「力学 I」と「電磁気学 I」

・この 2 つの授業科目については、将来、物理学を本格的に学習する学生と情報科学コースに進む学生でその到達度は異なってもよい。したがって、講義、演習ともに学力別クラス編成で実施した。



学力別クラスを設けることで、学力に応じた説明をしやすくなる点で教員にとって講義をしやすくなった。また、基礎数学における学生アンケートでは、「クラス分けをすることは良いと思いますか」との問いに対して受講生の約 8 割が 5 段階で 4 以上(そう思う、もしくは、ややそう思う)と答えているように、学生も、その学力に問わずクラス分けには賛成している。

実際に、学力向上の効果を検証することは、コントロール実験ができないため困難であるが、クラス分け編成導入後、単位取得率は上がっているので、おそらくは効果があったと判断している。

（4）その他の取り組み

学生参加型授業の更なる実現をめざした物理・情報科学科の新しい取り組み

物理・情報科学科では、講義「ロジカルシンキング I、II」を新設し、単なる講義ではなく、2回に一度は1教員で約10人の学生グループを担当する学生参加型演習を行い、個々の学生の学力に応じてきめ細かく指導した。

地球圏システム科学科の教育改善に関する活動

地球圏システム科学科は、「地域環境科学コース」「環境物質科学コース」の2コースからなり、教育改善ワーキンググループにおいて定期的に両コースの教育の質の点検、改善を行っている。さらに「地域環境科学コース」は、日本技術者教育認定機構(JABEE)による審査を受け、技術者教育にふさわしいプログラムに認定されている。この認定を継続するため、学科内の JABEE 対策ワーキンググループにおいて学習・教育目標、学習・教育の量、教育手段、教育環境、学習・教育目標達成度、教育改善などの共通基準と「地球・資源およびその関連分野」の分野別要件について常に厳しい点検を行っている。今年度は、教育効果のさらなる向上を目的に、授業の新設、現行科目の統合および科目名の変更、選択科目の必修化、開講時期の変更等を行った。新カリキュラムは平成25年度入学生より適用される。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

理学部で開設している専門科目223のうち、学生授業評価対象科目は171科目である。その内、実際に学生の授業評価を実施したのは166科目で実施率は97.1%であった。以下に授業評価結果の年度推移を理学部全体、学科・コースごとに検証する。

図1は学生の授業外学習時間(正規化した指標)の自己評価の年度推移である。1学科において2012年度に減少しているものの、その他の全ての学科においては、授業外学習時間が年々増加している。学生の自己学習能力強化を目標にしてさまざまな対策を講じてきたが、その効果が着実に現れ始めていると思われる。図2は、学生の授業への出席に関する自己評価結果である。各学科・コースで違いがあるものの、自己評価結果は概ね良好である。

図3は学生の授業目標達成度に関する自己評価結果である。1学科を除き各学科・コースとも、ほぼ上昇傾向にある。図4は教員側から見た学生の授業目標達成度についての評価結果の年度推移である。教員の評価に対して学生の自己評価が低いことがわかる。

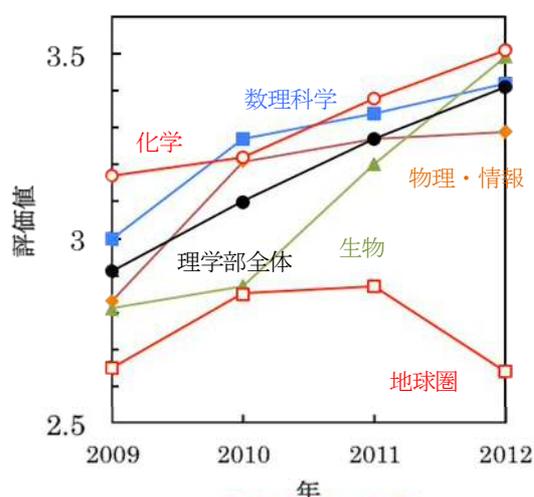


図1 学生の授業外学習時間(正規化した指標)の年度推移

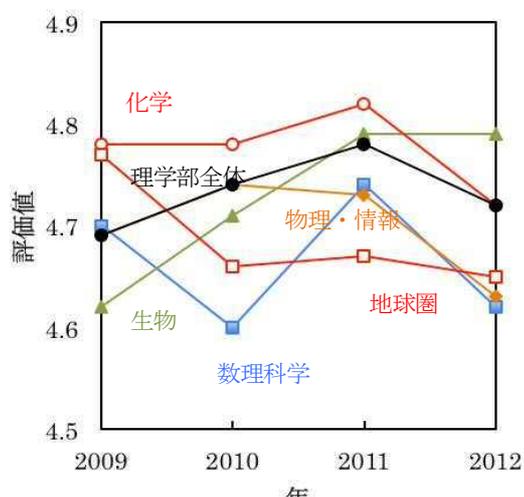


図2 学生の授業出席についての自己評価結果の年度推移

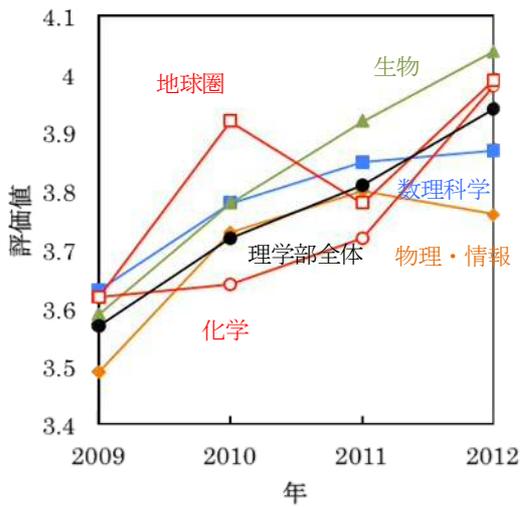


図3 学生の**授業目標達成**についての評価結果の年度推移

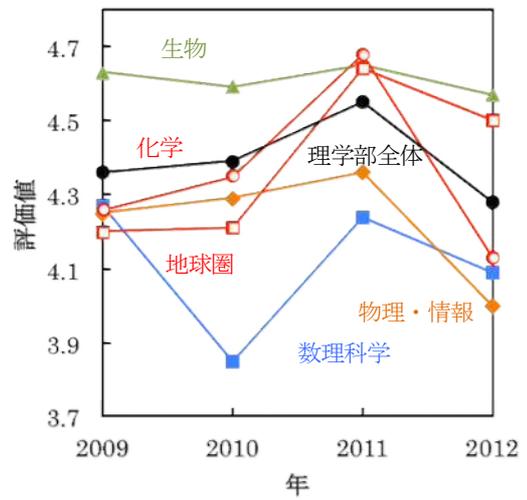


図4 教員側から見た学生の**授業目標達成**についての評価結果の年度推移

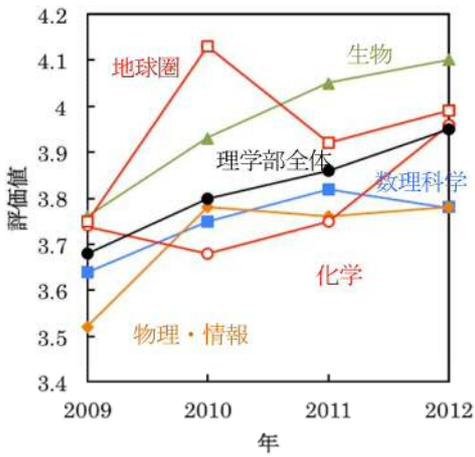


図5 学生の**授業理解度**についての自己評価結果の年度推移

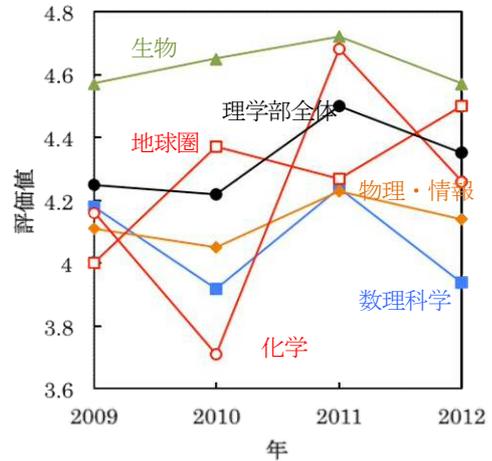


図6 教員側から見た学生の**授業理解度**についての評価結果の年度推移

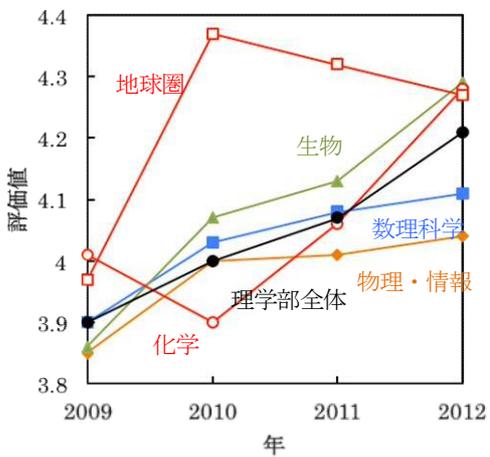


図7 学生の**授業満足度**についての自己評価結果の年度推移

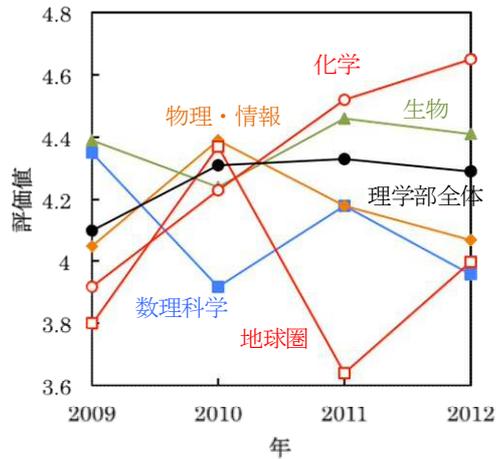


図8 教員側から見た学生の**授業満足度**についての評価結果の年度推移

図5は学生の授業理解度についての自己評価結果の年度推移である。一方、図6は教員側から見た学生の授業理解度の評価結果である。授業目標の達成度同様、学生と教員側で評価に開きがある。図7は学生の授業に対する満足度の自己評価結果の年度推移である。1学科だけは2年連続で減少しているように見えるが、他の学科に比べて評価値が高い学科なので問題にはあたらない。むしろ、評価値が低かった他の学科・コースすべてで増加しており、その結果、理学部全体としてみると4年間で学生の授業満足度は大きく増加したと言える。図8は教員が自分の実施した授業について学生が満足しているかどうかを評価した結果の年度推移である。1コースだけは、4年間で大きく増加しており、学生の視点に立って授業内容を工夫していることが読み取れる。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
理学部	高大連携FD	新高等学校学習指導要領による教科書の購入	61	新学習指導要領によって平成27年度入学者の既修得内容を把握し、初年次教育内容を検討することにより、授業計画を早期に開始できる。
計			61	

第6節 来年度の課題

理学部では、理学教育企画センターが中心となり、教育改善に努めている。その中で表面化した課題は、学生の自己学習習慣と能力の不足である。物理・情報科学科では他の学科に先行して、個々の学生の学力に応じたきめ細かい指導を行うために、上述したように、学力別クラス編成、学生参加型演習などの取り組みを行った。さらに、今年度、試験的に5本程度のビデオ教材を授業に利用した。その結果、「試験前等には何度も繰り返して見て勉強した」といった報告が学生からあった。このように、一度講義中に聞いただけでは内容を理解できない科目において、ビデオ教材には効果が期待できる。また、このような教材を活用した自習を促すことで、大学では学生参加型の授業への時間確保も期待できる。このような低年時教育の充実についての取り組みを今後も継続し、その効果を見極め、理学部全体での教育改善へと繋げていくことが必要である。

第8章 医学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 保健学科

(1) 授業公開 (ピアレビュー)

- 1) 日時 : 平成25年1月9日(水) 8:40~10:10 S3講義室
- 2) 科目名 : 病態生化学I
- 3) 対象 : 検査技術科学科2年生(必修)
- 4) 担当教官 : 検査技術科学専攻 服部幸夫教授
- 5) 参加者 : 看護専攻教員20名、検査技術科学専攻10名 計30名

【講義の目的】

本科目は、生体の生命維持や活動に必要なたんぱく質や酵素、ミネラル等についてその摂取や体内での合成および代謝過程を理解し、血中や体液中におけるそれらの数値の変化と生体の恒常性について生化学的見地から考察することを目的としている。本科目を学ぶことにより様々な病態が理解でき、実際に臨床現場において生化学検査がどのような役割を果たすか、また異常値が測定された場合、臨床検査技師としてどのような対応をすればいいのかなど、多岐にわたる見識や知識を習得することができると思われる。

本日の講義は、肝臓が産生・分泌するALT(L-alanine (2-oxoglutarate) aminotransferase)、AST(L-aspartate aminotransferase)、 γ -GT γ -glutamyl transferase)、ChE (Cholinesterase)、その他の酵素であるAcP (Acid Phosphatase)、LAP (Leucine aminopeptidase)、血中薬物等について動態やその測定方法、数値の変化が生体にどのような影響をおよぼすかについて詳しく説明し、臨床検査への応用方法について考察する。



【講義スケジュール】

- 8:40~講義目的の確認と、前回までの授業の復習
- 8:50~生体における肝臓の役割および肝疾患の病態について
- 9:20~肝臓が産生・分泌する酵素について、その数値の変化と病態
- 9:50~その他の酵素や血中薬物の動態および解析方法。その数値の変化と病態について

【ピアレビュー】

参加者のほぼ全員からこの授業が病態生化学の知識を身に着けるのに役立っているとのアンケート回答が得られたことから、具体的でわかりやすい授業であったこと、そして学びの多い研修であったと考えられる。また、授業方法についても6割以上の参加者から適切だったとの評価を得た。

ピアレビューについては9割以上の参加教員から有意義であったとの評価があり、次年度以降も同様の研修会を開くべきであると考えられる。また、アンケートには授業者に対してストレートに改善点についてもいくつか記入されており、授業者および参加教員双方に実りの多い研修会となった。

また、7割以上の参加教員が次年度以降についてもピアレビューを希望していることから、教員の中から数名の授業者を選び、後期、特に1月ごろに開催していくのが適当であると考えられた。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 大学教育機構との共催

(1) 平成24年度 FD担当者研修会報告書

- 1) 主催 山口大学 大学教育機構
- 2) 日時 平成24年5月9日(水) 17:40-18:30
- 3) 場所 第一テレビ会議室、工学部E21番教室、医学部第3講義室
- 4) 対象 各学部・研究科FD担当者 (参加者: 担当教員数: 12名、参加総数: 18名(オブザーバー, 大教センター主事・教員含む))
- 5) 報告

最初に糸長大学教育センター長より、本研修会の開催趣旨が説明された。本学のFD活動は全学FDと学部・研究科FDの2本立てになっていること。さらに、全学的な教育課題解決に対応する全学講演会および教員個人の教育課題の解決を支援する全学アラカルト型研修会から各学部・研究科がそれぞれの部局が抱える教育課題を組織的に解決するための学部FD、研究科FDというFD活動が現在重要視されつつあることが説明された。この

ため、大学教育センターから講師を派遣して、それぞれの教育課題解決の支援を実施する講師派遣型研修会が今後中心的なFD研修会になることが述べられた。また、例年実施されている各学部を巡回して実施してきた「教育改善研修会」を本年度も実施すること。さらに、本年度の研修テーマはポートフォリオの書式や具体的な運用方法を巡って各学部との

間で意見交換が中心的なテーマになることが明らかにされた。

次に、大学教育センターの小川勤教授より、本年度の教育機構主催の研修会の特徴と各学部・研究科FD担当



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	6.7%
良かった	9	60.0%
どちらとも言えない	4	26.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

者に対してセンターからの依頼事項が明らかにされた。依頼事項は、講師派遣型研修会の開催日時の報告、全学講演会の参加依頼、教育改善研修会の開催日時の報告について締め切り期日までに報告してほしいということであった。

次に、大学教育センターの中田充主事（教育学部准教授）から本年度のFD予算について説明があった。本年度から共同獣医学部が設立され学部が1つ増加したが、概ね昨年度並みの予算（約10万円）を念頭に期日までに予算要求をしてほしいとの説明があった。

最後の意見交換が行われた。共同獣医学部から学部の特性上、今後遠隔授業が増えてくると考えられるが、eラーニングを使った授業方法や遠隔授業の効果的な実施方法に関する研修会を実施したいと考えているので、それに関係したFD研修会や講師派遣で大学教育センターに協力してもらいたいという要望が出た。また、技術経営研究科からは来年度から英語を使った授業を宇部地区のキャンパスで実施する予定であるので、学内外における英語を使った授業の現状とこれに関するFD研修会を実施する際に協力をお願いしたいとの協力依頼があった。上記の2つの依頼については現状を調査した上で大学教育センターから当該学部に対して回答するとともに、今後、連携・協力していくことになった。さらに、人文学部からは教育改善研修会の意見交換の内容について質問があった。すなわち、人文学部では今月中にポートフォリオの内容を機関決定する予定であるため、後から意見交換の結果で変更しなければならない事態は避けて欲しいとの意見であった。これに対して糸長大学教育センター長からは提出されたポートフォリオに関して意見は述べるが、すぐに変更して欲しいということではなく、次年度以降のポートフォリオの見直し作業の際に今回の意見交換の結果を参考にしてほしいという説明があった。また、今回は特にポートフォリオを各学部で実際にどのように運用し、改善していくのかについて意見交換を実施したいとの回答があった。

当該研修会後のアンケートからは、研修時期については73.3%がこの時期でよいという回答であった。また、今後受けてみたい研修としては「発達障害学生への対応に関する研修会」や「就職指導に関する研修会」などの研修会への参加希望が多かった。

（2）「ポートフォリオを活用した学びのデザイン —島根大学教育学部に

おける取り組み—」

- 1) 日時：平成24年8月10日（金）13:30～15:00
- 2) 会場：メディア棟 情報メディア講義室
- 3) 参加者：参加総数 101名（昨年71名）（内訳）山口大学（吉田地区66名 小串地区9名 常盤地区4名）、山口県立大学7名、徳山大学10名、山口学芸大学5名
- 4) 講師：富安 慎吾 島根大学教育学部専任講師
- 5) 内容

「ポートフォリオを活用した学びのデザイン」というテーマで島根大学教育学部におけるポートフォリオの活用法について具体的な説明があった。島根大学の教育学部では「プロファイルシート」を利用して、①レーダーチャート、②棒グラフ・数値、③文書を用いて、「客観的評価」、「自己評価」、「他者評価」などの評価を総合的に実施できるように、関係者が情報を共有できるシステムを開発している。このシステムの開発理由は、学生がプロファイルシート作成を通して自らの学びを振り返り、学びの過程



を再認識することにより、「教師として必要な能力の向上」を目指すことにある。

今回の講演では例年通り本学の3キャンパスを結ぶとともに、新たに「コンソシアムやまぐち」に参加している3つの大学（山口県立大学、山口学芸大学、徳山大学）を遠隔授業システムを用いて講演会内容を同時に聴講するという試みを初めて実施した。このため、学長戦略部国際・社会連携課やメディア基盤センターにも協力をお願いして事前準備を実施した。

講演内容は現在本学が全学的に導入しようとしているポートフォリオの具体的な活用法を先進校から直接聞くことができるよい機会になった。研修会後のアンケート調査結果からも「非常に良かった」および「良かった」がアンケート全体の79.7%を占め、講演内容に対する満足度が高い結果となった。また、自由記述には「ポートフォリオに対するイメージがつかめた」、「講演の中で話されていた担任制度（チューター制度）に対して大変関心がある。」、「今回の講演内容は本学の教員が聞いたかった内容だったからよかった」など島根大学におけるポートフォリオの導入に対して本学の教員もかなり刺激を受けた様子を伺うことができた。今回の全学講演会は本学の教育改善の具体的な方向性を考える上で意義のある講演会であった。

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	9	10.7%
良かった	58	69.0%
どちらとも言えない	12	14.3%
あまり良くなかった	3	3.6%
良くなかった	2	2.4%
無回答	0	0.0%
合計	84	100.0%

(3) 平成24年度 派遣型アラカルトFD研修会

「大学教員として知っておくべき知的財産」(大学情報機構と大学教育機構

の共催)

- 1) 日程 平成24年8月22日(水) [吉田地区] 10:00~11:40
- 2) 場所メディア講義室(吉田キャンパス)、E21 番教室(常盤キャンパス)、第3講義室(小串キャンパス)
- 3) 講師 木村 友久(大学院技術経営研究科 教授)
- 4) 参加者 44名(アンケート回収 43名)
- 5) 内容

本研修会は本学すべての教員を対象として、第一部では著作権法の基礎的な知識(著作権、支分権、ライセンス契約等)について、第二部では大学における研究や教育、業務と密接にかかわるタイムリーな内容(バックアップサービスにおける権利関係等)について解説がなされた。第一部の著作権法についての解説では、日常的に起こり得る具体的な事例(資料の複写や配信、遠隔講義、引用等)におい



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	12	27.9%
良かった	27	62.8%
どちらとも言えない	3	7.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.3%
合計	43	100.0%

てどのような問題点があるかを検討するとともに、知的財産法における同法の位置付け、法解釈の手順等について説明がなされた。説明においては実際の裁判事例が紹介され、司法の場における同法の解釈のポイントと問題点が解説された。また、これと関連して支分権（複製権、頒布権等）やライセンス契約で注意すべき点について、事例を交えて解説が行われた。第二部のバックアップサービスにおける権利関係等の説明においては、近年普及が著しいクラウドサービスと著作権法とのかかわりを中心にして、複製や公衆送信の行為主体の解釈、国際裁判管轄と準拠法等について、豊富な事例をもとに解説がなされた。

研修会後に実施したアンケートでは、およそ約 9 割の参加者から「参加して良かった」との回答を得た。自由記述による回答には、「重要な事項であるのに、学ぶ機会が少ないため新鮮だった。研究では著作権のある資料等を用いることも多いので有意義だった」、「専門用語が難しいと思った」、「様々な著作権について勉強になった」、「タイトルの『大学教員として』を『大学教職員として』と変更し、職員の参加も促してほしい」、「今後またクラウドの著作権について研修会を企画してほしい」、「クラウドの著作権について興味がある。時間が短かったので続編を希望する」、「業務に関連した講義が聞けて参考になった」、「具体的な事例が示されたので興味を持って聞くことができた。後半の話は良くわからなかった」、「著作権について今まで漠然としか知らなかったが、概要に触れることができただけでも有意義な研修会であった。本研修会の続編を望む」「教育上使用する映像・画像・音声等の考え方についてもっと知りたい」、「クラウドや apache の話はごく一部の人にしか分からず、全体にむけての話としては、難しかったのではないかと思う」、「事例がわかりやすく、面白かった」、「著作権のことがよく分かった。今後気を付けて対応したい」等の回答が寄せられた。学内における本研修会のニーズは高いと思われるので、今後もこのような研修会の開催を検討してゆきたい。

2. 保健学科

（1）保健学科主導 FD 研修会

- 1) 講師：大塚泰二先生（山口県立山口高校・教頭）
- 2) 日時：平成 24 年 12 月 20 日(木) 16:00～17:00
- 3) 場所：山口大学医学部総合研究棟 S4 教室
- 4) 演題：山口高校の取り組み
- 5) 研修対象者：医学部保健学科の教職員
- 6) 研修スケジュール(約 60 分)
- 7) 参加者：看護学 18 名、検査技術科学 13 名、無記名 1 名 計 32 名
- 8) 内容：

今回の研修会は外部からの講師として県立山口高校教頭の大塚泰二先生をお迎えし、山口高校の取り組みについて講演していただいた。大塚泰二先生は、昭和 61 年に山口県立高校の教員として採用され、県内の高校で教鞭をとられた後、平成 20 年より山口県教育庁教職員課管理主事に従事し、平成 23 年より現職にある。約 30 年の長きにわたり山口県内の高校教育に携わってこられたエキスパートである。

高校卒業後の主な進路先である大学において適切な教育や指導を行うには、学生の置かれてきた環境や学習・生活の様子についてまず理解する必要があると考えられる。そこで、講演では主に、高校生とその保護者に対するアンケートを基に高等学校の現状についてお話し頂いた。その後、保健学科教職員からの質問にもお答えくださり、今後の大学教育について助言をいただいた。

中でも、思春期の子供たちにありがちな問題について具体的な例を挙げながらお話し頂き大変参考になった。学習態度、部活動の様子や生徒と教師や保護者とのコミュニケーションについての問題な

どは時代にかかわらず普遍的な対応事項である。一方、近年急速に普及したデジタル媒体、すなわちインターネットや携帯電話、携帯ゲームの使用法やマナーなどについてはまだまだ未発達の部分もあり、大学においてもそれらの使い方のルール作りが急務であると考えられた。

参加教員へのアンケートでは、21名から今回の研修会を有意義であったとの回答が得られた。また、29名からわかりやすかったとの評価があったことから、今回の研修会が保健学科教員にとって実りの多いものであったことが示唆された。一方で、少数ながらも、16時からの開催時間が早過ぎる、会場が狭いなどの意見もあった。今年度の反省点にするとともに次年度以降の研修会において考慮すべき事項であると考えられる。

(2) 平成 24 年度 教育改善 FD 研修会

1) 日程 平成 24 年 10 月 10 日 (水)

[小串地区] 13:15~13:45

2) 場所 医学部保健学科第 2 研究棟 HD1 講義室

3) 講師 川崎勝 (大学教育センター教授), 辻多聞 (学生支援センター講師)

4) 参加者 約 40 名 (アンケート回収 35 名)

5) 内容

本研修会では、医学部保健学科における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの川崎教授より、学生ポートフォリオ実施に関する全学の流れに関する説明があった。その概要とは、「中央教育審議会が大学における学士力 (社会人基礎力) の育成があげられ、山口大学の中長期計画・中期目標として学士力の育成を掲げていること」、「その具体的方策として学生の振り返りに伴う自己の PDCA サイクルを大学がフォローして



いくこと」、そして「学生支援センターが主体、大学

教育センターがフォローとして、学生ポートフォリオの全学的導入が検討され、2011 年度教学委員会にてその導入が決定された」というものであった。

次に、川崎教授より保健学科に対して、学生ポートフォリオへの積極的協力の願いが行われた。これに対し保健学科看護学専攻からは、「現在 2 年生以上を対象として実習要綱を示すとともに詳細な実習経験一覧表を記入させ、これをもとに指導を行っている状況であり、すでに実施していると言ってよいだろう」という回答があった。この回答を受けて、川崎教授から「実習の始まる前の学生に対してはどうしているのか?」との質問があり、保健学科看護学専攻から「実習要項への記入は 2 年次以降であるので、1 年生に対する実施方法に関して検討をする」との回答があった。

最後に、保健学科から川崎教授に対して学生ポートフォリオ実施にともなう質問がいくつかあった。その内容は、「①ポートフォリオの保管方法 (提出方法) はどうしたらよいであろうか?」、「②教員一人一人が全員分のポートフォリオを見るのか?」、「③現在の実習経験一覧表は専門に準じた形で作成し実施している。本件のポートフォリオでは社会人基礎力の育成が求められているがどうしたら良いか?」、「④学生全員分のポートフォリオを大学に提出しなければならないのか?」というものであった。これらの質問に対しそれぞれ、「①学生と教職員で 1 部ずつ持っていることが望ましいと考えている」、「②基本的に自身の担当する学生分を見れば十分であろう」、「③大学としては目標意識をもって大学時代を過ごすことを望んでいる。この目標意識の設定は社会人基礎力の育成に通じるものであ

り、現行の実習要項ではほぼクリアできていると思われる。社会人基礎力を育成に関しては必要に応じ追加記入項目などを検討してもらえれば良いと思われる」、「④学生一人一人分を提出していただくことは現在考えていない。ただし実施状況に関する報告は求められることになるだろう。その報告書の書式や提出方法は、今後の教学審議会にて検討されるので、それに従っていただきたい」との回答がなされた。

この研修会によって、医学部保健学科看護学専攻においてすでに実施されている実習経験一覧表が学生ポートフォリオとして十分なことが明らかとなった。そして、そうした実績を基にした十分な内容の1年次向け学生ポートフォリオ実施への期待を感じることができた。

3. 医学科

(1) テーマ (分野) 組換え DNA 実験

- 1) テーマ： 組換え DNA 実験安全講習会
- 2) 開催日時： 平成 24 年 5 月 15 日、6 月 15 日 開催
- 3) 実施時間/回数： 合計 3.0 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 組換え DNA 実験安全委員会
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 組換え DNA 実験安全委員会
- 7) 講演出席者 講演者：1 人 聴衆者：50 人
- 8) 講演 1： 組換え DNA 実験安全講習会 (教育訓練)
- 9) 演者/専門： 学内教員
- 10) 講演時間： 1.50 時間
- 11) 主な内容： 組換え DNA 実験が安全かつ適切に実施されるための講演

(2) テーマ (分野) CBT、試験問題作成

- 1) テーマ： CBT 試験問題の作問及びブラッシュアップ
- 2) 開催日時： 平成 24 年 4 月 13 日～ 1 日間
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内 企画立案者： 医学教育センター
- 6) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：40 人
- 7) 講演 1： タイトル CBT 作問について
- 8) 演者/専門： 学内教員
- 9) 講演時間： 1.00 時間
- 10) 主な内容： CBT 作問に関する説明

(3) (分野) 医学教育全般

- 1) テーマ： 医学教育の質保証と国際認証
- 2) 開催日時： 平成 24 年 11 月 14 日～ 1 日間 開催 大学院と共催
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内

- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：50人
- 8) 講演1 タイトル：医学教育の質保証と国際認証
- 9) 演者/専門：学外・医学系有識者/医学教育
- 10) 講演時間：1.50時間
- 11) 主な内容：医学教育の質保証と国際認証

(4) テーマ (分野) 医学教育全般

- 1) テーマ：医学の中の居場所さがし
- 2) 開催日時：平成24年12月12日～ 1日間
- 3) 実施時間/回数：合計1.50時間 1.50時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：SMAC (Student Medical Academia Center)
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：30人
- 8) 講演1 タイトル：医学の中の居場所さがし
- 9) 演者/専門：学外・医学系有識者/医学教育
- 10) 講演時間：1.50時間
- 11) 主な内容：医学の中の居場所さがし

(5) テーマ (分野) カリキュラム関連

- 1) テーマ：シラバス説明会
- 2) 開催日時：平成24年12月17日～ 1日間
- 3) 実施時間/回数：合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者 医学教育センター
- 7) 演出席者 講演者：1人 聴衆者：40人
- 8) 講演1 タイトル シラバス説明会
- 9) 演者/専門 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間 1.00時間
- 11) 主な内容 平成25年度シラバスの作成に関する説明

(6) テーマ (分野) PBL/チュートリアル教育

- 1) テーマ：展開医学系チュートリアルテューター講習会
- 2) 開催日時：平成24年12月18日～ 2日間
- 3) 実施時間/回数：合計2.00時間 1.00時間/2回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1人 聴衆者：29人
- 8) 講演1 タイトル：展開医学系チュートリアルテューター講習会

- 9) 演者/専門： 学内教員
10) 講演時間： 1.00 時間
11) 主な内容： 展開医学系チュートリアルテューター講習会

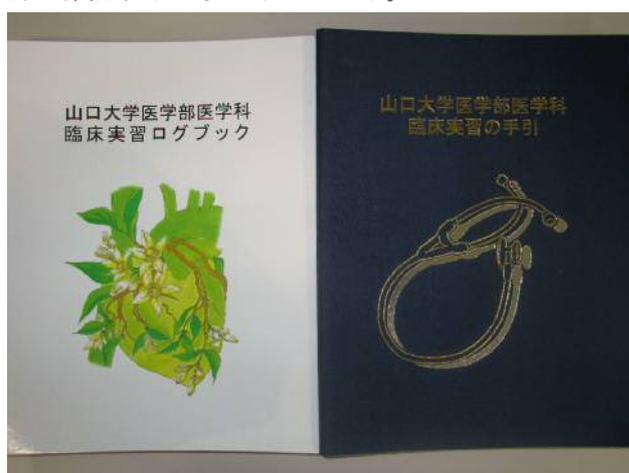
第3節 教育改善に関する活動

1. 医学科

本年度は、臨床実習の手引き、さらには臨床実習ログブックを、初めて作成し配布した。これは、臨床実習が始まる5年生、および6年生を対象としたものである。

山口大学の医学部医学科5年生は、一年間、大学病院の全診療科を1-2週間ずつ、一班4-5人のグループでローテーションする形式での臨床実習を行う。さらに6年生は、合計12週間、大学病院外の施設も含め、自由選択で研修を行うカリキュラムとなっている。ローテーション先での実習内容は、それぞれの診療科に任されており、多くの診療科では実習すべき内容やそれについての到達目標も、明確に定められてはいなかった。臨床系教員は、日々の忙しい臨床業務の中で教育を行う必要があり、さらに実習の場は、外来や病棟だけではなく、手術室や検査室等を含め多岐にわたる。実習で経験すべき内容は多岐にわたるものの、実際に経験することができたかどうか不明であった。

このように、臨床実習の内容に関しては、学生と教員双方の熱意による部分が大きいことは否定できない上に、どのような内容を経験したのか、統一された記録様式等はなかった。今回作成した臨床実習の手引きでは、その診療科で経験、学習可能な内容を明らかにし、その上で実習の目標を明確にした。この手引きを作成する過程で、診療科内では教員間の意思統一を図っていただいた。さらに学生は、ログブックに各診療科での日々の実習で経験した内容を毎日記録する。さらに、一週間の終わりには、本人の感想、振り返りを記入し、その上で指導教員がフィードバックとしてのコメントを記入することになっている。いわゆる、ポートフォリオ形式のログブックを活用することで、学生と教員のコミュニケーションに役立つのみならず、それぞれが経験した内容を振り返り、成長の過程を自身が確認するようになっている。



2. 保健学科

本学科では、学生の一つのゴールは国家試験の合格にあり、これまでも模試の計画等も含めて、学

生の準備状況に合わせて、学年ごとの、緻密な指導を行ってきており、これからもより充実させていくことが重要と考えるが、反面では自主性を失っていく学生もあり、その両面のバランスも考えた指導を行っている。また国家試験の準備とは別に、高年次に病棟実習を附属病院の協力のもとに行い、全人的な医療従事者の育成を目指している。

このような活動を行う中で、常に教官の中でより良い指導を行うための議論を行っている。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価については、以前より、医学科では医学教育総合電子システム[eYUME]上で、教員自己評価、学生による授業評価ともに実施しており、また、保健学科も、保健学科授業支援システム[FHS Web Campus]上で、同様に、教員自己評価、学生による授業評価を行っている。

第5節 FD実施経費報告

1. 保健学科

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
医学部保健学科	高校教師によるFD研修会	講師謝金・旅費 1名	12	今日の高校生の現状を知るために、高校生の教育指導についての取り組みを現場高校教師からお話しいただき、質疑応答を交え、理解を深めた。

第6節 来年度の課題

1. 医学科

(1) カリキュラムの国際認証に向けて

卒前の医学教育の中では、米国 ECFMG (Educational Commission for Foreign Medical Graduates) が2010年9月に出した通達に端を発した教育カリキュラムの国際認証が、大きな話題となっている。これは、国際認証を受けた医科大学出身者に、ECFMGの受験資格を限定するとなっている。米国での臨床医学の修練を受けるためには、この試験を受験することが必要であるが、これをきっかけに単にECFMGの受験資格というより、グローバル化に対応した医学教育が求められている。日本国内の現状は、この評価機関そのものが立ち上げられることが明らかになったばかりであり、国際基準に基づく認証評価制度が確立されようとしているところである。関東の先進的な一部の大学では、すでに米国の認証機関の評価を受けている。

この中で日本の医学部に共通した問題となっているのは、臨床実習(時間数、内容)が欧米に比べて後塵を拝していることである。山口大学も例外ではなく、このことを含め、PDCAサイクルに基づいた、医学教育改善のシステムの構築が求められおり、それを外部から評価されることになる。患者安全の視点から、医学教育の質の担保は、近年の大きな流れの一つであり、本学でも、これに対する準備を組織的に進めていく必要がある。

(2) 教育主任制度

医学部医学科では、次年度（平成25年度）より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始する。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的としている。来年度は、この制度の活用により、より充実した内容の教育を目指す。

(3) 学外での地域医療実習

医学教育モデル・コア・カリキュラムに示されているように、これからの卒前医学教育は、幅広い臨床現場での、診療参加型の臨床実習が求められる。大学病院の高度先進医療とは異なる医療の教育を行うことが必要であり、大学病院外の地域の施設での臨床実習の充実が課題となっている。このため、受け入れ施設の確保はもとより、指導医への指導法の教育についても、検討する必要がある。

(4) 成績不振者への個別指導

医学部医学科では、卒業後に国家試験を受験し、その合格率が全国共通の教育成果の評価尺度としてある。これに加えて臨床実習が開始される前の時点で、共用試験 CBT、および OSCE が施行され、知識、技能、および態度に関する全国レベルの評価を受けることになっている。在学中の早い時期から成績不振者へ介入の行うべきか、学部内で論議を重ねており、個別指導等の配慮を行うべきか、実際にどのように介入すべきか、検討を行っている。

2. 保健学科

本学科では、国家試験の合格率の 100% を目指し、その先に社会人としての医療従事者の育成とともに、大学院への進学者の増加を目指して、医学科とも協力して取り組んでおく予定である。

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通じた国際交流や交換留学を行っており、より国際的な人材育成のための努力を行っていききたい。

第9章 工学部のFD活動

第1節 授業公開

工学部では、これまで毎年度前期と後期に、開講科目を公開授業として期間を定めて一般教員の授業参観を実施してきた。従来から教員の参観率が低いという問題があったので、昨年度から各学科ごとに参観率向上の施策を、一昨年度後期からは参加率の向上を期待して、一定期間を定め、学部全開講科目を対象として授業科目を実施した。

平成24年度(前期)公開授業一覧

前期公開授業実施期間 7月2日(月)～7月19日(木)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全学科	全開講科目	全職	全教員	7月2日～ 7月19日	非常勤講師担当の科目は除く。

平成24年度(後期)公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月3日(月)～12月21日(金)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全学科	全開講科目	全職	全教員	12月3日 ～12月21日	非常勤講師担当の科目は除く。

参加者は前期20名、後期19名、合計39名であり、この人数は工学部の教員数の23%に当たり、昨年度から低下した。工学部として、教員には年1度の授業参観を目標に掲げており、目標達成までには今後更なる改善と普及が望まれる。そのため、多忙な教員のニーズに合わせた工夫・改善が必要と考えられる。

授業参観した教員から提出された感想や指摘などを、原文通り以下に列記する。

1. 前期公開授業感想まとめ

(1) 優れていると思われる点

1) 説明

- ・ 講義内容の根拠に、適切な論文を引用されている点。この雰囲気や学生に伝われば、論理展開の際に、文献を参照する習慣が学生に付くかもしれません。また、引用されている論文が、とても興味深い結果を示しているものが多く、私自身も参考になりました。
- ・ 講義の内容の流れが適切であり、話題が関連していることが理解しやすかった。
- ・ 理解していなければ他の科目にも影響を及ぼしかねない、クラス、イベントリスナー、ハンドラといったオブジェクト指向言語における特徴的な概念について、時間をかけ丁寧に説明されている点は、学生の目線に立った講義を行っている印象を受けた。
- ・ 話の流れ・前後のつながりがスムーズであり、聞いていて頭に入りやすい。学生を正視し、声かけを行いながら進めており、適度な緊張感を保っている。発声が明瞭で聞きやすい。
- ・ 資料や問題が学生に配布され、それをもとに講義されている。
- ・ 学生が、研究室配属後の研究に興味を持てるように、理解しやすい表現で解説を行っていた。
- ・ 現実の問題に即した事柄を実例を交えて説明している。

2) 板書

- ・ ソースコード行数の大きなソフトウェアを扱う段階になると、プログラミングに対して苦手意識をもつ学生は少なくない。こうした学生のことも考え、スライド上で図を多用しつつ直観的に理解できるよう工夫されていた。また、スライドも全体的に非常に見やすくフォントの大きさ等に関しても十分に配慮されていた。
- ・ パワーポイントのまとめ方も分かりやすく、読みやすかった点。
- ・ パワーポイントのスライドが簡潔にまとめられている。
- ・ 板書を使っての説明が丁寧であること。
- ・ 今どきのPowerPointを使用せず、板書によって、説明するので、学生が余裕を持ってノートへの書き写しができている。学生側で考えながら写すことができる。
- ・ 板書による丁寧な講義が行われており、わかり易い講義になっている。

3) 資料

- ・ 製図の知識は広範囲におよぶため、JIS準拠の詳細な教科書を指定し、それを使いこなせるようになることで、生涯使える能力を身につけさせる点が秀逸だと思われる。
- ・ 製図の実技においては、製図道具を用いたby handによる実践から、計算機の2D-CADシステムを用いたDrawingまでを対象に行っており、きわめて実用的なスキルを身につけることができる。
- ・ 問題の解の確認をWEBでのソフトで容易に確認できること。

4) 進め方と工夫

- ・ 学生個別にノーベル化学賞受賞者あるいは受賞業績に関する発表を3分間で行うというミッションが課せられた。新しい試みである。
- ・ 学生が調べた内容をショートプレゼンさせ、学生と教員から質問を受けるという形式は新しい試みとして興味深い今後も継続したらよいと思う。
- ・ 学生が積極的に授業に参加し、緊張すること無く発表できていた。
- ・ 全学生に発表をさせていた。

- ・発表ごとに質問の機会を与えていた。
- ・理解を促進するため、時々指導教員が解説していた。
- ・最近のノーベル賞の受賞には、原理を見出した後、広く応用されることが大きく影響することがよくわかった。
- ・学生に課題（学生個人別）を与え、Web等で調査したのち、結果のまとめをプレゼンさせるという演習科目である。学生ごとに課題が異なるため、学生の努力の結果を公正に評価できる（コピペ・レポートではない）。またプレゼン評価を学生相互に行うことにより、単なる報告ではなく、積極的な授業参加を促している点が優れている。
- ・講義中に、出席を兼ねた質問表を学生に書いてもらい、その回答を、講義の最初で行っている点。学生の理解度が計れ、良いコミュニケーションになっている。
- ・成果発表会を参観しましたが、発表に対し学生から多くの質問がなされ、質疑討論が成立しており、良いと感じました。
- ・ノーベル賞受賞者の紹介を2年生が5分程度で行っていた。3グループに分けて、それぞれの発表と質問を受けていた。学生が自ら参加する方式なので、意欲的に参加できる。また、よい発表に関しては学生自身がわかったり、発表した研究などにも興味を覚えるかもしれない。
- ・講義中説明した内容の説明直後、同じ説明内容を問題として与え、その場で考えさせたこと。
- ・レポート課題をガンガンさせて力をつけさせようとしている。
- ・わかり易い授業が志向されているが、理解度の低い学生におもねるのではなく、理解度の高い学生にも異なる視点から理解が進むような講義であった。

5) その他

- ・類似形式の授業を各学年・各学期に導入することができれば、教育効果がよりいっそう高まるものと思われる。
- ・建築に関する事例を心理学からアプローチするという文理融合の分野は、斬新であり、これからの工学に必須の分野となります。将来、建築を目指す学生には、とても貴重な経験になると思いました。

(2) 改善を検討すべきと思われる点とその理由

1) 説明

- ・パワーポイントの内容を黒板を使って説明されているが、黒板での説明の場合、何の説明か簡単なタイトルを書いた後、説明を書くようにしたら、学生もメモを取りやすいし、後でメモをみてもわかりやすいと思う。

2) 板書

- ・なし

3) 資料

- ・パワーポイントを使った講義ですが、資料を印刷してきた学生は少なく、その印刷も拡大した印刷方法を知らず、字が小さかった。前頁を見たい場合、資料が必要で、資料印刷は教員がした方がよいかもしれない。

4) 進め方等

- ・プレゼンテーションにおけるテーマはあったか？例えば、○○と△△が伝わるようにとか、

でないと、Wikipediaのような内容になってしまう。同様に、プレゼンのセオリーを教えているか？事前に教えていると更に効果的。近い将来の就職活動の準備と位置づけるとさらにモチベーションが上がる。

- プレゼンテーションの時間的制約をどう解決するか。積極的に参加できない学生をどうするか。
- 学生のプレゼンテーションに対する他の学生からの質問が少なかった。
- デザインのみを対象にしたコンテストであるにもかかわらず、デザイン以外の注目してほしい点をアピールしている点。
- 参考にした実在する橋梁を挙げさせてはと思いました。
- 評価結果を学生にフィードバックする手順が必要かもしれない。また、各学生へのアドバイスのための時間確保が難しい。
- 一部でヒマしている学生が見受けられましたので、教員側から質問する機会があれば緊張感が生まれるかもしれません。
- 学生の発表への改善をフィードバック（改良してよりよいものにする）する方法があればと思う。学会発表練習ではそれにより改善ができるが、多くの学生ではどのようにすればよいのだろうか。
- 質問を学生にさせることが難しいが、方法はあるはず。意外と質問は出ていた。
- 講義中の問題解答時間に学生は何もせず、ぼんやりしていた。回答用メモ用紙を配り、後で回収するようにしたら、講義により真剣に取り組む学生が増えると思われる。

5) その他

- 現場で導入が進められている3D-CADなどのフル3次元環境下での設計力強化ができれば、と感じるが、どの大学でも実現できていないため、それは将来課題であろう。
- 今年度は発表の課題がノーベル化学賞について、で、少し2年生には難しすぎたと思う。発表はなんとかできて、質問が出にくい。また、100年前の受賞など古い研究では、当時の研究レベルを知らないと、どうしてノーベル賞に値するのか理解は困難であろう。
- 化学式を間違えて書いた学生がいたが、誰も指摘しなかった。
- フラーレンの生成に真空が必要な理由について質問が出たが、わからないままであった。
- 時間がタイトなので、参観者が解説を入れるべきか迷い解説しなかったが、すべきであった。
- 他の講義のレポートを書いている学生が後ろ2～3列にかなり見られた。
- 携帯を扱っていた学生も3名いた。聞いていないことの結果は自己責任とはいえ、なんらかの対策が必要と思われた。
- 後ろでおにぎりやお菓子を食べている学生がいる。
- ほとんどが講義室の壇上付近での講義だったので、適宜後ろの方を巡回したり後ろの学生に声かけをしたりすることで、さらに学生の集中力が増すのではないだろうか。
- どのようにすれば学生参加型の演習がより効率よく計画できるかが課題。

(3) その他

- 空調の音が大きいため最後部の席では教員の声が聞きとりにくくなっていた。
- 優秀授業参観をおすすめします。
- 製図は演習的な性格を持つため、添削や指導に相当の労力を割く必要がある。しかし、約100名という非常に多い受講者を、少ない教員で指導する必要があり、大変な負担であると感じます。さらなるTAや外部講師の有効活用によって、より質の高い教育

を行う必要性があると考えられます。

2. 後期公開授業感想まとめ

(1) 優れていると思われる点

1) 説明

- ・ 難しい事柄を噛み砕いて分かりやすく説明されており、学生の理解度は極めて高いと思います。
- ・ 声の大きさも十分な音量であり、教室の最後列の学生も明瞭に聞き取れます。
- ・ 専門用語の説明や仕組みの説明に身近な例を引き合いに出した点。
- ・ 講義の基本事項を丁寧に説明していた。
- ・ 声量は十分と思いました。
- ・ 身近な例を引いて説明されているのも良いと思いました。
- ・ 声が大きく、話すスピードも速くないため、聞きやすい。
- ・ 今回の授業内容について、前回までの内容との違いや関係を明確にしている。

2) 板書

- ・ 国内外の多くの災害事例をパワーポイントにまとめられており、防災事業実施の必要性が実感できました。
- ・ 板書も達筆で丁寧に書かれており、学生は容易にノートが作成できると思います。
- ・ ホワイトボードの文字が大きい点。教室の最後列からでもよく見えた。
- ・ 板書の際に、学生がノートをとる時間を十分に確保している。

3) 資料

- ・ 丁寧に作りこまれたプリントであった。

4) 進め方と工夫

- ・ 実験の内容に関してポスターを作成させ、当日ポスター発表を開催されました。ポスター発表のプログラムもよく練られており、学生が活発に質疑応答している点が印象的でした。
- ・ 実験IIIの結果について、学生にポスター発表をさせた。これは学科として初めての試みであり、受動的な授業から能動的な授業への第一歩となろう。学生は、グループでの議論と共同作業、ポスター作成、発表準備、質疑応答などで、多くのことを学んだことであろう。今後も是非継続していただきたい。
- ・ プリントを主体とした講義で、プロジェクター上で書込みを行う形式であった。講義の最初に、インドネシアでの環境に関わる事例を写真で紹介したうえで、環境基準等に関連した詳細の講義を進めており、学生が講義の意義を理解したうえで説明を聞くため、理解度が増すと思われ、良い形態である。
- ・ 履修態度の悪い学生に対しては、適切な指導を行っておられ、クラス全体の学習に対する雰囲気や意欲を高度に保っておられます。
- ・ 教材に沿ってしっかりした内容の講義が行なわれていた。一部の学生が私語をする者がいたが全体的に静粛に行なわれていて全体の雰囲気は思ったより良かった。また前回の演習の模範回答が配布されていてタイミングの良さを感じた。
- ・ 講義の最初に、前回の内容を簡単に触れ、今回の内容と到達点（一般式）を示してから講述を始めた点。受講生がその後の教員の説明は何のための説明であるかを認識しながら聴講で

き、授業内容の理解に大いに役立つと思った。

- ・ 演習も授業の一環であるが、やらせっぱなしではなく、TAとともに教員が教室を巡回して指導した点。学生は質問しやすく、また、誤りをただしてもらえるので、授業内容の理解に大いに役立つと思った。
- ・ 授業開始前に資料を提示し、学生が予習できるようにしていた。
- ・ 学生にプレゼンテーションさせることで、分析装置に関する学習を促している。
- ・ 質問を行ったことを記録・点数化することで質問を積極的に行わせている。
- ・ 1つのテーマについて複数名の発表者で発表させているが、その比重も考慮して点数化している点。
- ・ 回答できなかった点は後日、再発表させることで理解を深めていること。
- ・ 内容については各自がまとめて提出させることで、授業の内容を再確認して点数化できる点。
- ・ 聞き取りやすい。資料が配布されていて、講義の進行がわかりやすい。PPに写された内容を学生が資料に書き込んだ後、説明がなされる形式で、書き込む時間も十分あり、学生が参加しやすい。
- ・ 与えられた課題を解決するためのロボットアームシステムの設計製作を学生がチームを組んで行っており、TA、教員がサポートをしていた。仮競技会を設定するなど、途中段階で学生が達成状況を実感できる仕組みを設けるなど、工夫がなされていると感じた。
- ・ プロジェクタを用いた視覚から訴える情報とプリント等による思考能力を鍛える取り組みおよび練習問題等を織り交ぜて学生のやる気を出す様に努力していた様に思う。

5) その他

- ・ 出席管理や課題提出にMoodleを活用していた。
- ・ 実験は準備と実施に時間と費用がかかるのが問題ではあるが多くの受講学生にとっては講義よりも満足度が高い。今回も学生は熱心の実験をしている様子であった。今後は、教員数が減っていく状況でどのように安全かつ省力化して実験を実施できるかの工夫が必要である。

(2) 改善を検討すべきと思われる点とその理由

1) 説明

- ・ シンシュリンは「血糖値が上昇する」ときに出るのか、インシュリンが出ると「血糖値が上昇する」のか、わかりにくかった。

2) 板書

- ・ 黒板の字が小さいように思われた。学生は板書で忙しいようであった。教員が黒板に書いてそれを学生が書き写す間をうまく使う方法があるかもしれない。
- ・ 板書に青チョークは向いていないように思います。

3) 資料

- ・ なし

4) 進め方等

- ・ 限られた時間内で発表と質疑を全学生にさせるのはなかなか難しいが、質問を義務付けるなど、発表だけでなく議論も全学生が加わるようにできると良い。実験IIIだけでなく、他の実験や授業等も加わるべきか。

- ・ 演習用紙として学科共通のマークシートを不特定多数に配布した点。科目によっては試験の答案用紙としても使う用紙なので、必要な分を配布し、すべて回収するような仕組みが望ましいと思った。
- ・ 図が書かれた資料に説明文を書き入れる方法について、学生は説明文を書いた時点で安心し、先生の解説を熱心に聞いていないようにも思える。説明文の理解を深めるために図があるのに、学生はその訓練が足りない。そこで、はじめから説明文と図が書かれた資料を配布し、両者を関連づけて説明し、学生にはその中で大切なところを図に書き加えるような形態があってもいいかと思う。例えば、「脂だけリンパ管を通る」の説明に、メモをとっているような学生は見あたらなかった（これが大切かわかりませんが）。この場合、PPの図にアニメーションで「リンパ管を通るのは脂だけ」などと示すことになる。
- ・ テスト対策として、学生は書き取った説明文だけに目を通し、図と関連づけて理解しないと思われる。よって、図を示し、これを説明せよ、という問題には答えられない学生が多いと思う。
- ・ 今回がたまたまそういう回だったのかもしれませんが、必要な情報はすべて与えられているのかも知れませんが、あまりノートを取っている学生がいないように思います。授業に関与させるといふ点からも、あえてノートを取る点を作ってはいかがかかと思えます。

5) その他

- ・ 今回初めての試みということでやむを得ない点ではありますが、会場のレイアウトは必ずしも適していたようには見えません。この結果を受けて次年度以降ご配慮されることをお勧めいたします。
- ・ 後3列に座った学生の半数程度は他の授業のレポート作成に余念がないようであった。折角の授業がもったいないように思われた。
- ・ 第1～3回の実習ではCADを必ず使うので、マウスの持参は必須とシラバスに記載したほうがよい。
- ・ 朝一でないのに、遅れて入室する学生が多いのは困ったものです。
- ・ コーヒーを飲みながら受講している学生がいた。
- ・ 聴講者に対して教室（D11）が広すぎる。そのためか、後方の学生の中には講義を聞かず、講義で使用するはずのノートパソコンで、ムービーを見ている学生やゲームで遊んでいる学生やいた。

(3) その他

- ・ 仕方がないことではあるが、発達障害の学生にとって発表は非常に困難であり、何をしたら良いかもわからないことであろう。今回の発表すらできないのであれば、就職活動もできないので、本人にはショックであっても、現実を見つめてもらうしかない。何か配慮する方法があれば良いのだが。
- ・ 講義室の機材の問題のようだが、LCDが安定して表示されない。
- ・ パソコンを用いる講義では、どうしても講義中にインターネット等で遊んでしまう学生がでてくる。LANケーブルを用いなくても、wifiで接続できるようになったため、教壇の教員が確認することは難しい。ケータイを扱う学生に対しても同様だが、講義中の講義室内だけ一時的に電波妨害装置を付けることはできないでしょうか。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成24年度も山口大学FD研修会への参加を積極的に行った。また工学部、理工学研究科工学系、及び医学系研究科工学系として以下のFD研修を実施した。

1. 教育改善FD研修会

開催日時：平成24年9月5日（水）13：10～13：40

開催場所：工学部D講義棟 11教室

研修対象：工学部教員

研修目的：教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施する

研修内容：以下の通り

1) 講師

糸長 雅弘（大学教育センター長）、吉村 雅弘（学生支援センター長）、
小川 勤（大学教育センター教授）

2) 内容

各学部・研究科と大学教育センターが一体になり、学生の学習意欲の向上や大学教育における職業意識の向上などを目的に、本格的な導入を目指している「学生ポートフォリオ」の導入環境の整備や活用方法などについて意見交換を実施する。これにより、今後一層の教育改善に向けた組織的なFD活動を継続的に実施していくためのきっかけにする。

3) 研修スケジュール

1. 開催挨拶とスケジュール説明（工学部点検・評価委員長）
2. 「学生ポートフォリオ」の導入環境の整備や活用方法
3. 意見交換

4) 参加者

41名

5) 内容の詳細

本研修会では、工学部における学生ポートフォリオ(ステップアップノート)の実施について意見交換を行った。最初に大教センターの小川教授より工学部から提出された学生ポートフォリオの実施計画について「ステップアップノートの内容は全学に示している簡略なひな形と比較して非常に丁寧で素晴らしい」とコメントが成され、今後の参考にしたいという主旨で、「導入された学科でどのような効果あったのか」、「具体的運用方法の計画(記入の機会をどの時点で設けるか?活用した面談どのように実施するのか)」について質問が行われた。

工学教育研究センターの齊藤センター長から、「平成19年度に1年生に意識をどう植えつけるかセンターの先生方で発案されて作って見たのが最初。その後ちょっとずつ形を変えて、各学科で試すという形で2～3の学科が基礎セミナーで使っているが工学部全体ではない。一昨年、工学教育研究センターからのお願いという形で配布した。効果については、いろんなところで使って、他の就学指導全部で効果が出たかどうか判断できるものなので、お話しできない。今年導入したものは、各学科がやっている共通項をまとめたらあの形になった。批判も浴びながら、これから変えていく。電子化については

moodle 化で一応検討を始めている状況。」と説明があった。実際に利用している学科からの情報提供として、社会建設工学科から、「学科レベルで作った学生の手引きを1年生に配布している。JABEE 認定受けていて、学生個人が PDCA を回せることが大切。学生の手引きには毎年度の始まり 4 月に 1 年を振り返って、単位の履修状況、到達状況を自己評価する。それを持ってチューターと面談している。最終的には 4 年間で振り返ってという欄を記入。教務的な話がメインなのでキャリアデザインには使い難い。電子化は学生委員とチューターが面談した記録を PDF 化して学科のサーバーで共有することで、担当教員が変わっても継続的に分かるようにしている。ステップアップノートは 3 年後期の共通教育科目総合教養 A にある大学院へのいざないで、自分の誇れることや、どうしたいかを記入し、卒業研究の担当教員や就職担当と相談する時のベースとしてもらうことを考えている。」と説明が、電気電子工学科からは、「ステップアップノート使って指導はしてないが、アドバイザー制を導入している。1 年生には手が回らないが、常盤キャンパスにいる 2、3 年生を半期に 1 度必ず個人面談している。准教授以上の教員を割り当て、呼び出して個別に面談し、修学状況の他に、学生生活全般のいろんな悩みや困り事の相談に乗る制度。その中でステップアップノートを使ったら良いという話は学科会議でも挙がっており、今後の活用を検討している。」と説明があった。小川教授からは「学科ごとの対応の仕方あることが分かった。これからも上手く行くやり方、行かないやり方を教えていただいて、ポートフォリオを他学部にも広めていきたい。」とコメントがあり、大学教育センターの糸長センター長からは「大学院へのいざないの中で使うのは非常に良いやり方だと印象を持った。新しい共通教育ではキャリア教育 2 という 1 単位ものが高年次向けにしてあるのでうまく活用できる可能性もある。大教センター長の立場で気になっているので何か聞かせ頂ければと思う。」とコメントされ、斎藤センター長から「ステップアップノートの中身を見ると、オリエンテーション、基礎セミナー、フレッシュマンセミナーで使うことを意識しており、後半は就職時に自分が何をしたいか、何をアピールできるかということ蓄積できるストーリーになっている。こういう形で使いなさいと言うよりは使い易い形で使って頂いて必要があれば改訂すれば良い。最初に考えていたのは、各学科で先進的な試み、面白い試みがされているので情報共有すること。結局は学生のためなので、学生が上手く行くならどいう使い方をされても良い。キャリア教育 2 で使うという形で同じようにやられていくと思う。」と返答があった。

質問では、1 年次開講のキャリア教育 1 の内容の予定について質問があり、「知の広場を使うことを考えている。今は前期に学長、副学長、学部長、後期に外部の産業界等から講師を招いてやっているが、これだとオムニバスで話を聞くだけになる。学生支援センターの平尾先生を中心に、座学でトータル 8 回しかないですが最初に 2 回、終わりに 1 回のような形で、キャリアデザインの考え方等の基礎的な話を交えて、それにプラス今の知の広場のやり方を組み合わせてはどうかと考えている。」と糸長センター長が返答された。中期計画ではポートフォリオを電子化して進めていくことになっているが、全学ではどういう計画で進められているのかという質問もあり、「今年に入って予算の目途が立ってない。新しい共通教育の実施に伴う修学支援システムの改修や、IYOCAN で機能的に出来てないところがあり、そちらの優先度が高いので今年度はむしろそちらを優先し、今年度は紙ベースを中心に様子を見ていきたい。」と糸長センター長が返答された。これに関して、電子化が進んでいった際に工学部のステップアップノートのような各学部ごとに作り上げていく形になるのか、全体でテンプレートのようなものあってそれを使う形になるのかという質問があり、「基本フォームを示しているが、学部の独自性高いものを 1 つのシステム内で実現すると予算がかかる。共通性の高いものをまずは電子化するというところからスタートせざるを得ない。Moodle 等で独自に構築される

ものあれば、それはそれで是非進めて頂きたい。」と糸長センター長が返答された。

- 6) アンケート結果
右に示す通り。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	2.9%
良かった	9	26.5%
どちらとも言えない	12	35.3%
あまり良くなかった	6	17.6%
良くなかった	6	17.6%
無回答	0	0.0%
合計	34	100.0%

2. 「発達障害学生の理解と対応 ―入学から就労までを視野に入れて―」に関する研修会

開催日時：平成24年9月5日（水）13：50～14：50

開催場所：工学部D講義棟 11教室

研修対象：工学部教職員

研修目的：全国的に発達障害（学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症、アスペルガー症候群など）学生に対する修学面や大学生活全般への支援の重要性が指摘されている。本学においても、入学時点から支援を求める学生が増えている現状を踏まえて、発達障害の特徴を理解しながら、個々の学生の特性に応じた対応を全学的に取り組む必要性が高まっている。その場合、就労を視野に入れた支援の方向性が重要になる。そこで、本研修においては、実際の事例への対応を踏まえた支援に関して報告を行って理解を深め、今後の学生への指導に役立てていくことを目的とする。

参加者：52名

研修内容：以下の通り

1) 講師

木谷秀勝（教育学部附属教育実践総合センター教授）

2) 内容

全国的に発達障害（学習障害、注意欠陥多動性障害、高機能自閉症、アスペルガー症候群など）学生に対する修学面や大学生活全般への支援の重要性が指摘されている。本学においても、入学時点から支援を求める学生が増えている現状を踏まえて、発達障害の特徴を理解しながら、個々の学生の特性に応じた対応を全学的に取り組む必要性が高まっている。その場合、就労を視野に入れた支援の方向性が重要になる。そこで、本研修においては、実際の事例への対応を踏まえた支援に関して報告する。

3) 内容の詳細

本研修会は最近増加している発達障害学生について、今後どのように修学面や生活面で対応していくのか、また将来の就労に向けてどのような対応を日頃から実施すべきかをテ

一マにこの分野の専門家である本学の木谷教授に講演していただいた。はじめに、発達障害、特に「軽度発達障害」について、その特徴と支援方法のポイントについて話があった。次に、大学教育における発達障害学生の支援について、現状としては専門スタッフが少なく支援が不足がちなため発達障害学生が一人取り残されることが多いことや大学職員のソーシャルスキルが重要であることが述べられた。また、就職活動や就労には困難さが伴うこと、そのために、早めに外部の組織（公的組織やNPO）を活用して就労支援に努めることや学内での支援、具体的には就業体験をさせるためのインターンシップへの積極的な参加やインターンシップ前に学内でインターンシップ（学内インターンシップ制）を導入することの重要性を述べられた。

最後に木谷教授からは、特に1年生から丹念に継続的にケアを実施し、学生との間で信頼関係を構築することが最も重要であることが説明された。

研修会の最後に質疑応答があった。その中で現在大学としてどのような支援体制が取られているのかについて質問があった。陪席していた大学教育センターの関係者からは、現在共通教育では支援の申し出があった学生（現在3名、すべて工学部）については、授業担当者には「授業中に配慮すべき事項」について紙ベースで連絡していることや共通教育係の中に窓口を作っていること、さらに、保護者や本人とも随時面談や電話相談を実施している現状が説明された。また、本学では全学的な支援組織（例えば、障害学生支援センターなど）が存在していないため、大学教育センターや学生相談所、保健管理センター、学生支援センター等が相互に情報共有を行い、連絡調整を実施していることが報告された。しかし、共通教育段階ではこのような支援体制で対応しているが、学部・学科の間では連絡が不足しがちであり、2年生以降の専門教育段階に進学した際には多くの問題を抱えていることが質疑応答の中から明らかになった。

4) アンケート結果

右に示す通り。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	22	56.4%
良かった	17	43.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	39	100.0%

3. 「教員のための英語による講義」に関する研修会

開催日時：平成24年8月9日（木）9：45～15：00

開催場所：工学部本館第2セミナー室

研修目的：山口大学工学部では、工学教育に関する研究講演会を毎年開催し、学生教育の改善に努めている。本年も学外から講師を招き、下記の内容により開催します。日頃の教育改善の参考にしていただくための情報提供を行うことを目的とする。

講師：アンソニー・ホイステッド准教授（工学部）

研修内容等：

「教員のための英語による講義」

1) セッション1 (9:45 - 10:45)

英語による講義に関する世界の状況

－国際言語としての英語による講義の増加

－学術的・科学的研究英語、学術誌への投稿あるいは国際会議における発表のための英語

－英語が第一言語でない国における英語による大学講義

休憩 (10:45 - 11:00)

2) セッション2 (11:00 - 12:00)

外国人教員から見た日本における英語による講義の状況

－なぜ英語による講義なのか？

－試験英語 vs 英語コミュニケーション

－英語という言葉は英語文化を表すのか？

昼食 (12:00 - 12:45)

3) セッション3 (12:45 - 13:45)

山口大学工学部の状況と改善提案 (1) －日本人学生への講義

休憩 (13:45 - 14:00)

4) セッション4 (14:00 - 15:00)

山口大学工学部の状況と改善提案 (2) －外国人学生への講義

4. 平成 24 年度山口大学 FD 全学講演会

「目標達成型大学教育改善プログラムと山口大学の教育改革」

講演テーマ：ポートフォリオを活用した学びのデザイン －島根大学

教育学部における取り組み－

講師： 富安 慎吾 島根大学教育学部 講師

主催：大学教育機構 (共催：大学コンソーシアムやまぐち)

日程：平成24年8月10日(金) 13:30～15:00

場所：吉田地区, 共通教育メディア講義室

常盤地区, 工学部 E2 1 教室

小串地区, 総合研究等多目的室(8階)

※遠隔講義システムを利用して常盤地区および小串地区でも同時開催

参加対象者：本学の教職員および県内他大学の教職員

スケジュール：

13:30～13:40 挨拶 (瀬瀬 厚 理事・副学長 (教育学生), 教育機構長)

13:40～13:45 講師紹介 (中田 充 大学教育センター主事 (教育学部准教授))

13:45～14:45 講演会

14:45～14:55 質疑応答

14:55～15:00 閉会 (糸長 雅弘 大学教育センター長)

第3節 教育改善に関する活動

工学部では、教育改善に関する活動の一環としてすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そして、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業に表彰を行って来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更している。すなわち、評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか?)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位10%に入っている科目を「優秀授業」として表彰する。表彰されるのは、その科目を担当した全教員、及び全職員である。また、各学科の最高得点獲得授業を「最優秀授業」として表彰する。ただし、原則として受講生10名以上の授業を対象とする。

本年度優秀授業表彰を受けた科目とその担当教職員を以下の表にまとめた。

平成23年度優秀授業一覧表					
番号	開設科目名	担当教員名	学科	学年	工学部 表彰種類
1	燃焼工学	三上 真人	機械工学科	3	最優秀授業
2	ものづくり創成実習 I	森田 実, 望月 信介, 三上 真人, 葛山 浩, 瀬尾 健彦	機械工学科	2	優秀授業
3	建設情報基礎工学	鈴木 素之	社会建設工学科	1	最優秀授業
4	土質力学 I	中田 幸男	社会建設工学科	2	優秀授業
5	構造力学演習 I	清水 則一	社会建設工学科	2	優秀授業
6	鋼構造工学 II	麻生 稔彦	社会建設工学科	3	優秀授業
7	社会建設基礎工学	赤松 良久	社会建設工学科	1	優秀授業
8	構造力学 I	清水 則一	社会建設工学科	2	優秀授業
9	土質力学演習 I	中田 幸男	社会建設工学科	2	優秀授業
10	複合構造工学 II	吉武 勇	社会建設工学科	3	優秀授業
11	社会建設工学特別講義	ANTHONY GRENVILE HOYSTED	社会建設工学科	2	優秀授業
12	ものづくり創成実習 I	中田 幸男, 吉武 勇, 渡邊 学歩	社会建設工学科	2	優秀授業
13	遺伝子工学	赤田 倫治	応用化学科	3	最優秀授業
14	応用化学工学実験 II	堤 宏守, 鬼村謙二郎, 岡本浩明, 山吹一大, 外崎剛, 森田由紀	応用化学科	3	優秀授業
15	配位化学	中山 雅晴	応用化学科	3	優秀授業
16	半導体工学 I	山田 陽一	電気電子工学科	3	最優秀授業

17	電気回路 II	山田 陽一	電気電子工学科	2	優秀授業
18	応用物理学	真田 篤志	電気電子工学科	2	優秀授業
19	数理計画法	若佐 裕治	電気電子工学科	3	優秀授業
20	論理設計	松元 隆博	知能情報工学科	3	最優秀授業
21	空気調和計画法	小金井 真	感性デザイン工学科	3	最優秀授業
22	デザイン心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	2	優秀授業
23	建築設備工学	小金井 真	感性デザイン工学科	3	優秀授業
24	感性心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	3	優秀授業
25	空間心理学	松田 憲	感性デザイン工学科	3	優秀授業
26	設計製図 I	小林 剛士, 鷗 心治, 山本 幸子	感性デザイン工学科	2	優秀授業
27	景観計画学	鷗 心治	感性デザイン工学科	3	優秀授業
28	都市計画学	鷗 心治	感性デザイン工学科	3	優秀授業
29	環境プロセス論及び演習	佐伯 隆	循環環境工学科	3	最優秀授業
30	廃棄物処理工学	今井 剛	循環環境工学科	3	優秀授業
31	移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	2	優秀授業
32	循環環境工学実験 II	三浦 房紀, 喜多 英敏, 中倉 英雄, 堀 憲次, 新苗 正和, 比嘉 充, 今井 剛, 小淵 茂寿, 田中 一宏, 山本 豪紀, 佐伯 隆, 樋口 隆哉, 通阪 栄一, 熊切 泉, 遠藤 宣隆, 隅本 倫徳, 鈴木 祐麻	循環環境工学科	2	優秀授業
33	反応工学	通阪 栄一	循環環境工学科	3	優秀授業
34	環境ビジネス論	今井 剛	循環環境工学科	4	優秀授業

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

前節でも述べたように、工学部では、教育改善に関する活動の一環としてすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そして、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業に表彰を行っている。来た。しかし、平成17年度から評価項目が変更され、「総合評価」がなくなったので、選考基準を以下のように変更している。すなわち、

評価項目の内、次の3項目

項目 2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目 9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

項目 10・・・この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)に受講者数の重みを加算した点数が、全開講科目の上位10%に入っ

ている科目を「優秀授業」として表彰している。この制度により教員も学生の講義の理解度や解りにくい点などを把握でき、講義方法の改善等に有用でありFD活動として重要である。しかし、学生も授業評価に関心が薄れており、アンケートに回答する学生数は激減しているのが現状であるのでそれらの改善を図ることが今後の課題である。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
工学部・ 理工学研究科	工学部FD研修会	FD関連図書	24	FD関連図書を購入し、理解を深めた。
	工学教育研究講演会	講師旅費・謝金	86	海外比較の視点から評価される大学教育について知見を得た。
計			110	

第6節 来年度の課題

工学部は、FD活動の中核に、授業参観を考えているが、工学部の目標である教員には年1度の授業参観にはさらなる改善と普及が望まれる。そのため、多忙な教員のニーズに合わせた工夫・改善が必要と考えられる。また、今年度は学部主催で「教員のための英語による講義に関する研修会」と「発達障害学生の理解と対応に関する研修会」を実施した。いずれも極めて重要な課題であり、参加した教員からも継続実施の要望が強かったので今後も継続して実施することが望まれる。

以上

第10章 農学部のFD活動

第1節 授業公開

1 授業公開（ピアレビュー）

1) 生物資源環境科学科

授業科目	遺伝学とバイオテクノロジー	実施日	平成23年6月15日
授業担当教員	小林 淳	評価担当教員	高橋 肇
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<ul style="list-style-type: none">・本授業は、その日の授業内容を宿題に課すことで、授業後にノート・教科書等を読んで確実に復習するシステムとなっていた。また、翌週の授業開始前に宿題を返却することで、受講者自身が授業内容を正しく理解できていたかを確認できるシステムとなっていた。・授業の章ごとにその概要の説明があり、よりわかりやすく教科書を読めるよう工夫されていた。また、パワーポイントの図は教科書とほぼ同じものを掲示してあったが、要所要所に補助説明の書き込みがあり、受講生個人が教科書に書き込んで理解を深められるよう工夫されていた。・授業開始前には、8割程度の受講者が教室の前方から着席しており、授業に臨む受講学生の学習意欲の高さを感じた。			

本授業をより良いものにするための提案			
<ul style="list-style-type: none">・パワーポイントで示された図のなかには、教科書に掲載されていないものもあった。できれば、こういう図は教科書への挟み込み資料として A5 サイズくらいで印刷、配布してあげてはいかがだろうか？・ウェスタンブロット法を解説するなかで、「抗体」についての説明があった。受講者の2年生は、「免疫」については生物学 I（高橋担当）の授業で昨年、1年生後期でも学習している。生物学 Iでの学習をふりかえるように説明していただくと授業相互の関連性が深まり、学生たちの学習意欲も高まるかもしれない。私たち教員は、もっと互いの授業内容を知って相互に補い合うように活用できれば、さらに良い授業を学生に提供できるのかもしれないと感じた。			
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点			
<ul style="list-style-type: none">・宿題を課して、学生たちに放課後での学習習慣をつけてあげている点に見習うべき工夫を感じた。宿題を採点し、返却してあげることで、間違った知識を習得した学生に対しても、その間違いを修正する機会を与えているものとして高く評価した。私も小テストを実施し、採点・返却しているが、本授業のように学生に課外時間に継続して学習できるように促してあげられるような授業のあり方を常に検討していきたいと感じた。・教科書を教材としてその内容に忠実に使用していた。授業は、教科書の章立てに従ってきちんと進めていくことで、受講する学生たちに体系的に学習が進んでいるという安心感を与えているのではないだろうか？私は現在、教科書を使わずに自作のプリントを配っているが、良い教科書があれば教科書の活用も検討してみたいと感じた			

授業科目	環境物理学	実施日	2011年7月5日
授業担当教員	鈴木賢士	評価担当教員	伊藤真一
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<p>よくプランニングされた授業であった。とくに、導入において前回までの授業の復習と今回の授業の位置づけについて、学生の視点に立って丁寧に説明していた点は高く評価できる。</p> <p>1コマ目の授業にもかかわらず遅刻者はなく、授業中の居眠りや私語もまったくなかった。学生は熱心にノートをとっており、本授業科目に対する学生の関心の高さがうかがえた。</p>			

本授業をより良いものにするための提案	
<p>板書をノートさせるのは大変効果的な授業手法のひとつではありますが、ともすると学生はノートをとるだけのマシーンになってしまう可能性があります（実際にはマシーンになることを好む学生の方が多いようです）。時には、学生に質問して、ノートとり作業では使っていない脳領域を活性化するような時間を設ければ、さらに魅力的な授業になると思います（ただし、授業のペースが狂いすぎてしまい、予定通りに進まないというおそれがあります）。</p>	
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点	
<p>板書。私もかつては板書のための授業を行っていましたが、パワーポイントの登場以来、ほとんど板書をしていません。この授業を参観させていただき、板書の良さを再認識致しました。パワーポイント主体の授業であっても、要所要所で板書を行えば、平坦な授業にアクセントがつくのではないかと感じました。授業にもとり入れてみたいと思います。</p>	

授業科目	生物学I	実施日	H24年1月11日、19日
授業担当教員	高橋肇	評価担当教員	竹松葉子
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業開始時間よりも前に前回の答案返却を一人一人行っていた。 ・授業開始時間丁度より小テストを開始し、その前に不正についての説明がなされた。 →これらのことから、学生が遅刻することが少なく、また他の教室に比べて学生の集合が格段に早い。また、一人一人に答案を手渡すので、学生の顔や理解程度が分かる。期末試験だけでなく平日頃から不正に対する心構えをインプットすることが出来る。 ・授業の最初に、全体の流れを説明して、その日の授業の位置づけを示していた。 ・授業で説明される内容が全てプリントとして配られるので、学生は知らなければならない範囲を明確にできる。 			

本授業をより良いものにするための提案

- ・一連の授業の流れのなかで学生が質問等をする時間的余裕がないので、小テストの用紙の最後に、前回の質問等が書ける自由記述欄を入れてはどうでしょうか（書く学生があるかはわかりませんが）。
- ・新たな提案は考えつかないが、全てプリントに授業内容が書いてありさらに小テストの範囲を教えるので、プリントにテスト範囲だけを書いてあとは授業に参加していない学生が目立ったのは気になった。
- ・どうしても生物学Ⅰは広く浅くなりますし、1年生で学科の概要も分かっていないでしょうから、それぞれの内容のところでどの先生がこの内容は専門で詳しく説明してくれるかを入れてもいいと思いました。実際に全部入れると大変なのでせめて、授業の中で他の教員の授業範囲に該当する箇所について「他の先生の授業のことは言ってもいいかわかりませんが、」とおっしゃっていましたが、どちらかと言うと反対に「この部分は〇〇先生の××という授業で詳しくするでしょうから、ぜひ聞いてください。」と言った方がいいと思いました。

評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点

最初に小テストをするというのは、理解度確認、遅刻防止のためにも取り入れてみたいと思う。

授業科目	園芸学	実施日	2011年12月2日
授業担当教員	山内	評価担当教員	藤間
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<ul style="list-style-type: none"> ・小テストの解説を行う。 ・配布資料と教科書を併用している。 ・分類を身近な品種を用いて解説している。 ・日常生活で見かけるものを例にして説明している（菓子の脱酸素剤、果物の品種）。 			

本授業をより良いものにするための提案

- ・農場実習で行っている作業と関連付けると、より理解が深まると感じる（ブドウの品種、ホルモン処理、花芽形成と剪定作業など）。

評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点

- ・小テストは授業の最後に行っているために、解説は特にせずに重要な内容の復習をしているが、テストの内容についても解説する方が良いと感じた。
- ・身近な事柄や興味を持ちそうな事柄を例にあげると、より理解が深まると感じたので、今後取り入れていきたい。

授業科目	植物栄養・肥料学	実施日	平成24年1月12日
授業担当教員	藤間充	評価担当教員	執行正義

本授業の実施に際して高く評価できる点
<ul style="list-style-type: none"> ・資料は文字が大きくシンプルで話の内容が良く伝わるように構成されている。 ・講義中は静粛が保たれており、学生は良い雰囲気の中で集中して話が聞けているようである。 ・トピック毎に資料を配布する機会が設けられており、話の内容が変わることが良く学生に伝わっていたようである。 ・講義資料中に空白が設けられており、前方のスライドを見ながら学生が書き込みをしており、緊張感を持続される効果がみられた。 ・スライドを使った説明時にアニメーションの効果を上手く利用して、スライドの説明箇所がリアルタイムに把握できる工夫が施されていた。 ・講義の最後の10分間の小テストは講義内容の復習が授業内にできるので効果的であると推察される。

本授業をより良いものにするための提案
・遅刻者が多いようですので、対策をお考えになられたら如何でしょうか？
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点
高く評価できる点に挙げた全ての事柄を自分も取り入れてみたいと思いました。

2) 生物機能科学科

授業科目	運動生理学特論	実施日	2012年 6月 27日
授業担当教員	宮田浩文	評価担当教員	松井健二
授業の内容・進行			
運動負荷をかけた際の乳酸蓄積量を実際に計測し、運動に伴うエネルギー代謝効率を計算することでヒトのエネルギー代謝に関する知見を紹介した。			
本授業の実施に際して高く評価できる点			
この回までの講義を通じて授業した内容に沿って、実際に各自が運動負荷をかけ、乳酸蓄積量を測定することで、運動に伴うエネルギー代謝効率の計算を行なわせることで、これまでの講義内容をより深く理解させることに成功している点。			

本授業をより良いものにするための提案
実際の測定が行なわれたが、20名程度の学生に教員一人で対応することとなり、少しばたばたしてしまっただけの印象がある。TAを使うことが望ましい。
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点

生物系の講義では実際の生物での観察、あるいは実験が理解に極めて有効であることを痛感した。実学を実施することが必要である。

授業科目	微生物生化学特論	実施日	2012年 9月 3日
授業担当教員	松下一信	評価担当教員	真野純一
授業の内容・進行			
<p>第1回の講義として、Bioenergetics の基礎概念、chemiosmotic concept の確立の歴史が紹介された。</p> <p>内容はATP合成メカニズムという生化学の基本を解説するものであった。カラー写真やエピソード的話題、板書を織り交ぜ、リズムよく講義が進められた。</p>			
本授業の実施に際して高く評価できる点			
<p>授業の構成が論理的であり、入念に準備されている点。</p> <p>落ち着いた自然なトーンで話をされた点。</p>			

本授業をより良いものにするための提案			
<p>途中で寝てしまう学生がいたのが残念だった。質問するなど、受講者とのインタラクションが何かあれば、学生の緊張感と集中が高まるのではないかと思います。</p> <p>あとで数名の学生に聞いたところ、Peter Mitchell が何者かを知らず、彼の化学浸透「説」の独創性の価値が十分理解できていなかったようだ。年々変化する学生の常識レベルを把握するのは難しいが、受講者の理解度に合わせて話をするすることで、より興味をもたせることができるのではないかと思います。</p>			
評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点			
<p>歴史的な組み立て。</p> <p>パワーポイントの資料を事前配布する点。</p> <p>スライドのフォーマットが統一されており、見やすくつくられている点。</p>			

授業科目	環境化学特論 (Environmental Chemistry)	実施日	2012年 12月 18日
授業担当教員	藤井 克彦	評価担当教員	阿座上 弘行
授業の内容・進行			

下水処理の歴史、仕組み、抱える課題を紹介。
資料（A4、17 ページ、全て英語）を配布、点呼による出欠確認の後、授業のスケジュール、単位取得、レポート提出の説明をし、講義を始める。
配布資料とパワーポイントファイルを用いながら、授業を進行。
教室の一番後ろで聞いていたが、ゆっくりと話をされ、マイクなしでも聞き取りやすかった。

本授業の実施に際して高く評価できる点

留学生を一番前に座らせ、各項目ごとに英語で要約した。
授業ごとに課題を解かせ、復習を行わせた。（課題は後でレポートとしても提出させる）
下水処理場の見学を入れることで、座学で学んだことを実際の現場を見せ、さらに深く学ばせていた。

本授業をより良いものにするための提案

下水処理過程を動画などを用いて視覚的に見せるとより効果があると思った。（しかし、後日現場を見せることで、対応されていた）
パワーポイントの資料で見づらい部分があった。とくに、課題の部分は大きく別途印刷された方が良いでしょうと思われた。

評価を担当するなかで、自らの授業にもとり入れてみたいと思った点

授業の終わりごとに、内容を復習するような課題を解かせていた点。
また、その理解度をレポートで確認し、不足があれば指導できるようにしていた点。
現場を見学させることで、座学の理解を補っていた点。

2 授業公開（学術セミナー）

実施学科：生物機能科学科

1) 「筋萎縮を防ぐためにサテライトセルを活性化しよう！！」

講演者：宮田 浩文

日時：6月28日（木）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

2) 「植物の環境ストレス応答に活性分子種はどう関わるか」

講演者：真野 純一

日時：7月31日（火）17：00～18：00

場所：農学部大会議室（本館2F）

場所：農学部（連獣）大講義室

3) 「炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析」

講演者：藤井 克彦

日時：12月14日（金）17：00～18：00

場所：6 番教室

4) 「微生物における細胞集団のダイナミック変動（細胞の一生）」

講演者：山田 守

日時：11月9日（金）17：00～18：00

場所：農学部会議室

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1 実施学科：生物資源環境科学科、生物機能科学科、

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

研修名：「学生ポートフォリオの実施についての意見交換」

日程：平成24年7月18日(水)

場所：農学部2F 会議室

講師：小川勤（大学教育センター教授）

平尾元彦（学生支援センター教授）

参加者：25名(アンケート回収24名)

報告：本研修会では、農学部における学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。参加者は教職員25名であった。以下に要点をまとめる。

最初に大学教育センターの小川教授より農学部から提出された学生ポートフォリオの実実施計画について大学教育センターとしてのコメ：

では、4年次にポートフォリオを使用して学生との個別面談を行うとしているが、それまで学生にポートフォリオを書かせるだけでは十分な記録がとれないのではないかと懸念している。元来、学生ポートフォリオの目的は学生の学びの過程や意欲を可視化することによって様々な問題の早期発見に繋げることにあるので、もっと早い時期（理想的には1年次）から面談を実施していただきたい。もう一点は、学生ポートフォリオは学生自身で保管させることになっているが、紛失してしまう学生がいるのではないかと懸念している。紛失した場合、その学生がこれまでどのような学びの道筋を辿ってきたのかわからなくなってしまう。そのため、他学部では学生ポートフォリオのコピーを事務等に保管してもらう策を講じているところもある。農学部でもこの方法を採用してはどうかとの提案がなされた。

これに対して、農学部学務委員長からは「ポートフォリオに関しては、最初の前提では、キャリア形成の一環として本人が就職活動を始めるときに役立つようにという説明をきいている。学業以外の面で学生が何を考え成長してきたかを知るべきはあくまでも学生本人であると考えている。そもそも学業以外の事項、殊に学生個人の思想信条等の個人情報に教員が知り得ることは好ましくないので関知すべきではないと考えている。個人情報等に関する法律上も問題があるのではないかと。また、4年次だけの面接ではそれまでの学生の様子がわからず不十分ではとのことだが、農学部では1～3年次の実験を通じて教員と学生が触れ合う機会が頻繁にあり、その場における出席や発言、レポートの提出等を通じて学業面はチェックができています。例えば1年次でも前期、後期でほぼ全員参加の授業があり、



学生の欠席情報を学科の教員全員で共有して、その状態が2～3週間続くならば呼び出しをかけるなどの措置をとっている。ポートフォリオで半年に1回の面談をやるよりも、学生のケアをしている自負がある。かえってこのようなポートフォリオが導入されると学生への指導が硬直化してしまうとともに、教員の負担が無駄に増えて、これから大きく伸びる可能性を持つ学生のために教員が注ぐべき力が削がれてしまうのではないかと危惧している」との意見が述べられた。また、他の出席者からは「農学部ではサークルやバイトにのめり込んで学業が疎かになり大学を辞める事態になる学生が問題になっている。学生ポートフォリオの『学業以外（サークル活動・アルバイト等）』という欄は大学が学業以外のことをすることを奨励しているようにみえる。学生の中にはこういう欄を設けると学業以外を頑張った方が就職には有利だとはき違えて考える学生がいるだろうから、これは問題である。大学生なのだから学業に注力するように教える側としては主張すべきである」、「ポートフォリオのコピーは誰がどこに保存するのか」、「学業面とそれ以外を分けて記述させる必要はないのではないか」、「この学生ポートフォリオにおける質問は、実際のキャリア戦線には役立たないと思う。実際の企業の就職試験で出される質問と同等の厳しい問いかけにしないと効果がないのではないか」、「学生は自身の思想信条はもとより、他の指導上必要となる事項に関しても本当のことは書かないのではないか。そうだとすると、そもそもポートフォリオを書かせる意味自体が無いのではないか」等の意見が出された。

これらの意見に対して、平尾教授からは「現在、多くの企業は学業のみならずバイトやサークルを含め、大学生活のあらゆる面を通じて学生にどのような資質があるかを問う傾向にある。最近、キャリアという言葉の意味合いは必ずしも就職ではなくて、例えば学生時代に何かに躓いたときにそれを超えてゆく過程も含まれている。学生ポートフォリオは学生が大学生活を通じて将来就職して社会へ羽ばたいていくための力を付けて行くための記録および指針であり、広い意味でのキャリア教育の一環であることをご理解いただきたい」との回答があった。また、小川教授からは、「学生の思想信条にかかわる個人情報に教員が触れてしまう件については、法的な側面からいえば事前に利用目的を定めて学生に明示すれば問題はないと考えている。ポートフォリオの導入がキャリア教育にとってベストだとは思っていないが、広い意味におけるキャリア教育において、学生がどのような生活をしていて、どのような方向に向かっているのかについて学生と話すきっかけになれば有意義であると考えている。農学部の事情に沿って今後も検討してもらいたい。また、ポートフォリオの保管については本日お話しした他学部の方法が良いと思われるが、この点に関しても先生方だけでなく事務の方も含めて再度ご検討いただきたい。今回の意見交換会は大学教育センターおよび学生支援センターとしても大変参考になった」との回答がなされた。

本研修会後のアンケートでは、研修会へ参加して良かったという意見は参加者の約半数にとどまる結果となった（表1）。具体的な感想としては、「FDと呼んでいいのかと思った」、「ポートフォリオの運用について本部の意向が聞けた」、「生産的であるとは思えない」、「単なる説明、言い訳を聞かされるだけでは無意味」、「流行でやっても根がつかない。下手に教員へ押し付けない」、「ポートフォリオの意味が少しわかりました。ポートフォリオの導入は教員が学生の私生活に介入するというこれまでになかった危険な試みだと思いました。やはり絶対にやるべきではないと思います。中期目標・・・」、「ポートフォリオは不要と思います」、「結局、ポートフォリオについて、目的・内容ともにはっきりしないものであった」、「意義が感じられない」、「多様な学生に対応するための情報源としては有効だと思っている」、「ポートフォリオに関して具体的な説明がなかった」、「ポートフォリオについては効果がないと考える」、「理解が進んだ」、「アンケートに書いても、どのようにとりあげられるのか、信頼感を持てません」とのコメントがあった（コメントは字句の若干の修正を除いて原文のまま引用）。（大学教育センターFD研修会報告書から転記）

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.2
良かった	10	41.7
どちらとも言えない	8	33.3
あまり良くなかった	3	12.5
良くなかった	0	0.0
無回答	2	8.3
合計	24	100.0

2) 平成24年度 教育改善FD研修会

研修名：「学生の主体的な学習活動を活発化させるPBL型授業の進め方」

日程：平成24年9月19日(水)

場所：農学部2F 会議室

講師：川崎勝（大学教育センター 教授）

参加者 22名(アンケート回収 20名)

報告：本研修会ではPBL(Problem-based Learning)の理論的背景、PBL-tutorialを採用した医学科モデルの概要と本学医学部医学科での導入事例、PBLの問題点、今後の動向について解説が行われた。PBLの理論的背景においては、知識伝授型の伝統的教授方法(Pedagogy)から成人教育学(Andragogy)へのパラダイムシフトを源として、PBLが生み出されたことが説明された。次にPBLが医学教育に取り入れられ、医学科モデルとして普及するに至った経緯、本学における医学モデルの導入事例について説明がなされた。また、PBLの問題点として、大量の知識を身に付けさせる教育には向いていないこと、学生側は学習へのレディネスを備えており、教員側は十分なりソース(人的・時間的)を持つとともに組織化されていることを前提とすること、日本における「現場」を知らない医学生を「成人」とみなすことに懸念があることが示された。そして、これらの問題点を踏まえたうえでPBL-tutorialが今後どのように発展するかについて説明がなされた。



質疑応答においては、「医学部医学科においてPBL-tutorialほどの程度効果があったのか」、「1年生を対象とする授業『山口と世界』はPBLを用いて行うのか」、「新入生に対してどのような教育をすればPBLを導入できるか」との質問がなされた。これに対して講師からは「医学部医学科で導入したPBLによる効果を定量的に言及することはできないが、4年時の国家試験前の全国的なテストにおいては、本学の学生は他校よりも成績が良い。これはPBLを導入した効果かもしれない」「1年生にはこの授業に対してレディネスがあるわけではないので、現実的には難しいのではないか」「1年生まではPedagogyを主とする学習をしてきているので、PBL型授業に備えて『自分で学ばなければ』という意識を育ててゆく必要がある」との回答がなされた。

研修会後のアンケート(表2)では、「PBLに関心を持つことができた」、「Active Learningについて理解できたが、実際に行うに当たって教員が何をどのようにやると効果が上がるのか大教センターが提示して欲しい」、「先生の御見識に基づいて、アクティブラーニング導入の問題点をセンタ

一内でひろめていただきたいと思います。特に一定のアウトカムが成立し得ない『山口と世界』では無理かと・・・」、「『山口と世界』は困難」、「農学部でPBLの実施は難しそう。農場実習に応用？」との感想が得られた。また、今後希望する研修会については「大学教育として知っておいた方が良い（必ず知るべき）内容に関する情報」、「授業改善の技術など」、「今回のような具体的な教育方法に関する研修」、「授業の進め方、テキストの使い方など講義方法について（理由：1 クラス中の理解の違いが最近大きくなった）」、「ポートフォリオ、カルト関係」との回答があった。

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	10.0
良かった	11	55.0
どちらとも言えない	5	25.0
あまり良くなかった	1	5.0
良くなかった	0	0.0
無回答	1	5.0
合計	24	100.0

上記、1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会、ならびに2) 教育改善FD研修会は、拡大教授会の前に開催したため、公務で出席できない教員を除いてほぼ全員の教員が参加した。学部で開催されるFD研修会には必ず参加するという意識が教員に定着したと思われる。今後のFD研修会も、このような日程調整を行って実施したい。

第3節 教育改善に関する活動

2008年4月1日に、以下のような農学部グラジュエーションポリシー(Graduation Policy: 以下GP)を定めている。

- 1) 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれら相互関係を把握するとともに、それらの将来有るべき姿を考える能力を身につけている。
- 2) 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。
- 3) 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。

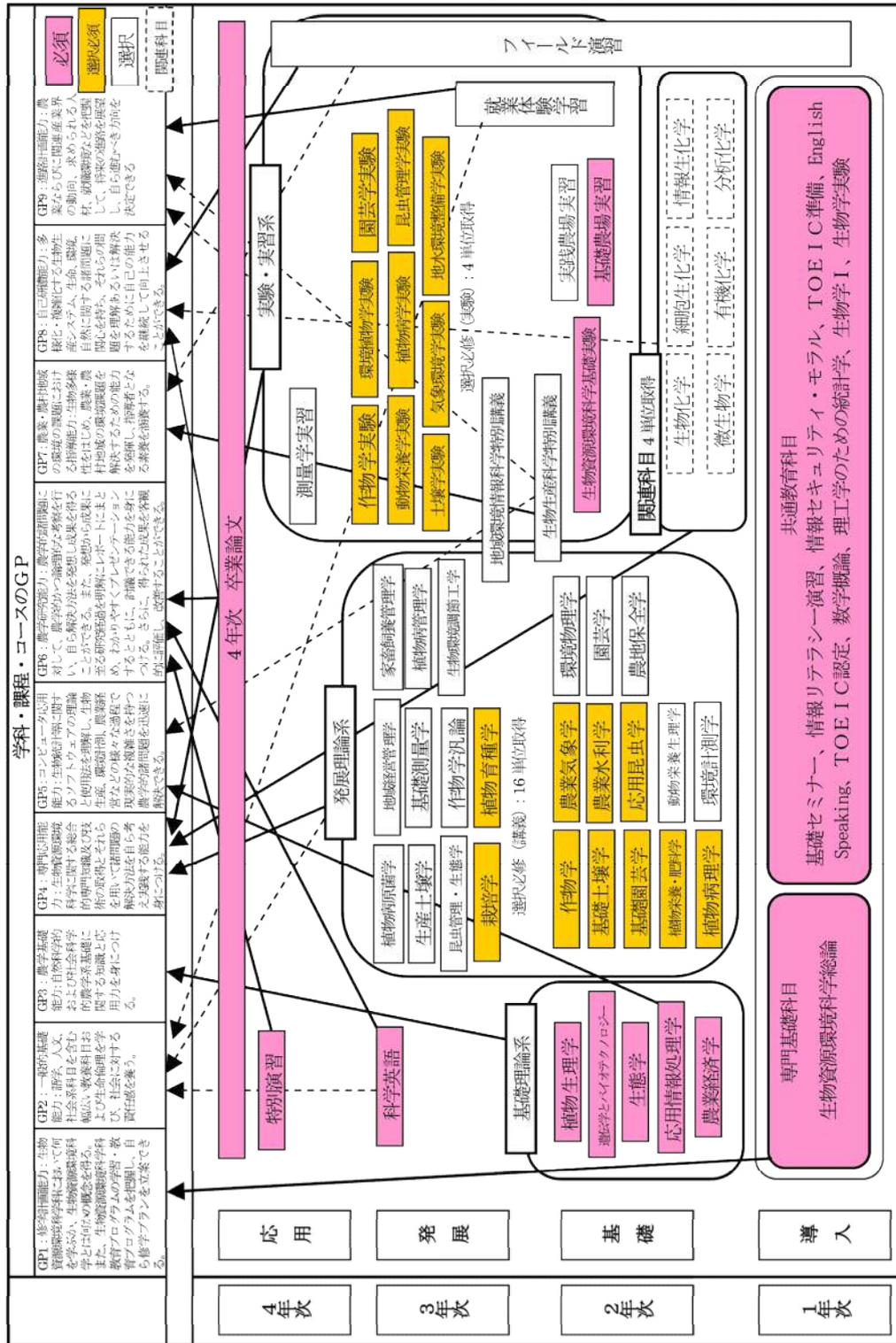
農学部のGPを基礎として、各学科(生物資源環境科学科、生物機能科学科)でのGPは、2008年4月1日に定めており、2011年度も本GPに基づいて活動を実施している。以下、各学科のGPを示す。

Graduation Policy (GP)	
記入者氏名	
記入年月日	2008年4月1日
学部・研究科名	農学部
学科・専攻等名	生物資源環境科学科
コース等名	
細分名	
農学部の教育目的（具体的に記述・箇条書き）	
農学部のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけている。 2. 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。 3. 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。 	
生物資源環境科学科のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 修学計画能力：生物資源環境科学科において何を学ぶか、生物資源環境科学とは何かの概念を得る。また、生物資源環境科学科教育プログラムの学習・教育プログラムを把握し、自ら修学プランを立案できる。 2. 一般的基礎能力：語学、人文、社会系科目を含む幅広い教養科目および生命倫理を学び、社会に対する責任感を養う。 3. 農学基礎能力：自然科学的および社会科学的農学系基礎に関する知識と応用力を身につける。 4. 専門応用能力：生物資源環境科学に関する総合的専門知識及び技術の取得とそれらを用いて諸問題の解決方法を自ら考え実践する能力を身につける。 5. コンピュータ応用能力：生物統計等に関するソフトウェアの理論と使用法を理解し、生物生産、環境計測、農業経営などの様々な過程で現実的な複雑さを持つ農学的諸問題を迅速に解決できる。 6. 農学研究能力：農学的諸問題に対して、農学的かつ論理的な考察を行い、自ら解決方法を発想し成果を得ることができる。また、発想から成果に至る研究経過を明解にレポートにまとめ、わかりやすくプレゼンテーションするとともに、討議できる能力を身につける。さらに、得られた成果を客観的に評価し、改善することができる。 7. 農業・農村地域の環境の課題における指導能力：生物多様性をはじめ、農業・農村地域の環境課題を解決するための能力を発揮し、指導者となる素養を涵養する。 8. 自己研鑽能力：多様化・複雑化する生物生産システム、生命、環境、自然に関する諸問題に関心を持ち、それらの問題を理解あるいは解決するために自己の能力を継続して向上させることができる。 9. 進路計画能力：農業ならびに関連産業界の動向、求められる人材、就職環境などを把握して、将来の進路を展望し、自ら進むべき方向を決定できる 	

Graduation Policy (GP)	
記入者氏名	
記入年月日	2008年4月1日
学部・研究科名	農学部
学科・専攻等名	生物機能科学科
コース等名	
細分名	
農学部の教育目的（具体的に記述・箇条書き）	
農学部のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 人々が自然と共存して幸せに生きていけるよう、生命と環境、およびそれらの相互関係を把握するとともに、それらの将来あるべき姿を考える能力を身につけている。 2. 農学の基礎知識、研究技術に加え、さらに理解力、創造力、解決力、総括力を身につけている。 3. 学問・研究の他に、人間性および社会性を身につけている。 	
生物機能科学科のGraduation Policy（具体的に記述・箇条書き）	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 生化学の基本的な知識とバイオテクノロジー等の技法を修得し、生物科学分野で社会貢献できる。 2. 生物と環境の相互作用の科学的な理解に基づき、環境問題に対処できる。 3. 科学技術の発展に関連した社会全体の問題について、自ら課題を見出し解決しようとする姿勢を持つ。 	

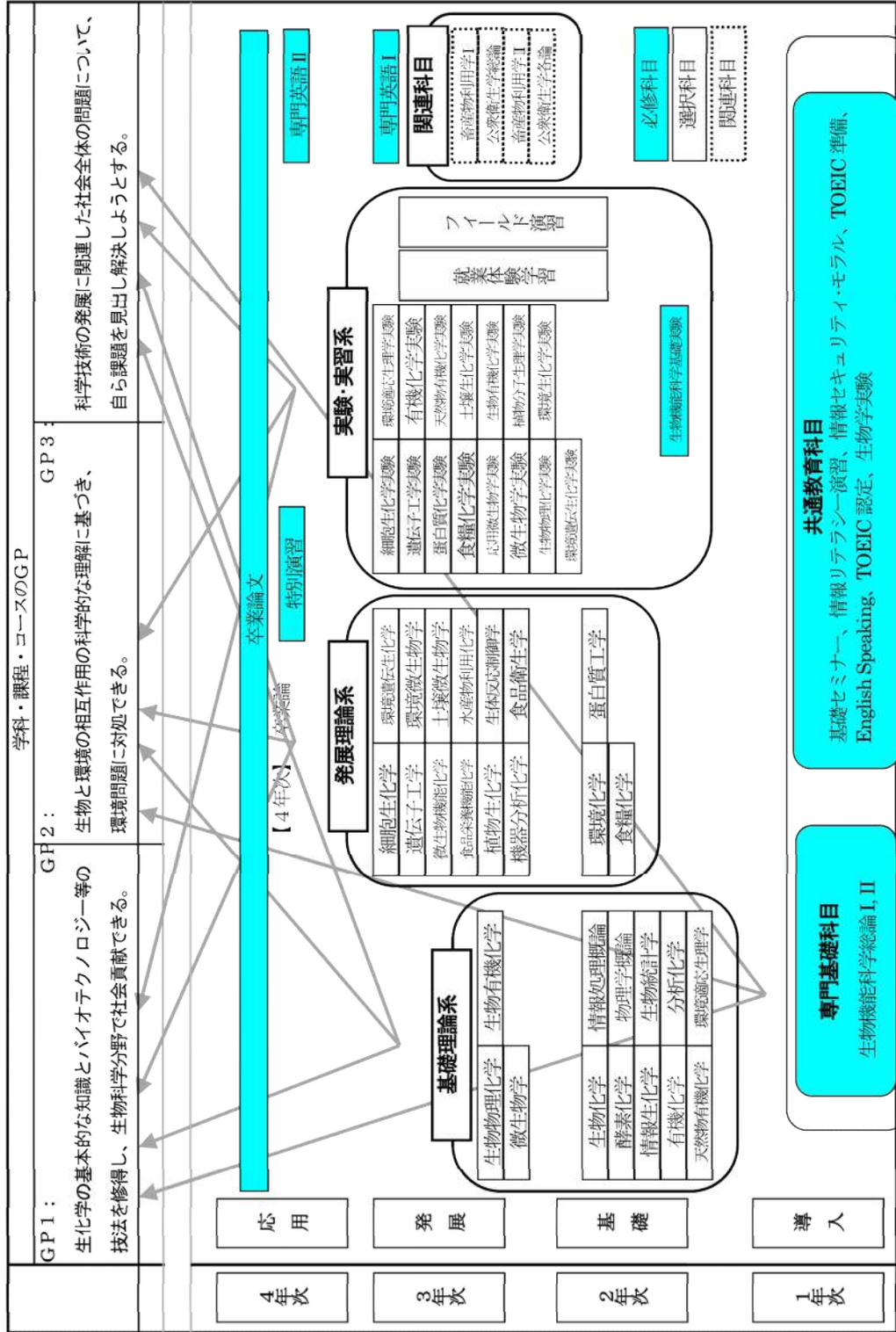
カリキュラムフローチャート(Curriculum Flow Chart: 以下CFC)は、全学組織の教学委員会より農学部の各学科への作成の依頼があり、平成23年7月に完成した。本CFCに基づいて、新入生オリエンテーションの履修の説明などで利用している。以下、各学科のCFCを示す。

農学部 生物資源環境科学科 カリキュラム・フローチャート 2011年7月23日版



農学部 生物機能科学科 カリキュラム・フローチャート

2011年7月1日版

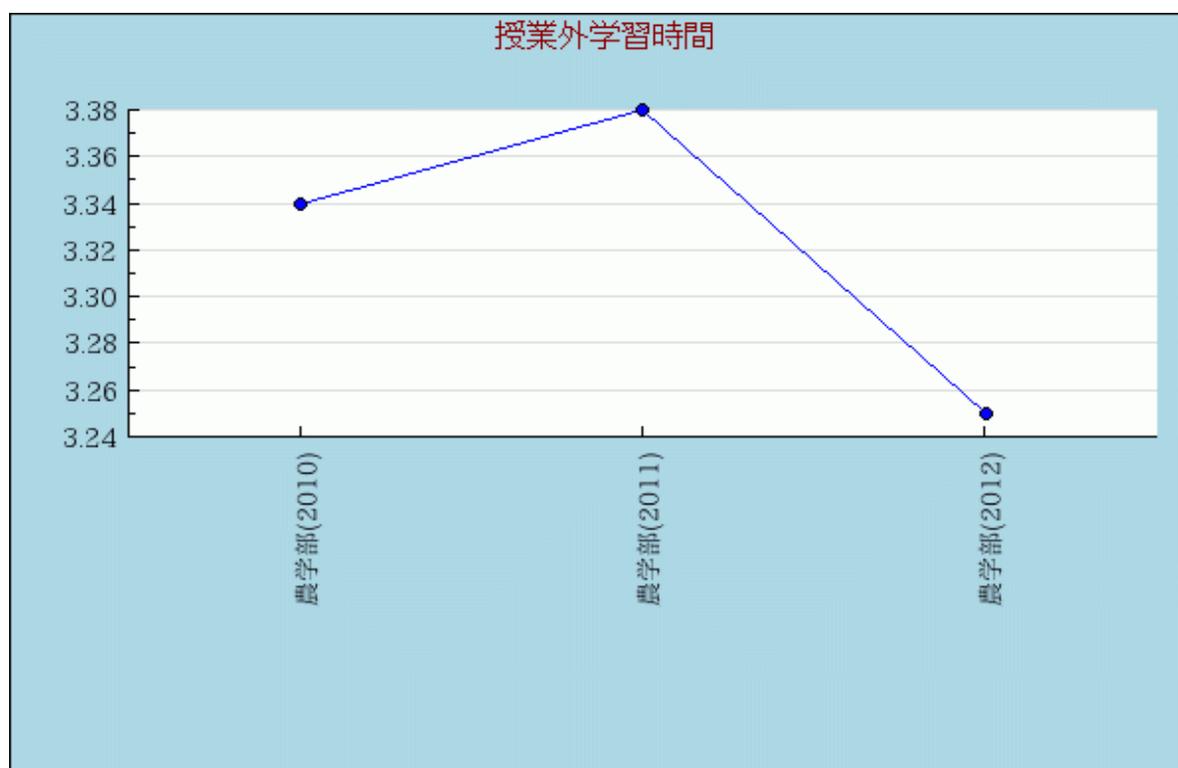


第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1) 学生授業評価

2010年度			2011年度			2012年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
86	83	96.5	75	74	98.7	73	70	95.9

2010年度以降、学生授業評価の実施率は、非常に高い値を示している。今後もこの率を維持していきたい。学生の授業評価をみると、2012年度はいずれの項目もポイントが下がっており、学生の学力低下や教員による学習指導方法など、要因を検証する必要がある。

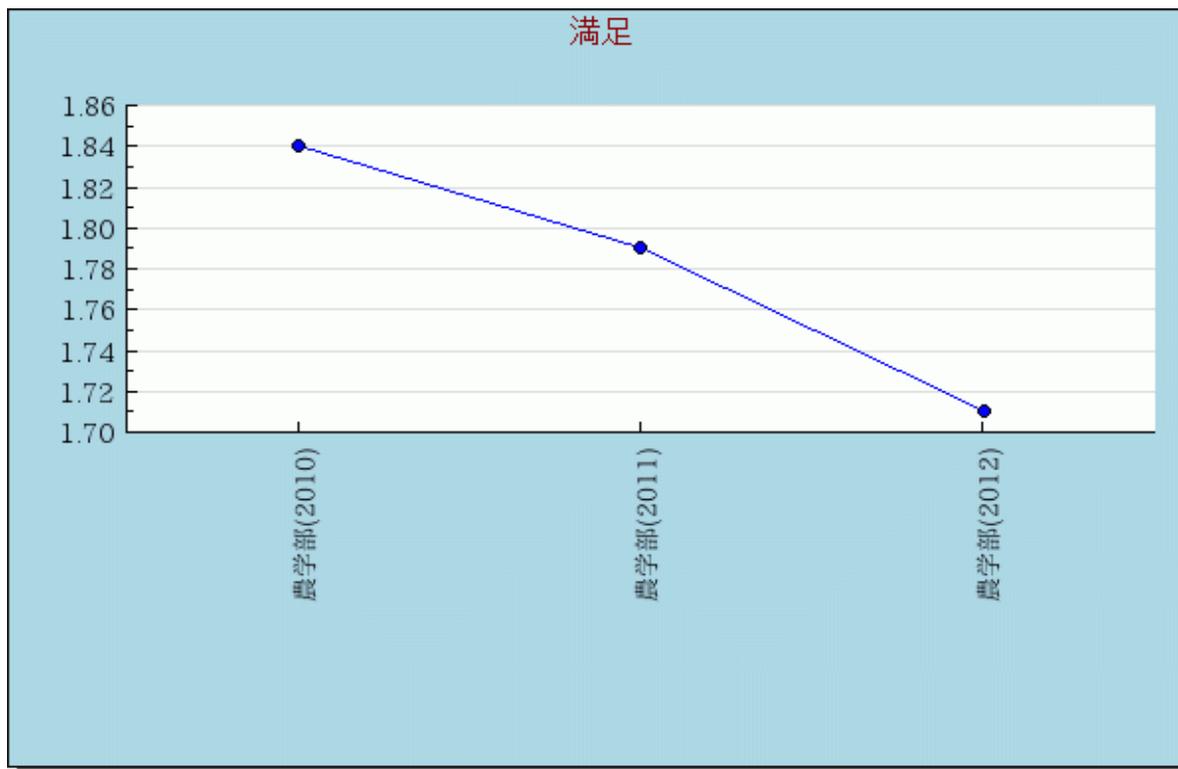


学習目標達成



理解





2) 教員授業自己評価

2010 年度			2011 年度			2012 年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
90	64	71.1	91	72	79.1	88	58	65.9

教員授業自己評価の実施率は、2010 年度に 7 割を超え改善がみられたが、2012 年度は再び 6 割台に低下した。再度、教員にアナウンスし、授業自己評価の実施率を高めたい。また、評価項目（授業外学習時間、学習の目標達成度、理解度、満足度）に関しては、学生の授業評価とほぼ相関しており、教員自身も状況をよく認識していることがうかがえる。

3) 今後の課題

授業外学習時間、学習の目標達成度、理解度、および満足度の低下の要因を検証し、具体的な対策を行うことが必要である。また、教員授業自己評価の入力については、未入力者のほとんどが未入力であることに気づいていない。未入力であることを教員に知らせるシステム（自動メール送信機能など）があれば、教員授業自己評価の入力率は飛躍的にアップすると思われる。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
農学部	学術セミナー	展示ボード(FD用)	116	ポスター展示に使用し、学生・院生への研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。
農学研究科・医学研究科(農学)	学術セミナー			
計			116	

第6節 来年度の課題

1. 授業外学習時間、学習の目標達成度、理解度、および満足度の低下の要因を解析し、具体的な対策を行うことが望まれる。
2. 教員授業自己評価の入力率を向上するための工夫が必要である。FD担当者は、会議など教員が集まる場で授業自己評価の入力を要請するとともに、将来的には未入力であることを知らせるシステムの導入が望まれる。

第11章 共同獣医学部のFD活動

第1節 授業公開

- (1) 授業公開（学術セミナー）
 - 1) 「新規プロテアーゼインヒビターの構造と機能」
講演者：山本芳実先生（獣医生化学研究室）
日時：平成24年4月18日（水）17:00～18:00
場所：連合獣医棟4F大講義室
 - 2) 「ウイルスの受容体同定のウラ」
講演者：下島昌幸 先生（獣医微生物学教室）
日時：2012年5月23日（水）17:00-18:00（獣医微生物学研究室）
場所：連合獣医棟4F大講義室
 - 3) 「“子宮組織特異的ナチュラルキラー細胞”って何？」
講演者：木曾康郎 先生（獣医解剖学研究室）
日時：2012年6月27日（水）17:00-18:00
場所：連合獣医棟4F大講義室
 - 4) 「犬の神経系腫瘍の治療 に対する取り組み」
講演者：中市統三 先生（獣医放射線学研究室）
日時：2012年7月25日（水）17:00-18:00
場所：連合獣医棟4F大講義室
 - 5) 「小動物獣医療における麻酔の安全性向上への取り組み-麻酔深度モニタリングについて-」
講演者：板本和仁 先生（動物医療センター）
日時：2012年9月26日（金）17:30-18:30
場所：連合獣医棟4F大講義室
 - 6) 「Protein Phosphatase 2A を標的とした抗がん戦略の可能性」
講演者：大浜 剛 先生（獣医薬理学研究室）
日時：2012年10月24日（水）17:00-18:00
場所：連合獣医棟4F大講義室
 - 7) 「Th2免疫活性化の調節機構の解析～問題解決のためのアプローチ～」
講演者：森本将弘 先生（獣医病理学研究室）
日時：2012年11月21日（水）17:00-18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館7番教室
 - 8) 「日本における魚介類の疾病と防疫対策」“Strategies for the Prevention of Fish and Shellfish Diseases in Japan”
講演者：高橋幸則 先生（山口大学客員教授）
日時：2012年12月19日（水）17:00-18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館2番教室
 - 9) 「食肉目のへパトゾーン症と住肉胞子虫症」
講演者：久保正仁 先生（獣医病理学研究室）
日時：2012年1月23日（水）17:00-18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館3番教室

(2) 授業公開（臨床例総合検討会 CPC）

- 1) 両眼の水晶体超音波乳化吸引術を実施した白内障の犬の一例
講演者：伊藤良樹 先生（獣医病理学研究室）
日時：平成 24 年 5 月 29 日（火）17:00～18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館 6 番教室
- 2) 原発性上皮小体機能亢進症の犬の一例
講演者：奥田 優 先生（獣医内科学研究室）
日時：平成 24 年 6 月 26 日（火）17:00～18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館 6 番教室
- 3) 豚精液の長期冷蔵保存の可能性
講演者：音井威重 先生（獣医繁殖学研究室）
日時：平成 24 年 9 月 25 日（火）17:00～18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館 6 番教室
- 4) 犬の食物アレルギーの診断を見直す
講演者：水野拓也 先生（獣医内科学研究室）
日時：平成 24 年 10 月 30 日（火）17:00～18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館 6 番教室
- 5) リピートブリーダー牛を再考する
講演者：谷口雅康 先生（獣医繁殖学研究室）
日時：平成 24 年 11 月 27 日（火）17:00～18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館 6 番教室
- 6) 国内野生動物で流行する疥癬について
講演者：佐藤 宏 先生（獣医寄生虫病学研究室）
日時：平成 24 年 12 月 18 日（火）17:00～18:00
場所：農学部・共同獣医学部本館 6 番教室

(3) 授業公開（獣医学特別セミナー）

- 1) 自然史博物館における研究—私たちは生物多様性をどれだけ把握しているか
講演者：倉持利明 先生（国立科学博物館 動物研究部）
日時：平成 24 年 7 月 11 日（水）17:00～18:00
場所：連合獣医棟 4F 大講義室
- 2) 日本の獣医領域における 核医学の現状と展望
講演者：夏堀雅宏 先生（日本動物高度医療センター 院長）
日時：平成 24 年 8 月 10 日（金）13:30～14:30
場所：連合獣医棟 4F 大講義室
- 3) 肝移植における免疫制御
講演者：大段秀樹 先生（広島大学大学院 医歯薬保健学総合研究院 教授）
日時：平成 24 年 8 月 24 日（金）17:00～18:00
場所：連合獣医棟 4F 大講義室
- 4) 悦楽の死体
講演者：遠藤秀紀 先生（東京大学総合研究博物館遺体科学研究室 教授）
日時：平成 25 年 2 月 15 日（金）15:00～16:30
場所：連合獣医棟 4F 大講義室
- 5) 三次元ライブイメージングにより明らかになった免疫・アレルギーの新世界
講演者：梶島健治 先生（京都大学大学院医学研究科皮膚科学教室 准教授）

日時：平成 25 年月 15 日(金) 17:30～19:00
場所：連合獣医棟 4F 大講義室

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

1 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

「授業に役立つ e ラーニングの活用」

日程 平成 24 年 10 月 10 日(水) 13:30～14:30

場所 農学部・共同獣医学部本館 2
階会議室

講師 王 躍 先生、小柏 香穂理
先生（メディア基盤セン
ター）

参加者 16 名(アンケート回収 14 名)



設問 1

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	21.4%
良かった	6	42.9%
どちらとも言えない	2	14.3%
あまり良くなかった	1	7.1%
良くなかった	2	14.3%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

内容

本研修会では、2010 年 4 月からメディア基盤センターから正式サービスとして提供されている教育支援システム「Moodle」の使い方について紹介が行われた。コースの登録方法を説明した後に、教材の登録方法や小テストの作成方法について説明が行われた。小テストの作成は、文法に癖があり慣れないと作り難いということで、広島修道大学と VERSION2 社が共同で製作した問題作成ツール「e 問つく朗」を提供してもらっており、これを利用すると比較的簡単に問題が作成出来ると紹介があった(Moodle ログイン後、右下の欄に表示)。

本学独自にメディア基盤センターでカスタマイズして追加した機能として、修学支援システムとの連携機能も紹介された。修学支援システムへ登録されている授業については、講義担当者が moodle にログインしたタイミングで自動的にコース登録が行われるので設定画面からコース利用で「学生はこのコースを利用できる」に変更することで学生が受講登録可能になる。学生は moodle にログインしたタイミングで修学支援システムへ履修登録を行った授業がコース登録されていた場合、自動的に学生メンバーとして登録される他、従来通り登録キーによる登録も出来る。これによりコースの登録申請やメンバー登録の操作が簡略化出来るということであった。

質疑では、Q「鹿児島大学の学生も自動登録されるのか？」A「出来る。3612～の学生が鹿児島大学の学生」Q「直接質問したい時は誰に相談すれば良いか？」A「小串は私、常盤は小柏先生、吉田は赤井先生が対応可能」等のやり取りがあった。

自由記述の感想には、非常に良かったという意見では「moodle の使い方に興味がでてきた」、良くなかったという意見では「自分でできる」等の回答があった。今後の参加については、出来るだけ参加したいという意見として「PC を使って実際に」「双方向通信教育に有効な手段を得られるもの」「健康な心と体について」等の回答があった。

2 教育改善研修会

日程 平成 24 年 12 月 12 日(水)
[吉田地区] 13:30~14:15
場所 農学部・共同獣医学部本館 会議室
講師 小川 勤 (大学教育センター教授)
糸長雅弘(大学教育センター長)
吉村誠 (学生支援センター長)



参加者 13 名(アンケート回収 11 名)

内容

本研修会では、共同獣医学部より提出された学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの小川教授より共同獣医学部から提出された学生ポートフォリオの実実施計画について、大学教育センターおよび学生支援センターとしてのコメント(気づき)や質問が述べられた。まず一点目としては、共同獣医学部におけるポートフォリオの運用に関して、鹿児島

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	4	36.4%
どちらとも言えない	4	36.4%
あまり良くなかった	1	9.1%
良くなかった	2	18.2%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

島大学との間で協議が行われたかどうかについて質問があった。これに対して、学部からは今のところこの件に関しては鹿児島大学と協議を行っていないが、今後は鹿児島大学での取り組み状況を把握し、双方でどのように実施するかについて検討していきたいことが明らかにされた。2 つ目の質問としては、共同獣医学部を卒業した場合、その後の進路は獣医師になるだけでなく、国や県などの公務員などさまざまな進路先が考えられるが、これに関して共同獣医学部として組織的にどのように対応しているのかについて質問があった。これに対して学部からは、年次が上がり教育内容が増え、深化するにつれて1年次当初とは進路先希望が大きく変わってくるのが現状である。したがって、学部としてはこれまでに1年生の夏休み期間中や研究室配属になる前の3年次から4年次にかけて、現職の獣医師や県庁や行政に勤めている方々から直接、仕事内容などについて話を聞く機会を提供し、学生が自らの進路を考える際の参考にしてもらっている。また、今回年度の初めに学生にポートフォリオを作成させ、教員と面談する機会を設けることにより、これまでに学習活動を振り返るとともに、今後の自らの進路を考えるきっかけを作りたいと考え、今回の運用計画を考えたことが明らかにされた。3 つ目の質問としては、医学部では医学実習に入る前に、病院での実習状況を詳細に記載し、指導教官からコメントを記入するというポートフォリオに似た制度がすでに導入されているのでこれを流用する案が示されているが、共同獣医学部では同様な制度はないのかという質問があった。これに対して学部からは今のところ、共同獣医学部では医学部のようなことは行われていない。しかし、平成 25 年度入学生から医学部と同様な動きがあるので、今後、ポートフォリオとの関係を考えていきたい旨との回答があった。

3 つの質問以外に、糸長大学教育センター長からは、ポートフォリオシートの Web 化について説明があった。現状では来年度から導入される新しい共通教育に向けた教務システムの改修作業を優先せざるを得ないことや、仮にポートフォリオシートが Web 化されても、基本的には大学教育センターおよび学生支援センターが示した「雛形」をベースにしたシート開発になることが説明された。

吉村学生支援センター長からは共同獣医学部ではすでに現職の獣医師や獣医師免許を持っていることが前提となっている職業に就いている方々を招聘して学生のキャリア指導に当たってい

ただいているので、今後はこれをさらに発展させるように、就職相談室等との連携を密にしていきたい旨、説明があった。

今回の研修会では大学教育センターや学生支援センターから共同獣医学部から聴取したい事項について質問する形で意見交換が行われた。参加者からはポートフォリオの具体的な運用方法に関する研修を実施するのではないかと期待して参加された先生方もいたので多少 mismatches があった部分については、開催趣旨を事前に十分説明する必要があったと反省している。しかし、短時間ではあったが、共同獣医学部のポートフォリオに対する考え方や現状のキャリア指導の具体的な内容を詳しく知ることができて大変有意義であった。

3 学部・研究科が単独で開催した研修会

(1) 「遠隔授業の良いところ、悪いところー3年間の連携教育プログラムでわかったことー」

日程 平成 24 年 11 月 14 日 (水) 13:30~14:30

場所 農学部・共同獣医学部本館 第 4 講義室

講師 海野年弘 先生 (岐阜大学応用生物科学部 教授)

参加者 27 名 (うち本学受講者 15 名、鹿児島大学遠隔受講者 12 名)

内容

まず本研修会では、遠隔講義システムを用いて講話内容を同時配信し、鹿児島大学共同獣医学部の教員も参加した。内容の主旨としては、平成 25 年 4 月の「岐阜大学・鳥取大学共同獣医学科」設置に先立ち、岐阜大学・鳥取大学・京都産業大学の間で実施された連携教育プログラムにおいて実施された遠隔講義について、その長所と欠点、可能性と限界についてのついてであった。

遠隔講義の理想としては、「臨場感と緊張感」を学生に持たせ、自由に質問できるような授業運営を心掛けることであるが、そのためには遠隔講義独自の授業運用法があるということであった。岐阜大学で取られた初期の学生アンケートには、遠隔講義に対して下記のような不満があった。

- ・映像・音声の乱れ
- ・授業の進行についていけない
- ・文字・図表が小さい
- ・教員と意思疎通が出来ない
- ・質問がしづらい
- ・臨場感に欠ける

これらの意見を受け、以下のような改善が行われた。

1. 遠隔講義システムの調整・追加
2. スライドなどの授業資料の改良
3. 付属機材をつかった授業運営の円滑化
4. TA の配置
5. トラブル発生時・事後の対応策の整備

改善策によりシステムトラブルの回数も激減し、学生アンケートも次第に対面型授業に劣らない評価を受けるようになった。遠隔講義は専門外の教員による授業を避けることで専門教育の充実を図ることができ、個々の教員の負担も減少する。遠隔講義のさらなる充実のためには、システムの保守点検、講義・補講の予約管理、トラブル発生時に対応する専門のスタッフが不可欠であると指摘された。最後に、遠隔講義のポイントとして、カメラ視線を心掛けること、重要な項目には視覚的な合図を使うこと、相手方の学生に定期的に呼びかけをすること、講義内容は対面式の 8~9 割を心掛けることなどが示された。

質疑では、岐阜大のシステム内容について、授業の録画システムの運用について、補講が必要

な時の対応のことについて質問があり、それぞれについて詳細な回答があった。

(2) 「教育支援システム「Moodle」を使ってみよう」

日程 平成 25 年 1 月 30 日 (水) 16 : 30 ~ 17 : 30

場所 メディア基盤センター 2 階 演習室

講師 王 躍 先生、小柏香穂里 先生 (メディア基盤センター)

参加者 5 名

内容

王先生より、教育支援システム「Moodle」についての基本概念と利用方法について説明があった。その後、小柏先生とともに、演習室の PC を使い、受講者が Moodle にアクセスし、Web ページの作成、教材の追加、小テストの作成方法などについて学んだ。受講者からは学生の登録方法、一斉メールの作成、修学支援システムとの連動など、実際の運用面についての質問があった。

(3) 「遠隔講義システム利用方法」

日程 平成 25 年 3 月 19 日 (火) 13 : 30 ~ 14 : 30

場所 農学部・共同獣医学部本館 第 4・第 5 講義室

講師 佐藤晃一 先生

内容

4 月からの新学期開始に先立ち、遠隔講義システムの利用方法について説明があった。遠隔講義システムの立ち上げ方法、講師・学生カメラの操作方法、マイクの利用方法、授業コンテンツの送信方法および効果的な提示方法について解説があった。また、先の岐阜大学・海野先生の話参考に、遠隔講義にあった授業コンテンツの作成方法、講義の運用方法についても紹介があった。参加者からはシステム機材の利用方法、学生とのコミュニケーション方法などについての質問があり、効果的な授業の準備をするための良い機会となった。

第3節 教育改善に関する活動

共同獣医学部設置にあたってグラジュエーションポリシー(Graduation Policy)およびカリキュラム・フローチャートの作成を開始し、2012年5月30日に鹿児島大学共同獣医学部と統一化した。以下の表に、グラジュエーションポリシー (GP1~5) および、リキュラム・フローチャートを示す。

共同獣医学部 カリキュラム・フローチャート 2012年5月30日確定版



第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生授業評価アンケート

1) 共同獣医学部

2012年度		
科目数	実施数	実施率
2	2	100

結果

あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。	4.51
--	------

1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満

あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？	1.58
---------------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6. 答えられない

あなたは、この授業の内容を理解できましたか？	1.29
------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	1.19
---------------------------	------

1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない

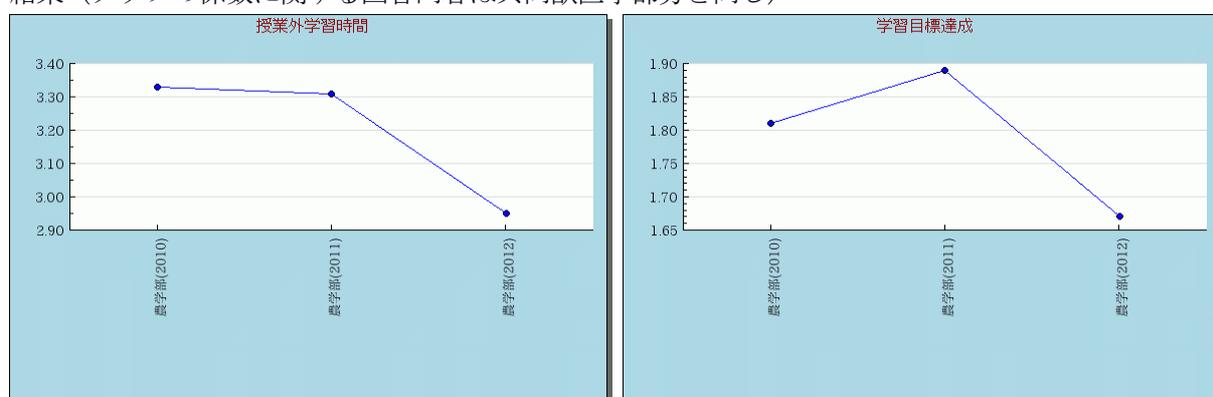
あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？	1.00
-------------------------	------

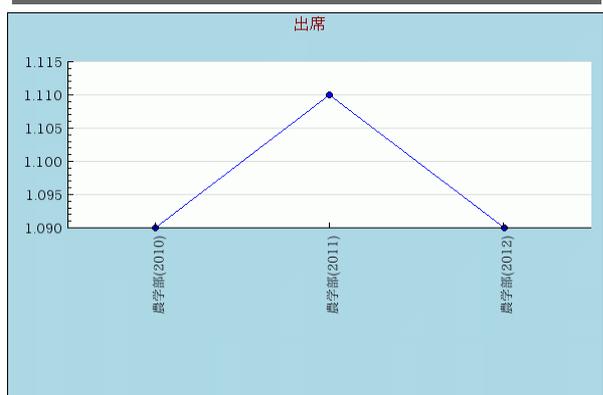
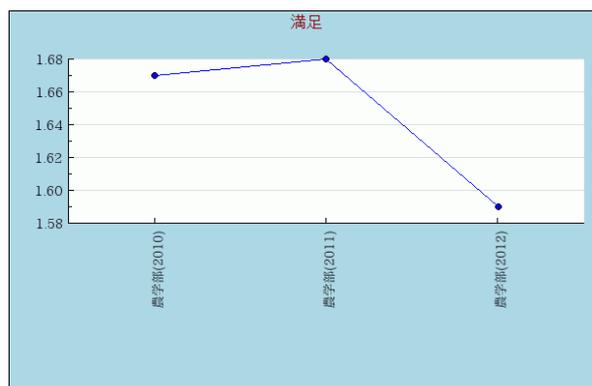
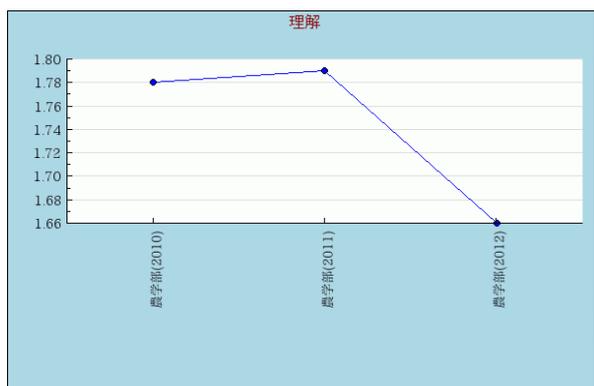
1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12回～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）

2) 農学部獣医学科

2010年度			2011年度			2012年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
39	30	76.9	38	33	86.8	39	34	87.2

結果（グラフの係数に関する回答内容は共同獣医学部部分と同じ）





共同獣医学部のアンケート対象科目は2科目のみであったが、学生授業評価は概ね良好な結果であった。農学部獣医学科の学生については、授業外学習時間の減少傾向が見られたが、昨年と比べて学習の目標達成度、理解度、満足度、出席率の改善傾向が確認できた。共同獣医学部設置の準備に伴った、学習環境の整備も改善要因の一つかと考えられる。

(2) 教員授業自己評価

1) 共同獣医学部

2012 年度		
科目数	実施数	実施率
1	1	100

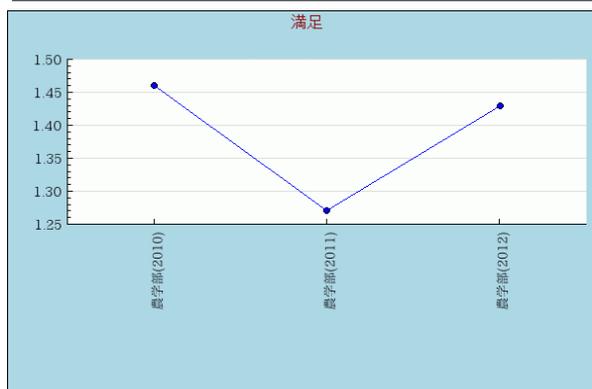
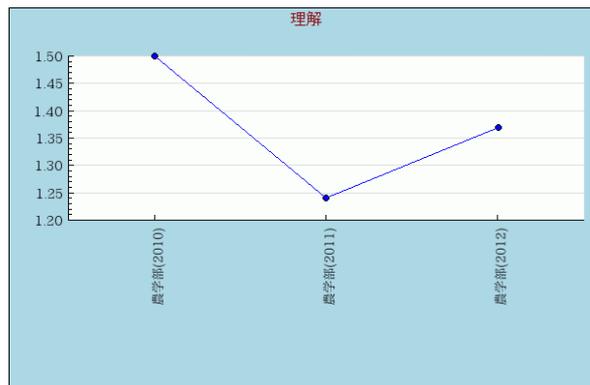
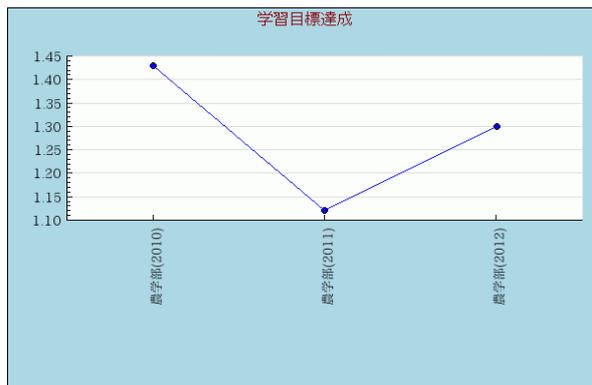
本結果は少数のデータのため省略し、教員授業自己評価については2) 農学部獣医学科において分析した。

2) 農学部獣医学科

2010 年度			2011 年度			2012 年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
39	20	51.3	38	30	78.9	39	22	56.4

結果

各グラフの縦軸は(1.そう思う、2.ややそう思う、3.どちらともいえない、4.あまりそう思わない、5.そう思わない)の平均点



教員授業自己評価度は、全体的に昨年度より低下傾向を示した。これは、学生の授業評価と相反する結果であった。上記より学生の立場からは、本年度の教員の授業方法については満足していることが分かったが、教員側では共同獣医学部に移行することで始まる、鹿児島大学との遠隔講義へ対応することに対する焦燥感と責任感がここに映されてるかもしれない。

3) 今後の課題

共同獣医学部への移行によって、従来までの授業評価項目に加え、遠隔授業に関する評価項目が本学部にとって重要な授業改善要因となる。本年度はまだ1年生の授業内容しか判断基準がないため、専門教育が始まる来年以降も十分な自己分析を行い、問題点は逐次改善または補完していかなくてはならない。

そのためには、学生および教員の声を効率よく拾い上げる必要がある。教員授業自己評価の入力率は6割程度にとどまっているため、意見が十分に反映されていない心配がある。もちろん、組織的な努力により、未入力者に対して入力の呼びかけを続けることが必要であるが、自己評価システムへの入力方法の検討、未入力者へのアラートシステムの構築、複数の自己評価システムの統合など、分かりやすいシステムへの改修も有効であると考えられる。

鹿児島大学の学生の声については、3月に互いの学生アンケートの統計結果を開示し、問題の抽出に当たった。今後も両大学間での情報交換を密にし、よりよい教育の実現に向かって努力していきたい。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
共同獣医学部	第2回共同獣医学FD研修会	講師謝金・旅費 1名	70	遠隔講義形式の長所・短所を理解し、本学部における実施準備にとって有用な知見を得た
計			70	

第6節 来年度の課題

始まったばかりの本学部にとって、FD活動は教育システムを正しく機能させるために重要な意味を持つ。従来の教育システムで行われてきた自助努力に加え、本学部特有の遠隔講義・実習を効果的に行うためには、今まで経験しなかった教授知識・技術の習得が必要とされる。

学生が専門教育課程へ進むにつれ、本年度では見いだされなかった新たな問題点が明らかになる可能性もある。学生の声を広く聴き、問題を早期に発見し対処する必要がある。共同獣医学部のメリットを活かした教育を行うためには、ここ数年が地盤固めにとって重要な期間になると考える。

第12章 人文科学研究科のFD活動

第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

人文科学研究科としてのFD研修会は実施していない。

第3節 教育改善に関する活動

人文科学研究科としての教育改善活動は特に実施していないが、大学院生アンケートを実施し、その結果を人文科学研究科委員会で公表した。特に研究室の整備に対する要望は施設環境整備委員会に伝え、人文学部棟の耐震改修工事にあわせた対応を講じて貰うこととした。第4節（1）参照。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

（1）学生アンケート

受講学生数が少ないことから、IYOCAN2を利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。平成24年度もこれを踏襲し、人文科学研究科在籍中の大学院生16名を対象に、前期試験終了日の平成24年8月2日を締切として、記述式の無記名アンケートを実施した。アンケート提出者は9名で、回収率は53.3%であった。

アンケートの質問項目は以下のとおりである。

- 1：人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続して欲しい点があれば、お教えてください。
- 2：人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善して欲しい点があれば、お教えてください。
- 3：研究環境（例えば、大学院生用研究室など）についてご要望があれば、お教えてください。
- 4：その他、ご意見ご要望があれば、お教えてください。

質問1に対する回答では、少人数教育や教員の丁寧な個別指導をあげた学生が多かった。演習のなかで他の学生から刺激を得られるとする者もあった。質問2に対する回答では、大学院生に特化した授業を充実させることや、入学直後に研究計画指導を希望する声があった。質問3に対する回答では、研究室の備品の不足や劣化、研究室の使いにくさをあげる学生が複数あった。質問4に対する回答では、人文科学研究科のメーリングリストを望む意見があった。

以上の結果について、平成24年10月の教務学生部会ならびに人文科学研究科で報告し、学生指導や教育に役立てるよう促した。

(2) 教員授業自己評価

平成 24 年度も、前年度同様、集中講義以外の人文科学研究科の全授業 157 科目について教員自己評価の対象としたが、IYO CAN 2 に入力された授業は 35 科目に留まり、履修者のなかった授業科目を除外しても、入力率は 41.1% に留まった。平成 23 年度の入力率は 46.1%、平成 22 年度の入力率 48.5% であり、元来の入力率が低いなかで入力はさらに漸減の傾向にあると見られ、何らかの組織的対応が必要である。

第 5 節 F D 実施経費報告

人文科学研究科で実施した F D 活動に伴う経費執行はない。

第 6 節 来年度の課題

規模が小さいため研究科独自の F D 活動は展開しにくいだが、大学院生アンケートを継続させて学生の要望をよく聴取し、学生の研究や研究環境の充実・改善に向けた提言を行っていくべきである。また、教員授業自己評価の入力率の向上は喫緊の課題である。

第13章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

本研究科では授業公開を実施していない。しかしながら過去の教育学部FD研修会でのアンケート回答において、ゼミの運営、特に多様な学生が参加するゼミの運営方法について、他の教員のものを参考としたいという要望があった。大学院での授業公開を検討する必要があると理解している。今後の検討課題としたい。

第2節 研究科主催FD研修会

特に研究科主催のFD研修会は企画しなかった。大学院修士課程の課題を整理し、検討する必要がある。その中で、教育学部との共通の課題については共催のFD研修会を開催することも考えられる。

第3節 教育改善に関する活動

今年度FD活動として挙げるものは特にないが、大学院修士課程での教育カリキュラムについて、より魅力的なものにするための検討をする必要があることを認識している。次年度以降、教育学部の教育企画部等とも連携しながら、教育カリキュラムについて教育改善のための検討を行っていききたい。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

これまで同様に、学生授業評価及び教員授業自己評価を実施した。その結果を平成25年4月20日にIYOCAN2のwebsite上で確認した。表1は学生授業評価の実施状況を、表2は教員授業自己評価の実施状況を表す。学生授業評価の実施率は69.6%であり、教育学部における実施率と比べて約17ポイント低い。それに対して、教員授業自己評価は45.3%となっており、教育学部における実施率と同程度である。参考のため、表3に平成21年度からの実施率の経年変化も示した。学生授業評価の実施率は、徐々に低下している一方、教員授業自己評価については平成23年度に大きく増加し、平成23年度・平成24年度は同程度である。大学院の授業においては、1科目あたりの履修者数が少なく、学生授業評価を実施したとしても、その結果を教員が閲覧することができない（アンケート回収数が5未満の場合、教員は閲覧不可）。従って、教員の立場からすると、学生授業評価を実施することの動機づけが弱い。それと関連して、受講者数が5名未満の場合は学生授業評価を実施しなくてもよいと考えている教員がいるのではないかと推察している。これらのことから、教育学研究科・専攻単位での学生授業評価の結果をFD報告書で報告し、教員に学生授業評価結果の傾向をフィードバックしていることや、受講者数が5名未満の場合でも学生授業評価を実施することの周知を行うことが必要であると考えている。

表1 平成24年度における学生授業評価実施状況。前期・後期を含めた科目数と実施数から実施率を算出した。

全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録あり科目(D)		
科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
339	103	339	103	30.4%	148	103	69.6%	258	103	39.9%
B&C			B&D			C&D				
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率		
148	103	69.6%	258	103	39.9%	148	103	69.6%		
B&C&D			実施率							
科目数	実施数	実施率	最大							
148	103	69.6%	69.6%							

表2 平成24年度における教員授業自己評価実施状況。前期・後期を含めた科目数と実施数から実施率を算出した。

全数(A)		開設科目(B)			対象科目(C)			履修登録あり科目(D)		
科目数	実施数	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
339	67	339	67	19.8%	148	67	45.3%	258	67	26.0%
B&C			B&D			C&D				
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率		
148	67	45.3%	258	67	26.0%	148	67	45.3%		
B&C&D			実施率							
科目数	実施数	実施率	最大							
148	67	45.3%	45.3%							

表3 学生授業評価及び教員授業自己評価の実施率の経年変化。

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
学生授業評価	70.6%	76.2%	71.5%	69.6%
教員授業自己評価	38.2%	31.8%	48.3%	45.3%

次に、最近4年間における学生授業評価の結果の変化を表4に示す。Q1, Q2, Q5, Q7については、年を経るごとに前年度に比べて評価値が同じか増加している。さらに、Q4の「あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか？」の質問項目については、平成23年度までは4.5を下回っていたが（評価値の5よりも4の方が多い）、平成24年度は4.63と4.5を上回り評価値の5を付けた学生が多いことを示している。全体的に、平成24年度は評価値が上昇しているように感じられる。これらは、教育学部の傾向とほぼ一致している。

表5においては、平成24年度における各専攻のアンケート回収数、評価値を示した。いずれの質問項目についても、評価値4.5を上回っており、良好な結果となっている。

表4 学生授業評価の平成21年度から平成24年度までの経年変化。質問番号・質問文と回答数(N)・評価値の結果(E)。回答選択肢は、全て共通で「1. そう思う(5)」、「2. ややそう思う(4)」、「3. どちらとも言えない(3)」、「4. あまりそう思わない(2)」、「5. そう思わない(1)」と設定してある。質問番号Q6のみ「6. この授業は当てはまらない」という選択肢が追加されている。ここで評価値Eは、回答選択肢の括弧内の評価値を用いて計算された平均値。評価値Eの値が4.5を下回るものを太字で表示した。

質問 番号	質問文		平成 21 年度	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度
Q1	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？	<i>N</i> <i>E</i>	503 4.71	437 4.74	357 4.76	407 4.88
Q2	参考資料や文献の提示・紹介は適切に行われましたか？	<i>N</i> <i>E</i>	502 4.64	440 4.64	357 4.68	407 4.79
Q3	学生の疑問・質問への対応や議論は、充分でしたか？	<i>N</i> <i>E</i>	504 4.64	439 4.75	357 4.73	408 4.84
Q4	あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか？	<i>N</i> <i>E</i>	502 4.49	440 4.49	357 4.47	407 4.63
Q5	この授業は、あなたの期待した内容を含んでいましたか？	<i>N</i> <i>E</i>	502 4.59	440 4.59	353 4.62	405 4.76
Q6	ゼミナールの運営は適切でしたか？	<i>N</i> <i>E</i>	449 4.66	428 4.64	267 4.68	384 4.80
Q7	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？	<i>N</i> <i>E</i>	493 4.64	435 4.69	348 4.69	401 4.81

表 5 平成 24 年度における各専攻のアンケート結果。Nはアンケート回答数を、Eは評価値を示す。質問項目 Q1～Q7 及び教育学研究科全体の結果については、表 4 を参照。

		Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7
学校教育 専攻	<i>N</i> <i>E</i>	177 4.85	178 4.78	179 4.79	179 4.62	179 4.69	165 4.76	175 4.75
教科教育 専攻	<i>N</i> <i>E</i>	229 4.93	229 4.80	229 4.87	228 4.63	226 4.81	219 4.83	226 4.85

第 5 節 F D 実施経費報告

教育学研究科の FD において、予算を伴う活動は実施していない。

第 6 節 来年度の課題

学生授業評価及び教員授業自己評価についての課題は次の通りである。

学生授業評価の実施率は 7 割程度であるが、年々低下傾向にあるようにも読み取れるので、再度、教員に実施を促す必要がある。その際、受講者数が少なくても（5 名未満でも）、教育学研究科全体及び専攻ごとに、学生授業評価の結果を確認することができる旨を周知することが必要である。教員授業自己評価については、逆に年々実施率が向上しており良い傾向にあるが、より一層の入力を促したい。

平成 23 年度の FD 報告書でも述べたが、教員からの要望として、ゼミの運営について FD 研修のテーマとして取り上げて欲しい旨の要望があった。以前より、教育学研究科では、多様な学生：ストレ

ートマスター・社会人学生（主に現職教員）・留学生がおり、ゼミ運営の困難さが指摘されていた。この点について、他の教員のゼミの運営方法を参考にしたいという要望であると理解している。大学院教育学研究科における授業公開として、ゼミの公開が可能であるか、継続して検討する必要がある。最後に、教育学部におけるFD活動に比べて、教育学研究科のそれは全体的に低調である。近年、修士課程においては、研究よりも教育の部分の比重が大きくなってきていることもあり、より一層のFD活動の充実を目指して、検討する必要がある。

第14章 経済学研究科のFD活動

第1節 授業公開

本年度の経済学研究科におけるピアレビュー活動は以下のとおりである。

公共管理コース

経営学科 FD 委員 古賀大介

1. 担当 : 経済学科 馬田哲次先生
2. 科目 : 公共管理コース Program Evaluation (大学院)
3. 評価対象講義の内容 : 公共管理コース学生が、プログラム・インパクト評価と効率性評価の理論を踏まえて作成した独自のプログラムを報告し、そのプログラムをめぐる質疑応答と担当教員のコメント
4. 日時 : 2010年7月9日(月) 5・6時限
5. 場所 : 東アジア研究科・2階演習室
6. 参加者 : 塚田広人先生、馬田哲次先生、柏木芳美先生、豊嘉哲先生、服部麻里子先生、古賀大介 (FD委員) *講義観察カード提出者のみ

ピア・レビュー対象講義では、留学生3名が準備してきた独自のプログラムを英語で報告した。これに対して報告終了ごとに、報告者と報告者以外の学生・馬田先生との間で質疑応答が交わされ、最後に馬田先生からの指導コメントがあった。本講義を観察したFD参加教員からは、講義後、以下のような観察所見が寄せられた。

参考となった点

- ・報告者によるプレゼンと時間配分が適切となるよう適宜指示が馬田先生からなされている点。例えば、報告者の説明が冗長になりそうな場合には、説明の省略を促すなど。
- ・まずは報告者以外の講義参加学生から質問を引き出すよう、馬田先生が上手に誘導している点。その質問と質疑応答を生かしながら、馬田先生が適切なコメントを行っている点。

講義運営での疑問や課題として指摘された点

- ・報告者以外の学生の中には、質疑応答中、私語をする者もみられた。教員が注意すべきではないか。
- ・報告を担当していない学生が、準備をせずに講義に臨む場合、どのように対応すべきなのか。

以上は主要な指摘であり、講義観察カードにはこのほか多くのコメントが寄せられた。出席者が作成した講義観察カードは、講義実施者である馬田先生に手渡し、今後の講義改善に生かされる見通しである。また、FD参加者も、FD対象講義での参考点・疑問点に留意しながら、それぞれが担当する講義改善に向けて、鋭意努力するものと思われる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成24年9月19日(水)、16時より約1時間にわたって大学教育機構との共催により、学生ポートフォリオを使った指導をテーマに教育改善FD研修会が実施され、機構側からの説明の後、質疑応答が行われた。この日は経済学部の定例教授会の日で、研修会開催の開始時刻が教授会の直後ということもあり、教授会へ出席していたほとんどの教員が研修会へ参加した。

第3節 教育改善に関する活動

1、平成22年度入学生から正式に導入された修士論文の「予備審査制度」は、正式の修士論文を提出する前(2~3ヶ月前)に修士論文草稿を仮提出し、それを審査委員が読み、不十分な箇所があればそれを指摘することによって、修士論文の品質を向上させようというものであるが、導入後は現在まで順調に機能している。

2、2013年度入試より、外国人留学生の語学能力に関する部分の出願資格が次のように変更されることとなった。

【変更前】

Ⅱ 出願資格

日本の国籍を有せず、2011年11月実施分以降に受験した独立行政法人日本学生支援機構が主催する日本留学試験の日本語科目の成績が、『聴解・聴読解』、『読解』の合計点については230点以上、『記述』については33点以上の者。

【変更後】

Ⅱ 出願資格

日本の国籍を有しない者。また、2011年11月実施分以降に受験した独立行政法人日本学生支援機構が主催する日本留学試験の日本語科目の成績が、『聴解・聴読解』、『読解』の合計点については230点以上、『記述』については33点以上の者、又は、独立行政法人国際交流基金及び公共財団法人日本国際教育支援協会が主催する日本語能力試験においてN1を取得した者(2009年度に旧試験を受験し、日本語能力試験1級を取得した者を含む)

これによって来日前に自国で受験する機会が多い試験が加えられたことにより、本研究科受験生への便宜が高まると予想される。

3、本年度、これまで経済学専攻の中に設置されてきた「公共管理コース」の運営面において若干の問題点が生じていることが明らかとなった。それは同コース運営の過程で、当初予想された以上の教員の負担が生じていることであり、本年度はこれについて学部で詳細な検討を行った結果、担当者の負担の調整と、同コースの仕事量の調整が行なわれることとなった。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価について近年の経済学研究科の実施率は2009年度は49%、2010年度は39%、2011年度は47%、2012年度は33%であった。教員授業自己評価は、2009年度は48%、2010年度も48%、2011年度は39%、2012年度は33%であった。

いずれも入力率が高い時でも5割以下にとどまっており、その改善方法について、その必要性の理解を強めることも含めて組織として検討する必要がある。

第5節 FD実施経費報告

平成24年度 経済学研究科FD実施経費報告票

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途	執行額(千円)	FD 活動の効果 (簡潔に)
経済学研究科	ピアレビュー		22	講義改善のための資料が得られた。

第6節 来年度の課題

経済学研究科における来年度の課題としては、第一に学生授業評価、教員授業自己評価の入力率向上に向けた組織的な取組みを強化することがあげられる。

第二に、第3節で述べたように、「公共管理コース」でその運営面において若干の問題が存在することが明らかになったが、そこには、今後、新しいカリキュラム等を実施する際には、少数教員に過度に依存することのないよう、指導体制の安定性、継続性に従来以上に配慮すべきであろうことが示されていると考えられる。

以上。

第15章 医学研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは理工学系研究科（第16章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは農学系研究科（第17章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第16章 理工学研究科のFD活動

理学系

第1節 授業公開

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独では授業公開を実施していない。理学系教員は、理学部のピアレビューに参加した。詳細は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、理工学研究科（理学系）として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

理学部教育改善FD研修会

講師派遣型アラカルト研修会「発達障害学生の理解と対応-入学から就労までを視野に入れて」

講師派遣型アラカルト研修会「学生相談室の相談内容から見えてくる最近の山口大学の学生の実態」

第3節 教育改善に関する活動

理工学研究科単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

理工学研究科理学系で開講している授業科目の学生授業評価結果について分析した。

図1は学生の授業外学習時間（正規化した指標）の自己評価の年度推移である。授業外学習時間としては少し少ない傾向にある。課題を出す等、自主学習を促す必要があると考えられる。図2は、学生の授業への出席の自己評価結果の年度推移である。多くの学生は出席状況が良好である。

図3は学生の授業目標達成度に関する自己評価結果である。図4は教員側から見た学生の授業目標達成度についての評価結果の年度推移である。教員の評価に対して学生の評価が低い。この傾向は学部と同じ傾向である。

図5は学生の授業理解度についての自己評価結果の年度推移である。一方、図6は教員側から見た学生の授業理解度の評価結果である。ともに2012年度は大きく増加しており、望ましい結果と言えるが、今後継続して調べていく必要がある。

図7は学生の授業に対する満足度の自己評価結果の年度推移である。図8は教員が自分の実施した授業について学生が満足しているかどうかを評価した結果の年度推移である。2012年度は学生の満足度も大きく増加しており、良い傾向にある。

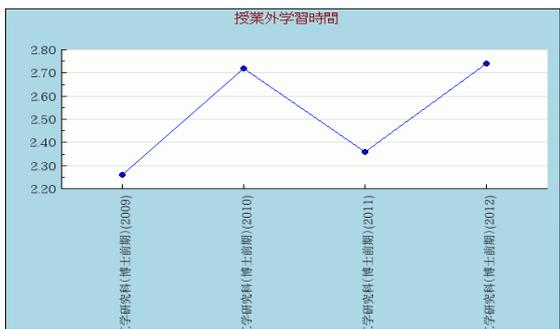


図1 学生の**授業外学習時間**（正規化した指標）の年度推移



図2 学生の**授業出席**についての自己評価結果の年度推移

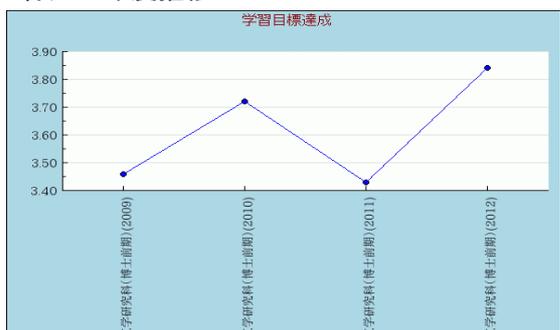


図3 学生の**授業目標達成**についての自己評価結果の年度推移

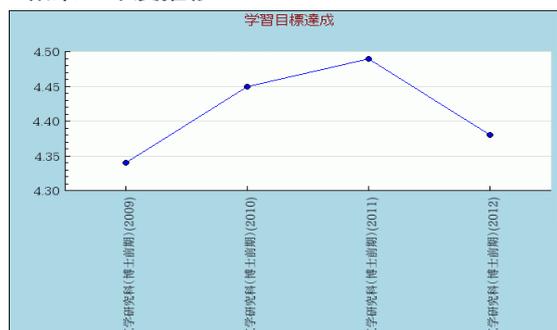


図4 教員側から見た学生の**授業目標達成**についての評価結果の年度推移

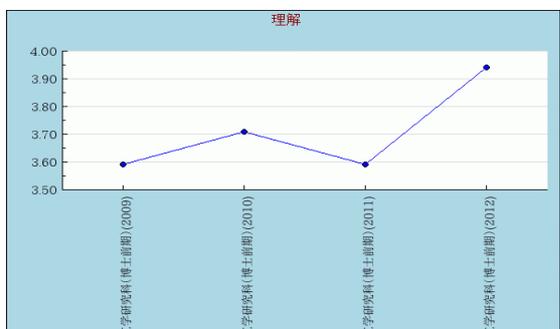


図5 学生の**授業理解度**についての自己評価結果の年度推移

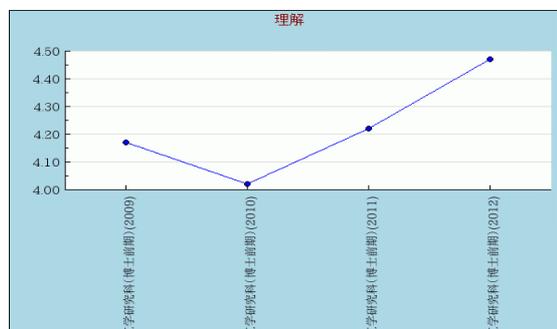


図6 教員側から見た学生の**授業理解度**についての評価結果の年度推移



図7 学生の**授業満足度**についての自己評価結果の年度推移

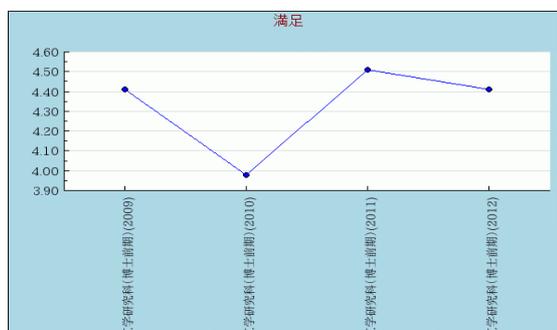


図8 教員側から見た学生の**授業満足度**についての評価結果の年度推移

第5節 FD実施経費報告

理工学研究科（理学系）単独では、FD 実施経費を使用していない。理学部と共通で使用した。したがって、実施経費報告は第7章の理学部のFD活動を参照されたい。

第6節 来年度の課題

授業外学習時間の評価値が低いので、自主学習を促すような取り組みが大学院授業において必要であろう。

工学系

第2節FD研修会、第4節以降については、工学部の部分と重複するので、ここでは、第1節授業公開および第3節教育改善に関する活動について述べる。

第1節 授業公開

理工学研究科も、昨年後期から参加率の向上を期待して、一定期間を定め、学部全開講科目を対象として授業科目を実施した。

平成24年度（前期）公開授業一覧

前期公開授業実施期間 7月2日（月）～7月19日（木）

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時 月 日	備考
		職	氏名		
全専攻	全開講科目	全職	全教員	7月2日～ 7月19日	非常勤講師担当の科目は除く。

平成24年度（後期）公開授業一覧

後期公開授業実施期間 12月3日（月）～12月21日（金）

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	備考
		職	氏名	月 日	
全専攻	全開講科目	全職	全教員	12月3日 ～12月21日	非常勤講師担当の科目は除く。

詳細に関しては、第9章を参照されたい。

第2節 教育改善に関する活動

理工学研究科工学系、医学系研究科工学系の優秀授業表彰一覧を示す。

平成23年度優秀授業表彰一覧表				
理工学研究科（工学系）、医学系研究科（工学系）				
番号	開設科目名	担当教員名	専攻名	表彰種類
1	都市環境工学特論	今井 剛	社会建設工学専攻	最優秀授業
2	構造材料学特論	吉武 勇	社会建設工学専攻	優秀授業
3	化学分析特論	吉本 信子	物質化学専攻	最優秀授業
4	界面電気化学特論	江頭 港	物質化学専攻	優秀授業
5	高分子化学特論	大石 勉	物質化学専攻	優秀授業
6	光機能材料工学特論	岡本 浩明	物質化学専攻	優秀授業
7	半導体物性特論Ⅱ	山田 陽一	電子デバイス工学専攻	最優秀授業
8	電力変換工学特論Ⅰ	田中 俊彦	電子情報システム工学専攻	最優秀授業
9	電磁波工学特論Ⅰ	堀田 昌志	電子情報システム工学専攻	優秀授業
10	地域計画学特論	鵜 心治	感性デザイン工学専攻	最優秀授業

11	空間・都市計画学演習	鷗 心治	感性デザイン工学専攻	優秀授業
12	環境エネルギー工学特論	小金井 真	感性デザイン工学専攻	優秀授業
13	空間造形学特論 I	内田 文雄	感性デザイン工学専攻	優秀授業
14	感性心理工学特論	松田 憲	感性デザイン工学専攻	優秀授業
15	空間計画学特論	中園 真人	感性デザイン工学専攻	優秀授業
16	基礎デザイン特論	木下 武志	感性デザイン工学専攻	優秀授業
17	都市防災システム特論	瀧本 浩一	環境共生系専攻	最優秀授業
18	地盤防災工学特論	兵動 正幸	環境共生系専攻	優秀授業
19	医用機械工学特論 I	陳 猷	応用医工学系専攻	最優秀授業

表彰の方法は第 9 章の工学部と同じであるが、対象が全開講科目の上位 20%となっている。

第17章 農学研究科・医学系研究科（農学） のFD活動

第1節 授業公開

1 授業公開（学術セミナー）

農学研究科および医学系研究科（農学）の各教員が、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学系研究科（農学）の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総理解の促進を図った。

1) 「筋萎縮を防ぐためにサテライトセルを活性化しよう！！」

講演者：宮田浩文

日時：6月28日（木）17：00～18：00

場所：農学部（連獣）大講義室

2) 「植物の環境ストレス応答に活性分子種はどう関わるか」

講演者：真野 純一

日時：7月31日（火）17：00～18：00

場所：農学部大会議室（本館2F）

場所：農学部（連獣）大講義室

3) 「炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析」

講演者：藤井 克彦

日時：12月14（金）17：00～18：00

場所：6番教室

4) 「微生物における細胞集団のダイナミック変動（細胞の一生）」

講演者：山田 守

日時：11月9日（金）17：00～18：00

場所：農学部会議室

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会、および2) 教育改善FD研修会を以下の日程で開催した。

1) 大学教育センターから講師を派遣して実施する研修会

研修名：「学生ポートフォリオの実施についての意見交換」

日程：平成24年7月18日(水)
 場所：農学部2F 会議室
 講師：小川勤（大学教育センター教授）
 平尾元彦（学生支援センター教授）

2) 教育改善 FD 研修会
 研修名：「学生の主体的な学習活動を活発化させるPBL 型授業の進め方」
 日程：平成24年9月19日(水)
 場所：農学部2F 会議室
 講師：川崎勝（大学教育センター 教授）

第3節 教育改善に関する活動

農学研究科および医学系研究科（農学）は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1) 学生授業評価

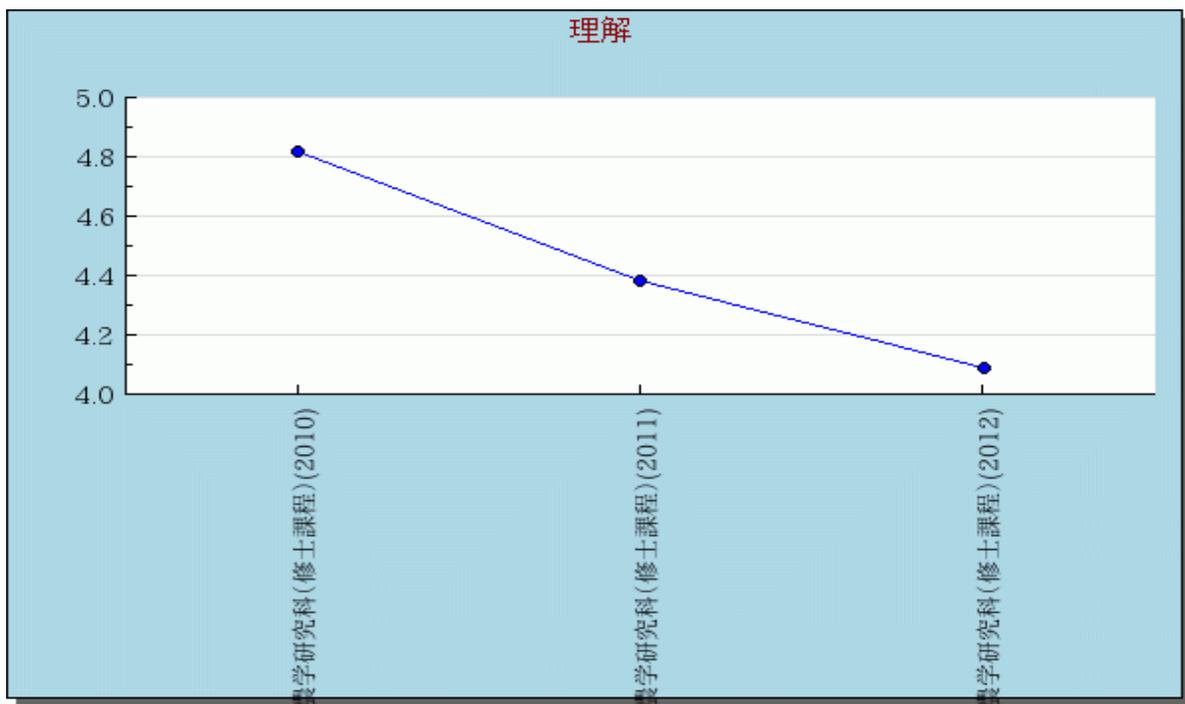
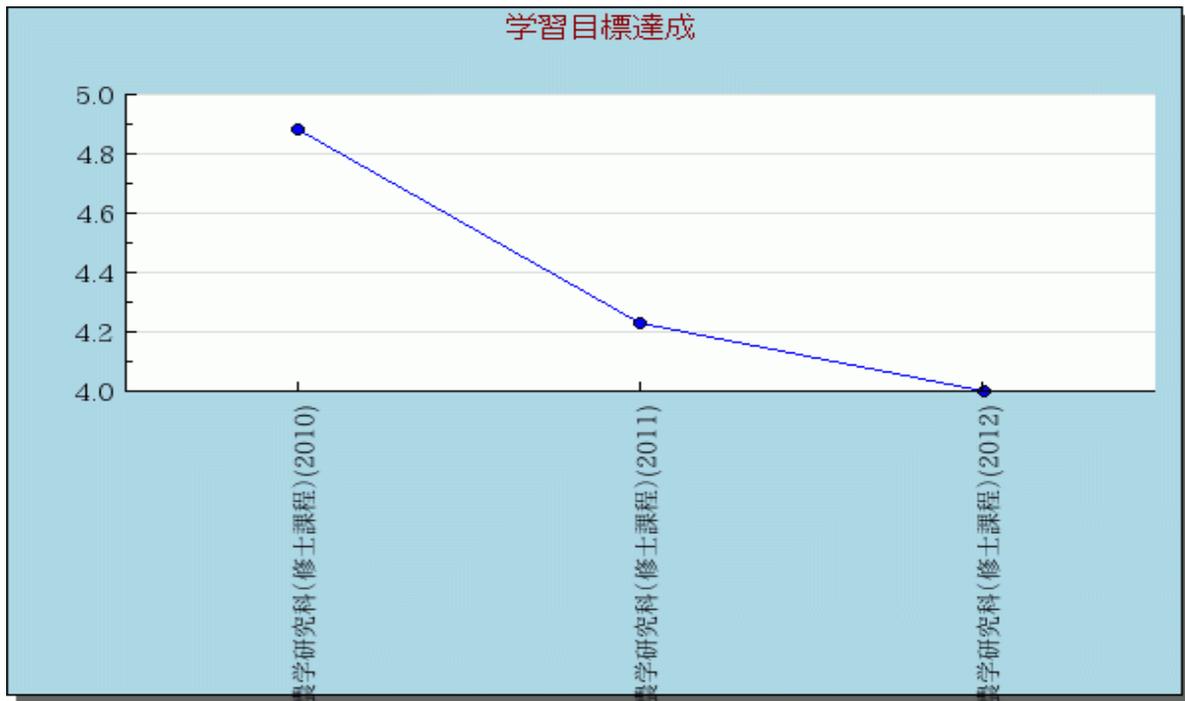
学生授業評価は、農学研究科および医学系研究科（農学）でそれぞれ独自に実施しており、学生による自由記述欄の内容をもとに、授業に対する評価を確認し、改善努力を行っている。授業評価実施率が低い点については、早急に原因を解析し、改善する必要がある。

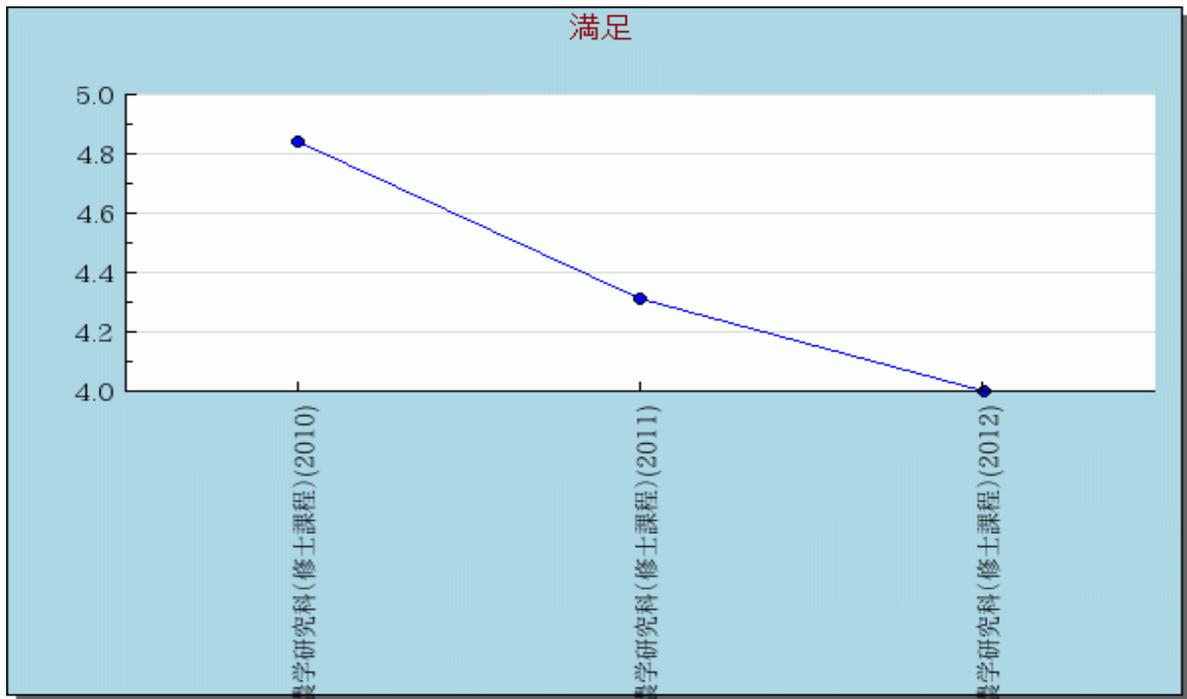
2010年度			2011年度			2012年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
-	-	41.2	-	-	36.4	24	9	37.5

2) 教員授業自己評価

教員授業自己評価は、年々入力率は増加しているが、まだ5割程度であり、組織的な取り組みが必要と考える。評価項目（学習の目標達成度、理解度、満足度）に関しては、いずれについても、学部と同様、年々点数が下がっている。この原因についても解析が必要である。

2010年度			2011年度			2012年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
92	36	39.1	21	11	52.4	24	11	45.8





第5節 FD実施経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
農学部	学術セミナー	展示ボード(FD用)	116	ポスター展示に使用し、学生・院生への研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図った。
農学研究科・医学研究科(農学)	学術セミナー			
計			116	

第6節 来年度の課題

農学研究科および医学系研究科(農学)のFD活動は、授業評価以外は全て学部と重複した内容となっている。しかしながら、研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間でもカリキュラムや教育方針は同じではない。このようなことから、それぞれの研究科独自のFD活動を新たに計画する必要があるかもしれない。また、学習の目標達成度、理解度、満足度の点数が年々低下傾向にある点については原因の解明が望まれる。

第 18 章 東アジア研究科の F D 活動

第 1 節 研究科主催 F D 研修会

24 年度は、下記のテーマで、講師を招いての研修会を行うこととした。このテーマを選んだのは、博士課程に特化した本研究科の性格上、教員自身の研究活動時に加え、その指導学生が学位論文の執筆や授業発表等を行う過程においても知的財産に関する知識が求められることから、知的財産についての認識を深めることが指導学生への教育の改善に直接寄与すると判断したからである。

1. 平成 24 年度 東アジア研究科 FD 研修会「大学教員として知っておくべき知的財産の知識」

(1) 概要

日程	平成 25 年 2 月 27 日(水) 17:00～18:30
場所	東アジア研究科・経済学研究科棟 307 演習室
講師	木村 友久 (技術経営研究科 教授)
参加者	20 名(アンケート回収 15 名)

(2) 内容

本研修会では、知的財産権の概要の説明と、近年の判例等を参考に大学教員として注意すべき点について解説がなされた。著作権をはじめとする知的財産権は、所掌が省庁に分かれているため解釈が微妙に異なるが、主として製品等の開発製造過程の創作物である知的財産(発明等、20 年程度)、営業上の信用が化体されている知的財産権(商標等、半永久的)、思想または感情の創作物である知的財産権(著作物等、死後 50 年程度)の 3 系統に分かれる。これらは無形の情報であり、例えば本であればその文章というように、データ自体に価値がある。動画等の他の著作物についても、その媒体は異なるがデータと捉えることによって知的財産の考え方が整理できる。実際の判例として博多人形と新居猛氏の NY CHAIR X の事例、江差追分事件、山の民家事件、TBS へんしん吹きごま事件等の説明があり、これらの実例をもとに大学で起こる可能性のある問題および注意点について解説がなされた。

質疑応答では、ある実際の作品の制作にかかわった複数の人のうちの誰に著作権があるかについて質問があった。これに対して、講師からはその作品に関する判決の概要と判断の根拠について説明があった。また、折り紙の折方も何らかの権利で保護されるかとの質問に対しては、折り方に独自性や芸術性があれば特許として保護される可能性はあるとの回答があった。

(3) 結果

研修会後のアンケートでは、表1のように本研修会が「良かった」と回答した教員が大半を占める結果となった。具体的な感想としては、「教員にとって最も大切な法律問題について豊富な判例を示していただき大変参考になった」、「後半、論文に関する事例をもっと詳しく聞きたかった」、「出席者の興味のあるテーマに絞ってそこを深く話してほしい」、「論文執筆について原資料（写真）の著作権がどれほど主張されるか、今後アジアでも問題視されるかもしれない」等のコメントが寄せられた。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	13.3%
良かった	11	73.3%
どちらとも言えない	1	6.7%
あまり良くなかった	1	6.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

第2節 教育改善に関する活動

博士課程のみの独立した大学院として、主たる教育活動が学生に対する研究指導となっている本研究科の現実に鑑みて、24年度も昨年度に引き続き、「研究指導法についての検討会」を企画した。同検討会は当初、毎年11月に、本研究科の経済・経営・法律コース、比較文化コース、教育開発コースのそれぞれにおいて行われる準備論文報告会の終了後に、計三回行うこととしていたが、24年度は、報告を予定していた学生の都合(休学等)により、教育開発コースのみが準備論文報告会を行うこととなったため、「研究指導法についての検討会」も一回のみの開催となった。

1. 平成24年度 第一回「研究指導法についての検討会」(教育開発コース)

(1) 概要

日時	平成24年11月16日 18:15-18:35
場所	東アジア研究科・経済学研究科棟307演習室
報告者	有元光彦
参加教員	8名

(2) 内容

まず報告者から、指導学生五名について、それぞれの一年次から三年次までの指導の経過につき詳細な報告があった。続いて、指導上の留意点として、次のことが指摘された：

- ①研究環境を整備するため、関連する文献の充実に努めたこと、
- ②東アジアプロジェクト研究にRAとして参加するよう促したこと、
- ③関連する学会・研究会への参加を促したこと。

最後に指導上の問題点として、次のことが指摘された：

- ①学生の日本語能力(執筆者注：指導学生は全て日本語以外を母語とする留学生である)に関して、日常の指導上さほど問題はないものの、論文を作成する段階においてはかなりの問題があり、日本語のチェックが必要となること、
- ②一部の学生について、専門用語の定義や論理の展開等に関し、細部への注意を払うよう指導する必要があったこと、
- ③一部の学生は、研究内容の新規性と独創性をはぐくむことに配慮しながら指導をする必要があったこと。

報告のあと、報告者と参加教員との討論が持たれた。参加者たちは、報告者が多くの博士課程学生を適切に指導し得ていることに印象付けられながら、学生同士の学び合いの場をいかに設けるかの問題や、教員が学生の論文等の日本語の文面の改善をどのように指導するかの問題について質問を行い、報告者が回答した。

(3) 結果

研修会の終了後、参加者にあらかじめ配布していたアンケート用紙(参考資料参照)を改修した。集計の結果寄せられたコメントを整理すると次の通りである。

- 1) 準備論文報告会における報告学生の報告に関する参加教員のコメント
 - ・とても分かりやすかった。
 - ・準備はよくできており日本語もよく理解できた。
 - ・一生懸命な発表姿勢が印象的だった。
 - ・××語と日本語の比較研究をとても興味を持って聞くことができました。例文を使った分かりやすい研究発表でした。
 - ・プレゼンについて。聴衆に語りかけるようになるとなおよい。
 - ・プレゼン資料について。スライド一枚あたりの文字数が少なく読みやすく、良かった。
 - ・学位論文の全体構成が分かる資料があればよいと思った。
 - ・研究上の意義についてもう少し丁寧な説明が欲しかった。
 - ・「2」の先行研究の部分について。具体的にどの研究を参考にしたか明記した方がよい。
 - ・「分裂現象」の三パターンは独自に分析して得られた結果か、それとも先行研究の結果なのかをはっきりさせる必要がある。
 - ・どこ部分のどこを修飾しているかがスライド上で図示されているとよかったです。
 - ・データソースについて。「BS朝日」の番組(比較的マイナーと思われる)を選択した理由は何か。
- 2) 教員の指導法に関する参加教員のコメント
 - ・留学生のご指導大変かと存じます。
 - ・多くの学生をシステムティックに、また個々のテーマを活かした指導をしていると思う。留学生ばかりなので大変かと拝察します。(他三名、ほぼ同意見)
 - ・学生への指導に大変参考になった。
 - ・先行研究と資料をしっかりと収集させ、その上に立って指導されているように感じました。
 - ・一年次から学会発表を行っているのは研究上良い経験だと思う。私のゼミ生にも学会発表を促しているが、なかなか参加せず視野が広がらないことが問題である。
 - ・一年目から三年目までのプロセスが確立している印象を持ちました。
 - ・オリジナルなデータ収集・分析を重視されている点に共感する。
 - ・全体指導と個別指導を交えて指導されている点も参考になりました。

第3節 FD実施経費報告

平成24年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
東アジア研究科	講師派遣型研修会	講師旅費 1名	1	知的財産権について知見を得た。
計			1	

第4節 まとめと来年度の課題

「国内外から、東アジアで活躍できる指導的高度専門職業人を目指し、「研究意欲と創造性を備え、研究計画に基づいて自立的に研究を遂行していく人」(本研究科アドミッションポリシー)を求める本研究科の教員の使命は、国内外から入学してきた学生に博士の学位を授与すべく、自立した研究者としての能力を育み、学位論文の執筆を適切に指導することである。学生の中には留学生が少なくなく、11月に行われた教育開発コースの「研究指導法についての検討会」においては、日本語を母語としない指導学生を多く抱える報告者から、日本語の添削の問題など、指導上の具体的な工夫や課題について話があり、多くは自らも留学生の指導学生を担当している参加教員たちにとって参考になるところが多かったのではないかと思う。東アジア研究科FD委員会では、今後も、準備論文報告会など教員の集まる機会を利用して、こうした討論型の研修会を設け、研究指導上の諸問題を認識し、問題の対処方策等を教員間で共有するよう、努めていきたい。

また、知識財産に関する2月の研修は、知識財産法をめぐる最近の動向について、専門家から詳細に話を聞く貴重な機会となった。博士課程学生への研究指導を教育の主内容とする本研究科においては、今後も、今回の研修会のような、学術研究の遂行上の諸問題を扱った啓発活動が望まれる。

知識財産に関する2月の研修の後に行われたアンケートにおいて、今後に希望する研修内容について参加教員に尋ねたところ、「本研修と関連する書物を撮影した写真についての詳しい話」、「著作権に関する詳しい内容」など当該研修と関連する要望のほか、「博士課程レベルでの留学生に対する指導方法について」、「学生とのコミュニケーションの取り方」、「学生の勉強意欲の引き出し方」、「個別テーマを設けて内容を詳しくした研修」等に対する要望が出された。本研究科で教育活動にあたっている教員たちの間で、既に述べた留学生への対応のほか、学生とのコミュニケーションや学生の勉学意欲等、日本人学生も含めた博士課程学生一般の指導法上の問題が意識されていることが窺える。FD委員会として、これらの問題の解決に資する活動を強化していくことが、来年度の課題となるであろう。

(参考資料)「研究指導法についての検討会」において配布したアンケート用紙

平成24年度 第1回 東アジア研究科FD研修会 アンケート

教育開発コース

お名前_____

※本コメント票は、FD 研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出ください。

※コメントは2種類あります。一つは準備論文報告に関してであり、もう一つは指導法に関してとなります。両方とも主指導教員へのメッセージとしてご記入ください。

準備論文報告 〇〇氏の報告に関して

研究指導法報告者 〇〇先生の指導法に関して

平成24年度 山口大学大学院東アジア研究科FD委員会

塚田 広人

更科 慎一

角田 由佳

松岡 勝彦

第 19 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。そして、宇部・福岡・広島の 3 教室体制で授業を行っていることにより、全教員が週末に授業を担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室の 3 カ所の教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている（新カリキュラムにより平成 25 年度から一部変更）。

前年度に引き続き平成 24 年度に赴任した教員を対象にして、平成 24 年度前期必須科目 6 科目の授業を公開し、新任教員によるピュアレビューならびに MOT 教育カリキュラムの研修を行った。

なお、技術経営研究科の専任教員が担当する授業については、原則として他研究科あるいは機構教員に対して公開されており、必要に応じて聴講等が行われている。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修

平成 23 年度の FD 研修活動として、平成 25 年度秋入学生から開始する宇部教室（常盤地区）英語授業に対応するために、所属全教員向けの語学研修（ロゼッタストーン社遠隔語学研修サービスを平成 24 年 7 月から利用）を実施した。並行して、各教員は平成 25 年度からの下記英語授業に向けた教材開発を行っている。

講義内容

Innovation management:

This lecture explains a basic matter required for notional understanding of an innovation. These consist of following contents.

What is an innovation?

What kind of type is there?

Why is an innovation required in a company or an organization?

Understands the following contents about the feature of an innovation. An innovation is a process, not a single event like technological invention. The goal of an innovation is a market, is received there and completed. In order to raise the probability of a success of an innovation, gets to know the element which constitutes the process from a start to the goal, and it, and understands about how it should be manipulated to these elements. Furthermore, it is explained using an example how the generated innovation is diffused, or penetrated into a market or society.

The examination from both sides of grasp of recognition and its application possibility of the technological seeds used as the base and market needs, and its future trends is needed for creation of a technological innovation. That outline is explained also about a framework required for this examination.

Special Lectures on Operations Management:

In this lecture, product development, production planning, material procurement, work management, conduct a lecture on the entire operation of business activities from the perspective of project management and logistics management.

Product development requires much time and money, which means that product development planning (objectives) focused on future market trends is an important topic. With regards to product commercialization, also of critical importance are the ideas and techniques associated with product development plans based on an understanding of market needs and technological road maps, the production control, raw materials procurement and inventory management activities of the production site - which are aimed at mass production - and, moreover, the principles of Supply Chain Management (SCM) that extend to distribution and revenue maintenance. In this class, lectures are carried out using case examples involving product development, planning and the production of automotive parts, as class participants gain a deeper understanding of industrial management through discussions and practice problems.

Business Law:

This lecture, civil law, commercial law, Anti-Monopoly Law, a consumer law, an intellectual property law, an exportation and importation trade management law, a code of legal procedure and an international proper law decisional rule involved with these, I deal a law territory that a company is supposed to need in the situation that affects a business regardless of an inside and outside country. It is not limited to understanding of mere law interpretation and contract negotiation based on a law, contract making and right information make an analysis, I interpret an effective becoming right and right scope, strategic application etc of lawsuit strategic intellectual property is fundamental in the lecture business competent acquisition I aim. Internationalization of advancement of a technique and a business activity has brought a condition that cannot correspond it in the technology development of own firm completion-type in many cases. I am demanding ability that carries out enterprise strategy and intellectual property strategy while acquire and using a more favorable license rapidly regarding an intellectual property entire territory in this. I do knowledge of a fundamental business law and business competent formation with a lecture that a student settles in the form of the task in subject latter half therefore.

Finance /Accounting & Business Economics:

First, students learn the meaning of income statement, balance sheet, and cash flow statement which play a key role of the corporate accounting, and master the basic knowledge and the ability about them for practical use in a short term. For that, they perform the practice with the PC using a spreadsheet made on Excel and understand the numerical relations of these 3 financial statements.

Furthermore, they learn financial analysis technique such as profitability, growth rate and safety indicator, and understand return on investment, a present value, internal rate of return, the investment collection number of years through practice and deepen general knowledge about the corporate finance.

In addition, as the basics of microeconomics necessary for a business person, they study the principle of price mechanism, and behavior of consumers and companies.

Technology Marketing:

"New product development is more than just making products that work." (T. Curtis)

First, the students in this course learn the following basic knowledge that engineers and scientists need to know: definition of marketing, finding a market opportunity by an environmental analysis, segmentation, targeting, and marketing tools such as product, price, place, and promotion policies.

Second, the students learn the knowledge and skills related to the process of new product development where the engineers and scientists are deeply involved: clarifying a customer's problem, concept design as interim solution for the customer's problem, project design and detail design based on the concept design, manufacturing and tests, etc.

In order to understand the process of marketing and new product development deeply, in parallel with lectures, each student draws up a product plan based on acquired knowledge and skills, and original ideas.

Corporate strategy theory:

This subject aims to acquire the knowledge whole about necessary management strategy theories for learning management of technology, and especially, technical terms related to business administration, necessary management analyses for participating in discussion, and understanding of framework for strategy plans. So, this lecture will focus on the field of "Business administration", "Marketing", and "Finance" from the contents generally lectured in MBA, not limiting to the management strategy theories, which seem to be important for management of technology. It is a purpose to promote the study of the other major subjects efficiently and effectively.

Advanced Study of Intellectual Property Information:

Intellectual property information that is represented in the patent official report is not limited to character as a mere right document. A basic informational technology development of a technique stops researcher informational development that takes the lead or fails there various information are disclosed such as informational new goods of a technique information. A condition that massive group of information hinders application of intellectual property information exists also from a unique format of intellectual property information and anything on the other hand. I aim to understand nature of intellectual property information of an inside and outside country and acquire skills conducive to intellectual property strategy by conducting an analysis that these made online information retrieval and a certain aim last in this place. Student, in addition to acquiring a reference of general intellectual property information and an arrangement artifice, choose manufacturing industry that is conducting international development several companies and analyze intellectual property strategy applying the skill, I conduct drafting of intellectual property strategy that set imagination or a specific company up still more. Further intellectual property information is a domain name and writing object (around invention conceptual design and a trademark I deal with an intellectual property as the need arise besides such as a program and database) especially.

Green MOT:

The purpose of this course is to study the development of "green" businesses and technologies, which contribute to establish a clean, energy-efficient, and sustainable society.

We first analyze the situation of domestic and international energy and environmental policies by reference to official documents such as the Annual Report on the Environment, World Energy Outlook, etc. because the policies strongly affect the development of the green businesses and technologies. We search promising green businesses and technologies through this analysis.

Second, we examine the promising businesses and technologies (e.g. energy-saving technology, new energy resources, and green materials) from many angles. Each student of this course examines documents related to a particular green business or technology and reports on the actual state, problems, and outlook of the green business or technology from the viewpoints of engineering, policy, legal system, market, etc. Through the reports and discussions, the students share the knowledge.

Life Science MOT:

The course focuses on the pharmaceutical and biotechnology-based industry. In this kind of industry, companies directly conduct fundamental research, where their business is inevitably linked to science. Therefore, it brings high uncertainty to their business, which is called a “high risk, high return” business. The existing business models, approaches, and systems cannot fully handle problems that are specific to such a high-risk-high-return business. In fact, a new combination of innovations is needed in such a situation. The course aims to explore the favorable relationships between innovations of technology and innovations of the business style in such an industry, while being based on the actual company cases. Concretely, you do the following: (1) learn about the R&D processes of progressive pharmaceutical companies and the effects of biotechnology in post-genome era on the companies, (2) understand the important features of business tied directly to science: i.e., the uncertain, complex, interdisciplinary, and fast-changing, (3) think about the difficulties that pharmaceutical and biotechnology-based companies should solve, and (4) discuss the appropriate business strategy and business model, while verifying the actual company cases.

Monozukuri MOT:

With the progressive improvement of ICT, manufacturing business management has been largely dependent on the ability to utilize digital engineering (DE). In light of this, first, this lecture will clarify the issues of the traditional DE by discussing and organizing the following topics from both engineering and management perspectives. How the various systems supplied to support DE are utilized in not only product planning, development and manufacturing but also the whole product lifecycle such as logistics, sales, procurement, maintenance, repair, collection and disposal. Also, how the systems contribute to the management, and what their limits and challenges are.

Second, you will learn the reasoning behind Analysis-Led Design (ALD) which fully utilizes QFD, TRIZ and CAE during the early stage of designing such as in the conceptual design phase. Then, you will deepen your understanding of why ALD is exceptionally efficient to produce innovative products effectively.

Finally, using a case study of a company which carries out advanced manufacturing utilizing ALD, we will discuss how human resource development for the advancement of DE to ALD, technological development, organizational reform and infrastructure development should be.

Strategic Technology Management Advanced Course:

A framework required a technological innovation to be managed strategically is explained. Time is required by the time the result of a technological innovation is obtained. Since high uncertainty exists in future market environment, it is difficult to predict the exact situation correctly. However, if an innovation is performed and it tries to lead to a success, it is indispensable to examine a future market and enterprise environment. Scenario planning is one of the useful frameworks, when examining a future market and enterprise environment. At this lecture, a matter required for scenario planning and scenario creation is studied first. The relation between science and technology, a future trend of evolution of science and technology, etc. are included in that required matter. Furthermore, the matter shown in the next required for planning of a technology strategy and measure research and deployment in a company or an organization is explained.

That is, they are the role of the technology in management strategy, strategic integration and linkage, the break down to the research and development from a technological strategy, etc.

Special lecture on open innovation:

The objective of this course is to study strategy formation and its implementation for effective open innovation. Recent weak performances of many Japanese manufacturing firms which adhere to traditional closed innovation apparently raise doubts on the effectiveness of this traditional innovation mode in rapidly changing globalized business field. Firms should strategically examine how to construct relationship with other entities in broad business ecosystem and consequently achieve innovation for sustainable growth, as businesses get increasingly to be open. We study contemporary open innovation in comparison with traditional innovation mode as well as organizational structure and capabilities which are suitable for open business activities. We also investigate national/regional policies aiming to foster open innovation and their impact on firms' activities in some of leading countries. We then discuss major topics in terms open innovation implementation such as R&D outsourcing, open IP and VC utilization.

Research-and-Development Management Advanced Course:

The research and development done in a company or an organization are positioned as an execution measure of a technological strategy. Therefore, since research and development are done as part of management activities, it needs to be unified with corporate strategy or a business strategy. To manage research and development, two viewpoints, i.e., a broad view and a micro view, are required. A macroscopic viewpoint is related with the whole research and development activities in a company or an organization, and is related with promotion of a research-and-development project with a micro individual viewpoint. This lecture explains a framework required for management of research and development from the above viewpoints. From a macroscopic viewpoint, how to grasp the whole research-and-development portfolio etc. is explained. From a micro viewpoint, the method of managing a new-product-development project is explained.

New product development can be regarded as a process which consists of screening of theme, acquisition of resources required for the project execution and execution of development, launch to market, and evaluation. In new product development, leading to the goal is important, performing re-distribution of resources and reexamination of a task corresponding to the situation of the progress in milestone set up in the middle of this process. The methodology for new-product-development project promotion (example: the Stage gate method) is explained from such a viewpoint.

Marketing Research:

In order to understand consumers' (or customers') needs and develop an effective marketing strategy, the marketing research is indispensable. An accurate insight based on information and data becomes a great force for the problem solution in the business strategy, i.e., in finding business opportunities and making an efficient marketing plan. This course aims to understand the importance of the marketing research and learn about how to apply it to the practical situation. To execute appropriate decision making as a leader or a manager, you learn the entire systematic process of the marketing research: Data Identification, Data Collection, Data Analysis, and Information Use, where clarifying the marketing problem is the most important. For deeper understanding, this course deals with the marketing research from the perspectives of both the research process and the research methods. In particular, the research methods mainly consist of statistical methods, and partially include machine learning methods. Therefore, we learn about basic statistics in the early stage of this class. In addition, this class includes some exercises based on some concrete cases.

Theory on Venture business:

In this subject, students acquire basic knowledge about the overall venture business aiming at rapid growth, and a method for business planning and the financing. About the venture business, they consider the social mechanism supporting success cases including the Silicon Valley overseas. About the financing, they learn the use of the public aid and subsidy system, the structure of investment and the incubation fund of the venture capital as the means of the direct finance, the exit strategy by stock market flotation and the mergers and acquisitions of the venture company. In addition, they study the significance of the indirect finance (debt) and deepen general understanding concerning the venture business through a case study and discussion among the students attending the lecture.

Special lecture on business finance:

The purpose of this course is to study fundamentals of managerial finance/accounting which underpin persuasive business planning and efficient investment decision making process in the context of value maximization. We first examine premise, assumptions and logic for setting value maximization as the one and only objective in corporate finance with reference to corporate governance. We then study investment decision rule with putting emphasis on its critical constituents, namely 1) hurdle rate estimation, 2) return metric selection and 3) project definition and cash flow projection. With regard to 1), we develop it mainly based on CAPM in conjunction with understanding risk-return relationship and portfolio effect. With regard to 2), we review calculation procedure and compare advantages/drawbacks of most typical metric such as ROI, NPV and IRR. With regard to 3), we examine side-effects (e.g. opportunity cost and synergy effect) and relationship with other projects for characterizing a project appropriately. We also develop sophisticated simulation-based investment analysis capitalizing on managerial accounting knowledge.

Special topics on Strategic Thinking:

This course is focused on the strategic thinking about problem solving, decision-making, and related strategic management. In general, tackling business issues requires a thinking process, that is, to grasp the essence of the issues and make appropriate decisions. In fact, when we are faced with business issues, subconsciously we tend to solve them with our own experience. However, relying on experience alone, without the "know-how" of problem solving and decision making, has its limitations. Through examining various case studies, the course will systematize lessons from the success and failure of cases as well as summarize theories on strategic thinking and decision-making. It will also touch on strategy analysis, strategic management, thoughts about risk and some related game theories.

Theory of inventive problem solving:

TRIZ (the theory of inventive problem solving) has an inductive theoretical system for inventive problem solving such as technology forecasting based on patent analysis, trend analysis on advancement, a matrix of contradictions, a proposal for solutions and so on. In this lecture, first, you will learn the theoretical framework of TRIZ, methodology, and the underlying concept to improve the ability to identify, analyze and solve problems, and develop creative products significantly as well as to enhance inventive faculty dramatically.

Second, in order to improve the capacity for business feasibility assessment of technology and decision on R&D investment, you will gain an understanding of the theory and methodology on invention and evaluation of the concept, adding value to patents, strategic and systematic expansion of intellectual property. Then, we will have a group discussion on creativity based on a specific case.

Finally, in order to acquire the capacity to capitalize intellectual property on your own following the creation of ideas, we will conduct practical problem solving exercises using the advanced software which guides strategic creation of intellectual property by linking the patent database of the major developed countries with TRIZ.

Leadership theory:

There is the problem that "What is an excellent leadership?" before business administration is approved. The research and analysis about it have been performed in various fields of philosophy, ethics, history, religion, politics, and military affairs, etc., In this lecture, the leadership is defined as "the abilities to set targets of the group and draw the group member's cooperation and contribution to aim at the effective achievement". Business administration theories about the leadership are roughly classified into four theories; 1. Trait theory, 2. Behavioral theory, 3. Contingency theory, 4. Transformational leadership. Various roles that setting and solution of problem, evaluation and encouragement of subordinates, and activation of organization etc. are demanded from the leader. However, the demanded roles will change according to the age and the situation. We don't adopt the one theory, but set a goal for students learning management of technology to acquire useful contents on businesses with various aspects through the lecture.

Advanced Study of Intellectual Property Strategy:

I deal with practical strategy that differentiation in an enterprise and competitiveness insurance utilizes as a source an industrial property (patent utility model, a trademark and design) in this lecture. Especially, utilizing method of a patent map, a research and development process and intelligent property, patent clear Lance, a basis patent substantial life prolonging plan, cut to divide of know-how protection and patent application and, a plan of know-how management, licensing strategy, technique a standard and an intellectual property strategy, an Anti-Monopoly Law and an intellectual property strategy, I give a lecture around relation of a technical tie-up and technique introduction and enterprise strategy. Example, research and development strategy, intellectual property strategy and an example of a company research that advanced enterprise strategy in Trinity-style, a patent other company sale example research, university application when a company develop a new rule enterprise strategy, open innovation and an intellectual property strategy, an international patent invasive lawsuit, international design, a trademark invasive lawsuit etc deals with a concrete example. Further a writing object gives a lecture with a form that assumed a case that a program that accompanies a technology development and a database or a content exists and combined with patent strategy.

Advanced Study of Licensing and Intellectual Property Law:

I conduct comparison of an each country intellectual property system and deal with right becoming strategy of an international intellectual property around a Patent Law in this lecture. An international intellectual property law, historically, consistent adjustment among a loose system in conformity with a Paris treaty, WIPO etc gropes to a united system, through each legal basis conceptual unity in the between areas that Southeast Asia seems to be seen, a becoming convergence of a fundamental system and right conception was planned. Unity among a law system is realized with a form that patent preparatory investigative information by an international application system and a principal country says with joint ownership also practically. Therefore there is necessity that understands realistic influence that a code of legal procedure that a difference is loud exerts in intellectual property right protection by a country in addition to comparing a difference of a left each country system from a side of a substance law. I conduct comparison of a system that so called 3 poles of a day, rice, EU center on a patent system and Southeast Asia in this place. Also, I deal with an international lawsuit that offense and defense of an each lawsuit business of each country and lawsuit jurisdiction included and aim at knowledge that international intellectual property strategy consists with foundation and skill acquisition in addition to the right becoming procedure of a principal country. I give a lecture also about intellectual property strategy including technique standardization and design, a trademark still more.

第3節 教育改善に関する活動

(1) コア・カリキュラムに基づく平成25年度カリキュラムの確定

本研究科ではFD活動の取り組みの一環として、平成20年度以降MOT教育コア／カリキュラムを策定、その後の継続的検討を経て平成24年度に平成25年度からの実施内容を確定した。

平成20、21年度文部科学省

「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」事業
MOT教育コア・カリキュラム開発

本事業は、文部科学省の「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」の1つとして採択されたものであり、平成20年度から21年度に技術経営系専門職大学院協議会（MOT協議会）を構成する全国の10大学でMOT教育のコアとなる内容を定めることを目的とし、当時のMOT協議会・会長校である山口大学大学院技術経営研究科が中心となって取りまとめを行った。

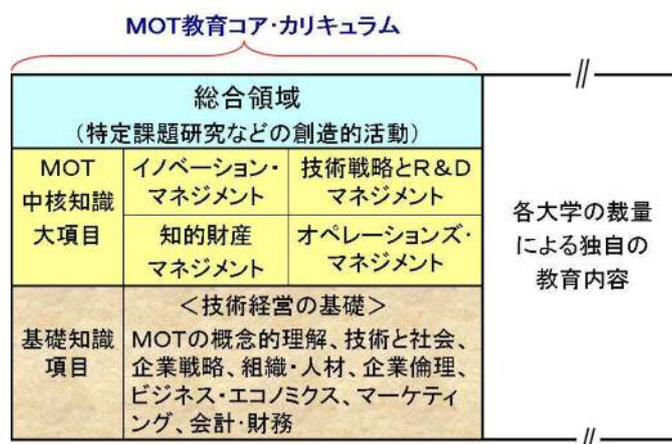


図1 MOT教育コア・カリキュラムの構成

MOT教育コア・カリキュラムは、日本におけるMOT教育展開の基盤であり、MOT教育の質向上を図るために技術経営教育の内容を整備する。全てのMOT専門職大学院の学生が習得すべき内容を体系化したものであり、今後、大学における技術経営教育はMOT教育コア・カリキュラムをベースにして大学院教育カリキュラムを編成し、「MOT専門職大学院修了生の到達度の保証」の基盤となることを目指している。図1に、教育コア・カリキュラムの構成を示す。

当研究科では、平成22年度からFD活動における教育改善の取り組みとして、MOT教育コア・カリキュラムに基づいた教育カリキュラムの見直しを継続的に計ってきた。基盤科目においては、平成22年度に『新産業創出論』と『プロジェクトマネジメント特論』の2科目を廃し、平成24年度から新たに『イノベーション・マネジメント』と『オペレーションズ・マネジメント特論』を開講した。また、応用・演習系科目では、『商品開発演習』と『ビジネスプラン演習』を統合し、新たに『商品開発・ビジネスプラン演習』を開講した(図2、図3)。

平成22年度 カリキュラム構成		
基盤科目(必修)	応用・演習系科目 (3科目以上選択)	展開科目群(選択)
新産業創出論	プロジェクトマネジメント演習	経営戦略(5科目)
知的財産権論	商品開発演習	知的財産(3科目)
プロジェクトマネジメント特論	知的財産戦略演習	財務・経済(2科目)
企業経営特論	ビジネスプラン演習	地域(2科目)
会計・財務特論		ベンチャー(2科目)
組織と人材マネジメント特論		技術戦略(2科目)
		技術管理(4科目)
		先端技術(3科目)
特定課題研究(必修)		

図2 本研究科のカリキュラム構成と MOT 教育コア・カリキュラムの基礎知識項目ならびに中核知識項目に対応する範囲 (朱枠)

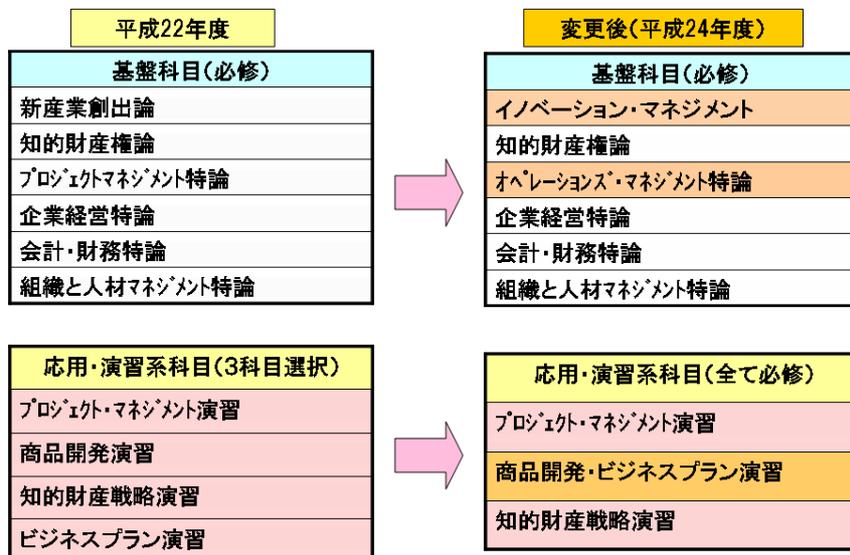


図3 平成22年度のカリキュラムから改訂した平成24年度カリキュラム

平成23年度・平成24年度に渡るにおける教育改善の取り組みとして、教育カリキュラムの向上を目指して平成25年度からの下記改定を確定した。

平成 25 年度 基盤科目・応用科目

科目分類	科目名
基盤科目	イノベーション・マネジメント
	オペレーションズ・マネジメント特論
	ビジネス法務
	会計・エコノミクス特論
	テクノロジー・マーケティング特論
	企業戦略特論
応用科目	知財MOT特論
	グリーンMOT特論
	ライフサイエンスMOT特論
	ものづくりMOT特論

平成 25 年度 展開科目

科目分類	科目名	
展開科目	戦略立案	技術戦略特論
		オープンイノベーション戦略特論
	施策展開	マーケティングリサーチ特論
		R&D マネジメント特論
	ビジネスプランニング	ベンチャービジネス特論
		ビジネスファイナンス特論
	課題解決法	戦略思考特論
		創造的問題解決特論
	グループマネジメント	経営組織特論
		リーダーシップ論
	知財	知財戦略特論
	国際知財法務特論	

●平成 25 年度以降の日本語講義対応教室時間割

平成25年度時間割

必修科目 平成 25 年度限りの科目

《前期》

4/13～7/25(3コマ×5週) ※土曜日の授業
時間→午前(8:50～14:20)、午後(14:30～19:15)

対象 学年	講義 室	A(…→広島→福岡)		B(福岡→…→広島)		C(広島→福岡→…)	
		午前	午後	午前	午後	午前	午後
1 年	福岡 1 広島 1	イノベーション・マネジメント(久保)	オペレーションズ・マネジメント特論(春山)	会計・エコノミクス特論(向山)	ビジネス法務(木村)	テクノロジーマーケティング特論(福代)	企業戦略特論(稲葉)
2 年	福岡 2 広島 2	リスク管理特論(春山、松浦)	技術評価特論(久保、松浦)	経営戦略特論(大北)		地域イノベーション論(稲葉)	商品開発・ビジネスプラン演習(福代・向山)

《前期集中講義》

(5コマ×3週)
土曜日:①8/17～8/31、②9/7～9/21
日曜日:①8/18～9/1、②9/8～9/22
時間はすべて 8:50～17:40

「情報化製造技術特論」(2年生)と「ものづくり MOT 特論」(1年生)は、共通の科目と読替える。「環境・エネルギー技術特論」と「グリーン MOT 特論」も同様。

対象 学年	講義 室	A(②広島)		B(①福岡)		C(①広島→②福岡)	
		土曜日	日曜日	土曜日	日曜日	土曜日	日曜日
1,2 年共通	福岡 1 広島 1	創造的問題解決特論(上西)	ものづくり MOT 特論(上西、春山)	研究開発型ベンチャー特論(福代)	グリーン MOT 特論(福代)	コンテンツビジネス法務特論(木村)	

《後期》

9/28～2/1(3コマ×5週)
時間→午前(8:50～14:20)、午後(14:30～19:15)

「マーケティングリサーチ特論」と「マーケティング戦略特論」は、共通の科目、「ベンチャービジネス特論」と「ベンチャー資金戦略特論」、「ビジネスファイナンス特論」と「財務戦略特論」、「知財戦略特論」と「知的財産戦略特論」も同様。

対象学年	講義室	A(…→広島→福岡)		B(福岡→…→広島)		C(広島→福岡→…)	
		午前	午後	午前	午後	午前	午後
1,2 年 共 通	福岡1 広島1	マーケティングリサーチ特論(石野)	経営組織特論(高橋)	技術戦略特論(久保)	ビジネスファイナンス特論(松浦)	知財戦略特論(木村ほか)	経済分析論(ゲン)
	福岡2 広島2	ベンチャービジネス特論(向山)	企業倫理(福代)			戦略思考特論(ゲン)	

平成26年度時間割

必修科目

《前期》

(3コマ×5週) ※土曜日の授業

時間→午前(8:50~14:20)、午後(14:30~19:15)

対象学年	A(…→広島→福岡)		B(福岡→…→広島)		C(広島→福岡→…)	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後
1 年	イノベーション・マネジメント(久保)	オペレーションズ・マネジメント特論(春山)	会計・エコノミクス特論(向山)	ビジネス法務(木村)	テクノロジーマーケティング特論(福代)	企業戦略特論(稲葉)

《前期集中講義》

(5コマ×3週)

対象学年	広島		福岡	
	1~3週	4~6週	1~3週	4~6週
1,2 年	ライフサイエンス MOT 特論(石野)	グリーン MOT 特論(福代)	知財 MOT 特論	ものづくり MOT 特論(上西、春山)

共通				
----	--	--	--	--

《後期》

(3コマ×5週)

時間→午前(8:50~14:20)、午後(14:30~19:15)

対象学年	A(…→広島→福岡)		B(福岡→…→広島)		C(広島→福岡→…)	
	午前	午後	午前	午後	午前	午後
1,2年共通	ベンチャービジネス特論(向山)	創造的問題解決特論(上西)	R&D マネジメント特論(久保)	オープンイノベーション戦略特論(松浦)	国際知財法務特論	※リーダーシップ論(稲葉)

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

教育改善を目的とした評価活動

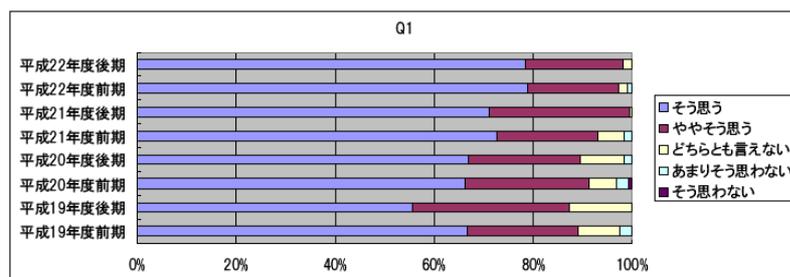
(1) 学生授業評価

[学習指導法に対する学生授業評価]

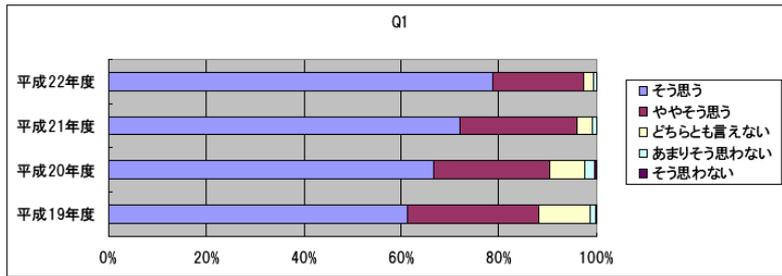
学習指導法に対する学生による5段階の授業評価の結果では、「そう思う」から「どちらとも言えない」までを含めた肯定的な意見が、6項目とも80~90%を締めている。同時に、年度ごとに指標が良くなっていることが見出せる。

質問(Q1)：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

講義科目



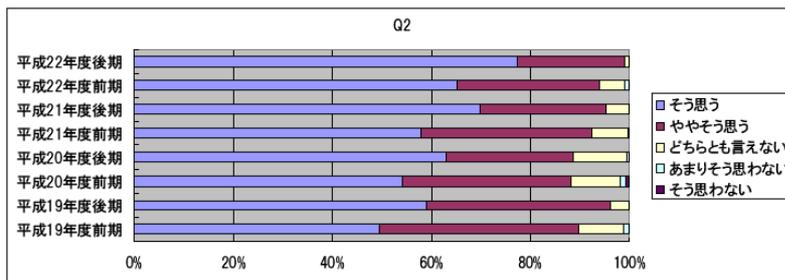
演習科目



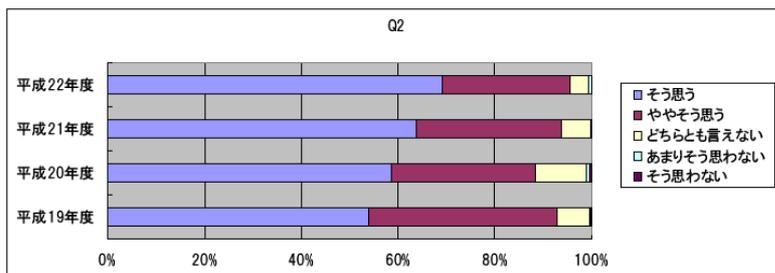
平成 23 年度 授業科目総合平均 4.6
 平成 23 年度 演習科目総合平均 4.8
 平成 24 年度 授業科目総合平均 4.8
 平成 24 年度 演習科目総合平均 4.8

質問 (Q2) : 理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？

講義科目



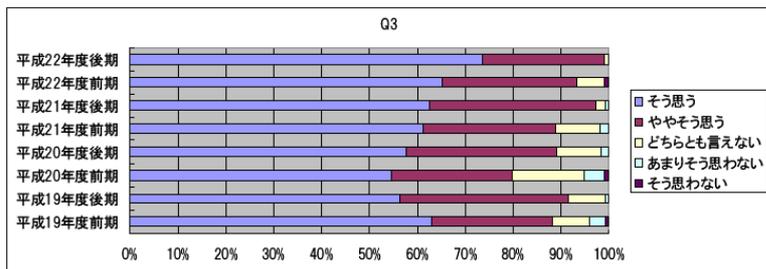
演習科目



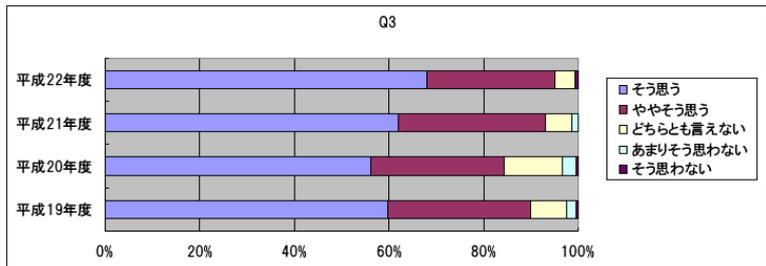
平成 23 年度 授業科目総合平均 4.70
 平成 23 年度 演習科目総合平均 4.76
 平成 24 年度 授業科目総合平均 4.69
 平成 24 年度 演習科目総合平均 4.48

質問（Q3）：教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？

講義科目



演習科目



平成 23 年度 授業科目総合平均 4.7

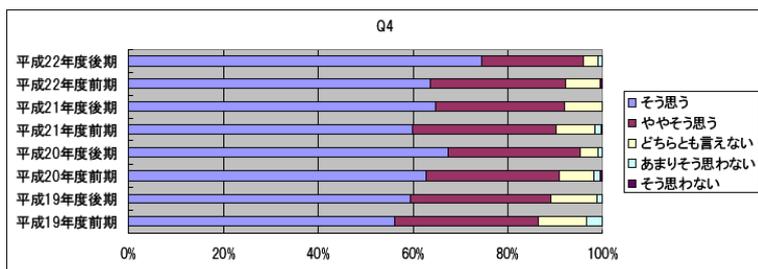
平成 23 年度 演習科目総合平均 4.7

平成 24 年度 授業科目総合平均 4.6

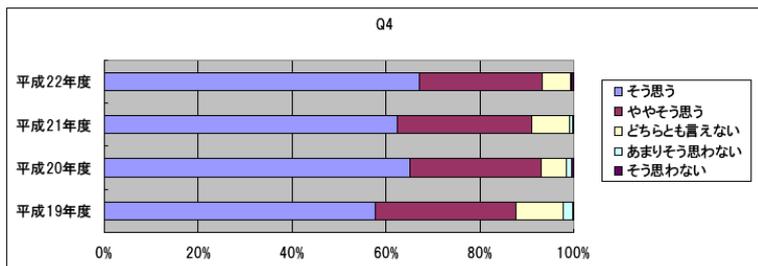
平成 24 年度 演習科目総合平均 4.6

質問（Q4）：練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？

講義科目



演習科目



平成 23 年度 授業科目総合平均 4.70 点

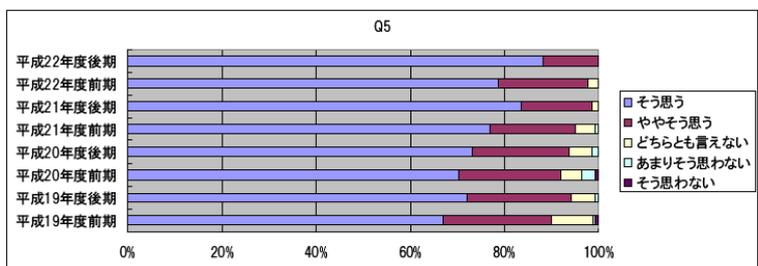
平成 23 年度 演習科目総合平均 4.60 点

平成 24 年度 授業科目総合平均 4.61 点

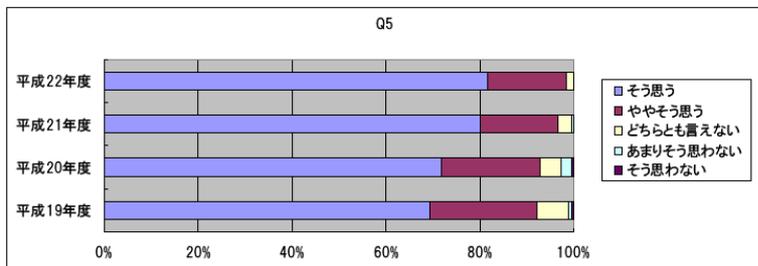
平成 24 年度 演習科目総合平均 4.53 点

質問 (Q5) : 学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか?

講義科目



演習科目



平成 23 年度 授業科目総合平均 4.73 点

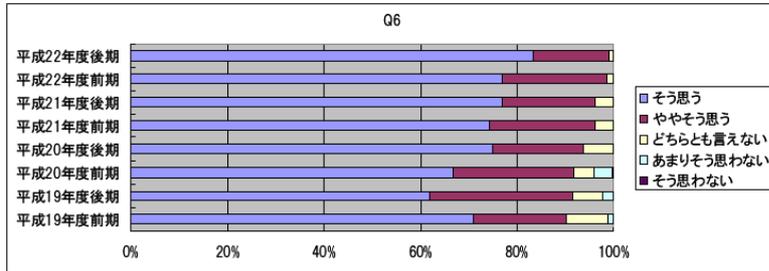
平成 23 年度 演習科目総合平均 4.70 点

平成 24 年度 授業科目総合平均 4.73 点

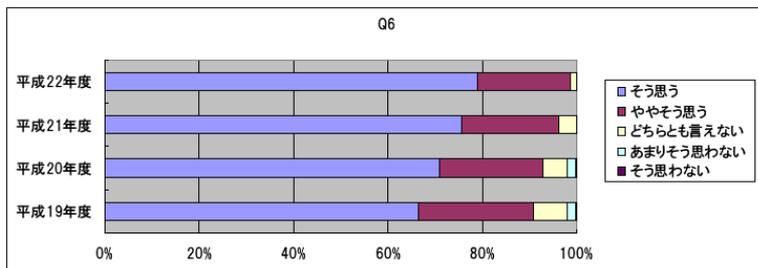
平成 24 年度 演習科目総合平均 4.66 点

質問（Q6）：担当教員の熱意を感じましたか？

講義科目



演習科目



平成 23 年度 授業科目総合平均 4.79 点
 平成 23 年度 演習科目総合平均 4.75 点
 平成 24 年度 授業科目総合平均 4.76 点
 平成 24 年度 演習科目総合平均 4.82 点

質問 (Q8) : あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

平成 23 年度 授業科目総合平均 4.3 点

平成 23 年度 演習科目総合平均 4.4 点

平成 24 年度 授業科目総合平均 4.3 点

平成 24 年度 演習科目総合平均 4.1 点

質問 (Q9) : あなたは、授業の内容を理解できましたか？

平成 23 年度 授業科目総合平均 4.4 点

平成 23 年度 演習科目総合平均 4.5 点

平成 24 年度 授業科目総合平均 4.3 点

平成 24 年度 演習科目総合平均 4.2 点

質問 (Q10) : この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

平成 23 年度 授業科目総合平均 4.7 点

平成 23 年度 演習科目総合平均 4.7 点

平成 24 年度 授業科目総合平均 4.7 点

平成 24 年度 演習科目総合平均 4.4 点

第5節 FD実施経費報告

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額 (千円)	FD活動の効果（簡潔に）
技術経営研究科	ロゼッタストーンを利用した遠隔システムによる語学研修	遠隔研修システム 12名	638	平成25年度秋入学からの英語授業に対応することができた
計			638	

第6節 来年度の課題

技術経営研究科では、過去のFD活動の成果を継続的に実施する。

平成25年度の課題

- (1) コア・カリキュラムに基づく平成26年度カリキュラムの編成

引き続き、平成24年度からの新カリキュラム移行対応、および平成25年度秋入学者向け英語授業の教材開発を継続する。

- (2) 技術経営教育コア／カリキュラムに基づく到達度評価システムの検討

MOT教育コア・カリキュラムに準拠した到達度の評価を継続的に実施する。

第 20 章 連合獣医学研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

山口大学大学院連合獣医学研究科は山口大学，鳥取大学および鹿児島大学の共同獣医学部獣医学科あるいは農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備，施設を連合した基本的に修業年数 4 年の大学院博士課程である。したがって，各教員の授業公開は主に各大学における学部教育で行われている。しかしながら，下記教育活動については三大学共通で実施されており，他大学の教員ならびに学生の前での授業を行っている（アンケート，学生授業評価結果は第 3 節，第 4 節に記載）。

三大学共通で実施される主な教育活動

- 1、共通ゼミナール
- 2、各大学における特別講義
- 3、Eラーニング

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

平成 24 年度 教育改善 FD 研修会（共同獣医学部，連合獣医研究科）

日程 平成 24 年 12 月 12 日(水)

[吉田地区] 13:30～14:15

場所 農学部・共同獣医学部本館 会議室

講師 小川 勤 (大学教育センター教授)

糸長雅弘(大学教育センター長)

吉村誠 (学生支援センター長)



参加者 13名(アンケート回収 11名)

内容

本研修会では，共同獣医学部より提出された学生ポートフォリオの実施についての意見交換を行った。最初に大学教育センターの小川教授より共同獣医学部から提出された学生ポートフォリオの実施計画について，大学教育センターおよび学生支援センターとしてのコメント（気づき）や質問が述べられた。まず一点目としては，共同獣医学部におけるポートフォリオの運用に関して，鹿児島大学との間で協議が行われたかどうかについて質問があった。これに対して，学部からは今のところこの件に関しては鹿児島大学と協議を行っていないが，今後は鹿児島大学での取り組み状況を把握し，双方でどのように実施するかについて検討していきたいことが明らかにされた。2 つ目の質問としては，共同獣医学部を卒業した場合，その後の進路は獣医師になるだけでなく，国や県などの公務員などさまざまな進路先が考えられるが，これに関して共同獣医学部として組織的にどのように対応しているのかについて質問があった。これに対して

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	4	36.4%
どちらとも言えない	4	36.4%
あまり良くなかった	1	9.1%
良くなかった	2	18.2%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

学部からは、年次が上がり教育内容が増え、深化するにつれて1年次当初とは進路先希望が大きく変わってくるのが現状である。したがって、学部としてはこれまでに1年生の夏休み期間中や研究室配属になる前の3年次から4年次にかけて、現職の獣医師や県庁や行政に勤めている方々から直接、仕事内容などについて話を聞く機会を提供し、学生が自らの進路を考える際の参考にしてもらっている。また、今回年度の初めに学生にポートフォリオを作成させ、教員と面談する機会を設けることにより、これまでに学習活動を振り返るとともに、今後の自らの進路を考えるきっかけを作りたいと考え、今回の運用計画を考えたことが明らかにされた。3つ目の質問としては、医学部では医学実習に入る前に、病院での実習状況を詳細に記載し、指導教官からコメントを記入するというポートフォリオに似た制度がすでに導入されているのでこれを流用する案が示されているが、共同獣医学部では同様な制度はないのかという質問があった。これに対して学部からは今のところ、共同獣医学部では医学部のようなことは行われていない。しかし、平成25年度入学生から医学部と同様な動きがあるので、今後、ポートフォリオとの関係を考えていきたい旨との回答があった。

3つの質問以外に、糸長大学教育センター長からは、ポートフォリオシートのWeb化について説明があった。現状では来年度から導入される新しい共通教育に向けた教務システムの改修作業を優先せざるを得ないことや、仮にポートフォリオシートがWeb化されても、基本的には大学教育センターおよび学生支援センターが示した「雛形」をベースにしたシート開発になることが説明された。

吉村学生支援センター長からは共同獣医学部ではすでに現職の獣医師や獣医師免許を持っていることが前提となっている職業に就いている方々を招聘して学生のキャリア指導に当たっていただいているので、今後はこれをさらに発展させるように、就職相談室等との連携を密にしていきたい旨、説明があった。

今回の研修会では大学教育センターや学生支援センターから共同獣医学部から聴取したい事項について質問する形で意見交換が行われた。参加者からはポートフォリオの具体的な運用方法に関する研修を実施するのではないかと期待して参加された先生方もいたので多少ミスマッチがあった部分については、開催趣旨を事前に十分説明する必要があったと反省している。しかし、短時間ではあったが、共同獣医学部のポートフォリオに対する考え方や現状のキャリア指導の具体的な内容を詳しく知ることができて大変有意義であった。

第3節 教育改善に関する活動

年1回開催される共通ゼミナール、年3回実施される特別講義では毎回、学生アンケートを実施し、教育改善にフィードバックしている。

(1) 平成24年度山口大学大学院連合獣医学研究科 獣医学共通ゼミナールに関するアンケート結果(抜粋)

期 日	平成24年8月22日(水)～8月25日(土)
場 所	鹿児島大学
参加学生	62名 アンケート回収 47名分

- 1) 英語論文執筆のすすめについて
 1. 色々な話が聞けて、おもしろかった。
 2. 本では学べない口伝をありがとうございました。

3. 分かりやすい講義で、とても聞きやすかったです。
どんな先生もすんなりアクセプトされないことがあると知り、少し気持ちが楽になりました。
4. 時間が短くてさらっとしかできなかったがもう少し時間をとって（コマ数を取って）じっくり行って欲しい。
5. とても、これからの論文作成意欲がかきたてられる内容だった。とてもエキサイティングだった。
6. 非常にわかりやすい講義で大変有意義な講義でした。自身の論文作成の際に活かしていきたい。
7. この手の講義は受講する機会があまりないため、とてもよかったですと思います。
先生の御自身の経験談も聞けてとても参考になりました。ただ、少しスライドの送るスピードが速かった気がします。
8. 先生の経験談を交えた講義で論文作成の流れや気構えがわかって良かった。
実現できないコメントに対する対応をもうちょっと具体的に聞いてみたかったです。
9. 教員の経験等を交えて分かりやすく話して頂き、大変参考になりました。
論文を書くにあたっての注意点、目標の定め方など今後活かしていきたいと思いました。

2) 実践プレゼンテーション論について

1. 今まで意識してなかった、知らなかったことがあって良かった。
2. どうしたら分かりやすくプレゼンできるか具体例を示してくださったので、とても分かりやすかったです。
3. これからのプレゼン内容を考えさせられる非常に刺激的な内容でとてもおもしろく聴けました。
4. これまで意識していない事だったので、今回の講義内容に沿ったプレゼン資料を今後作成したいと思う。
5. 英語論文執筆の講義と同様に普段受講する機会のない内容なのでとても良い機会となりました。
6. スライド作成時に陥りやすい点など、自分に当てはまることが多く、自分のプレゼンを見直しやすい機会になったと思います。今まではプレゼンをすること自体が目的になっていたのですが、研究計画の共有や効率化を図る手段だと今更ながら気付きました。
7. パワーポイント作成の基本的な心構えは今後も忘れないように、役立てていきたいと思いました。

3) セミナーC,D 2年生以上

1. 最近獣医師とは何だろうと思うことがよくあったのですが、何となくそのヒントを得られたように感じました。
2. 非常に円滑に進み、聞きやすいセミナーでした。
3. スライドに英語と日本語を表記してもらいたいです。
4. 専門外の内容は英語だとなかなかわかりづらい部分も多かったと思う。
5. 先生方の今されている研究なので、興味深い内容が多く、面白かったです。プレゼンテーションの方法など、参考になるところもあり、有意義でした。全ての発表でレジュメ欲しかったです。
6. 1人あたりの時間を短くして、講師の先生の数が増える方が学生は飽きないかもしれません。
7. Those were excellent seminar and useful for my further study, which improved my professional knowledge and opened my eye widely.

4) ポスター研究紹介について

1. 最初は英語で質問するのにビクビクしてが、オーラルの所よりも聞きやすいので、1年生にもメリットがある。
2. 興味深い内容だったが、人数が多くあまり質問等しにくいのが残念であった。
3. 普段あまり読まない分野の研究について説明してもらえたので非常に面白かった。もう少し見て回る時間を長めにしてもらいたかったです。
4. 自分の研究分野に近いものや、今後のポスター作成に参考となる発表があり、それらについて、発表者に質問することができ、今後の見通しを立てやすくなったと思いました。
5. 今回のように決まった発表のない形式だと自由な討論ができて良いと思いました。
6. 去年より良かったです。去年はポスターがコの字ではなかったので狭くて見にくかったので今回は良かったです。
7. 時間は丁度いいと思いました。ただ、ポスターの表記については、日本語及び英語のどちらかだったので、一部の研究紹介を留学生の方々が見れていないようでした。
8. 1時間でまわりきることができないほど、興味深い他分野の研究が多くありました。質問していたら、あっという間に時間が過ぎました。楽しかったです。自分の知らない視点を取り入れるよい機会でした。
9. 先生方、学生を問わず色々な方からアドバイスをいただき、大変有意義な時間でした。ありがとうございました。
10. That was on excellent presentation and everybody showed a wonderful poster.
11. Most of the posters was in Japanese. It should be in English.

5) 特別講演について

1. ツパイという動物を初めて知りました。人の疾患のよい疾病モデルになることに驚きました。
2. 非常にエキサイティングで刺激的だった。
3. 今更ながら、獣医学は動物ではなく人間のための学問なのだ、と再確認しました。
4. C型肝炎で苦しんでいる人は多いので、とても大事なことであり、とても勉強できました。
5. 専門外の内容で少々難解だったが、スライドに日本語が含まれていたのが非常に助かった。
6. とても興味深く、完成された研究を背景から、新たな知見を含め教えていただき、とても満足です。自分の研究にも応用でき得る知見を得られました。レジュメが欲しかったです。
7. 疫学から始まり、実験モデルの作製まで興味深いお話が聞けて良かったです。
8. Thank you for the professor given us an excellent lecture, that would be significant in my future study.
9. Very good and we know a lot of information about Hepatitis C. Last two years we have printed materials for the special lecture but this years no printed materials for special lecture.
10. Very exciting and informative presentation.

(2) 平成24年度第1回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義 アンケート結果

〈授業科目名〉 平成24年度第1回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成24年6月8日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鹿児島大学

〈担当教員名〉 鳥取大学 山野好章 教授

『Expression analysis of the spermatogenesis related genes in maturing rat

testis』

山口大学 奥田 優 教授

『Diagnostic Methods for Canine Leptospirosis』

〈受 講 者〉

1. 連合獣医学研究科1年生	4名
2. 連合獣医学研究科2年生	3名
3. 連合獣医学研究科3年生	2名
4. 連合獣医学研究科4年生	1名
5. 農学部獣医学科5年生	17名
6. 農学部獣医学科6年生	1名
合計	28名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

1. はい	26名 (93%)
2. いいえ	1名 (3.5%)
3. 無回答	1名 (3.5%)

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 色々な分子生物学的手法を聴けて、今後の卒論作成に大変参考になりました。
- ・ 講義の内容も難しかったし、英語だったので、正直あまりよく分からなかったです。
- ・ 大学院でどのような研究がされているかを知れてよかった。英語の講義というのもよかった。
- ・ 興味深いテーマでしたが、日本語と英語という形式は講師の先生も聴講者にも負担であると思います。All 英語でも良いのでは?
- ・ 刺激になるのでこれからも定期的開催して欲しいです。

(3) 平成24年度第2回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義
アンケート結果

〈授業科目名〉 平成24年度第2回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成24年10月5日(金) 10時20分~11時50分

〈実施大学〉 山口大学

〈担当教員名〉 鹿児島大学 三好宣彰 教授

『Lung tumors in dogs and cats (犬と猫における肺腫瘍)』

鳥取大学 日笠喜朗 教授

『Diuretic actions of α 2-adrenoceptor agents medetomidine compared with xylazine and their antagonisms in dogs

(犬における α 2-アドレナリン受容体作動薬のキシラジンとメデトミジン利尿作用の比較とその拮抗効果)』

〈受 講 者〉

1. 連合獣医学研究科1年生	1名
2. 連合獣医学研究科2年生	5名
3. 連合獣医学研究科4年生	1名
4. 共同獣医学部 2年生	30名

5. 共同獣医学部 4年生 28名
合計65名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- | | |
|--------|-------------|
| 1. はい | 53名 (81.5%) |
| 2. いいえ | 3名 (4.6%) |
| 3. 無回答 | 9名 (13.9%) |

〈講義についての意見・感想〉

- ・ もう少し体の機能についての知識を多く学んでから聞くことができれば、より理解できたのかと思います。(2年生)
- ・ 自分の研究室の分野である薬理作用的な話と、自分の研究では知ることはできなかった病理学的な話を聞けて、関わりのある話の理解が深められたことと、新たに関心を持つことができたという二つの側面でとても収穫のある貴重な経験ができました。(4年生)
- ・ 自分の研究分野とは異なる分野の研究について、講義を受ける機会が少ないので、とても良い機会であり、興味深い話をしていただき、有意義なものだと思います。(院生)

(4) 平成24年度第3回 山口大学大学院連合獣医学研究科 特別講義
アンケート結果

〈授業科目名〉 平成24年度第3回山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義

〈実施日〉 平成24年11月22日(金) 10時30分～12時00分

〈実施大学〉 鳥取大学

〈担当教員名〉 山口大学 佐藤晃一 教授

『GI Motility and Intestinal Resident Macrophages』

(消化管運動と腸管常在型マクロファージ)

鹿児島大学 遠藤泰之 教授

『Epidemiological survey of arthropod-borne diseases in Japanese wildcats』

(日本産ヤマネコにおける節足動物媒介性疾患に関する疫学調査)

〈受講者〉

- | | |
|----------------|-----|
| 1. 連合獣医学研究科1年生 | 1名 |
| 2. 連合獣医学研究科2年生 | 2名 |
| 3. 連合獣医学研究科3年生 | 3名 |
| 4. 連合獣医学研究科4年生 | 2名 |
| 5. 農学部獣医学科 5年生 | 27名 |
| 6. 農学部獣医学科 6年生 | 1名 |

合計37名

〈特別講義はあなたにとって有意義でしたか?〉

- | | |
|--------|-------------|
| 1. はい | 36名 (97.3%) |
| 2. いいえ | 0名 (0%) |
| 3. 無回答 | 1名 (2.7%) |

〈講義についての意見・感想〉

- ・ 他大学の先生の講義を聞く機会はあまりないので、新鮮だった。鳥大の先生がやっていない様な話が聞けて良かったです。(5年生)
- ・ 6年生の自分にとっては卒論発表用のスライド作製の参考になりました。(6年生)
- ・ 研究に至るまでの背景がすごく分かりやすく、全体が理解しやすかった。(院生)

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価 (結果)

<授業科目名> 平成24年度獣医学共通ゼミナール (平成24年8月23日 実施)

<担当教員名> 鹿児島大学 担当教員 (宮本, 大和)

<学年>

1. 1年生	12 人
2. 2年生	19 人
3. 3年生	17 人
4. 4年生	5 人
5. 無回答	1 人

<学生区分>

1. 一般学生	20 人
2. 留学生	15 人
3. 社会人	19 人
5. 無回答	0 人

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか?

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	1 人
3. どちらとも言えない	6 人
4. ややそう思う	23 人
5. そう思う	24 人
6. 無回答	0 人

2) 理論や考え方, 専門用語などがわかりやすく説明されましたか?

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	0 人
3. どちらとも言えない	8 人
4. ややそう思う	28 人
5. そう思う	18 人
6. 無回答	0 人

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか?

1. そう思わない	0 人
2. 余りそう思わない	3 人
3. どちらとも言えない	9 人
4. ややそう思う	20 人
5. そう思う	22 人

6. 無回答 0 人
- 4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？
1. そう思わない 0 人
 2. 余りそう思わない 1 人
 3. どちらとも言えない 3 人
 4. ややそう思う 18 人
 5. そう思う 32 人
 6. 無回答 0 人
- 5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？
1. そう思わない 0 人
 2. 余りそう思わない 1 人
 3. どちらとも言えない 6 人
 4. ややそう思う 24 人
 5. そう思う 23 人
 6. 無回答 0 人
- 6) 教員の身振りや手振り，目を見て話すなどの態度は適切でしたか？
1. そう思わない 0 人
 2. 余りそう思わない 3 人
 3. どちらとも言えない 5 人
 4. ややそう思う 22 人
 5. そう思う 24 人
 6. 無回答 0 人
- 7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？
1. そう思わない 0 人
 2. 余りそう思わない 0 人
 3. どちらとも言えない 6 人
 4. ややそう思う 22 人
 5. そう思う 26 人
 6. 無回答 0 人
- 8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？
1. そう思わない 1 人
 2. 余りそう思わない 3 人
 3. どちらとも言えない 11 人
 4. ややそう思う 29 人
 5. そう思う 10 人
 6. 無回答 0 人
- 9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？
1. そう思わない 0 人
 2. 余りそう思わない 2 人
 3. どちらとも言えない 6 人
 4. ややそう思う 24 人
 5. そう思う 22 人
 6. 無回答 0 人
- 10) このセミナーは，あなたの研究にとって有意義でありましたか？
1. そう思わない 1 人
 2. 余りそう思わない 2 人
 3. どちらとも言えない 12 人
 4. ややそう思う 19 人

- | | |
|---------|------|
| 5. そう思う | 20 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

山口大学大学院連合獣医学研究科 学生授業評価（結果）

<授業科目名> 平成24年度獣医学特別ゼミナール（平成24年8月21, 22日 実施）

<担当教員名> 鹿児島大学 担当教員（辻尾, 川崎, 叶内, 白石, 川口, 小尾, 松尾, 中馬, 瀬戸口, 矢吹, 藤木, 高木）

<学年>

- | | |
|--------|-----|
| 1. 1年生 | 5 人 |
| 2. 2年生 | 8 人 |
| 3. 3年生 | 7 人 |
| 4. 4年生 | 0 人 |
| 5. 無回答 | 0 人 |

<学生区分>

- | | |
|---------|-----|
| 1. 一般学生 | 6 人 |
| 2. 留学生 | 6 人 |
| 3. 社会人 | 8 人 |
| 5. 無回答 | 0 人 |

<質問 I >

1) 教員の話し方は聞き取りやすかったと思いますか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 4 人 |
| 4. ややそう思う | 8 人 |
| 5. そう思う | 7 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

2) 理論や考え方, 専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 1 人 |
| 3. どちらとも言えない | 4 人 |
| 4. ややそう思う | 8 人 |
| 5. そう思う | 7 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

3) テキストやプリントなどの教材が効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 1 人 |
| 2. 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. どちらとも言えない | 6 人 |
| 4. ややそう思う | 3 人 |
| 5. そう思う | 8 人 |
| 6. 無回答 | 0 人 |

4) コンピュータなどの視聴覚メディアが効果的に使われましたか？

- | | |
|--------------|-----|
| 1. そう思わない | 0 人 |
| 2. 余りそう思わない | 2 人 |
| 3. どちらとも言えない | 2 人 |

- | | | | |
|--|-----------|----|---|
| 4. | ややそう思う | 4 | 人 |
| 5. | そう思う | 12 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |
| 5) 学生の疑問・質問などに対して適切な回答が得られましたか？ | | | |
| 1. | そう思わない | 0 | 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 1 | 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 1 | 人 |
| 4. | ややそう思う | 6 | 人 |
| 5. | そう思う | 12 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |
| 6) 教員の身振りや手振り、目を見て話すなどの態度は適切でしたか？ | | | |
| 1. | そう思わない | 0 | 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 2 | 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 6 | 人 |
| 4. | ややそう思う | 6 | 人 |
| 5. | そう思う | 6 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |
| 7) 教員のセミナーに対する熱意を感じましたか？ | | | |
| 1. | そう思わない | 0 | 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 1 | 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 5 | 人 |
| 4. | ややそう思う | 4 | 人 |
| 5. | そう思う | 10 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |
| 8) あなたはセミナーの内容を理解しましたか？ | | | |
| 1. | そう思わない | 0 | 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 3 | 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 4 | 人 |
| 4. | ややそう思う | 12 | 人 |
| 5. | そう思う | 1 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |
| 9) このセミナーはあなたにとって満足のいくものでしたか？ | | | |
| 1. | そう思わない | 0 | 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 3 | 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 3 | 人 |
| 4. | ややそう思う | 8 | 人 |
| 5. | そう思う | 6 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |
| 10) このセミナーは、あなたの研究にとって有意義でありましたか？ | | | |
| 1. | そう思わない | 0 | 人 |
| 2. | 余りそう思わない | 2 | 人 |
| 3. | どちらとも言えない | 7 | 人 |
| 4. | ややそう思う | 7 | 人 |
| 5. | そう思う | 4 | 人 |
| 6. | 無回答 | 0 | 人 |

第5節 FD実施経費報告

該当なし

第6節 来年度の課題

- (1) 教育改善について
各大学の代議員で構成される学務担当者会議を毎月開催し、教育の充実を目的とした改善を検討しており、FDに関しても更なる充実を図りたい。

平成 24 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	任 期	備 考
	副学長 (教育学生担当)	纈 纈 厚		大学教育 機構長
大学教育センター	センター長	糸 長 雅 弘		
学生支援センター	センター長	吉 村 誠		
保健管理センター	所 長	服 部 幸 夫		
留学生センター	センター長	福 屋 利 信		
人文学部	教 授	武 本 雅 嗣	H23.4.1~H25.3.31	
人文学部	教 授	高 橋 征 仁	H24.4.1~H26.3.31	
教育学部	教 授	千々和 一 豊	H23.4.1~H25.3.31	
教育学部	教 授	中 野 伸 彦	H24.4.1~H26.3.31	
経済学部	教 授	陳 建 平	H23.4.1~H25.3.31	
経済学部	教 授	河 村 誠 治	H24.4.1~H26.3.31	
理学部	教 授	川 俣 純	H23.4.1~H25.3.31	
理学部	教 授	山 崎 鈴 子	H24.4.1~H26.3.31	
医学部	教 授	藤 宮 龍 也	H24.4.1~H25.3.31	医学科
医学部	教 授	野 垣 宏	H24.4.1~H26.3.31	保健学科
工学部	教 授	麻 生 稔 彦	H23.4.1~H25.3.31	
工学部	教 授	山 田 陽 一	H24.4.1~H26.3.31	
農学部	教 授	赤 壁 善 彦	H23.4.1~H25.3.31	
農学部	准教授	伊 藤 真 一	H24.4.1~H26.3.31	
共同獣医学部	教 授	奥 田 優	H24.4.1~H26.3.31	
共同獣医学部	准教授	日下部 健	H24.4.1~H26.3.31	
学生支援部	学生支援部長	藤 井 純 朗		
学生支援部	教育支援課長	庄 野 栄 二		
学生支援部	学生支援課長	杉 山 美由紀		

平成 24 年度 山口大学 学部・研究科 FD 担当者 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	准教授	尾 崎 千 佳	
教育学部 教育学研究科	准教授	野 村 厚 志	
経済学部 経済学研究科	教 授	塚 田 広 人	
理学部 医学系研究科（理学） 理工学研究科（理学）	教 授	山 崎 鈴 子	
医学部（医学科） 医学系研究科（医学）	教 授	松 井 邦 彦	
医学部（保健学科）	教 授	河 野 裕 夫	
工学部 理工学研究科（工学） 医学系研究科（工学）	教 授	今 井 剛	
農学部 農学研究科 医学系研究科（農学）	教 授	伊 藤 真 一	
共同獣医学部	准教授	日下部 健	
東アジア研究科	准教授	更 科 慎 一	
技術経営研究科	教 授	木 村 友 久	
連合獣医学研究科	教 授	奥 田 優	

平成 24 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	糸 長 雅 弘	
//	主 事	菊 政 勲	
//	主 事	渡 邊 幹 雄	
//	主 事	中 田 充	
//	教 授	小 川 勤	
//	教 授	川 崎 勝	
//	准教授	木 下 真	
//	講 師	岡 田 耕 一	

平成 24 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」
平成 25 年 11 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)